

まさかこいつに憑依するとは

Aqua@D

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

聖剣使いに憑依した人間の物語

目次

月光校庭のエクスカリバー

Who is she? | 1

Who is she? II | 10

What is Durandal? | 16

What is Durandal? II | 23

What is Durandal? III | 35

What is an evil spirit? | 40

停止教室のヴァンパイア

What is a vampire? | 49

What is a vampire? II | 54

When is a talk? | 60

When is a talk? II | 65

What is a chaos brigade? | 72

What is a chaos brigade? II | 78

What is a chaos brigade? III | 89

冥界合宿のヘルキャット

When is homecoming? | 95

Who is a new comer evil spirit | 105

? | 105

What is practice? | 117

What is practice? II | 125

What is practice? III | 137

Where is a faction?	298	What is a sham battle?	291	課外授業のデイウォーカー	
It is what as Fenrir?	278	It is what as Fenrir?	267		
Whom and joint struggle?	255				
246					
Where is Northern Europe?	240	Where is Northern Europe?	240		
What is an Excalibur?	225	What is an Excalibur?	232		
What is an Excalibur?	225				
放課後のラグナロク					
210					
What is a jaguar note drive?	199	Whom and resumption?	192		
Whom and resumption?	181	Whom and resumption?	181		
gel?		gel?			
It is transmission to an an	175	It is transmission to an an	175		
体育馆裏のホーリー					
What is a rating game?	170	What is a rating game?	162		
What is a rating game?	153	What is a rating game?	144		

W  
h  
e  
r  
e  
  
i  
s  
  
a  
  
f  
a  
c  
t  
i  
o  
n  
?

II



## 月光校庭のエクスカリバー

Who is he?

「うーん、久しぶりね！日本！」

「……はしゃぐな、今回は観光で来たのではない」

と、栗毛の女性と青髪の男性が話している。二人とも

十字架を胸に下げていている上に男性の方は修道服を着ている為、教会関係の人物である事がわかる。

「そうね、それでどうするの？」

「出発前にこの町を管理している魔王の妹たちに手紙を送ってある。まずは、そいつらの本拠地へ向かう」

男性の言葉に栗毛の女性が反応し、申し訳そうな表情になる。

「……えーっと、直ぐに？」

「直ぐにだ」

即に戻事をする男性。

「……よって行きたい所があるんだけど……ダメ？」

しかし、女性の方は引かない。

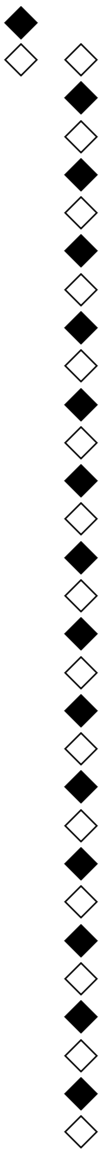
そういえば、幼馴染がこの町にいる……という事を前に何回も話されたのを思い出した男性は渋々折れた。

「……仕方がない、1時間だ。それまでは自由行動だ、終わり次第目的地である駒王学園で集合だ」

「……ありがとー！じゃあ、行ってくるね！」

バビューン！と住宅街に駆けて行った女性を見て男性は小さく溜息をついた。

「……何処で時間を潰すか……」



どうも、あと一時間は暇なゼノンだ。

実は憑依なんて事を経験している元一般人です。寝て起きたらこのゼノン君、当時5歳に憑依してた。

しかも、物騒な世界で悪魔やら堕天使、天使がいる事をすぐ知った。何故かって？何でも俺は天然の聖剣使いらしく、すぐに裏について教わったからだ。

しかし、ここが教会だからという事もあるが「悪魔や堕天使は消毒だ、ヒヤツハー」的な人物が多い。そのせいか、何だか元一般人の俺は教会では浮いていた。

まあ、でもこのゼノン君のスペックは高く、数年でそれなりの強さまでなつて『破壊エクスカリバー・デストロクシオンの聖剣』を使わせて頂く事になった。

そんな中、俺がゼノン君に憑依して十年くらいがたった時に教会のお偉いさんから任務を依頼された。

なんか、俺と紫藤イリナっていう憑依後に出来た友人だけで行くように……つて言われたので目的地である日本に来たんだが、イリナには振り回されっぱなしだな……。

と、考えながらあるいていたら何も変哲もない公園についた。

特にする事も無いので、ベンチに座り時間が経つのを待っていると暫くして黒髪の眼鏡をかけた女性が近づいてきた。

多分、現魔王の一人のセラフォル・レヴィアタンの妹、ソーナ・シトリーだろう。

俺が立ち上がり片手で人払いの結果を貼るとソーナ・シトリーらしい女性は警戒しながら話しかけてきた。

「貴方は、もしかして先日送られてきた親書の差出人ですか？」

「ああ、そうだ。……そこまで警戒しなくても良い、ベタだが、神に誓つて〃私たちからは貴方たち悪魔には剣を向けない。それでどうしたのかね？」

神を信じていない俺がこんな事をいうのは馬鹿げているが、そんな事知らない悪魔さんの為に言っておく。すると、若干だがソーナ・シトリーの警戒が薄れる。

「いえ、ただあまりにも奇妙な人物がいたからです。詳しい話はリアス・グレモリーとお願いします」

「ああ、そのつもりだ。そうだ、リアス・グレモリー殿にあと一時間後にそちらに向かう、と伝えてくれ」

さつきから時間は経っているが、どうせイリナの事だから遅れるだろうから若干時間を伸ばしておく。

「ええ、わかりました」

話が終わったので人払いの結界を解除する前にソーナ・シトリーは目的地である駒王学園の方に転移した。

その後、栗毛の女性……紫藤イリナと合流した俺は目的地である駒王学園の旧校舎にあるオカルト研究部に足を運んだ。

そして、俺はオカルト研究部と書かれたプレートに掛けられた扉をノックして口を開いた。

「教会から派遣された者だが、こちらがリアス・グレモリー殿の部室か？」

「ええ、入ってちょうだい」

「失礼する」

リアス・グレモリー本人からの許可がおりたので入室する。

部屋内には、紅髪の女性……リアス・グレモリーを護るように五人の男女が後ろに控えていた。

彼らがグレモリー眷属だろう。しかし、何であの金髪のイケメン君はこつちを親の仇を見るみたいに睨んでるんだ？わけわからん。取り敢えず、自己紹介でもしとくか。

「お初にかかる、リアス・グレモリー。そして、その眷属達。私の名はゼノン、そして隣の女性は紫藤、紫藤イリナだ」

イリナが流石に魔王の妹の前だからか律儀に頭をさげる。

「さて、本題に入ろう。簡潔に言うならばエクスカリバーが盗まれた」



「何ですって!?!」

リアス・グレモリーが驚く。

「話を続ける。主犯は『神の子を見張る者』の幹部コカビエルだ。そのコカビエル達は日本に逃れ、この地に持ち込んで来ている」

すると、リアス・グレモリーの表情が険しくなる。が、ほつとて話を続ける。

「今回奪われたのは『天閃の聖剣』『夢幻の聖剣』

『透明の聖剣』の三本だ」

聖剣の名前を告げると金髪でない方のグレモリー眷属の男……確かイリナの幼馴染で兵藤一誠が疑問の表情を浮かべる。

すると、隣の黒髪の女性がエクスカリバーについて小声で説明する。それが終わってから亜空間から一本の剣を取り出す。

「そして、これが残るエクスカリバーの一つ『破壊の聖剣』だ」

「え? いいの、見せちゃって?」

「ああ、構わない」

「じゃあ、こつちが『擬態の聖剣』よ。能力はこうやって形を自由に変える事ができるの」

イリナが聖剣の形状を変えながら説明する。それが終わるとリアス・グレモリーが口を開いた。

「それが墮天使の組織に奪われるなんて、とんでもない失態ね。しかも、聖書にも乗っている墮天使の幹部がでてくるなんてね」

「私たちが来る先日から奴らの動向を探るためにこの町に神父……悪魔払いを秘密裏に潜り込ませてもらっていたが……成果は無し、寧ろ彼が始末されてしまった」

兵藤が何だか難しそうな表情をしているが大丈夫か?

しかし、そろそろ本題に入るか。

「今回こうして貴方達と会話をしているのはこの地をグレモリーが所有し、管理しているからだ。」

「……何が言いたいのか?」

「ああ、単刀直入に言おう。この事に関しては貴方達、悪魔は一切介入しないほしい」

すると、リアス・グレモリーは眉根を寄せる。

「……つまり、あなた達は私たちを疑ってるわけね。私たちが墮天使と手を組んで聖剣をどうにかすると」

「あくまで可能性の話だが、そう思っても仕方ないだろうか？ 実際、神側から聖剣を取り除ければ、墮天使だけではなく、悪魔側にも利がある。我らは戦争こそしていないが、基本的には敵対しているからな……」

実際、元一般人の俺は何故いがみ合うのかがあまり理解できないがな。

「……という事は、貴女方は2人だけで墮天使の幹部からエクスカリバーを奪い返すつもりなの？ 下手したら死ぬことになるわよ？」

「大丈夫よ」

「同意見だ。死ぬかもしれないが……その時はその時だ」

恐らく人数的に厳しいものがあるが何とかなるだろう。最悪、グレモリー眷属に協力を要請すればいいだろう。コカビエルの目的が当たっていれば協力せざるを得ないだろうし……。

ゲスいな俺の考えは。

「……っ！死ぬ覚悟でこの日本に来たというの？ 相変わらず、あなた達の信仰は常軌を逸しているのね」

「我々の信仰をバカにしないでちょうだい、リアス・グレモリー。ね、ゼノン？」

いや、信仰の事を俺に言われてもな……。

「……教会からは墮天使に利用されるぐらいなら、エクスカリバーが全て消滅しても構わないと言われた。私達の役目は最低でもエクスカリバーを墮天使の手からなくす事だ。それに、今回の件はエクスカリバーを熟知している私たちが適任だろう」

とりあえず、イリナはスルーして言いたい事を言う。

「さて、そろそろお暇させて貰う。イリナ、行くぞ」

そして、話が途切れて終わった為退室しようとイリナに声をかける。

「そう、お茶は飲んでいかないの？ お菓子ぐらいは振舞わせて貰うわ」「ご好意感謝するが……ん？ 数奇な運命だな、こんな所で会えるとは

なアーシア・アルジエント」

兵藤に隠れて見えなかつたがよく見るとアーシア・アルジエントがここにいるとは驚いた……行方不明と聞いてたが、まさか生きてるとは。

「貴方が噂になっていた『魔女』になった元『聖女』さん？まさか悪魔になつてゐるなんて思つてなかつたわ」

『聖女』や『魔女』という言葉に反応するアルジエント。やはり、好きで崇拜されていたんではないという事か。

「それで、アーシアは悪魔になつても主を信じているのかしら？」

「……捨てきれないだけです。ずっと信じてきたものですから……」

「そうか、至極どうでもいいことを聞いて悪かつたなアルジエント」  
「はっ。」

俺の発言に驚くグレモリー眷属たち。

「どうした、反応が予想外だったか？まさか『ならば、今すぐ私に斬られるといい。罪深くとも、我らの神ならば救いの手を差し伸べてくださるはずだろう』なんて台詞を言つて欲しかったのか？」

態々、聖剣を亜空間から取り出して言う。

「……」

まだ呆然としているグレモリー眷属たち、そんなに意外だったか？

「イリナも謝罪しろ、好きで『聖女』や『魔女』と言われてたのでは無いだろう」

「あ、うん。ええと、ゴメンね、アーシアさん」

こいつも、昔は陶酔か狂信と言つていいほどに神に固執していたが、俺との付き合いで大分マシになつたがたまに行き過ぎる時があるからな。

「あ、いえ、大丈夫です」

「さて、本当においとましなければならぬのだが……少しいいかな、リアス・グレモリー？」

「え？」

やっと戻ったりアス・グレモリー、だがそれよりも先に戻った奴が凄く殺気立ってるのが気になる。

「その金髪の彼が殺気立っているのだが、どうにかできないか？ 最後まで変わらなかつたからな……少し気になってな」

「あ、祐斗は……」

へえ、祐斗っていうのか。まあ、いいか金髪君で。

「ああ、祐斗と言うのか。では祐斗君、何故そんなに殺気立っているんだ？ 収まる術があるのなら協力は惜しまないが？」

やば、大分挑発的になってしまった。案の定、金髪君は更に殺気立って声を荒げた。

「戦えー僕とー！」

「は？……まあ、リアス・グレモリーに實力を見せておくのも有りだろう。模擬戦という形でいいかな、リアス・グレモリー？」

なんだ、よかつた。斬らせろとか言われたらどうしようかと思つたが、戦うだけなら簡単だ。対した實力を持っていないだろうし、何より精神が安定していない。

揺さぶればボロを出すだろう……ってやっぱり考えがゲスいな、俺。

「……わかつたわ。朱乃、結界を校庭に。」

さつきも兵藤にエクスカリバーについて説明していた黒髪の女性……『雷の巫女』姫島朱乃がはつた結界の中に入り金髪君と向き合う。

「さて、なぜ君はそこまで……」

「キミ達の先輩だよ……失敗だったそうだけどね」

先輩で聖剣に怨みを持っている？

「ああ、君は『聖剣計画』の犠牲者の一人で処分を免れた者か……ならばこの聖剣に憎しみを持つのは無理もない」

「知ったような口を聞くな！」

同情しても怒るのか、ならば簡単にボロを出すな。

「……私は、何も言わない方がいいか。なら、始めよう」

そう言くと、すぐさま祐斗と言われた金髪の魔剣使いが突っ込んできました。

「僕の力は無念の中で死んでいった皆の思いの結晶、この力で聖剣所有者を倒して、聖剣を破壊する！」

それを『破壊の聖剣』により破壊して捌き、ワザと聖剣を地面に突き立てる。すると、轟音と共に地面が抉れた。

「クレーターが出来た!？」

何故か驚いている兵藤一誠。この程度なら素手でも可能なんだが？

「真のエクスカリバーでなくともこの破壊力。七本全部を消滅させるのは修羅の道か……」

すると、新たに魔剣を創造して突っ込んでくるので、それも同様に『破壊の聖剣』により破壊して捌き、距離をとる。

「憎しみを持つのは無理もない……が、それでは聖剣の破壊は愚か今の俺にすら勝てないぞ？」

「うるさい！」

そんな地味な精神攻撃をいれつつ金髪が創り出したさつきより大きめの魔剣を俺が破壊して距離をとる、というのを繰り返した。

そろそろ、リアス・グレモリーに実力の一片を見せて終わらせようとした途端に金髪君が

「君の聖剣の破壊力と僕の魔剣の破壊力。どっちが上か勝負だ！」

と言って金髪の手にはそれなりの禍々しいオーラを放ち、2 m以上の巨大な魔剣を創造した。

さて、丁度良かった。金髪が魔剣を振りかぶってきたのですぐさま

『エクスカリバー・デストラクション破壊の聖剣』を亜空間に戻し、拳に聖なるオーラを宿し迎撃する。

バキン！

金髪の魔剣が折れた。

「残念だったな、憎しみにとらわれずに君の持ち味を生かせればまだマシな模擬戦になっただろう」

そして、そのまま背後に周り手刀

で金髪君を気絶させる。

そして、驚いた顔をしたグレモリー眷属たち……の近くにいるイリナに近づく。

「さて、イリナ戻るぞ。それでは、リアス・グレモリーとその眷属たちまた会おう。」

「え？」

訳がわからない、と呆然とするリアス・グレモリーに背を向けて俺たちはこの場を去った。

## Who is she? II

「はあ……」

どうも、ゼノンだ。なんでテンションが低いのかと言うと……。

「ごめん！　本当にごめん！」

謝るイリナとその傍らにある絵を見てもう一度俺は、溜息をつく。

「はあ……俺が離れた僅かな時間で有り金の全てを使ってそんな絵を買うか？」

俺の発言そのままの意味で有るが説明すると、俺がイリナに金を預けて少し単独行動をしている間に、イリナが騙されてただの落書きにしか見えない絵を全額はたいて買った、という訳だ。

「だから謝ってるじゃない！」

何故、逆ギレするんだ？まあ、イリナだし仕方ないか……。

「これはお前の責任だ、お前が何とかしろ…….とりたいが、お前の事だから物乞いをする…….なんて突拍子もない事を言い出しかねない」  
「……ギク！　…….そ、そ、そんなことな、ないよ？」

口でギク！なんていう奴なんか普通はいないぞ？

「そこで代案がある。今から兵藤の家に行つて食料を分けてもらいに  
行け」

「え？　イツセー君の家に？」

キョトン、とするイリナ。

「ああ、お前は幼馴染なんだろう？財布を落としたりとか何とか言い訳して  
恵んで貰いにいけ」

「え？　私一人で？」

誰の所為でこうなったと思っっているんだ？

「当たり前だ、誰が全財産捨ててきたと思っっているんだ？とりあえず、  
近くまでは俺もついて行く。さっさと案内しろ」

「あ、お前たち!」

俺たちは、兵藤の家に向かう為に街中を歩いていた。すると、最近聞いた声が聞こえて来た。

「ん? 兵藤か……それとグレモリー眷属のチビとその男は誰だ?」

よくみると、兵藤と銀髪の幼……少女と知らん男がいた。

「チビ……?」

「こ、小猫ちゃん、落ち着いて!この子は、塔城小猫ちゃんっていうんです」

……結構俺って抜けているな、流石にチビは不味いだろ。気にしているみたいだし。

兵藤が落ち着かせたから事なきを得たが。

「チビはタブーだったか、済まなかったな塔城。で、このお前と雰囲気  
が似た奴は誰だ? 悪魔らしいが……」

「……匙、匙元士郎だ」

兵藤と雰囲気似ている、と言ったら露骨に嫌な表情をされたがどう  
いう事だ? 奴の神セイクリッド・ギア器の感じが同じ龍系統だと思っただから

言っただけだったか……謎だ。

「そうか、で、何のようだ?俺たちは今からお前の家に慈悲を貰いに行く  
ののだが?」

「え?どうして俺?」

兵藤が流石に反応した。仕方ない、イリナの為に話してやろう。

「実は、この大馬鹿イリナが今回持ってきた金を全てこの絵につき込んでしま  
ってな、飯を食えないんだ。だから、幼馴染という手を使って飯を  
たかりに行こうとしていたんだ」

その言葉に三人がイリナを見つめる。塔城に至っては呆れを越して  
不憫な目付きでイリナを見ている。

「あはは……」

「じ、じゃあ俺が奢るからそのファミレスで話さないか?」



すると、兵藤が有難い提案を持ちかけてきた。

「え!? 本当!? イッセー君!?」

イリナが過剰に街中で反応する。

「騒ぐなイリナ、完璧に不審者だぞ?」

「あ……」

「御馳走様でした。感謝する、兵藤」

日本に来てファミレスで食事をする事になったのは残念だがしっかりとご馳走になった。

「御馳走様でした。ああ、主よ。イッセー君にご慈悲を」

イリナが十字を胸の前でできる。

勿論、悪魔である彼らにダメージを与えてた。なんだ、恩を仇で返すつもりか?

「あははは、ごめんなさい。ついうっかり」

テへ、と笑みを浮かべるがお前のうっかりは信用ならん。

「それで、我々に何の用だ?」

食事も終り、イリナのうっかり(日常茶飯事)によるダメージが収まってから俺は兵藤たちに話しかける。ここまでしたということは何か話があるのだろう。

「単刀直入に言う、エクスカリバーの破壊に協力したい」

おお!? 意外だ、あちらから協力を申し出るとは……まで、なんでこいつらしいかないんだ?

「構わない……」ちよつと、ゼノン!?」と言いたいがこれはグレモリー眷属が協力してくれるというのか、それともお前たちのみが協力してくれるというのかをはっきりさせてくれ」

イリナをスルーして質問をする。実は、この質問に裏はない。

「俺たち三人と……あと俺のパートナーの一人だけだ」

パートナー？ 誰って考えるまでも無いか。計四人ってことは、兵藤たちの単独行動か……どちらにせよ協力してもらおうけどな。

「パートナーとはあの金髪君……祐斗って呼ばれていた奴か？」

「あ、ああ。そうだけど」

なんだ、断られると思っているのか？ 駒は多い事には構わないが……って、やはり考えがゲスいな。

「そうか確認をただけだ、協力をお願いしよう。ただし、最低限、悪魔だと正体がばれないように。それとお前たちの主にも可能な限りばれないようにしてくれ」

何回も言うがばれても俺たちにデメリットはないしな、兵藤たちから協力を頼み込んで来たんだからな。

「本当に、ゼノン？ 彼らは悪魔側の陣営なのよ？」

イリナが不満そうな声をあげる。

「そうか？ ならば契約するか？ 兵藤一誠？」

実際、俺と出来るかわからないが。

「え!？」

「だ、だめよ！ ゼノン！ 悪魔と契約するなんて！」

俺の発言に驚く兵藤たちと必死になって俺に言うイリナ。やっぱり俺が悪魔と契約するのは無理があるか……。

「そうか、仕方ない」

「(本当にする気だったのか？ この人は!?) 何だか本当に教会から来た人なのかを疑うな……)」

なんか、兵藤が驚きながらこちらを疑った目で見ると、という器用な事をしているが……気にしない。

それと、イリナ。俺は変な所でしつこいんだぞ？

「では、悪魔の力は借りずドラゴンの力を借りる為に彼と契約しよう。屁理屈だが上もドラゴンの力を借りるなどは言っていない」

「……確かにそうは言っていないわ」

上手く契約についてスルーしてくれたイリナのうっぴりに感謝する。

「協力関係は成立……と言うことでいいのか？」

確認の為か、兵藤が俺たちに訊ねる。

「ああ、後は君のパートナーを呼んでくれ」

すると、兵藤は金髪君に電話をかけた。

「話はわかったよ」

兵藤は金髪君……木場祐斗を呼んで、先程の事ついて説明をした。

「正直言うと、エクスカリバーの使い手に破壊を承認されるのは遺憾だけだね」

「そうか」

木場の挑発を軽く流す。

「やはり、『聖剣計画』のことで恨んでいるのね。エクスカリバーと教会を」

イリナが訊ねる。

「当然だよ。あの計画によって聖剣使いの研究は飛躍したんだろうが、計画が失敗したからと言って、被験者ほぼ全員を殺すことが許されると思っているのか？」

木場が少し殺気立って逆に訊ねてきた。まあ、普通に考えたら基地外じみているよな。

「その事件は教会でも嫌悪されている。処分を決定した責任者は異端の烙印を押され、いまでは墮天使側の住人をなっている」

多分墮天使側でも戦争に対して好意的な奴らの方にいるんだろうがな……。

「墮天使側には？ そいつの名前は？」

話に興味を持ったのか、木場が質問してきた。

「バルパー・ガレイ。『皆殺しの大司教』と呼ばれた男だ」

「……墮天使を追えば、その男に行きつくのかな」

何かを決心したのか木場はそう呟き、こちらを向く。

「僕も情報提供したほうがいいようだね。先日、エクスカリバーを

持った者に襲撃されたよ。その際に神父が一人殺されていた。殺されたのはそちらの者だろうね」

やはりか……。静かに聞き、襲撃者の名前を訊ねる。

「フリード・セルゼン。この名前に覚えは？」

ああ、あいつなのか。候補の中に入っていたとはいえ、墮天使側につくとはな……。これも運命か？

「ああ、知っている。同期だ……。対した交友は無かったけどな」

一回だけ、あいつと同じ仕事をした事がある、という程度……。ならば良かったんだがな。何度か模擬戦をしたことが有るんだよな。

わざわざあの狂人と同等に見られたくもないし、言葉に嘘を交える。

「元ヴァチカン法王庁直属のエクソシスト。十三歳でエクソシストになった天才、悪魔や魔獣を滅していく功績は大きかったわ」

イリナがフリードについて説明する。

「フリードについて、特に話し込む事ではない。それより、エクスカリバー破壊の共同戦線と行こうか」

だが、話を切り替えて紙に連絡先を書いて兵藤に渡した。

「ありがとう。俺たちの連絡先は……。」「イツセー君の連絡先はおぼさまからいただいているわ」……。え？」

凄いな兵藤の母は、幼馴染だからと言って本人の許可無く連絡先を教えるか？

「では、またな。食事と滞在中の経費の件はいつか礼をする」

話は済んだ為、席を立った。しかし、節約しないと……。後でイリナに借りた金、全額払わせるか？

「食事ありがとうね。また奢ってくれとうれしいな」

「誰の所為でこうなったと思ってるんだ、イリナ？」

どの口が言ってるんだ、とイリナに告げる。本気で払わせるぞ？

「あはは……。じゃあね！」

……。絶対反省してない。また、似たような事が起きるな。

……。はあ。

What is Durandal?

エクスカリバーの搜索を始めて数日。エクスカリバーを所持していたフリードを探すが一向に手がかりすら掴めない。

それにしても、コカビエルの奴もまだ動かないのか？あいつの目的は戦争だろうからな。それか、聖剣に関して何か準備をしているのか？

と辺りが夕暮れに染まる中を散策しているとある場所から馴染みの深い気配がする。

「イリナ、聖剣の気配だ。今すぐ向かうぞ」

「わかったわ！」

「逃げさせてもらうぜ！ 次に会う時に決着だ！」

聖剣の反応のした方に向かうと、エクスカリバー二本を持ったフリードとハルパーに向かい合う形で兵藤たちがいた。

「逃がすと思うか？」

「やつほー」

フリードたちと兵藤たちの間に立ち、フリードに告げる。

「マジかよ！お前がいるとはな、ゼノン！仕方ねえ、バルパーのじいさん、撤退だ。コカビエルの旦那に報告しに行くぜ！」

「致し方あるまい」

「それじゃ、バイビー！」

フリードは懐から閃光弾を取り出し、地面に投げつけた。

別に視界を奪われても戦闘は出来るので、一応不意打ちに備え光が収まるまで動かず警戒しておく。

そして、光がおさまると二人は逃げていた。

「……兵藤、俺たちは彼奴らを追跡する、お前たちは……頑張れよ。いくぞ、イリナ」

近くにリアス・グレモリーとソーナ・シトリーが近づいて来ているのが分かったので、逃げるようにバルパーたちを追跡しに行く。

「ええー！」

「僕も追わせてもらおう！ 逃がすか、バルパー・ガリレイ！」

すると、直ぐに木場がこちらに合流した。まあ、いいか。

「イリナ、木場、今回は戦闘はできる限り控えて貰う」

フリードたちを追跡している途中でイリナと木場に話しかける。

「どうして？」

「何故だい？」

「まず、今回の目的が追跡だという事に加えてあいつらの拠点でこの少人数で戦闘する事に利点がない」

わざわざ相手の有利な場所で戦う必要がない。調べたコカビエルの性格からして挑戦をふっかければあいつなら乗ってくるだろう。

「確かにね……」

「……」

木場は納得していないが言葉を続ける。

「それに、コカビエルは聖剣を目的として奪ったのでは無い……ということだ」

「どういう事？」

「どういう事だい？」

この言葉に、二人は食らいついてきた。よく考えればわからないか？……推測に過ぎないがな。

「推測に過ぎないが、コカビエルの目的は天使・墮天使・悪魔による三つ巴の戦争を起こす事だ。その為、我々から聖剣を奪った上で魔王の妹がいるこの地にやって来たのだろう。だったら、早急に悪魔に連絡しサーゼクス・ルシファア殿に協力を要請した方が一番効率的だ」

セラフオル・レヴィアタン殿でも可だがな。

そう話している間にフリードたちが、拠点らしき街はずれの廃鉱の中に入っていく。

中に入るとバルパーとフリードだけがいた。

「さて、追いついたぞ？バルパー・ガリレイ、フリード・セルゼン。コカビエルは何処だ？」

すると、強烈な殺気と共に奥から光の槍が降り注いできた。

すぐさま、イリナと木場より前に出て『破壊の聖剣』エクスカリバー・デストラクションを亜空間より取り出して光の槍を全て破壊する。

光の槍が降り注ぐのが止んだと同時にコカビエルが出てきた。

「ほう、今を防ぐか……流石に聖剣を託されるだけあるな」

イリナと木場に撤退できるように目配せをして、コカビエルに問いかける。

「貴様が墮天使幹部コカビエルか？」

「ああ、私がコカビエルだ。さて、計画まで時間がないが直ぐに終わらせるでしょう」

俺の質問に律儀に答えると、コカビエルはバルパーに合図をした。

すると、バルパーが小型の何かを使い結界を創り出した。すると、辺りは廃鉱からただの広い空間に変わった。

「ちっ……逃す気は無いか……イリナ！木場！バルパーを狙え、こいつの持っている道具が結界を創り出している。その間、俺はコカビエルの相手をする！」

あの道具が気になるが今は逃げる事を専決して行動しなくては……。

「わかったわー！」

「させるかよー！」

イリナと木場がバルパーに向かうがフリードが邪魔をする。

「さて、何処まで粘れるかな？」

余裕の表情でコカビエルは、フリードたちと離れ俺に向けて光の槍を無数に撃ち出してきた。

「ははは、どうした？防戦一方じゃないか、それとも精一杯かな？」

あれから、遊ぶようにだんだんとスピードを速め、威力を強くした光の槍を撃ち出してくるコカビエル。まだまだどちらも余裕があるとはいえ、コカビエルが油断している内に何か手を打たないとな。

イリナと木場の方はなんとか優位に進めている。しかし、まだフリードに有効打を与えていない。

と、いうのも……予想以上にバルパーの指示が的確で思うように攻められない、という現場だ。

「ふっ！」

ほんの僅かな時間で聖なるオーラを凝縮し、斬撃を光の槍の弾幕を消すような形で飛ばした。

「小癩な……」

すると、コカビエルは余裕の現れかわざわざ残りの弾幕を消し、斬撃を手で受け止めようとした。

……今しかない！

「イリナ、木場！フリードの動きを止めろ！」

すぐさま、二人に指示を出す。

「了解！『擬態の聖剣』！」  
エクスカリバー・ミミック

「ああ！『魔剣創造』！」  
ソード・ベース

イリナの聖剣の形状が変化し、幾重にも又分かれしてフリードを襲い、木場の神セイクリッド・ギア器によりフリードの足元から魔剣が生み出される。

「なんじゃ、こりゃあ!?!」

フリードは突然の猛攻に驚き飛んで回避する。

「落ち着け、フリード。『天閃の聖剣』で……「遅い！」」  
エクスカリバー・ラビッドリイ

フリードが着地する直後の隙を狙って濃いオーラを練った聖剣でフリードの聖剣を砕く！

物凄い音が鳴り響きフリードの持つ二本の聖剣の半身が砕け散つ



た。

オーラが足りなかったのが原因か……完全に破壊出来なかった。

「げげ!? 僕ちゃんの聖剣が!？」

「……素晴らしいぞ、その聖剣使い。バルパー、計画を早めるぞ」

聖剣を半身とはいえ二本も破壊されたのに余裕なコカビエル。

計画だと? 何をする気だ……?

「ふむ、仕方あるまい。フリード、引くぞ」

「了解だぜ!」

すると、バルパーが結界を解くと

辺りが廃鉱に戻った。しかし、さつきと位置が変わっていてコカビエルが出口側にいた。

「手土産だ、生き残れたらまた会おう」

コカビエルが先程とは比べものにならない巨大な光の槍を数本生み出し、こちらに投合してきた!

くそつたれ! 廃鉱ごと俺たちを消す気か!? 仕方ない……。

俺は決心するとその場に聖剣を突き刺して莫大なオーラを聖剣に込めて言霊を唱える。

「破壊せよ!」エクスカリパー・デストラクシオン『破壊の聖剣!』

そして、閃光が俺たちを飲み込んだ……。

「くっ……流石に墮天使幹部。これを使う事になるとはな……」

砕けて核だけになった聖剣をみて呟く。使用したのは、昔に俺が考察したリスク有りまくりの一度限りの聖剣による広範囲の衝撃波。

欠点は核を残して聖剣が砕け散るといふ単純明快なもの。

先ずは、全員の安否を確認しようと辺りを見回す。すると、少し遠くにイリナが血塗れで横たわっていた。急いで駆け寄る。

「イリナ……息はあるか」

脈と呼吸を確認して生きていることに安堵した俺は応急処置として回復魔術を唱える。

「大丈夫かい？」

すると、後ろから声がかかる。

「木場、よく生きてたな。神セイクリッド・ギア器のお陰か？」

「後は君の近くにいたからかな……でも、悪魔の僕にはあれはキツイな」

確かに悪魔に光は有毒だ。明らかに今の木場は気力だけで持ち堪えている。

「そうか、とりあえず俺たちの拠点に來い。治療をする」

「うん、お願いするよ」

と、同時に木場も倒れ込む。……俺もキツイんだが？

「さて、治療は粗方済んだが流石にダメージは抜ききれないか」

あれから二人を拠点のホテルに連れ込み重症の二人を重点的に治療して、現在では木場が完全にはいかないが動けるまでに回復した。

「でも、大分マシになったよ。それで、これからどうするんだい？」

木場の質問に少し考えて答える。

「……彼奴らの計画について、これも推測だがグレモリー眷属に対する挑発と迎撃の準備だろう。だが、聖剣の気配がしない……まだ計画が始まっていないのだろう」

一度区切り、水を飲んでから続けた。

「それで、俺の推測が正しいなら駒王学園でその計画をするだろう」とすると、木場が立ち上がる。

「なら、すぐに行こう」

「ああ……イリナ、借りてくぞ」

『エクスカリバー・ミニッツ』  
と、いって俺の部屋に寝かせてあるベッドの近くにかげられた  
『擬態の聖剣』を手に取ってホテルを後にした。

## What is Durandal? II

「……っ！木場、コカビエルが動き出した、速度をあげるぞ！」

駒王学園に向かう途中に、結界内ではつきりとは感じられないが聖剣が反応している。

「了解！」

駒王学園前につくと敷地内全体に結界がはってあって、その外にはシトリーとその眷属……だろう人たちがいた。

「さて、シトリー。現場は？」

今直ぐに入りたいが、結界を突き破るのも手間がかかるし、無駄だから大人しく、シトリーに聞いてもらうように話しかける。

「え、ええ。今は、グレモリー眷属が時間稼ぎをしています。それで、ケルベロスと交戦中です」

「時間稼ぎってことは、応援が？」

「ええ、後一時間後にルシファー様が」

「……一時間後？まさか、数時間前に呼んだ……とかじゃ無いよな。」

「そうか、加勢しに中に入る。入れてくれるか？」

「……わかりました」

シトリーの許可を得て一部だけを開いた結界をくぐり、敷地内に入る。すると、上空に浮かぶコカビエルに、その後ろに控えるバルパーとフリード。その二人の近く浮かぶ三本のエクスカリバー。

さらに、対面するグレモリー眷属がコカビエルが召喚したケルベロスと戦っている。

「加勢する」

といって『エクスカリバー・ミミック擬態の聖剣』による剣圧でグレモリー眷属の周りのケ

ルベロスを全て吹き飛ばす。

「部長！ 朱乃さん！ ケルベロスを屠れるだけの力を得ました！」  
すると、兵藤が叫ぶ。すごいな、最近悪魔に転生したとはいえ、やはり赤龍帝か……。

「イツセー！ あなたの譲渡を私と朱乃、二人同時にできないかしら？」

すると、グレモリーが問う。

……なんだ、譲渡か。そのまま蹴散らすのかと期待した俺って一体……。

「……………どちらにも倍加した力の七割か八割しか譲渡できませんけど、可能です！」

兵藤は少し考えるような素振りをした後にそういった。この間にバルパーの周りに書かれた術式を解析する。

「それだけあれば十分よね、朱乃？」

「はい、いけますわ」

グレモリーと姫島は顔を見合わせ、兵藤に譲渡するように言った。すぐさま、兵藤は二人に近づいて、肩に触れる。

ブーステッド・ギア・ギフト  
「赤龍帝の贈り物！」

トランスファース  
『Transfer

！』

兵藤の声と同時に体を通して、倍加された力がグレモリーと姫島に流れ込んでいく。そして、両者から魔力が溢れた。

確かに、ケルベロスを奢るだけの力にはなったな。

「いけるわね、朱乃！」

「はい！ 天雷よ！ 鳴り響け！」

何の余裕かわからないグレモリーの不敵な笑みに応えるように、姫島が雷の照準をケルベロスへと合わせる。しかし、それを察知した為、ケルベロスはその場から逃げようとしていた。

「逃がさないよ」

だが、ケルベロスは逃げることはできず、その四肢を地面から生えた無数の魔剣によって貫かれた。……木場か。援護としては素晴ら

しいが、来るのが遅くないか？

そして、ケルベロスに姫島の雷が降り注いだ。

轟音が鳴り響き、残りのケルベロスはその身を雷に焼かれて無に還った。

「くらえ！ コカビエル！」

ケルベロスが消滅し、即座にグレモリーがコカビエルへと手を向ける。すると、滅びの魔力の塊が撃ち出された。

「でかい！」

兵藤が、その大きさに驚愕して声を出す。知らんが何時もよりも格段に大きいみたいだが……。

案の定、コカビエルは軽く右腕のみ防いでいだ。そして、コカビエルは受け止めていた腕を上に向けて、グレモリーが放った魔力の軌道をずらした。その魔力は天高く飛んで行った。

「ふふ、なるほど。赤龍帝の力があれば、リアス・グレモリーの力がここまで上がるのか」

余裕綽々と笑うコカビエル。

そして姫島の方を見て言葉を続ける。

「それに、その女はどうやらバラキエルの力を宿しているようだな」「私をあの者と一緒にするな！」

コカビエルの言葉に目を見開き、激昂した姫島が雷を連続して落とす。だが、そんな集中力の途切れた攻撃が通用する筈も無く、コカビエルは鼻で笑うと翼ですべてを薙ぎ払った。

そして、こちらを向いた。

「ほう、生きていたのか。……おや、もう片方の聖剣使いはどうしたのかね？ 死んだか？」

コカビエルの挑発に何故か苛つくが出来るだけ冷静に返答する。

「巫山戯るな、生きてる」

……冷静というよりはぶっきらぼうだな。

「そうか、残念だ。死んでいればミカエルの奴も動くかもしれないなかつたんだがな」

やはり、目的は戦争か。戦争狂か？ こいつは。

「……完成だ」

バルパーの声が聞こえ、そちらを向く。すると、校庭の中心にあつた三本の聖剣が今までにないほどの輝きを放っていた。俺の胸元にある『破壊の聖剣』の核と俺の手元の『擬態の聖剣』が反応している。

「三本のエクスカリバーが一つになる」

神々しい光が辺りを覆い、宙に浮いている三本の聖剣が重なり一本の聖剣になった。

「エクスカリバーが一本になった光で下の術式も完成した。あと十分もしないうちにこの町は崩壊するだろう。解除するにはコカビエルを倒すしかない」

「は？本気かよ。時間までにコカビエルを倒さなければ、町ごと俺らはお陀仏ってことか？」

「ってことは、サーゼクス・ルシファー殿の到着は間に合わない。」

「ってことは俺の奥の手を出す必要があるか……（今まで忘れてたなんて、口が裂けても言えない）」

「フリード！」

「はいよ、ボス」

「コカビエルの呼びかけで、フリードが歩いてくる。」

「陣のエクスカリバーを使い。最後の余興だ。三本の力を得たエクスカリバーで戦ってみろ」

「コカビエルの言葉に聖剣を取り、気味の悪い笑みを浮かべるフリード。あれを無視して木場に話しかける。」

「木場、あのエクスカリバーの破壊に協力してくれないか？」

「いいのかい？」

「木場がそう言うが……」

「実際、あの聖剣の核さえ回収できれば問題ない。それに、今の状況で協力し合わない手は無い」

奥の手を出すのにも、それなりに時間がかかるし現場のエクスカリバーには『擬態の聖剣』では威力不足だ。『破壊の聖剣』が有ればな……。あんな事しなければな……。

「くくく……貴様はあの計画の生き残りか。数奇なものだな、この極東の島国で会うことになるうとはな……」

嫌悪感を抱くような笑い方するバルパー。そして、バルパーは自身の過去を何故か語りだした。

今の内に、奥の手の準備をするか……って何て唱えれば良いんだっけ？

「私は、聖剣が好きだ。聖剣の物語に心を躍らせたこともある。だが、だからこそ、自分に聖剣が使えない時は絶望し、聖剣使いに憧れ、その思いは高まり、聖剣の使えるものを人工的に創りだす研究に没頭して、そして研究は成功した。キミたちのおかげだ、感謝しているよ」  
聖母マリア、ディオニシウス、バシレイオス、そしてペトロよ、だっけ？何かごっちゃになっている気がする。

「成功……？ 僕たちを失敗作だとして処分したじゃないか」

その後は覚えているんだけどな…… 我が声に耳を傾けてくれ。

この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する。デュランダル……だよな？

「聖剣を使うのには、必要な因子がいる。しかし、被験者たちには因子はあるものの必要な数値に満たなかったのだ。そこで私は、因子を抽出して集めることができないか、と考えたのだよ」

うーん、バシレイオス、ペトロにディオニシウス、聖母マリアの四名が入っていたんだよな。

「そして、私は持っている者たちから因子を抜き取り、このように結晶化させたのだ」

バルパーが懐から光り輝く球体を取り出してこちらに見せてきた。  
……ん？なんだあれ？すっかり考え込んでいたな。順番が思い出せないし……。

「これにより、聖剣使いの研究は飛躍した……が、教会は研究資料を奪って私を異端認定した。貴様を見る限り、私を異端認定したくせに研究は引き継がれているらしい。だが、あのミカエルのことだから因子を抜き出しても被験者は殺していないだろう。まあ、私よりは人道的だろうな」



その後、愉快そうに笑うハルパー。しかし、俺は関係無いぞ？天然の聖剣使いだからな。

「同志たちを殺して、因子を抜き出したのか？」

木場が殺気のこもった声でバルパーに問いかける。

「ああ、そうだ。この球体はその時のものだが、三つほどフリードに使用してしまった。残りのこれは最後の一つだ」

「俺以外の奴は因子についていけなくて死んじまったけどな！やっばり、俺様はスペシャルだねえ！」

俺的にはフリードがついていけたのが驚きだよ。

「……バルパー・ガリレイ。自分の研究の為だけにどれだけの命を弄ぶつもりだ」

木場の手が怒りで震え、怒りから生み出される魔力が祐斗の体を覆った。なんだ？パワーアップフラグか？

「ふん、この因子は貴様にくれてやる。環境を整えば後で幾らでも量産できる段階までは研究できている。先ずは、この町を破壊する。その後、世界各地の聖剣をかき集め、聖剣使いを量産した上で統合されたエクスカリバーでミカエルと教会に戦争を仕掛けてやる」

バルパーとコカビエルが手を組んだ理由がそれか……。しかし、計画的には無理が有りまくるぞ？この町が破壊されたら魔王が許さな idarou し、ミカエル様もジュリオさんたちが動くだろう。どう頑張っても準備期間なんてねえよ。

そして、バルパーは聖剣の因子を木場に向かって放り投げた。コロコロと転がりうまく木場の足下で止まる。

「みんな……」

木場はしゃがんでそれを拾う。その瞳からは涙が流れていて、表情には悲哀の感情と怒りの感情が浮かんでいる。

『……』

「ん？」

そんな時、先程の因子から淡い光が漏れ出し校庭を包む。そして、ぽつぽつと光が人の形を成す。

そして、木場を囲むように現れた少年少女たち。

「この場に漂う様々な力が因子に宿っていた魂を解き放ったようですね」

姫島がそう言った。確かに、ここには天使はいないが悪魔に墮天使、聖剣使いに、赤龍帝がいるしな。

木場は同胞である少年少女を見つめ、悲しそうな、しかし、懐かしそうな表情になる。

「ずっと……ずっと、思ってたんだ。僕だけが生きていていいのかって……。僕よりも夢を持っていた子、僕よりも生きたかった子がいた。それなのに、僕だけが平和な暮らしをしていいのかって……」

すると、木場の同志である一人の魂が

『自分たちのことはもういい。キミだけでも生きてくれ』

と、訴えかけてくる。

そして、他の少年少女も同調するように口を開く。聞こえてきたのは、ある人物につきっきりで教わった懐かしいもの……。それは、聖歌。近くにいる木場が彼らにつられるように聖歌を口ずさむ。歌う彼らは無垢な笑顔を浮かべていた。

歌う彼らの魂が輝き始める。その輝きは木場を中心に強くなっていき、その光が木場に訴える。

『僕らは、一人ではダメだった……』

『私たちは聖剣を扱える因子が足りなかった。けど……』

『みんなが集まれば、きっと大丈夫……』

悪魔は聖歌を聞くとダメージを受けるはずだが、この場にいる誰一人として苦しんでいる者はいない。

ふと、頬に手を当てると濡れていた……。俺も自然に涙を流していたみたいだ。

『聖剣を受け入れるんだ……』

『怖くなんてない……』

『たとえば、神がいなくても……』

『僕たちの心はいつだって……』

「……ひとつだ」

目を閉じて木場が言葉を紡ぐと魂が天へと昇り、木場の降り注ぐ。

魂から発せられた光は優しく木場を包み込んだ。木場から感じられる力が増大していく。

そして、木場は目を開きバルパーに告げる。

「バルパー・ガリレイ、あなたを滅ぼさない限り、第二、第三の僕たちの生が無視される」

「ふん。研究に犠牲はつきものだ。ただそれだけのこと」

バルパーはいかにもくだらないといった表情で、木場の言葉を切り捨てる。

すると……

「木場っ！ フリードの野郎とエクスカリバーをぶっ叩けっ！ お前は、リアス・グレモリーの眷属の『騎士』で俺たちの仲間だ！ 俺のダチなんだよ！ あいつらの想いと魂を、無駄にするなあ！」

「祐斗、やりなさい！ 自分で決着をつけるの！ エクスカリバーを超えなさい！ あなたはこのリアス・グレモリーの眷属なのだから！

私の『騎士』はエクスカリバーごときには負けはしないわ！」

「祐斗くん！ 信じてますわよ！」

「……祐斗先輩！ ファイトです！」

木場の仲間からの声援。

その声により、木場は至った。

「僕は……剣になる。部長、仲間たちの剣になる！ 今こそ僕の想いに応えてくれッ！ 『<rb>魔剣創

</rb><rp></rp></><rp></rp></><rt>ソード・バス</rt><rp></rp></><rp></rp></></ruby>』!!」

そして、神々しいオーラと禍々しいオーラを放つ一本の剣が手元に現れた。

「禁手化

、『双覇の聖魔剣』。聖と魔を有する剣の力をその身で受けるとい

うか十分か、木場一人で。

金属音と共に木場の聖魔剣とフリードのエクスカリバーが衝突す

る。

均衡を保ったかに見えるがフリードのエクスカリバーを覆うオーラは、木場の聖魔剣のオーラによって見るからにかき消されていく。

「はあ!? その駄剣が、本家本元の聖剣を凌駕すんのか!？」

驚愕の声を出すフリード。

「それが真のエクスカリバーならば、勝てなかっただろうね。でも、そのエクスカリバーでは、僕と同志の想いは断ち切れない!」

「チー!」

フリードは舌打ちをして、聖剣を高速で振り回す。

『エクスカリバー・ラビッドリィ天閃の聖剣』の能力か、だが今の木場なら……。

「なんで当たらねえんだよお! 無敵の聖剣様なんだろうお!」

いとも簡単に回避する木場に流石のフリードも焦り始めたみたいだ。

「なら、こいつも追加だ、くそつたれ!」

すると、聖剣の先端が消えた。

今度は『透明の聖剣《エクスカリバー・トランスペアレンシー》』の透過能力か、しかし、これはフリードの溢れる殺気で無駄だな。

予想通り、フリードの透明な刀身との木場の聖魔剣が火花を散らす。

そして、打ち合う度に段々とエクスカリバーと聖魔剣の力の差がついてきて……

ついには、透明になっていた聖剣が砕けて姿を現す。

「マジか! マジですか! 伝説のエクスカリバーちゃんが木端微塵かよっ! これは酷いぜよ!」

喚くフリードに木場が接近し、オーラを込める。

すると、フリードのエクスカリバーは聖魔剣と接触した瞬間、金属音が鳴り響いて砕け散った。

「見ていてくれたかい? 僕らの力はエクスカリバーを超えたよ!」

エクスカリバーで受けきれなかった木場の一撃を受けて、フリードは鮮血をしたたらせて倒れる。

「ぼ、馬鹿な……。聖魔剣だと？ あ、あり得ない……。相反する力が混じり合うことなどないはずがないのだ……」

バルパーは苦悶の表情を浮かべてつぶやく。相反する力が混じり合うことなどないはずで、じゃあ、某野菜人の漫画である咸卦法はなんなんだ？ え、設定が違う？

「バルパー・ガリレイ。覚悟を決めてもらおう」

木場は聖魔剣をバルパーに向けて斬りかかろうとするが、バルパーが何かを発見したかのように声を荒げる。

「……そうか！ わかったぞ！ 聖と魔、それらを司る存在のバランスが大きく崩れているとするならば説明はつく！ つまり、魔王だけでなく、神も……」

バルパーが言葉を続ける事はなかった。

何故なら、バルパーの胸にはコカビエルが放った光の槍が突き刺さっていたからだ。

「お前は優秀だったよ、バルパー。そこに思考が至ったのも優れているからだろうな。しかし、お前がいなくても俺は別に自分だけでやれる」

死んだバルパーを見下しながらコカビエルは言う。そして、大きな哄笑を上げながら、地面に降りた。久しぶりの大きな重圧に例の言霊をやつと正確に思い出した。

「限界まで赤龍帝の力を上げて、誰かに譲渡しろ」

コカビエルは不敵な笑みを浮かべ、自信に満ちた一言を発した。

それに対し、グレモリーが激昂する。

「私たちにチャンスでも与えるというの!? ふざけないで！」

「ふざけないで？ ははは！ ふざけているのはお前たちの方だ。俺を倒せると思っているのか？」

コカビエルから、さらなる重圧が発せられる。俺は頭の中で先程解析した術式を構造する。

「イツセー。赤龍帝の籠手を」





# What is Durandal? III

「え……う？」

呆然とするグレモリー。同じく呆然としたコカビエルだったが直ぐに笑みを浮かべた。

「ほう？貴様か。ショックで使いものにならなくなったかと思っただが……面白い。赤龍帝、こいつに譲渡しろ」

……あれ？グレモリーを説得する必要なしか？

「早くしろ、赤龍帝」

「あ、ぶ、部長？」

コカビエルの催促に、兵藤が困惑している。無理もないな、俺だつて驚いている。

「……彼に賭けるしか無いわ。イツセー、お願い……」

すると、グレモリーが決心したのか、兵藤に俺への譲渡を促す。グレモリー眷属が俺を見ている。

そして、俺は『擬態の聖剣』エクスカリバー・ミミックを地面に突き刺してから兵藤に向けて術式を展開した左腕を突き出す。兵藤は俺に近づき左腕に触れた。

「赤龍帝の贈り物！」

トランスファー  
『Transfer!』

兵藤から流れる力を左腕の術式に溜める。そして、兵藤が俺から離れたのを確認した後に、右手に聖なるオーラを込めながら言霊を唱える。

「ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

すると、言霊を唱え始めた瞬間から俺の周りの空間が歪み、次第に俺の右手付近に歪みが集まり、亜空間が開いた。そして、その亜空間に手を掲げる。

「この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する。……デュランダール！」

言霊を唱え終わると同時に、聖魔剣を遥かに凌ぐ聖のオーラを放つ



剣が俺の右手に収まった。

「デュランダルですって!?!」

「貴様、エクスカリバーの使い手ではなかったのか!」

驚愕するグレモリー眷属たちとコカビエル。

「私は、もともとは聖剣デュランダルの使い手だ。エクスカリバーは兼任していたに過ぎない」

「だが、その程度では俺は倒せんぞ!」

わざわざ空中に浮かび、そう叫ぶコカビエル。

「(フラグ乙) ……術式、解放」

右手に持ったデュランダルの剣先に左腕の術式を移して、そこに胸元から取り出した『破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣』の核と『擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣』を押し付ける。

そして、術式を安定させる為に譲渡された力と俺のありつただけの生命力をつぎ込む。

デュランダルの聖なるオーラと先程つぎ込んだ力が融合し、漏れ出した聖なるオーラで出来た光の柱が俺を包む。

完成したエクスカリバー二本を一時的に融合させたデュランダルのを見て告げる。

「……汝を “エクス・デュランダル” と名づける」

俺の命名により、一層オーラが強まるエクス・デュランダル。

自然体で右手に持ち、コカビエルに向かって下から斬り上げるように言霊と共に斬りつけた。

「滅びよ」

その意味をもった言霊と共に放たれたのは、黄金の光の斬撃だった。コカビエルはエクス・デュランダルから発せられるオーラによって動けない。

「何だこの光は!?!まるで神……」

『Half Dimension!』

すると、どこからか何かが聞こえる。しかし、斬撃はそれを介せず、そのままコカビエルを消滅させてシトリー眷属による結界をも消滅させて上空に飛んでいった。

そして、エクス・デュランダルはさっきの一撃でデュランダルと二つのエクスカリバーの核に戻る。

「まさか、半減は疎か干渉すらできないとはな……しかも、コカビエルを消すとは予定外の状況になっているな」

その後、白い全身鎧を身に纏った声色からして男性がこちらを向いて話しかけてきた。

あの鎧とさっきの能力は……

「……白龍皇か」

「ああ、そうだ。赤龍帝の力を見たかったんだが……それ以上に面白いものを見れたな。貴様の名は？俺はヴァーリだ」

目を付けられたか……また厄介な。

「……ゼノンだ」

「覚えておこう、貴様の名を」

結構です、と心の中で思うが一旦地上に降りてフリードを担いだ。そして再び光の翼を展開し、空に飛び立とうとする。

『無視か、白いの』

すると、兵藤の『<rb>赤龍帝の籠

</rb><rp></rp></><rt>ブーステッド・ギア</rt><rp></rp></><rp></rp></><rt>ruby>』の宝玉が光り、ドライグらしき声がする。

『起きていたのか、赤いの』

白龍皇の鎧の宝玉も光って声を発した。

暫く続きそうなので、デュランダルを亜空間に戻し、聖剣の核を回収をしに動く。

他の奴らは二天龍の話聞き入っている為、俺の空気の読めない行動は目に入っていないみたいだ。

『せつかく出会えたのにこの状況ではな……』

『いいき、いずれ戦う運命だ。こういうこともある』

『しかし、白いの。以前のような敵意が全然伝わってこないが?』

『赤いの、そちらも敵意が段違いに低いじゃないか』

『お互い、戦い以外の興味対象があるということか?』

『そう言うことだ。こちらは暫く独自に楽しませてもらうよ。たまには悪くないだろう？ また会おう、ドライブ』

『それもまた一興か。じゃあな、アルビオン』

そうこうしている間に、二龍の会話が終わり、フリードを抱えた白龍皇が宙に浮かんでいく。

「キミがもつと強くなるのを待っている。俺の宿敵くん」

最後に兵藤に向かって言い放ち、

飛び去っていた。

「これで、一先ず、一件、落着か……」

回収も終えて、緊張感が抜けた俺に、急に疲労感と虚脱感が襲ってくる。

流石に無謀すぎたか……？

「やったじゃねえか、色男！ へえー、それが聖魔剣か。綺麗じゃないか」

兵藤は、俺と同じく緊張が抜けたのか、木場へと駆け寄ってそう言った。

やばい……視界が霞む……。

俺はヨロヨロと校舎まで歩き、寄りかかる。

「イツセーくん、僕は「今は言いつこなしだ。いったん終了でいいだろう？」……そうだね」

すると、紅髪のグレモリーらしき人物が木場たちに近づき何かを言っている。

「…斗、よく……きてくれたわね。それに……なんて……誇れ……」

やべえ、何も見えないし、殆ど聞こえない。

「……、僕は……誓い……。僕………は………の眷属……として、……と……を……お……し……」

あー、ダメっぽいな。無理だ。

そして、俺は気を失ってそのまま倒れた……

「うふふ、ありがとう。そういえば彼は……！アーシア！直ぐに治療を！朱乃もお願い！イツセーはアーシアに力を譲渡して！お兄様たちが来るまで彼を死なせてはいけないわ！」

その後、こんな事が起こった事も知らずに……。

What is an evil spirit?

「何処だ？此処は……」

その後、俺が目を覚ますと知らない部屋のベッドで寝ていた。辺りを見回すと窓の外は真っ暗で夜である事がわかる。

そして、服が変わっていない事を考えると俺が倒れてから時間があまり経っていない事がわかる。

暫くこの場で状況を整理していると、ドアが開き外から紅髪の男性が入ってきた。確か、あの方は……

「……サーゼクス・ルシファー？」

「うん、そうだよ。もう起きたんだね」

なんか、思ってたより軽い性格の人だな……。

「え、ええ。それでどうして貴方のような方が此処に？」

「妹のリアスの眷属からコカビエルの件に関して助けを呼ばれてね……まあ、それは君が解決してくれたけどね。それで、ついたらリアスに頼まれてね。彼を助けて！ってね」

……俺を助けた？

「何故だ？」

メリツトが余り無い気がするが？

「何故って……君がコカビエルを倒したって事も有るし、何よりリアスに頼まれたからね」

……この人、シスコンか？いや、多分間違いない……そんな感じがする。

「……そうですか、失礼しました。感謝致します。失礼ですが、誰が？」

よく、俺をここまで回復させたな……と思う。治療の類じゃないかな。

「ああ、私の『僧侶』<sup>ビシヨツプ</sup>のマグレガー・メイザースだよ」

確か、魔術結社「黄金の夜明け団」<sup>ゴールデン・ドーン</sup>の創設者の一人だったか？あの

人なら納得だな、禁術の研究の第一人者なら延命ぐらい可能だろう。「そうですか、それで何故私に会いに？」

「……今、君自身の余命は知っているかい？」

急に、ルシファア殿の雰囲気シリラスなものに変わる。余命か……

「……ええ。あと数時間程度ですかね」

と言うと、ルシファア殿はこう返してきた。

「そうだ、私自身も君をこのまま見殺しにはしたくない」

「……も？」

ん？ルシファア殿が私を見殺しにしたくないのは、妹の為だとしても……私も、つて誰だ？

「ミカエルと連絡をとって話をした」

なんだつて!?

「ミカエル様と!?!……ぐ……」

叫ぶと全身が悲鳴を上げた。案外、身体も危ないみたいだ。

「余り、声を荒げない方がいい。それで、ミカエルも君をこのまま失うのは、と言っていてね。まあ、最終的には君自身が決める事になったけどね……」

「死ぬか、生きるかを」

「方法は？」

わざわざ、ミカエルさまに許可を得ているという事は悪魔が関与する事だとはわかるが……。

「簡単だ、君を悪魔にする」

俺を悪魔に？

「どうやっ……悪魔の駒ですか……誰の？」

予想では、あり得るのがグレモリーかシトリーか。それか、サーゼクス殿の知り合いの悪魔か？

「勿論、私の妹さ」

おっと、ビンゴ。まあ、あいつらとは仲良くできそうだな。ミカ

エル様の許可を得ている以上、断る必要はないし……

「……わかりました。お願いします」

そして、頭を下げる。

「わかった。それでは、リアスを呼んでくるよ」

そして、ドアに向かって背を向けるサーゼクス殿。その前に確認しておきたい事が……

「彼女は今の事は……」

「いや、全く知らないよ。これは私と私の眷属、及びミカエルしか知らないよ」

……眷属入りの理由なんか考えてないぞ？

「では、どうすれば？」

すると、申し訳なさそうにするサーゼクス殿。まさか……

「うーん……頑張れ！」

駄目だ、この人……。

「……わかりました」

こうなつたら、グレモリーが来るまでのわずかな時間に考えてるしかない……！

\*

「どうしたの、話つて？」

……結論から言おう、短時間では無理だ。ゴリ押すか。

「ああ、単刀直入に言おう。私を悪魔にして欲しい」

「え!?!……どうして？」

「……理由が必要か？」

俺が知る中では、驚いてばっかりのグレモリーがまた驚いているが、そちらには利益しかないだろう？と言葉と共に視線で問いかける。

「いえ……それもそうね。それじゃあ、貴方にはこれしか無いわね」





と、握り返してから質問をした。

「まず、貴方の待遇について話させて貰うわ」

「ああ、了解」

\*

「……………え? 悪魔って本当?」

「確認するまでもないだろう?」

翌日、グレモリーから処遇について話された俺は、一先ずイリナの様子を見にきていた。そして、自分が悪魔になった事を明かした。

「……………後悔はしてないの?」

「……………してない……………と言いたいが、あの人に再会した時が怖い」

あの人には頭が上がらない……………。

「……………ふふふ、ゼノンらしいな。分かった、それじゃあ私だけで報告しに行くね」

俺らしいって何だよ? とりあえず、エクスカリバーを渡す。

「ああ、済まないな。ほら、エクスカリバーだ」

「うん……………って何で全部核だけなの!?!」

イリナが驚く。

……………そういえば、イリナは知らなかったな。

「気にするな。そういえば、身体は大丈夫か?」

話題を変えて流すか……………。

「うん、ゼノンの治療のお陰よ」

「にしては、俺が起こすまで寝ていたけどな」

流石にダメージが抜けきれなかったのかぐっすり寝てた。

「もう! それは言わないでってば!」

頬を膨らませて怒るイリナを見て、自然に顔が綻ぶ俺。

釣られてイリナも笑顔になった。

そして、話が途切れて沈黙が続く。

「……じゃあな」

「このまま、こうしている訳にもいかないのでイリナに別れを告げる。」

「……ううん、またね!」

すると、イリナは笑顔で言つて。立ち去つていった。……あいつも、俺が悪魔になつたとはいえ変わらなかつたな……ありがとう、イリナ。

\*

イリナと別れてから数日後、グレモリー……いや、部長（と呼べと言われた）から放課後の部室に来るように頼まれた。ちなみに、未だに出来ない兵藤とアルジエント以外には自己紹介を済ませている。

「遅れてすみません!」

「遅れてごめんなさい」

ドアを開けてオカルト研究部に入ってくる二人。そういや、部長から聞いた話によると部長とアルジエントは兵藤と同棲しているらしい。それを聞いて「流石、ハーレム王を名乗るだけあつて女を落とすのは容易いのか……」と、男として戦慄したが、話を詳しく聞くにあいつも、鈍感無自覚ハーレム形成野郎らしい（実際、そこまで言われていない）。まあ、それはそれで楽しめそうだ。

「遅かつたな、兵藤とアルジエント」

とりあえず、声をかける。

「あれ?ゼノンさん、どうしてこちらに?」

「え、え?なんで教会側の間がここに?」

そして、当然の反応をいただいた。説明するのが面倒なので悪魔の翼を出す。

「部長、貴重な駒をいいんですか?」

すると、わかつたのか兵藤は部長に質問する。

「ええ、デュランダル使いが眷属にいるのは頼もしいわ。これで、祐斗と共に剣士の二翼が誕生したわね」

と、満足気という部長。すんなり納得してくれたので俺も嬉しいです。

「そういうえば、イリナは？」

すると、兵藤が思い出したかのように俺に問いかけた。

「イリナなら、既に私のエクスカリバーを合わせた五本とバルパーの遺体を持って本部に帰った。砕けているが、奪還の任務は成功。芯があれば錬金術で再び聖剣に出来るしな」

じゃなきゃ、俺もあんな事はしない。もうする気も起きないがな……今度は死ぬだろうしな。

「……教会を裏切って良かったのか？それに、エクスカリバーも返しちやつて良いのか？」

……そこを指摘されるとはな。

「裏切り……か、一応悪魔になった事は、上からは許可は得ている。しかし、一応エクスカリバーは返さないと不味い、デュランダルとは違って、使い手は他に見繕えるからな」

ミカエル様がまさか許可するとはな……何故だ？

「教会は今回の事で悪魔側……つまり魔王に打診してきたそうよ。」

「墮天使の動きが不透明で不誠実のため、遺憾ではあるが連絡を取り合いたい」と。それとバルパーの件についても過去逃した事に関して自分達に非があると謝罪してきたわ」

さらに、部長が続ける。

「今回の事は、墮天使の総督アザゼルから、神側と悪魔側に真相が伝わってきたわ。」

エクスカリバー強奪はコカビエルの単独行為で他の幹部は知らない事だった……とね。

あと、近い内に天使側の代表と悪魔側の代表と墮天使総督のアザゼルが会談を開くらしいわ。なんでも墮天使総督から話したい事があるみたいで、その時にコカビエルの事を謝罪するかもしれないなんて言われているけれど、あのアザゼルが謝るかしら」



る。

「今度の休日、みんなで遊びに行くんです。一緒に行きませんか？」

屈託のない笑顔で言うアルジエント。今度か……微妙だな。

「今度、機会があればお願いしよう。今回は気が乗らないな……そう  
だ、忠告しておこう」

そして、俺は少し意地の悪い笑顔を浮かべる。

「え？」

突然の俺の言葉に首を傾げるアルジエント。

「そういう笑顔は好きな人にだけ向けるといい……まあ、それが君の  
魅力なんだとは思うがね……」

と言つて、笑顔を浮かべたままチラとアルジエントにわかるように  
兵藤をみる。

「え!?!……あう……」

理解したのか、アルジエントは真っ赤になる。……これが、愉悦か  
……! (違います)

「ではまたな、学園でまた会おう」

アルジエントが狼狽えているのを眺めていて俺を視界にすら入れ  
てない兵藤や苦笑している木場やあらあら、と言っている姫島、興味  
がないのか羊羹を食べ続ける塔城にまた驚いている部長を尻目に更  
にアルジエントを狼狽えて俺は部室を出て行った。

こうして、俺の悪魔生活が幕を開けたのである。

## 停止教室のヴァンパイア

What is a vampire?

あれから、転入して数週間も経たないうちに制服が夏服に変わり、それなりの日にちが経った。

今日は、ある人物に会う為に人払いの結界を公園に貼って待っていた。

「よう、なかなか早く気づいたな」

すると、二十代くらいの若い男が現れた。

「お久しぶりです、アザゼル『墮天使総督』」

「おいおい、そんなに強調すんなよ」

やれやれ、と肩をすくめるアザゼル。どうせ、反省していないだろうし話を進める。

「それで、何の用ですか？わざわざ兵藤を介さなくても……」

詳しく言うなら、兵藤が受け取った対価の中にアザゼルの力が僅かに感じられる宝石が混じっていて、それで気づいたっていう訳だ。

「まあ、今代の赤龍帝に直にあっておきたかったからな」

「……はあ。グレモリーが怒りますよ？貴方は気にしないとは思うが」

一応、言っておく。

「ああ、まあな。」

俺の言葉にアザゼルはそう言うってから急に真面目な顔になる。

「……っと本題だが……すまなかったな」

急に真面目な顔になったことに内心驚きながらも訳を訊ねる。

「……どうしたんですか？」

「俺なりのケジメだ。コカビエルの野郎の所為でお前を悪魔にさせちまったんだよな」

何故、それを知っているのか……可能性としては……

「ミカエル様から？」

「ああ、奴から色々な……」

意外にも、アザゼルは俺が悪魔に転生したことを気にしているみたいだ。

「そうですか、あまり気にしないでほしいですね。私自身は、後悔してないんでね」

「……そうか、ありがとうな。じゃあ、また会談でな。この学園でやるみたいだしな」

「ええ、また」

そして、アザゼル総督は去っていった。というか、この会談を学園でやるのか……面倒ごとが頻繁に起こるな、これも赤龍帝の所為か？

\*

「冗談じゃないわ。確かに悪魔、天使、墮天使の三竦みのトップ会談がこの町で執り行われるとはいえ、突然墮天使の総督が私の縄張りに侵入し、営業妨害していたなんて……!」

その翌日、オカルト研究部で部長殿は眉を吊り上げて怒りを露にしていた。

その理由は、アザゼルが会談前に接触してきたかららしい……兵藤に。面倒ごとになりかねないので俺も会っている事は言っていない。

「私の下僕に手を出そうだなんて……万死に値するわ! アザゼルはセイクリッド・ギア神器に強い興味を持っていると聞いわ。きつと、イツセーのブラス・テッド・ギア『赤龍帝の籠手』に興味を持って接触してきたのね……大丈夫よ、私が絶対に守ってあげるわ」

台詞自体は、慈愛深いグレモリーらしいが……いかんせん部長殿が兵藤を膝枕をしている所為で緊張感にかける。

「……やっぱ、俺の神セイクリッド・ギア器をアザゼルは狙っているのかな。墮天使の総督なんだし……」

兵藤が心配そうに呟く。ふと、ルシファー殿が転移してきたので話

をふる。

「大丈夫だろう、気にする事はない。ですよね……?」

「そう、アザゼルは昔から、ああいう男だよ、リアス」

とりあえず、真っ先に跪く。

「お、お兄様!?!」

驚愕の声を上げる部長、何かが落ちる音と兵藤のうめき声が聞こえたがそのまま跪いておく。

「先日のコカビエルのようなことはアザゼルはしないよ。ただ、悪戯はするだろうけどね。しかし、予定より早い到着だな」

サーゼクス・ルシファー殿がそう述べる。近くにもう一人いるみただが、跪いているため確認できない。

「くつろいでくれたまえ。立つてもかまわないよ。今日はプライベートだ」

ルシファー殿の言葉に従って立ち上がる。そして、確認するとルシファー殿の後ろに銀髪の女性が立っていた。あの方は、確かルシファー殿の『女王』<sup>クイーン</sup>であり、妻のグレイフィア・ルキフグス殿か。

「お兄様。どうしてここへ?」

怪訝そうに部長が質問すると、ルシファー殿は、ポケットから一枚の紙を取り出した。

「授業参観が近いのだろうか? 私も参加しようと思っただけ。是非とも妹が勉学に励む姿を間近で見たいものだ」

そう言えば、授業参観か……俺には縁のない事だ。

「グレイフィアね? お兄様に伝えたのは」

部長はグレイフィア殿を見る。

「学園からの報告はグレモリー眷属のスケジュールを任されている私の元へと届きます。無論サーゼクス様の『女王』<sup>クイーン</sup>でもあるので主への報告も致しました」

それを聞くと、部長は嘆息していて、みるからに乗り気ではない事がわかる。

「報告を受けた私は、魔王色職が激務であろうと、休暇を入れて妹の授業参観に参加しに来たかったのだよ。安心しなさい。父上をちゃん



と来られる」

「おいおい、シスコンっぷり激しいな。苦労してんだろうな……その下の悪魔たち。」

「そうではありません！ お兄様は魔王なのですよ！ 仕事を放りだしてくるなんて！ 魔王が一悪魔を特別視されてはいけませんわ！」

「おお、部長が正論を言ってる。だが、そんなんでシスコンが折れる訳ないぞ？」

「いやいや、これも仕事さ。三勢力の会談をこの学校でやろうと思っ  
ていてね。今回は、その下見に来たんだよ」

「ほらな。そういうえばアザゼルもそんなような事を言ってたな、この  
学園で会談をやるって。」

「……っ!? ここが本当にするんですか？」

部長が驚く、ふと周りを見ても他の部員も驚いている。一応、驚か  
ないのも不自然なので振りはしておく。

「ああ。この学園はどうやら何かしらの縁があるようだ。偶然では片  
づけられない事象が重なっている……そう言えば、初対面の子がいた  
ね。初めまして、魔王のサーゼクス・ルシファーだ。リアスの兄でも  
ある」

と、急に話題を変えて兵藤とアルジエントに向かって声をかけたル  
シファー殿。

「は、初めまして！お……じ、自分は『兵士』<sup>ポーン</sup>の兵藤一誠です！」  
「び、『僧侶』<sup>ビシヨップ</sup>の、あ、アーシア・アルジエントです」

二人は緊張した面持ちで自己紹介をした。それに満足したのか話  
しを続けるルシファー殿。

「赤龍帝に癒し手、それに聖剣使い……。妹の眷属は楽しい者が多く  
ていいね。眷属として、グレモリーを支えてくれ、よろしく頼むよ」  
「無論です」

「は、はい！」

そのルシファー殿の言葉に、返事を返す俺たち。

「さて、自己紹介も終わったところで、聞きたいのだが、こんな時間に  
空いている宿泊施設はあるかね？」

その発言に事前にサーチしとけよ、と心の中で思っていると兵藤が……

「それなら。うちに来ますか?」

と言つてルシファア殿たちは兵藤宅に泊まる事になった。

一瞬サーゼクス殿がニヤリと笑つたのを見て……これが狙いだつた気がするの間違いないと感じた俺だった。

\*

サーゼクス・ルシファア殿が来てから数日が経ち、授業参観の日になった。

その前にプール清掃からのプールなんてものがあつたが、その日は参加していない……気不味いし、

その日の昼休み、俺は手洗いから教室に戻る為に廊下を歩いていると木場がこちらに向かって来た。

「どうした?」

「あ、何だか魔女っ子が撮影会をしているって聞いたから、ちよつと見に行こうかなと思つてね」

これが、俺が木場をこいつも（女性に興味のある）男なんだと認められた瞬間であつた。

同時に、こいつもそういう趣味があるのか……と思つた瞬間でもあつた。

「……そうか、悪かつたな引き止めて。俺はいいから行つて来い」

と言つて事前に断つて木場を見送つた。

それにしても、魔法少女?こんなところにいるって事は十中八九関係者だろ?

早ければ、会談で会えるし、重要な人物だったら何時か会えるから態々行く必要はない、と思ひ教室に戻つた。

その後の授業参観はカオスだったので割愛する。……なんだよ粘土細工つて?英語はどこにいった?

この世界の日本の教育制度を本気で疑つた一日になった。

## What is a vampire? II

授業参観の翌日、俺たちオカルト研究部のメンバーは旧校舎一階の“開かずの教室”とされている……らしい部屋の前に立っていた。

なんでも、この部屋の中にもう一人の『僧侶』<sup>レシヨツブ</sup>がいるらしい。最初聞いた時は、驚いたが予想の範囲内だ。

新参の兵藤やアルジェントも正体を知らないみたいで、会うのは今回が始めてらしい。

何故、そいつの部屋の前に来ているのかというと……

話では、ある事情によつてそいつを眷属にしたらしいが、その能力が危険視されて、以前の部長の能力では扱いきれない、と判断した上から封印をするようにいわれたが、この前に記録でみたフェニックス家との一戦と俺がやらかしたコカビエルとの一戦で高評価を得たのでその封印が解禁されたらしい。(俺を眷属にした、というのも含めた評価らしいが)

それで、扉には“KEEP OUT”のテープが何重にも張られてた上で、呪術的な刻印も刻まれていた。

「二日中ここに住んでいるのよ。一応深夜には術が解けて旧校舎内だけなら部屋から出ても良いのだけれど、中にいる子自身がそれを拒否しているの」

なんだ、ということとは……

「つまり、その『僧侶』<sup>レシヨツブ</sup>は単なる極度の人見知りという事か？」

そう至った理由は、この『僧侶』<sup>レシヨツブ</sup>はパソコンを介して人間と契約を執り行っているそうで仕事すらしらない、というかむしろ一番の稼ぎ頭だという事からこの線が一番高いと思ったからだ。

「そうよ。さて、開けるわよ」

部長が扉に刻まれていた刻印を消して扉を開けると同時に……

「嫌あああああああああー」

中から異常なほどの絶叫が発せられた。なんだ、元気だな……。

そんな事を考えていると、部長は溜め息をつき、姫島と共に部屋の中に入っていく。……何時も通りらしいな。

中に入らず、部長たちの会話を聞く。

「ごきげんよう」

「な、な、何事なんですかああああ!?!」

ビビり過ぎだろ、興味が出て来たな……入るか?

「あらあら、封印が解けたのですよ? さあ、私達と一緒に出ましよう?」

「嫌ですうう! ここが良いですうう! 外に行きたくない! 人に会いたくないいいっ!」

「重症だな……行くか」

正体を確かめるべく、俺たちは部屋の中に足を踏み入れる。

部屋の中の奥には部長と姫島がいて、更にその先に例の『僧侶』<sup>ビシヨツプ</sup>がいた。

そいつは、力なく床に座り込んでいた。そして、その金髪の美少女……いや、少年は赤い瞳をしていた。そして、ある事に気づく。

「……吸血鬼?」

「き、金髪の美少女! よっしやあ! 『僧侶』<sup>ビシヨツプ</sup>は金髪尽くして事か! イヤッホー!」

しかし、俺の呟きは何時の間にか隣にいた兵藤の歓喜の声によって掻き消された。というか、兵藤……

「……こいつは男だ」

「……え?」

俺の発言に兵藤が固まった。

すると、部長が説明してきた。

「ゼノンの言う通り、この子は紛れもない男の子よ」

「女装趣味があるのですわ」

その言葉に続き、姫島も解説した。ミルたんのようなミスマッチと比べるのはおこがましいが、似合っている分まし……か? いや、どちらもたちが悪いな。

「な、何だつてええええ!?!」

「ひいひいひい！ゴメンなさいい！」

兵藤の絶叫と例の彼の絶叫が合わさる。近くにいるから余計煩いな……。

兵藤は頭を抱えてその場にしゃがみ込み現実逃避を始めた……大袈裟な。まあ、まだ〃もう、男の娘でもいいや……〃とか言わないから良かった。というか……

「何故、女装しているんだ？引きこもっているのに見せる相手がいないだろう」

誰にも見せない趣味って……マイブームって奴か？もしかして、ネットアイドルとか？

「だ、だって、女の子の服の方が可愛いもん」

……思考が女の子だな、こいつ。

それにしても、こいつもキャラが濃いな……本当に俺以外のオカルト研究部のメンバーはキャラが濃すぎる。

「可愛いもんって言うな！俺は、アーシアとお前でダブル金髪び……ゲフォ！」

急に立ち上がって泣き叫ぶ兵藤を物理的に黙らせて、アルジエントの方に投げ捨てる。黙せることが目的だから大したダメージは受けてないだろうし、アルジエントがいるから大丈夫だろう。

「と、ところで、こ、この方たちは誰ですか？」

すると、女装趣味の彼が恐る恐る部長に訊く。考えればわからないか？

「あなたがここにいる間に増えた眷属よ。『兵士』の兵藤一誠と『騎士』のゼノンに、あなたと同じ『僧侶』のアーシア・アルジエントよ」

回復した兵藤を含めた俺たちは挨拶をするが、俺のさっきの所為か彼は一層怖がるだけだった。

「お願いだから外に出ましよう？もうあなたは封印されなくても良いのよっ。」

「嫌ですう！僕に外の世界なんて無理なんだあ！どうせ僕が出てつても迷惑をかけるだけだよおっ！」

部長の説得に頑固として拒絶する女装趣味の彼。こいつは……



あれから、他の部員も元に戻り一旦部室に戻った後にギヤスパーク・ヴラデイに関しての詳細を説明された。

『停止世界の邪眼』？』

一誠の問いに、俺が続ける。

「ああ、それがあのヴラデイの持っている神セイクリッド・ギア器の名前だ。視界を潰されると発動できない、実力差がある相手には効果がない、と欠点はあるが強力な神セイクリッド・ギア器だ」

使いこなせば、任意の物体の時間のみを停止させるといった使い方もできるから強いんだよな。この神セイクリッド・ギア器は目が使えれば大丈夫だから、所有者が接近戦を熟せる人物だったら無双できるしな。

「時を止めるってチートじゃないっすか!？」

お前がどうか、赤龍帝。てか、この部活のメンバーもチートじみた連中だよな……俺を含めて、まだ実践経験が足りてないが。バアル家の滅びの魔力を濃く継いだリアス・グレモリー、『神の子を見張る者』の幹部の「雷光」のバラキエルの娘の姫島朱乃、猫又の塔城小猫、聖魔剣の木場祐斗、赤龍帝の兵藤一誠、『聖母の微笑み』をもつアーシア・アルジエント。それに、ギヤスパーク・ヴラデイ。

「あら、イツセーの倍増の力と白龍皇の半減の力だつて反則級の力なのよ?。」

長考していると、部長が代弁して下さった。それにしても……

「部長はよく奴を眷属に出来たよな?……ああ、変異の駒か」

あんまり考えないで言葉にするのはやめないと。まだまだ、知識不足だしな……。

「ええ、そうよ。更に、彼は類希な才能の持ち主で、無意識の内に神セイクリッド・ギア器の力が高まっていくみたいなの。上の話では、将来的にバランス・ブレイカー

禁手へ至る可能性もあるという話よ」  
……強大な力を持っているが扱いこなせない上に段々力が増大していく、なんて、漫画ではよくあるな。そういう奴は、大概利用されるか、なんか暗い過去とかあるよな。

というか、禁手は基本的には元の力のスケールアップだけど、

使い手の認識によって別物に化けることもあるから……今のヴラ  
デイの性格からすると。

「彼がこのまま禁バランス・ブレイカー 手に至ったら、自分以外の時を無差別かつ、半永  
久的に止める……なんて事になりかねないな……」

あり得ない……なんて事がないのが神セイクリッド・ギア 器の恐ろしい所だよな。

「そう、危うい状態だけど、私の評価が認められた為に今ならギヤス  
パーを制御出来るかもしれないと判断されたそうよ。私がイツセー  
と祐斗を禁バランス・ブレイカー 手に至らせた事を上の人達は評価したのでしようね」

何でも、兵藤はライザー戦後のパーティーに乗り込んだ時に代償と  
制限付きの禁バランス・ブレイカー 手へ至ったらしい。

「能力的には朱乃に次ぐんじゃないかしら。ハーフとはいえ、  
由緒正しい吸血鬼の家柄で、強力な神セイクリッド・ギア 器も入れている上に吸血鬼  
の能力失われていない。それに、人間の魔法使いが扱える魔術にも秀  
でているわ」

そう考えると、凄く戦力になるんだが、あの性格ではな……。

「で、どうするんだ？あいつは？」

部長に質問する。何か考えているよな……？

「ええ。とりあえず、教育係としてイツセーと小猫にあの子を頼める  
かしら？」

あの二人で大丈夫か？俺は恐がられているから、参加しないのは当  
たり前だが。

「はいー」

「了解です……」

その後、よく校庭で死の鬼ごっこを見るようになった……勿論、追  
いかけられているのはヴラデイだが。というか、大丈夫なのか？あれ  
？

まあ、いいや



# When is a talk?

「……ギャーくん、ニンニクを食べれば健康になれる」

「いやあああ！小猫ちゃんが僕をいじめるうう！」

夕日が差し掛かる旧校舎近くで塔城がニンニクを持ちながらヴラデイを追いかけていた……よくやるなあ。

そんな中、俺は今日仕事もないので、ようやく俺を見ても暴走はしなくなったヴラデイの走りっぷりを遠くから眺めていた。

「……アザゼルか」

すると、アザゼルが近づいているので振り向く。

「よう、ゼノン。へえ、魔王眷属の悪魔さん方はここで集まってお遊戯してる訳か」

「お遊戯って……まあ、そんなもんだろがな。何の用ですか？」

どうせ、ロクでもない用だろ？

「ああ、聖魔剣使いはいるか？ ちよつくら見に来たんだが」

聖魔剣使い？……ああ、木場か。

木場って、どこにいたつけ？

「こつちには、いませんね。もしかしたら、あつちの方にいるかもな……」

適当な事言っておくか、アザゼルにヴラデイの神セイクリッド・ギアの制御方法とか教えて貰えれば儲け物だな。

「そうか、じゃあちよつくら行ってくる」

「……あまり、刺激するなよ？」

一応、釘を刺しておく。

「ああ、できるだけな。俺だって戦争しに来たんじゃないしな」

そして、アザゼルはヴラデイたちの方に歩いて行った。

さて、今日は帰るか……俺は何も見えない。

\*

その数日後、俺と兵藤はとある場所に姫島から呼び出された。二人に何やら要件があるらしい。

その場所とは、町の外れを進んむとある神社だ。裏で特別な約定が執り行われていて、悪魔でも入る事が出来るようになっていて、と説明を受けた。

「いらつしゃい、お二人とも」

神社が見える辺りまで来ると、巫女装束を着た姫島が立っていた。意外に似合ってるもんだな。

俺たちは、姫島の先導について行く。そんな中、姫島は歩みを止めずに話してくる。

「ゴメンなさいね。急に呼び出してしまって」

「あ、いえ。俺もやる仕事がなくて暇だったので」

「……重要な要件があるのはわかっている」

そして、俺たちは鳥居をくぐる。

すると、ある覚えのある気配と共にだいたいの用の察しがつく。あの方か……。

「朱乃さんはここに住んでいるんですか？」

と、兵藤が質問をする。まさか、これは「俺の家に住まないか？」という事か……!?

「ええ、先代の神主が亡くなり、無人になったこの神社をリアスが私の為に確保してくれたのです」

なんだ、普通の質問だったのか。

期待外れだな兵藤……。

「彼が赤龍帝ですか？」

突然、発せられる懐かしい声。

声のした方向へ振り向くと、豪華な白いローブを着て頭上には金色の輪が漂っている青年……ミカエル様がいた。

「初めまして、赤龍帝……兵藤一誠くん。私は天使の長のミカエル。

なるほど、このオーラの質はまさにドライグですね」

「お久しぶりです、ミカエル様」

すぐさま、跪く。

「ええ、ゼノンも久しぶりです。もう、貴方が仕えてる訳でもないのですから、頭を上げなさい」

そう言われ立ち上がる。

三勢力の中では、一番まとも人格者だよな……ミカエル様は。アザゼルは総督っぽくないし、サーゼクス殿はシスコンだしな。

「さて、二人とも本殿に向かいましょう」

そして、本殿に移動するが亜空間内にあるデュランダルが共鳴しているのがわかる……この感じは……。

「聖剣？」

それも、二本もあるぞ。

「ええ、これはゲオギウルス……聖ジョージと言えば伝わりやすいでしょう。彼が持っていた龍殺しの聖剣アスカロンです」

と言ってデュランダルが共鳴していない方の聖剣を兵藤に差し出すミカエル様。

「俺に龍殺しの聖剣って大丈夫なんですか!？」

おいおい……

「阿保か兵藤、特殊な儀礼を施しているか何かでお前にも使えるようになっている筈だ」

「その通り。これには特殊な儀礼を施していて、悪魔であってもドラゴンの力を持つ貴方ならば使うことは可能です。方法は、籠手に同化させます」

気になったので、質問する。

「ドライグ殿、そんな事は可能なのか？」

兵藤に向かつて……正確に言えば赤い龍ウエルシュ・ドラゴンドライグに話しかける。

『ああ、神器は思いにこたえるから、こいつがそう望めばいい。あと、殿なんて付けなくてもいい』

すると、兵藤が発現させた神セイクリッド・ギア器の宝玉が光り、返答してきた。

そして、兵藤は恐る恐るアスカロンを握り望む。するとアスカロンは光になり籠手に吸い込まれた。

すげーな、セイクリッド・ギア神器、何で俺は持ってないんだよ。

「さて、兵藤くんは用が済んだので姫島さんの所に戻っていいですよ」「は、はい。わかりました」

そして、兵藤が去ってからミカエル様が残ったほうの聖剣を差し出した。

「さて、ゼノンにはこれを……」

「これも、聖剣……？ デュランダルに似た雰囲気を持っているのですが？」

デュランダルと同一の剣か、それとも……？

「これは、シャルルマーニュが持っていたとされる佩刀の聖剣ジョワユースです。デュランダルと同じ材質で作られ、イエス・キリストの処刑に用いられた聖槍ロンギヌスの破片が埋め込まれている聖剣です」

『トゥルー・ロンギヌス黄昏の聖槍』の簡易聖剣版のようなものか？

「そんな、コールブランドーやデュランダルに次ぐような聖剣を頂いてよろしいので？」

知名度は、コールブランド（カリバーン）やエクスカリバー、デュランダルに比べると低いが、伝承通りなら神殺しの聖剣となる。

「こちららも聖魔剣をいただいたのでいいんですよ。あと、墮天使側にはセイクリッド・ギア神器の情報を送っているので安心してください。それに、この聖剣は本来、コカビエルの件で帰還した時の功績で渡す予定でしたから」

……ん？

「ということは、ジユリオさんがいなかったのは……？」

「ええ、この聖剣の発掘と回収を頼んでいたのです。あの彼もいない今、貴方には期待していたのですが……」

「本当か……コカビエルの件の功績は、大きいからな。それに、あの人がいないから俺にも期待がかかっていたのは間違いないし。」

「すみません……」

そう考えると、自然に頭を下げていた。

「いえ、そういう意味で言ったわけではないのですよ。……話は変わりますが、いずれ貴方自身について彼らに話すことになるでしょう」  
前半で頭を上げて話を聞いていると、気になる単語が出てきた。俺について……か。

「……ええ、自身が分かる範囲で全て話します」

憑依については、既にミカエル様には話してある。意外にもすんなり受け止められたのは俺も驚いたけど……。何でも、この世界には英雄の魂を継いだ人間がいるらしく有り得ない話じゃないらしい。

とりあえず、ジョワユースを受け取る。すると、聖剣が光り……

『……………』

「ん？」

何だ、今の？何かが聞こえた気がしたんだが……。光も直ぐに収まったし。

「大丈夫みたいです。ジョワユースも貴方を所有者として認めたいようですよ」

「……ええ、そうみたいです」

考えても結論はおろか、推測すら立てられないからとりあえず気にしないでおう。

「それでは、また会いましょう」

そして、ミカエル様は飛び去って行った。

さて、部長に報告しに行きますか……

# When is a talk? II

「失礼します」

部長が会議室の扉をノックしてから入り、他の俺たち部員達も後に続く。

今日は三大勢力が集まって会議を行う日で、会談は駒王学園の新校舎にある職員会議室で行う。

学園も強力な結界に囲まれているので誰も中へ入れなくなり、会談が終わるまで外には出られない。

因みに、ヴラディは神セイクリッド・ギア器を未だに扱いきれない為、何らかのシヨックで邪魔をしたら大変な事になってしまいかねない、という理由から彼は部室で留守番をしていて不在である。

室内には豪華なテーブルがあり、それを囲む様に各陣営のトップ達が座っていた。

悪魔側は、サーゼクス・ルシファー殿にセラフォル・レヴィアタン殿……何でも例の魔法少女があの方らしい。そして、給仕係としてグレイフィア・ルキフグス殿。

天使側はミカエル様とガブリエル様。

墮天使側には墮天使総督アザゼルと白龍皇のヴァーリ。

と、俺にはとってはレヴィアタン殿以外は交流のある方たちが集まった。

流石に大事な会議だけあって、アザゼルやレヴィアタン殿にルシファー殿は皆、装飾が施された衣装を着ていた。

「私の妹と、その眷属だ」

俺たちが入ると、すぐにルシファー殿が他の陣営に紹介する。

コカビエルの件に関して、リアス・グレモリー眷属に対してミカエル様は謝礼をしていたのだが、アザゼルはあまり悪びれた様子を見せなかった。

「その席に座りなさい」

ルシファー殿の指示を受け、壁側に設置された椅子に向かうと、既

に席の一つにソーナ・シトリーが座っていた。

その隣に部長が座り、その横に兵藤、姫島、木場、アルジエント、塔城、俺と順番に座った。順番に意味は無い……と思う。

「全員が揃ったところで会談の前提条件を一つ……ここに居る者達は、最重要禁則事項である『神の不在』を認知しているという事。」

……では、それを認知しているとして、話を進める」  
ルシファア殿の一言で三勢力の会談が始まった。

\*

あれから、それなりの時間が経った。

今は、部長とシトリーに姫島が立ち上がり、先日のコカビエル戦の一部始終を各陣営に話している。

「……以上が、リアス・グレモリーとその眷属悪魔が関与した事件の報告です」

そして、話が終わる。

「ご苦労、座ってくれたまえ」

「ありがとう、リアスちゃん」

ルシファア殿の一言で部長は着席し、レヴィアタン殿は部長にウインクを送った。

「……さて、今の件とはあまり関係性がないが、はっきりさせておきたい事が一つ。ゼノンくん、君は一体？」

言いたい事はわかるが……

「失礼ですが、どういう意味ですか？」

「ああ、ミカエルからの君についての報告には色々疑問に思う事があってね。特に、神の不在について以前から知っていた……というのが驚きだね」

ミカエル様……どんな報告してたんですか？まあ、色々ぼかす事もあったでしょうし、サーゼクス殿にはその事は報告しなければいけないしな。

「私は、孤児でした。そこで教会に拾われ、天然の聖剣使いである事がわかり教会で暮らすようになったのです」

立ち上がり、一礼してから語り出す。全員の視線を浴びているから、口下手な俺じや話せなくなってしまうよ（大嘘）

「……しかし、突然私は私ではなくなったのです」

「あん？どういう事だよ？」

俺も言われたらそう突っ込むだろう台詞にアザゼルは突っ込んだ。流石はアザゼルだ。

「憑依……というのはご存知ですか？それにより、私は五歳の時にある日本人と思われしき記憶と経験を得ました。ですから、歴史書などを読んで直ぐに至りました」

実際、知識は無駄にあるが俺自身の個人情報については大半がわからない。まあ、今では吹っ切れてゼノンとして生きてるし、今の生活に満足してるからそこまで気にしてないけどな。

「まさか……だが、有り得ない話ではないな……」

やっぱり、そういう奴もいるらしくサーゼクス殿やアザゼルはすんなりと納得したみたいだ。反面、部長たちやシトリーは驚いている。

「そういう理由から、あの時は利があると感じたので貴方に協力したんですよ」

おっと、口が滑った。

「……あの時？なんですか、アザゼル」

ミカエル様が冷たい目でアザゼルを見つめる。

「おい、ゼノン！何喋ってんだよ！」

「……つい、うっかり。すみません、アザゼル総督。ミカエル様、決して『破壊の聖剣』エクスカリバー・デストラクションのあの件には全く関与していません」

そういえば、成功したのか？五大龍王の一角「黄金龍君」ギガンテイス・ドラゴン「ファーブニルと契約はしたみたいだけでも、そこから人工神セイクリッド・ギア器にできたのかはわからないからな。

「うっかりってレベルじゃねーよ！」

「……アザゼル、この後お話が」

「わかりました……」



このやり取りが終わっても、グレモリー眷属はポカンとした表情を浮かべるのは収まらなかった。

その為、サーゼクス殿が咳払いをしてから話始めた。

「……そろそろ本題に戻ろう。先程の報告を受けて、墮天使総督の意見を聞きたい」

先程の報告……コカビエルの件だな。

「先日的事件は、我が墮天使中枢組織『神の子を見張る者』の幹部コカビエルが、他の幹部及び総督の俺に黙って単独で起こしたものだ……というか、その辺りの説明はこの間転送した資料に全て書いてあったろ？それが全部だ」

アザゼルの説明になってない意見にミカエルが嘆息してからおっしゃる。

「説明としては最低の部類ですが……貴方個人が我々と大きな事を起こしたくないと言う話は知っています。それに関しては本当なのでしよう？」

「ああ、俺は戦争に興味なんてこれっぽっちも無いぜ」

そこで、サーゼクス殿がアザゼルに問いかける。

「一つ訊きたいのだが、どうしてここ数十年神器の所有者を集めている？最初は人間達を集めて戦力増強を図っているのかと思っていた。天界か我々に戦争をけしかけるのではないかとも予想していたのだが……」

「そう、わかっただけはいましたが、いつまで経ってもあなたは戦争を仕掛けてはこなかった。しかし、白龍皇を手に入れたと聞いた時には、少し警戒心を抱いたものです」

ミカエル様は、一応俺の自論とアザゼルから聞いたテロ組織の情報を知っているから警戒は幾分少ない。

「神器の研究の為だよ。なんなら、一部の研究資料もお前達に送ろうか？第一、俺は今の世界に充分満足しているから戦争なんか仕掛けねえよ……つたく、俺の信用は三竦みの中でも最低かよ」

「「その通りだ／ね／です」」

ルシファア殿、レヴィアタン殿にミカエル様の三方の意見が見事に

一致した。

アザゼルがよっぽど信用されていないのを改めて実感できた。

「……神や先代ルシファーよりもマシかと思っただが、お前らもお前らで面倒臭い奴らだ。こそこそ研究するのもこれ以上性に合わねえか。なら、和平を結ぼうぜ。元々そのつもりもあつたんだろ……天使も悪魔もよ?」

まさかアザゼルが和平を一番に提示するとは思っていなかったのか、俺以外の皆が驚いた。

すると、アザゼルの発言に驚いていたミカエル様が微笑む。

「ええ、私も悪魔側と貴方たち<sup>グリゴリ</sup>に和平を持ち掛ける予定でした。これ以上、三竦みの関係が続けていても、今の世界の害となる。天使の長である私が言うのも何ですが……戦争の大本である神と魔王は消滅したのですから」

というか、実際過去にあつた覇権を求めた戦争も利益はほとんどなく、失ったものが多いみたいだしな。まあ、過去は変えられないからとやかく言うつもりは無いが。

「あの堅物ミカエル様が言うようになったな……昔とは大違いだぜ」

昔は、ミカエル様も神を過度に崇拜していたらしい。

「……失ったものは大きい。けれど、いないものをいつまでも求めても仕方ありません。人間達を導き、神の子らをこれからも見守って先導していくのが一番大事なことだと私達の意見も一致しています」  
「おいおい、今の発言は堕ちる……と思ったが、システムはお前が受け継いだんだったな。俺らが堕ちた頃とはまるで違っていい世界になつたもんだ」

実際、昔のシステムがわからないが、俺が天使だったら直ぐに堕ちてたんだろうな……。すると、サーゼクス殿が口を開く。

「我らも同じく魔王がなくなるとも種を存続する為、悪魔も先に進まねばならない。戦争は我らも望むべきものではない……次の戦争をすれば、悪魔は必ず滅ぶ」

確か悪魔は、72柱の半分以上が断絶し軍勢と共に滅びるか、生活が立ち行かなくなったりして冥界境界や人間界の奥地に隠棲してい

るらしいな。しかも、出生率は低く増えにくいんだよな。それで悪魔の駒が出来たらしいが。

「次の戦争をすれば、三竦みは今度こそ共倒れる。そして、人間界にも影響を大きく及ぼし世界は終わる。……俺らは戦争をもう起こせない」

先程までふぎけた調子だったアザゼルが一転し、真剣な表情となっていた。こう、真面目になるときはしつかりやる人物だから、嫌いじゃないんだよな。

「神がない世界は間違いだと思うか？神がない世界は衰退すると思うか？残念ながらそうじゃなかった。俺もお前達も今こうやって生きている。……神がなくても世界は回るのさ」

神がなくても、世界は回る……か、だが、神がない事で世界は少しづつ「ズレ」始めている。

聖魔剣は、それが顕著に出ている……昔からの疑問だったがセイクリッド・ギア神器とは何のために存在しているんだ？それが未だに謎だ、他にも色々疑問は尽きないがな。同様に俺が俺にセン憑依した事も関係しているのか……？

「さて、そろそろ俺達以外にも……例えば、世界に影響及ぼしそうな無敵のドラゴン様に意見を聞こうか。まずはヴァーリ、お前は世界をどうしたい？」

アザゼルの問いに白龍皇は笑みながら答えた。大体察しはついてるが……。

「俺は強い奴と戦えれば、それで良い」

だよな、戦闘狂はそれだよな。

「お前らしいよ、ヴァーリ。じゃあ赤龍「聖剣使い、お前は？」……ヴァーリ？」

次は赤龍帝か？と思ったが何故か俺に振られた。どういう事だ……？

「こいつにも、聞く価値は有るだろう？今、俺はこいつの方に興味がある。別に順番なら赤龍帝が最後でも良いだろう？」

戦闘狂に興味持たれるとか、最悪だな。というか、何か引つかかる

な……何だ？

「……それもそうだな、ゼノン。お前はどうか？」

「そうですね……!？」

俺が話そうとした途端に、嫌な感じと共に周りの時が止まった。

What is a chaos brigade  
?

「襲撃か……」

そう呟き、辺りを確認するとルシファア殿とミカエル様、アザゼルが展開したであろう強力な防御結界の外側に魔法使いの大群が転移してきた。

TOP陣を除いて現状で動けるのが白龍皇と俺、部長に木場だけか……兵藤はまだか？

「放たれている魔力から察するに、一人一人が中級悪魔程度の力は持っているらしい」

ルシファア殿が冷静に観察しながら言う。その魔法使い達の魔法が降り注いでいるが、三方による結界に阻まれて完全に攻撃が通らない。

すると、戸惑った表情の部長が呟く。

「ヤツキのは一体……」

「襲撃だ。恐らく、力を譲渡する類の神セイクリッド・ギア器が何かでヴラデイの神セイクリッド・ギア器を一時的に禁手バランズ・ブレイカーにしたのだろう。現状では、ルシファア殿やミカエル様たちは結界の維持及び、駆除で動けない」

俺が説明している中、窓際にいるアザゼルは、手を掲げて光の槍を多数出現させた後に、手を振り下ろすと同時に光の槍が魔法使い達を貫き排除していく。

「ありや、結界内と外部が繋がれてるな。こんな大規模な転移用魔方陣を即興で作れるとは思えない」

アザゼルの言う通り、結構な人数が転移している。そんな魔法陣を即興で作れる奴は少ないしな。いない……と言い切れないのが怖い所だが。

「……内部から情報が漏れたと考えていいだろうな」

考察を呟いてしまった。たまにある俺の悪い癖だ。どちらにせよ、この可能性は高い。ヴラディを態々使ったから、その線は濃厚だ。

「そうだろうな……おつ、赤龍帝の復活だ」

ん？ 本当だ、兵藤が戻ってる。だが、辺りをキョロキョロと見回している所を見ると、状況が呑み込めてないみたいだ。

「な、何があったんすか？」

「襲撃だ。ヴラディがさらわれている」

予想通りの台詞だったので、とても簡単に説明をする。その後、アザゼルが話始めた。

「なら、やるべき事は囷と奪還だな。囷はヴァーリ、お前がやれ。白龍皇が前に出れば、連中も注目せざるを得ない。ハーフヴァンパイアの奪還だが……」

アザゼルが面々を見渡した中で、部長が一步踏み出して宣言した。

「私が行きますわ。部室には『戦車』の駒が置いてあるから、〃ギヤスリング〃をすれば敵陣の真ん中に出る事が出来る筈です」

確か、『王』と『戦車』の位置を瞬間的に入れ替えるレーティングゲームの特殊技の一つだったか。部長が態々『戦車』の駒を置いて行ったのは、この襲撃を見越した行動だったのか？ 流星はグレモリーの次期当主か。

「なるほど……それなら、敵の虚を付け、何手か先んじえるだろうね」

部長の言葉に、ルシファー殿が思案した表情になる。恐らく、部長一人では少し無理があるのだろう。敵の数は外を見る限りだと大勢本陣にいる事が予想できるからな。そして、ルシファー殿はグレイファイア殿へ一つ提案した。

「グレイファイア、〃ギヤスリング〃を私の魔力方式で複数人転移可能にできるかな？」

「そうですね……ここでは簡易的な術式でしか使えそうにありませんが、お嬢様ともう二方くらいなら可能かと」

二人か……普通に考えるなら譲渡が可能な兵藤に、手数的に木場か。他は動けないし、俺はどちらかと言えば囷向きだしな。だけど、囷にはヴァーリが出るみたいだから暫くは傍観しているだけになる

か？

「ふむ、リアスと誰か二人……イツセーくん、祐斗くん、頼めるかね？」

「やっぱり予想が冴えるな。戦闘中にこれが充分に生かせるようになれば戦闘も楽になるんだけどな。」

「は、はい！わかりました！」

「わかりました」

すると、準備が出来るまで待つしかない三人へと、アザゼルが声をかけ、何かを放り投げる。

「なら、コイツを持っていけ。あと、赤龍帝にはこれだ」

それは、両方とも腕輪で、奇妙な文字が幾重にも刻まれているが片方は赤く染まっている。

セイクリッド・ギア

「神器の力がある程度抑える事の出来る腕輪だ。例のハーフヴァンパイアに使ってやれば、多少なり力の制御も可能だろう。片方は赤龍帝専用だ、これで擬似的にだが一定期間内ならバランス・ブレイカー禁手を維持できる」

「便利なものだな……伊達にセイクリッド・ギア神器の研究をしているわけではないか。」

「ヴァーリ、お前は囷だ。白龍皇が出てきたとなれば、連中も黙って見ていられないだろうから、出来るだけ連中の気を引いてこい」

「……了解」

一瞬、何かを考えたような気がしたが、返事をして窓へと近づいていき、窓から出る瞬間に小さく呟く。

バランス・ブレイク

「……禁手化」

『Vanishing Dragon Balance Breaker!』

その直後、ヴァーリは白いオーラに包まれた。光が止んだ後、ヴァーリは白い全身鎧を纏っていた。

ヴァーリが出ていったと同時に会議室の床にある魔方陣が展開される。引つかかっていたのはこういう訳か……!?

「そうか……今回の黒幕は……グレイフィア、三人を早く飛ばせ！」

すると、ルシファア殿はグレイフィア殿に指示を飛ばす。

それを受けたグレイフィア殿は兵藤に木場と部長を隅に移動させ、小さな魔方阵を出して転移させた。

会議室に現れた魔方阵を見て、ルシファア殿は苦虫を噛み潰した様な表情をした。あの魔法陣は、確か……

「レヴィアタンの魔方阵……」

ルシファア殿と俺の眩きが被る。

すると、魔法陣からどこに需要があるのか俺には理解できないデザインをしたドレスに身を包んでいる女性が現れた。兵藤なら喜びそうだが……。

「ごきげんよう、現魔王のサーゼクス殿」

「先代レヴィアタンの血を引く者……カテレア・レヴィアタン。これはどういう事だ？」

ルシファア殿の問いにカテ……旧魔王その1は何故か挑戦的な笑みを浮かべて言う。この絶望の布陣のど真ん中にきても余裕という事は何か秘策があるんだろうけど……自力の差が歴然だ。そんなにヤバイ秘策なのか？

「旧魔王派の者達は殆どが『禍カオス・ブリゲードの団』に協力する事に決めました」

という事は聞きなれない単語だが、その『禍カオス・ブリゲードの』と呼ばれる組織に旧魔王派の一族が加わってる訳か。

『禍カオス・ブリゲードの団』か……三大勢力の危険分子を集めている連中で、

禁バラン・ブレイカー手に至った神セイクリッド・ギア器ロンギヌス持ちはおろか神滅具ロンギヌス持ちすらいる奴ら

か。しかし、旧魔王の奴らがそちらにつくとは……悪魔も大変だな」アザゼルは他人事の様に笑うが、関係あるからな？そちらにも思想の違う奴らはいらるだろうし……。

もしかすると、あの人もそこにいるのか？

「カテレア、それは言葉通りと受け取っていいのだな？」

「サーゼクス、その通りです。今回のこの攻撃も我々が受け持っております」

このあまり効率の良いとは思えないこの襲撃を？こんな三方がいらるときに態々攻めてこなくとも……頭がコカビエルと同等だな。



「クーデターか……カテレア、何故だ？」

「私たちは、この会談のまさに逆の考えに至っただけです。神と先代魔王がいらないのならば、この世界を変革すべきだと」

あれを含めた旧魔王派は和平を認めずに神の不在を知った上でクーデターを起こしている。新旧で意見が真逆だな。

「オーフィスはそこまで未来を見ているのか？」

オーフィス……無限の龍神ウロボロス・ドラゴンと呼ばれる最強のドラゴンか……。まさか、そいつがリーダーか？しかし、あの龍がそんな野心は持たない筈だが？

アザゼルの問いに旧魔王その1は答える。

「彼は力の象徴としての、力が集結するための役を担うだけです。彼の力を借りて一度世界を滅ぼし、もう一度構築します。新世界を私達  
が取り仕切るのです」

実際、こんな奴らが新世界を創ろうとしたら、私利私欲しか考えない奴らしかいないからまともな世界は創れないだろう。精々、反逆者  
どうして争って自滅が関の山だろう。

「カテレアちゃん！どうしてこんな事を！」

セラフホルーの叫びにカテレアは憎々しげな睨みを見せる

「私から『レヴィアタン』の座を奪っておいて、よくもぬけぬけと！  
私は、正統なるレヴィアタンの血を引いている……私こそが魔王に相  
応しい！」

なんか、こいつ口を開くたびに小物臭が増してきたな……秘策なん  
かなさそうだな。あっても、残念な感じで終わりそうだな……。

「カテレアちゃん……。わ、私は！」

「安心しなさい、セラフホルー。今日、この場で私が貴方を殺し、私が  
魔王レヴィアタンを名乗ります。そして、オーフィスには新世界の神  
となつて貰い、システムと法や理念は私達が構築する。ミカエル、ア  
ザゼル、そしてサーゼクス。あなた達の時代は終わり、これからは私  
たちの時代です」

もう口を開くなよ……可哀想に思えてきた。

すると、アザゼルが口を開いた。

「言葉が陳腐すぎるぜ、レヴィアタンの末裔。どこのかませだよその台詞？」

「ごもつとも、アザゼルと珍しく意見が合うな。明日は光の槍でも降るか？」

「アザゼル！貴方は何処までも私たちを侮辱する！」

煽り耐性低いなこいつ……戦闘になったら俺が出るか。

「思った事をいっただけだったのに、どうも切れやすい奴だな……しかたねえ、やってや……」「アザゼル」ん？」

アザゼルが旧魔王その1と闘いそうだったので引き止め、ワザとらしい口調で話かける。

「堕天使総督殿に手を煩わせる訳にはいけません。同族の不祥事は同族が償うのが道理です。それに、あんな輩に手の内を晒すつもりで……？」

「……じゃあねえな。てなことでカテレア、こいつが代わるそうだ」

一応納得したのか、俺に任せることにしたアザゼル。しかし、当然旧魔王その1は……

「ふざけるな！そんな下級悪魔なんぞにつ……!？」

激昂したので、喋ってる最中に外に向かって思い切り蹴り飛ばした。窓を割って、外に吹き飛ばした旧魔王その1をジョウユースを亜空間から取り出して追った。そこには、ブチ切れる寸前の旧魔王その1が此方を睨んでいた。

だから俺は、先程にルシファア殿が言った「魔法使いたちは中級悪魔程度の力は持っている」に因んで旧魔王その1が怒るであろう台詞を吐いて聖剣ジュウユースを構えた。

「……さて、殺り合いますようか。中級悪魔様？」

その後、旧魔王その1がブチ切れて戦闘が始まった。

What is a chaos brigade  
?  
II

旧魔王その1の防御障壁を容易く斬り裂き近距離で魔術をぶち込む……という事を何度か繰り返して有利な状況で戦闘を続けている。冷静さが欠けているからほぼ一方的な状況になっているが。

「……っ！ 下級悪魔ごときが！」

魔術によりボロボロになった旧魔王その1が忌々しそうに叫ぶ。

「すみません、余りにも貴方がノロマなものですから……そろそろ、奥の手を出しますか？」

と、挑発や精神攻撃は基本。実際、奥の手を早く出してもらわないと困る、起死回生の手だったら最悪アザゼルに援護して貰えばいいし、対した事がなければそのままいけるだろうしな。

すると、旧魔王その1は距離をとって語りだした。

「……ふふふ、いいでしょう。その台詞、後悔させてやろう」

旧魔王その1は胸元に手を突っ込んで、小瓶を取り出した。そして、中に入っていた小さな黒い蛇らしき物を呑み込んだ。

すると、旧魔王その1の魔力が急に倍以上に膨れ上がった。

「今のは、何だ？」

基本的にこういう奴は質問に答えてくれる筈。

「今のは、オーフィスの蛇です。世界変革のため、オーフィスには少々力を借りました。この力で貴様を倒した後は、貴方たち全員を倒します」

さっきの蛇のようなものは、ウロゴロス・ドラゴン無限の龍神オーフィスによるものか……どこまでの強化度なのかわからないので距離が離れているので様子見で魔術を放ちながら距離を詰める。

そして、魔術を防いでいた障壁を魔力を纏った足で蹴りつけるが、障壁で防がれて反撃とばかりに打たれた拳を聖剣で受けて軽く吹き飛ばす。

「ちっ……」

思わず舌打ちをしてしまったが冷静に思考する。確かに、蛇の効果で全体的に能力は飛躍している。さて、どうするか……？

「どうですか？今の私とあなたでは、力の差は歴然です」

蛇の影響で気持ち昂りすぎて思考力が低下しているのか訳がわからないことを話す旧魔王その1。

部長たちがヴラディを救出するのを待つ必然性もないし……やはり速攻でケリをつけるか。まあ、この程度なら……

「……デュランダル！」

コカビエルの件の後からデュランダルは態々詠唱しなくてもよくなった。理由は不明だが、便利なので良しとする。

「ふっ！」

そして、気と魔力を融合させ身の内と外に纏って瞬間的に強化する。これは、まだ持続力に欠ける為に一瞬しか持たないが、今はこの一瞬で充分……！

「なっ!?何故聖剣が二本も!？」

驚く旧魔王その1の隙を狙いデュランダルとジョウユースの範囲内にまで近づき告げる。こんな所で驚くなんて……お終いだぜ？

「Game Over だ」

「な!? 速……」

防御障壁をデュランダルで斬り裂いて、そのまま聖なるオーラを込めたジョウユースで旧魔王その1を斬って消滅させた。凄まじいな、ジョウユース……

「……ふう、終っ……!」

旧魔王その1を滅して、一息ついて緊張を解こうとした途端、俺のいる辺り周辺に無数の魔力弾が放たれた。ちっ……ここで反逆か。魔力弾の数が多い……捌ききれるか？

「バランス・ブレイク禁手化！」

すると突然、黄金の全身鎧を身に纏った人物が現れて魔力弾の大半を光の槍で相殺した。

「ほらよ、これで貸し一つだ。ってことでミカエルの説得は頼むぜ？」

その全身鎧を身に纏ったのは、アザゼルだった。

「アザゼル、その鎧はまさか……」

「正解だ、バニシング・ドラゴン 白い龍セイクリッド・ドラゴンや他のドラゴン系セイクリッド・ギア神器セイクリッド・ギアを研究して作り出した、俺の傑作人工神器だ。今は『ダウン・フォール・ドラゴン・スピア墮天龍の閃光槍』の擬似的な禁手状態だ。名前は『一墮天龍の鎧』《ダウン・フォール・ドラゴン・アナザー・アーマーダウン・フォール・ドラゴン・アナザー・アーマー》」

説明し終わるとアザゼルは、さっきの魔力弾を放った首謀者である白い全身鎧を身に纏った人物を見上げ、話かける。

「しかし、ヴァーリ。お前が裏切るとはな……」

そう、さっきの攻撃はヴァーリだったのである。可能性としては、俺を除いては、こいつしか有り得ないしな。

「アザゼル、俺はあくまで協力するだけだ。アースガルズと戦ってみないか？」と魅力的なオファーを受けてね。自分の力を試してみたい俺では断れない。アザゼルは戦争嫌いだから、ヴァルハラ……アース神族と戦う事を嫌がるだろう？」

「どこまでも戦闘狂だな……俺主観だが、さっきの旧魔王どもよりは変な欲望が無い分ましに思える。」

「……チツ。俺もやきが回ったもんだ。身内がこれとはな……」

「ゼノン！ 無事か!？」

「ゼノンくん、無事かい?」

「さっきのは一体?」

すると、部長たちがやってきた。時間が惜しいので直ぐ様、説明する。

「簡単に説明するなら、お前たちが転移後に旧魔王の一人が来たが、俺がさっき始末した。そして、ヴァーリが裏切った訳だ」

皆が、ヴァーリを見るとヴァーリは語り出した。

「俺の本名はヴァーリ……ヴァーリ・ルシファーだ。死んだ先代の魔王ルシファーの血を引く者だが、旧魔王の孫である父と人間の母との間に生まれた混血児。バニシング・ドラゴン 白い龍セイクリッド・ギアの神器は半分人間だから手に入れたものだ。そうして、ルシファーの真の血縁者でもあり、白い龍でもある俺が誕生した。運命、奇跡と言う物があるなら、俺の事かもし

れない……なんてな」

すると、ヴァーリの背中から光の翼と共に、悪魔の翼が幾重にも生え出した。態々見せてくれるなんて丁寧だな。

「嘘よ……そんな……」

部長が呆然と呟く。……って事は、部長はサーゼクス殿から教えられて無かった訳か。悪魔側なんだから、既に知ってると思ってたよ。「事実だ。もし冗談の様な存在がいるとしたら、こいつの事さ。俺が知っている中でも過去現在、おそらく未来永劫においても最強の白龍皇になる」

アザゼルが肯定する。というか、歴史書を見る限りだと歴代の赤龍帝と白龍皇の戦いは余り載ってないし、アザゼルみたいに見た経験がないから歴代歴代言われても、実感がわかないんだよな。

「俺の様に魔王十伝説のドラゴンみたいな思いつく限り最強の存在がいる反面、そちらの様にただの人間に伝説のドラゴンが憑く場合もある。ライバル同士のドラゴンセイクリッド・ギア 神器とはいえ、所有者二名の溝はあまりに深過ぎる」

確かに、元の地の力では天地の差があるな。バランス・ブレイカー 禁手に至ってい

て『ジャガーノート・ドラッグ 覇龍』も可能なような気がする白龍皇に対して、未だにバランス・ブレイカー 禁手に正式に至れていない赤龍帝。

兵藤を指を差し見下しながらヴァーリは話を続ける。

「君の事は少し調べた。父は普通のサラリーマンで、母は普通の専業主婦。両親の血縁は全くもって普通で先祖に力を持った能力者、術者がいた訳でもない。勿論、先祖が悪魔や天使に関わった事もなく、君の友人関係も特別な存在ではない。君自身も悪魔に転生するまではブーステッド・ギア 赤龍帝の籠手以外、何も無い普通の男子高校生だった」

うお、結構調べたんだな……俺は人物の過去については余り調べない主義なんだよな。

「ヴァーリ、何が言いたい?」

アザゼルが言う。確かに、兵藤なんて凄く微妙な顔をしているぞ? 「つまらない……あまりにつまらな過ぎて、キミの事を知った時は落胆よりも笑いが出た。せめて親が魔術師ならば、話は少しでも変わっ

たかもしれないが……。そうだ！こう言う設定はどうだろうか？キミは復讐者になるんだ！」

ヴァーリの言っている意味がわかった俺はヴァーリを睨みつける。復讐者……。巫山戯てんのか？ このクソ野郎は。

「俺が君の両親を殺そう。親を俺の様な貴重な存在に殺されれば晴れて重厚な運命に身を委ねられると思わないか？ どうせ君の両親は今後も普通に暮らし普通に老いて、普通に死んでいく。そんなつまらない人生よりもそのが華やかだ！ そうだろう？」

「……殺すぞ、この野郎」

兵藤から殺気が溢れる。態々こんなことを言って兵藤を挑発したな、こいつは……。応じなかったら、普通に兵藤の両親を殺しそうだが。しかし、これはヴァーリの単独行動と言う事だな。ヴァーリを誰かが連れ戻しに来るまで兵藤の成長の為に利用させて貰うぜ？

「ヴァーリ！ てめえなんぞに、俺の親を殺されてたまるかよおおおお！」

『Welsh Dragon Over Booster!』

兵藤の怒りにより、籠手が赤く強大なオーラを解き放ち、赤い鎧

……。『赤龍帝の鎧』を纏った。本来なら、禁手に至っていない

ない兵藤では犠牲を払わないといけないのだが、事前にアザゼルから貰った特製のリングのお陰で犠牲を払わずに済んだ。

『セイクリッド・ギア神器は単純で強い想い程、力の糧となる。兵藤一誠の怒りは純粋な程お前に向けられているのさ。真っ直ぐな者、それこそドラゴンの力を引き出せる真理の一つ』

「そうか。そう言う意味では俺よりも彼の方がドラゴンと相性が良い訳だ」

空中で、飛んで向かってくる兵藤をながらヴァーリとアルビオンが会話をする。

「だが、ドライブを使いこなすには知恵が足りな過ぎる」

「さつきから俺が分からない事を言ってるじゃねえ！」

『Boost Boost Boost Boost!!』

両者の会話の中で一誠は、彼なりに考えて龍殺しの聖剣であるアスドラゴン・スレイヤー

カロンで斬りかかるも振り回すだけの剣では、ヴァーリに当てる事が出来ない。

『Divide!』

『Divide!』

『Divide!』

『Divide!』

「ぐう……」

兵藤の苦悶する声が漏れる。ヴァーリも態々倍加した分だけ半減させるとか……案外こいつに成長して欲しいみたいだな……まあ、好敵手なんだから当然か？

『BoostBoostBoostBoost!!』

兵藤がもう一度連続で倍加して今度は片手で斬りかかる。

『Divide!』

が、また避けられて一撃入れられる。……しかし、何故片手持ちにしたんだ？ 何か策があるんだと思うが。

『Divide!』

二撃目が入り更に半減される。

『Divide!』

「何!」

三撃目が入るが、兵藤が右手でヴァーリの右腕を掴み捉える。

「ドライブグ! 収納しているアスカロンに力を譲渡だ!」

『承知っ!』

『Transfer!』

一誠の左手に力が譲渡され、アスカロンを収納した籠手でヴァーリの顔面に拳を入れる。

すると、龍殺<sup>ドラゴン・スレイヤー</sup>の聖剣の威力が発揮されて『一白龍皇の鎧<sup>テイバイン・デイベイディング・スケイルメール</sup>』の一部が呆気なく壊れ、ヴァーリは地面に叩きつけられた。

しかし、兵藤もキツかったのか一旦地上に降りてきた。

何というか……泥臭い戦い方だな。そういう、肉を切らせて骨で立つ、みたいな考えは嫌いじゃないがな。



「へへ……やったぜ」

「兵藤、まだだ。既にあいつは回復している」

喜んでゐる兵藤には悪いが、

俺の言う通り、大破した筈のヴァーリの鎧が再び元の状態に戻っていた。

「……まじかよ」

バランス・ブレイカー

兵藤の禁手状態は制限時間付きで、その時間内でヴァーリを倒すには、相打ち覚悟でジャガーノート・ドラゴン覇龍ぐらいしかないか？速く、ヴァーリを迎えに誰か来いよ。

「……ん？　これは……」

考え込んでいた俺の目の前に何か光った。それは先程の攻撃によつて破損した白龍皇の宝玉だった。俺はその宝玉を手に取り兵藤に投げ渡した。

セイクリッド・ギア

「兵藤、神器は思いに応じて進化する。そして、相反する力も聖魔剣により合わせる事が可能だ。言いたい事はわかるな？」

兵藤は宝玉を受け取り、俺の話を聞いてからほんの少しだけ考えた後に、右手の甲に存在する赤龍帝の宝玉を叩き割りヴァーリに叫んだ。

バニング・ドラゴン

「白い龍、ヴァーリ！　もらうぜ、お前の力！」

そして、兵藤は白龍皇の宝玉を右手の甲に埋め込んだ瞬間、右手からオーラが発生し、兵藤の右半身を包み込んだ。

しかし……

「うぐあああああああああああああッ！」

兵藤の身体中には、形容し難い激痛が走っていると思う。魔力と気の混合もきつかったからな……それなりのリスクはあるとは思ったがこんなに酷いんだな……

『ドライグよ、我らは相反する存在だ。それは自滅行為に他ならない。こんな事でお前は消滅するつもりなのか？』

リスクは消滅か……まあ、不可能では無いだろうし、後は兵藤の意志の強さに賭けるしかないな。

『アルビオンよ、お前は相変わらず頭が固いものだ！』

我らは長年、

人に宿り争い続けてきた！　しかし、それは毎回毎回同じ事の繰り返しだったな』

『それが、我らの運命。お互いの宿主が違ったとしても戦い方だけは同じだ。お前が力を上げ、私が力を奪う。神器をうまく使いこなした方がトドメを刺して終わりとなる。そう、今までもこれからも』

兵藤が苦しみに呻いている中、会話をする二天龍。後で、ドライグに過去の戦いについて聞くか……興味が湧いてきた。

『俺はこの宿主……兵藤一誠と出会って一つ学んだ事がある……それは、馬鹿を貫き通せば可能になる事がある！』

「俺の想いに応えろおおおッ！」

『Vanishing Dragon Power is taken!!』

兵藤……一誠の叫びと同時に右手が真っ白なオーラに包まれ、白い籠手が出現した。

「で、出来た……！」

右手の白い籠手をみて声を漏らす一誠。それを見て呟く。

「白龍皇の力を宿した籠手……安直だが名前を付けるなら

デイベイディング・ギア  
『白龍皇の籠手』ってところか……」

『あり得ん！　こんな事はありません！』

すると、アルビオンが驚愕の声を出す。というか、アルビオンはさつきドライグが言っていた通り頭が固いな……聖魔剣があり得るんだから、有り得なくは無いんだよ。

「まあ、進めた俺が言うのは何だが、無謀にも程がある。死んでいないにしろ、確実に寿命を縮ませたな」

今はまだ驚きっぱなしの部長には確実に怒られそうだな……結果オーライでなんとかなるか？

「……良いよ、俺は一万年も生きるつもりは無いから。けど、やりたい事は山程あるから、最低でも千年は生きたいけどな」

ハーレムかな？　一誠ならあり得るが。

「ふっ……今まででこんな奴は見た事が無い」

少し前に上空に上がったヴァーリが拍手しながら言う。全身鎧の

所為で表情がわからないが、多分ヴァーリは良い笑顔を浮かべているだろうな。

「なら、俺も少し本気を出そう！　俺が勝ったら、君の全てと君の周りにある全ても白龍皇の力で半分にしてみせよう！」

『Half Dimension!』

宝玉から音流が流れ、眩いオーラに包まれたヴァーリが木々へ手を向ける。すると、木々が一瞬で半分の太さになってしまった。

「……半分？」

それを見ていた一誠は、小さく何かを呟いてから首だけを動かして部長へ視線を向ける。そして、半分になった木と部長を交互に見てからワナワナと震えながら口を開いた。どうした？

「ふ……ふざけんあああああ！　部長の！　俺の部長のおっぱいを半分の大きさにするつもりかあああああアツ!」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!』

は……？　え？

「絶対にてめえだけは許さねえツ！　ぶつ倒してやるツ！　ぶつ壊してやるツ！　ヴァーリイイツ！」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!』

いやいや、何でだよ。何故そんな結論に達するんだよ？しかも、倍加スピードが断然速くなってるし、わけわからん。

すると、一誠は今までとは段違いのスピードでヴァーリに向かって飛び出して、動き回るヴァーリを難なく捕まえ……

「これは部長のおっぱいの分！」

謎の台詞と共に腹に右の鉄拳を入れた。

『Divide!』

それと同時に、奪った白龍皇の力……『ディバイディング・ギア白龍皇の籠手』の能力で、ヴァーリの力を半分にした。

威力に耐えられずヴァーリは吐瀉物を口から吐き出した。

「なんだよそりや!?　　主さまの胸が小さくなるかもしれないって理由だけで、ドラゴンの力が跳ね上がりやがった!」

隣でいつの間にかバランス・ブレイカー禁　手を解除したアザゼルが爆笑している……まあ、爆笑する気持ちはわかるが……

「朱乃さんのおっぱいの分!」

そんな中、一誠は更に叫び顔面に鉄拳を打ち込み、兜を破壊する。

「これは成長中のアジアのおっぱいの分!」

今度は、背中に付いている噴射口を破壊した。ヴァーリの体制が更に崩れる。

「そしてこれが、小猫ちゃんのロリおっぱいの分だあああああ!」

止めとばかりに猛スピードを乗せたタツクルをかました。それを食らったヴァーリは地面に叩きつけられて、吐血した。

しかし、ヴァーリは不気味に笑いながらゆっくりと立ち上がると、ある呪文を唱え始めた。

『我、目覚めるは、覇の理に……』

『自重しろヴァーリ!　　我が力に翻弄されるのがお前の本懐か!』

「一誠、離れろ!　　アザゼル!」

ジャガーノート・ドライブ 覇　龍の呪文だと分かった俺は更に一撃を放とうとする一誠を呼び戻し、ヴァーリのジャガーノート・ドライブ 覇　龍に備えてアザゼルに声をかける。

「ああ、バランス禁……」

「ヴァーリ、迎えに来たぜい!」

すると、アザゼルがバランス・ブレイカー禁　手になる寸前に三国志の鎧を着た男がヴァーリの目の前に転移してきた。

「びしょう美猴か。何をしに来た?」

「それは酷いんだぜい?　　相方がピンチだつーから遠路はるばる

この島国まで来たつてのによろ?　　他の奴らが本部で騒いでる

ぜい?　　北の田舎アース神族と一戦交えるから任務に失敗したの

なら、さっさと逃げ帰ってこいつてよ?　　カテレアはミカエル、ア

ザゼル、ルシファアの暗殺に失敗したんだらう?　　なら、監察役の

お前の役目も終わりだ。俺たちと一緒に帰ろうや!」

二人の会話から推測するに、こいつも「カオス・ブリゲード禍の団」の一員であるこ

とは間違いない。ヴァーリのジャガーノート・ドライブ覇龍の露呈を防ぐ為に来たのか？ それか、単にアース神族との戦争が間近だから呼び戻しに来ただけか。

「な、何だよ。お前は!!」

すると、二人の話に一誠が割って入った。すると、その問いにはアザゼルが答えた。

「闘戦勝仏の末裔……簡単に言えば西遊記の孫悟空の末裔だよ」

「ええええっ!?!」

一誠が仰天しているから、謎の誤解をしないように説明する。

「一誠、正確には孫悟空の力を受け継いだ猿の妖怪だからな?しかし、偏見で悪いがお前が「禍カオス・フリゲードの団」に入っているとはな……」

初代の闘戦勝仏様は、一度お会いしたが色々裏が有りそうな帝釈天とは違い素晴らしい方だったからな。

「俺たちは、仏になった初代と違って自由気ままに生きるのさ。一応、自己紹介させてもらうぜい。俺たちは美猴。よろしくな、赤龍帝。そして、聖剣使い」

俺の言葉に気を悪くせずに返答した美猴は手元に棍を出現させ、地面に突き立てる。すると、地面に黒い闇が広がり、ヴァーリと美猴を沈ませていく。闇に紛れて撤退しようしているので、別に態々追う必要を感じられなかったので一応報告に部屋に戻った。

因みに一誠は、バランス・ブレイカー禁手が終了して疲労感からかぐったりとしていた。

What is a chaos brigade  
? III

西暦20XX年7月

天界代表天使長ミカエル、墮天使中枢組織『神の子を見張る者』総督アザゼル、冥界代表魔王サーゼクス・ルシファー、三大勢力各代表のもと、和平協定が調印された。

以降、三大勢力の争いは禁止事項とされ、協調体制へと向かっていった。

そして、この和平協定は舞台になった駒王学園から名を採って「駒王協定」と称される事になった。

——ダンタリオンの書架の「魔界の歴史書」より抜粋

\*

「てな訳で、今日からこのオカルト研究部の顧問になる事になった。アザゼル先生と呼べ。もしくは総督でも良いぜ？」

「駒王協定」が結ばれてから数日後、着崩したスーツ姿のアザゼルがオカルト研究部の部室にいた。だから、どういうわけだ？

すると、部長は額に手を当て、困惑しながら言う。

「……どうして、あなたがここに？」

すると、アザゼルは笑顔で返す。

「セラフオローの妹に頼んだら、この役職だ！まあ、俺は知的でチョーイケメンだからな。女生徒でも食いまくってやるさー！」

……そうか、〃オカルト研究部の顧問〃が一番アザゼルが一般生徒たちに危害を加えない役職なのか。下手に教員にすれば変な授業をやりかねないしな。生徒は論外だし、清掃員とかだと自由過ぎて行動

範囲が広がるからか。それだったら、興味の対象である俺たちに押し付けた方がいいしな。シトリーもやはり考えてるんだな。

「そんな事したらミカエル様に誇張して密告しますよ?」

まさかしないとは思うが一応アザゼルにとても有効な釘を刺す。

「……じ、冗談に決まってるんだろ」

あからさまに冷や汗を流すアザゼル。まあ、いいや。

アザゼルはふと姫島を見ると口を開く。

「まだ俺たち……いや、バラキエルが憎いか?」

アザゼルは心なしか、複雑そうな表情をしていた。

「許すつもりはありません。あの人のせいで母は死んだのですから」

父親をあの人呼ばわりか……なんか込み入った事情がありそうだが、ハーレム王が解決してくれるに違いないだろう。解決してから聞く分には大丈夫だろうし。

「……そうか。でもな、あいつは悪魔に下ることを許していたぜ?」

それもリアス・グレモリーの眷属だったからだぜ?それ以外だったら、バラキエルは許しているか俺も分からなかったぜ?」

その言葉に姫島は、複雑そうな表情を浮かべているだけだった。

その間に、アザゼルの視線が一誠に向けられた。

「赤龍帝……イツセーで良いか?イツセー。お前はハーレムを作るのが夢らしいな?」

「えっ……そ、そうっすけど?」

アザゼルの質問に一誠が困惑しながら返答する。

「なら、俺がハーレムを教えてやろうか?これでも過去数百回に渡ってハーレムを築いてきた男だぜ?」

それを聞いた一誠は目を見開き驚愕の表情を浮かべた。

「マ、マジっすかああああ!?!」

「それにお前は童貞だろう?ついでに女の事も教えてやるよ。教えて欲しいか?」

「勿論です!」

即答かよ……お前ならその相手なら身近にいるだろ?

「ならこれから、童貞卒業ツアーにでも出かけるか」

「アザゼル、私のイツセーに変な事を吹き込まないでちょうだい！」  
すると、すぐさま部長は一誠を引き離して自身の元に引き寄せた。  
そんな中、俺は部長から言われていた夏休みの計画について思案し  
ていた。

何か、嫌な胸騒ぎがする。何も起こらなければ良いが……。

\*

駒王学園 一学期 終業

駒王学園高等部 オカルト研究部

顧問教諭 アザゼル（墮天使総督）

部長

リアス・グレモリー『王』<sup>キング</sup> 三年生

残る駒『戦車』<sup>ルーク</sup> 一個

副部長

姫島朱乃『女王』<sup>クイーン</sup> 三年生

部員

塔城小猫『戦車』<sup>ルーク</sup> 一年生

木場祐斗『騎士』<sup>ナイト</sup> 二年生

ゼノン『騎士』<sup>ナイト</sup> 二年生

アーシア・アルジエント『僧侶』<sup>ベシヨッフ</sup> 二年生

ギヤスパール・ヴラディ『僧侶』<sup>ベシヨッフ</sup> 一年生

兵藤一誠『兵士』<sup>ボーン</sup> 二年生

\*



駒王協定が結ばれた数日後、ある場所で会議が行われようとしている。

大きめの円卓にその周りに座る面々。その一人一人の正体は不明だが、かなりの実力を持つ事は確かだ。

その中でも、中央に座る年端もいかないうような黒髪の少女からは、形容しがたいほどのオーラに満ちていた。

驚くことに、人間や悪魔、堕天使や天使などの多くの種族の者たちが集まっていた。

「……さて、先日の協定の襲撃だけ」

「失敗ですね。それも、犠牲の割にはそっちには対した収穫も得られたのではないかな？協力してくれた魔法使いの方々には謝罪はしたのか？」

一人のアジア系の青年が切り出すとその隣にいた中性的な顔立ちをした一人の人間が事実と共に挑発をする。

「貴様ッ！」

頭に血が上った一人の悪魔がその人間へと突っかかろうとすが、さっきの悪魔よりも高位であると思わしき悪魔はそれを片手を上げて制した。

「それならば、一体どうすればよかったか、意見を聞かせて貰いたいな」

実際はその悪魔も怒りを抑えているのだろう。その人間を見る目に殺意が混じっている。

「あの状況だったら、態々彼女だけに行かせなければ良かったではないのですか？そう、君たち三人で出れば真なる魔王の貴方達ならば余裕ではないのかな？」

しかし、その人間は尚も煽り続ける。すると、隣の青年が肘で小突

いて注意をする。

「……今後狙うならトップ陣が別々の時ですね。揃つてると厄介である為、個別に襲うのが一番ですね」

注意を受けたので、最後にまともな意見を述べて口を閉ざす。

もつとも、それを簡単に許す相手では無いですがね、と先程の人間は心の中で呟く。

「なるほど……参考にはさせて貰おう」

口ではそう言うものの、心の内でどう思っているかは分からない。

悪魔……それも旧魔王となると、人間を見下す傾向がある。真面目に取り合っていない可能性が高い。

その後、現状報告や今後の方針、動きを話し合い、会議は終了を迎える。

「全く……こんな無駄な話し合いなど意味ないと思わないか、曹操？」

会議が終り、先程の二人が会話をしている。

「そう言うな、……………」

セイクリッド・ギア 神

器の研究や三大勢力の今後の動き

なんかは、一々派閥ごとに報告したってしようがないだろう？」

その曹操と呼ばれた青年の言葉に　それもそうですが……

と言葉を濁す。

「というか、何故あんなことを？」

会議は、別に今回が始めてではなく前回までは旧魔王とはどちらかといえは有効的に関わっていた為、疑問に思った曹操は問いかける。

「ああ、旧魔王派の奴らですか。早く潰れるように、ですね。今回の件で無能っぷりがよく理解できました。利用価値がなくなつたので、さっさと消えて欲しいものですよ」

美しい笑顔で、そんな事を言い切つた事に曹操は顔を引きつらせながら、別の事を問いかける。

「君も恐ろしいよ……所で、君の目的の人物は発見できたけど、どうするんだい？俺達の計画は準備期間だけど……」

「しばらくは動く気はない……とりたいですが、あれの調整を兼ね

て、顔見せぐらいはしようと思ってます」

「あれかい？大丈夫なのか？まあ、君なら無謀な事はしないと信じているけど」

あれが何なのかわかってる曹操は性格を踏まえてそう言う。

「ええ、大丈夫ですよ。さて、私たちの準備を急ぎましょうか」

「ああ、ゲオルグ頼む」

その曹操の言葉と同時に二人は霧に包まれて転移した。

## 冥界合宿のヘルキヤット

When is home coming?

「凄いな、駅の地下に冥界行きの列車がでてるとはな……」

今、俺たちグレモリー眷属は部長の里帰りについていく為に冥界行きの列車に乗っていた。

「はは、確かにね。最初は僕も驚いたよ」

「これに乗るのは、久しぶりです……」

列車内にはグレモリー眷属と車掌がいるだけだ。……いや、アザゼルもいたな。

部長は一番の前の車両、眷属である俺達は中央から後ろの車両に座らなければならないらしく、席順としては、一誠とアルジエントが隣に座り、対面に塔城と姫島。で、少し離れた席に俺、対面に祐斗にギヤスパード。アザゼルは端の席で寝ている。電車に乗った理由は、確か悪魔の冥界への移動方法を見ておきたいと言っていたが寝るの早過ぎないか？

「というか、流石は目標がハーレム王だな……確か、姫島とも同棲したんだって？」

少し離れた一誠を話題に挙げる。ちなみに、ソースは姫島本人からだ。女子部員の中では一番会話してるのが彼女かもしれない。次いで部長、アルジエント、塔城の順だな。なんでか知らないが気が合うんだよな……。

「そうみたいだね」

「凄いですよね……」

祐斗はにこやかに、ギヤスパードは尊敬の眼差しで言う。

「一誠の今後に期待だな……」

そこで話を切り、冥界でのスケジュールを手帳を見て確認する。

今回は部長の里帰りと、現当主に眷属悪魔の紹介に新鋭若手悪魔達の会合。その後は修業でアザゼルが主に修業に付き合うらしい。

しかし、今も新鋭若手悪魔達の資料を見ているが……サイラオーグ

とかまじチートじゃねえか。部長を含めた若手の王の中なら単体の戦力なら段違いだぞ？

「凄まじいな……」

「どうしたの、ゼノン？」

「ん？部長か、何でも無い。どうしたんだ？」

いつの間にか日本から冥界についている上、部長が近くに来ていた。すると、部長は何の地図を広げた。

「新しく眷属になったイツセイやアーシアや貴方にはグレモリーの所有する領土を与える事になっているのよ」

部長曰くグレモリー領は日本で言うところの本州ぐらいの広さがあり、渡した地図の赤い所は既に手が入っている土地だが、それ以外の所はOKで好きな土地を言えば貰えるそうさ。

「この夏休み中に言ってもらえばいいわ」

といって地図を俺に渡し、そろそろ本邸につくわ、と言って元の席に戻って行った。

「さて、どうしようか……」

\*

『まもなくグレモリー本邸前。皆さま、ご乗車ありがとうございます』

あれから、祐斗やギヤスパの意見を参考にして考え込んでいると車掌のアナウンスが響いた。

そして、列車は静かに停止して部長の先導のもとに俺達は降りた。

「あれ、先生は降りないんですか？」

アザゼルが出る素振りを見せなかつた為か一誠が訊く。

「ああ、俺はこのままグレモリー領を抜けて、魔王領の方へ行く。サーゼクス達と会談があるからな。終わったらグレモリー本邸に向かうから先に行って来い」

アザゼルのその言葉を受けた俺たちは、一旦アザゼルと別れ駅のホームに降り立った。

「「「「リアスお嬢様、おかえりなさいませ！」「「「「」」」」」」

すると、花火が上がると同時に大勢の執事やメイドが出迎えをした。

すると、少し離れた所にある馬車？の近くにいたグレイフィア様が近づいて来た。

「お嬢様、おかえりなさいませ。道中、ご無事で何よりです。本邸まで馬車で移動しますので眷属の皆様もお乗り下さい」

あ、あれが馬車でいいのか……冥界の馬ついでかいんだなあ。

馬車内では、特に変わる事無く本邸についた。

巨大な城門が開き、カーペットの上を歩き出そうとした時、城から紅髪の少年が飛び出して来て部長に抱きついた。

「リアス姉さま！おかえりなさい！」

紅髪……確かサーゼクス様の息子だったかな。一応この少年も、血筋的にはグレモリーの当主候補なんだよな。

「あの、部長。この子は？」

一誠が問いかけると、部長は少年が自分の甥であると簡単に説明をした。そして、甥と手を繋いで城の中に進んで行ったので続いて眷属である俺たちも城の中に入っていった。

そして、広大な玄関ホールに着くと、グレイフィア様を始めとしたメイド達が集合していた。

「お嬢様、早速皆様をお部屋へお通ししたいと思うのですが」

「そうね、私もお父様とお母様に帰国の挨拶をしないとイケないし」

部長とグレイフィア様が話をしている間にふと、階段の上をみるとドレスを着た亜麻色の髪の少女がいるのを見つけた。

目は合わなかったが、こちらの視線に気づいたのか階段から下りてきた。

「あら、リアス。帰ってきたのね」

「はい、お母様。ただいま帰りましたわ」

「え!？」

一誠が大声で驚いたので視線で黙らせる。

あの少女が部長の母親か……確か、悪魔で魔力に余裕のある者は見た目の姿を自分の好みに変えられるんだったか？その所為でベストな状態を維持できるのか。悪く言えば若づ……部長の母親からプレッシャーが酷い。悪魔にこの系統はタブーなのか？

「リアス。その方が兵藤一誠くんね？」

「え？俺の事をご存じなんですか？」

まあ、そりや赤龍帝で娘の眷属なんだから知っていてもおかしくはないけどな。

「ええ、娘の婚約パーティーに顔ぐらい覗かせますわ。母親ですもの」

婚約パーティー……祐斗から聞いた話によると部長と当時婚約者のライザー・フェニックスの婚約パーティーだったか、一誠のお陰で婚約は解消したんだっけな。

一誠が冷や汗を垂らす中、部長の母親は小さく笑って一誠に自己紹介をする。

「初めまして。私はリアスの母、ヴェネラナ・グレモリーですわ。よろしくね、兵藤一誠くん」

その後は、夕食の時間までは部屋で休憩のようで各自個別に向かった。

\*

「うむ。リアスの眷族諸君。ここを我が家と思ってくれるといい。冥界に来たばかりで勝手がわからないだろうから、欲しいものがあつたら、遠慮なく言ってくれ」

そして、やる事もなく夕食の時間になり、食事の最中にグレモリー卿……部長の父親がそう言った。

部長や姫島、祐斗は優雅に食事をとっているが、アルジエントは悪戦苦闘しながら、ギヤスパーは涙目で食事をしている。一誠は豪華な料理に中々、フォークやナイフがつけられないのかあまり手が動いていない。塔城はなにか思いつめているのか一口も食べていない。

塔城が心配だな、何で思いつめているんだ？……本人に聞くのは不

味いか、あとで部長にでも話しておくか。

そんな事を考えながら食事をしていると、一誠と何かを会話していたグレモリー卿が手元の鈴を鳴らす。すると執事が近づいてきた。

「旦那さま、御用でしょうか？」

「うむ。兵藤一誠くんのご両親宛てに城を一つ用意しろ」

「……どうしてそうなった？」

「ちよつ、ちよつと待つてください！　そこまでのお土産はちよつとスケールが違うと……」

一誠は急いで制止しようとする、ヴェネラナ様が口を開く。

「あなた、日本は領土がせまいのですから、平民が城を持つなんて不可能ですわ」

「ふむ、そうだったな。……城が無理ならば何がいいだろうか……」

いや、そういう訳ではないだろ？　なんとというか、価値観のズレが酷い。

「お父さま。あまりそういう気遣いは逆にあちらへ迷惑をかけますわ。イツセーのご両親は物欲の強い方々ではありませんし」

すると、見兼ねた部長が一誠を助ける。それに満足したのかグレモリー卿は口を閉ざした。

すると、ヴェネラナ様が一誠に話しかける。

「一誠さんは、しばらくはこちらに滞在するのでしょうか？」

「はい。部長……リアスさまがこちらにいる間입니다」

「そう、ちよつどいいわ。あなたには紳士的な振る舞いを身に付けてもらわないといけませんから。少しこちらでマナーのお勉強をして貰います」

その時、リアスがテーブルを叩いて立ち上がった。近くに座るギヤスパアがヒツ　と軽く悲鳴を上げて縮こまった。

「お父様！　お母様！　先程から黙って聞いていれば、私を置いて話を進めるなんてどういう事なのでしょうか!？」

「お黙りなさいリアス。あなたはライザーとの婚約を解消しているのよ？　それを私達が許しただけでも破格の待遇だと思いなさい。お父様とサーゼクスがどれだけ他の上級悪魔の方々へ根回ししたと



思っているの？ 一部の貴族には “わがまま娘が伝説のドラゴンを使って婚約を解消した” と言われているのですよ？ いくら魔王の妹とはいえ、限度があります」

それから、少しだけ言い争いが続いたが、結果的に部長はヴェネラナ様に言いくるめられて終わった。部長は納得してないような表情をしているけどな。

「リアスの眷属さん達にお見苦しいところを見せてしまいましたわね。話は戻しますが一誠さんにはここに滞在中に特別な訓練をしてもらいます。少しでも上流階級、貴族の世界に触れてもらわないといけませんから」

口論していた時の鋭い表情から一変して微笑みながらヴェネラナ様はそう言った。

「あ、あの、どうして俺なのでしょう？」

一誠が自分を指差して動揺しながら訊く。

「あなたは次期当主たる娘の最後の我がままですもの。親としては最後まで責任を持ちますわ」

その言葉で、部長は顔を真っ赤にした。親公認か……頑張れ部長、一誠は真意を理解してなさそうだな。

その後は、他愛ない会話は有ったが特に変わった事無くで夕食が終わった。

「……ふっ！」

そして、夕食前の部屋に戻る事になっているが城周辺なら外に出てもいい為、外でデュランダルとジョウユースでの二本の剣を扱い振るっていた。以前はデュランダルと破壊デストラクション・エクスカリバーの聖剣でパワー×パワーよりで結構ゴリ押し気味だったからな……ジョウユースと破壊デストラクション・エクスカリバーの聖剣とは性質が全く違うからな。

「……この程度でいいか」

暫く剣の鍛錬をした後に剣を亜空間に戻す。そして、ある事を試してみる。

「……ん、成功か？」

メイドさんから外に出る前に貸してもらった手鏡で確認する。

「あら？祐斗？」

「いや、違う。ゼノンだ」

すると、部長が何故かやってきた。部長がわからないなら成功か？

「……………え？どうやったの？」

「上級を含めて魔力に余裕のある悪魔は姿を変えられる、それを利用したものだ。それで、どうしたんだ？こんな外に出て」

姿を元に戻して問いかける。しかし、これは中々のものだ。まあ、魔力のコントロールがものをいうから一誠なんかは難しいか。逆に、姫島やアルジェントは出来そうだな。

「……………ちよつと気分転換にね」

「ああ、親か……………」

「よくわかったわね……………いえ、夕食の光景をみればわかるわね」

と、溜息をついて俺に近づくと部長。

「まあ、あれだけ言われてたらな……………」

鏡を亜空間にいれながら返す俺。ふと、塔城の件を思い出して聞いてみる事にした。

「……………そういえば、塔城の様子がおかしかったのに心当たりはあるか？」

「ええ、今、あの子は自身の力に悩んでいるのよ」

「自身の力……………猫又の力か？」

「そういえば、貴方には小猫が妖怪なのは話していたわね」

部長曰く、まだ一誠やアルジェントには話していないとの事だ。

「そうね、少し詳しく話しましょうか」

部長が話し出したのは二匹の姉妹猫の話であった。

その姉妹の猫は親と死別してからは帰る家も頼る者もなく、二匹の猫はお互いを頼りに懸命に一日一日を生きていった。

「二匹はある日、とある悪魔に拾われたのよ。姉の方が眷属になる事で妹も一緒に住めるようになり、やっとまともな生活を手に入れた二匹は、幸せな時を過ごせると信じていたのよ」

ところが、姉猫は隠れていた才能が転生悪魔となった事で一気に溢れ出たらしく、力を得てから急速なまでに成長を遂げた。

「その猫は元々妖術の類に秀でた種族で、その上、魔力の才能も開花した挙げ句、仙人のみが使えると言う仙術まで習得してしまったのよ」  
短期間で主をも超えてしまった姉猫は力に呑み込まれ、血と戦闘だけを求める邪悪な存在へと変貌していった。

「力の増大が止まらない姉猫は遂に主である悪魔を殺害し、はぐれと成り果てたのよ。しかも、追撃部隊を悉く壊滅する程の最大級に危険なものとなしたのよ」

そこで、悪魔達はその姉猫の追撃を一旦取りやめ、残った妹猫に悪魔達はそのに責任を追及しようとしたらしい。

「この猫もいずれ暴走するかもしれない。今の内に始末した方が  
良い」

と……

「処分される予定だったその猫を助けたのはお兄様で、お兄様は妹猫にまで罪は無いと上級悪魔の面々を説得してお兄様が監視する事で事態は収拾したのよ」

けど、信頼していた姉に裏切られ、他の悪魔達に責め立てられた小さな妹猫の精神は崩壊寸前だったそうだ……

「お兄様は、笑顔と生きる意志を失った妹猫を私に預けて下さったのよ。そして、少しずつ感情を取り戻していき、それで私はその猫に小猫と名付けたのよ」

……似たような話がある奴から聞いたが……

「……もしや、そのはぐれ悪魔は、黒歌という名か？」

「ええ、そうよ」

ビンゴ……しかし、何か裏があるな、本人黒歌から聞いた話と違うしな。  
「……どういう事だ？」

「え？どうしたの？」

「いや、ただの独り言だ。それより明日なんだが、帝都を見るよりダンタリオンの書架……は贅沢か、グレモリー邸の書架で本を読んでいても構わないか？」

何か手がかりがあればいいが……

「え、ええ。家のなら直ぐに許可は下りるわ。それに、ダンタリオンの

書架も修行の合間には行けるように申請しとく事も出来るけど……」  
「すまない、頼む……つと、話し込んでいたなそろそろ戻った方がいい」

誰かに見られたら誤解されてしまう、と言うと顔を真っ赤にする部長。……初心だなあ、イリナがいないと弄る相手がないからな。部員で弄り甲斐があるのは部長やアルジエントぐらいだしな。……と  
いっても弄る機会はさほどないしな。

「そうね。それじゃ、お休み」

「ああ」

そして、部長が戻り視界から消えたのを確認すると、俺は口を開く。  
「さて、グレイファイア様、聞いてましたよね？」

すると、視界にグレイファイア様が出てきた。一応、俺が僅かに察知できる程度に隠れていたから俺に話が有るんだろう。因みにグレイファイア様が隠れてたのは部長と話している途中だ。

「ええ、書架の件はお嬢様の言うとおり大丈夫でしょう。……話は今はぐれ悪魔についてですね？」

「ええ、先程の部長の話は真実で……？」

多分、悪魔側はそれで統一された意見なんだろうが……

「……ええ、それが真実だと信じられていました」

……つて、あれ？

「ました？つてことは……？」

「グラシヤラボラス家の次期当主がその件について話がある……と連絡がありました」

ですが……と続けるグレイファイア様。

「その次期当主は、話の前に不慮の事故で亡くなってしまいました」

何だそれ……

「きな臭い話ですね……」

「ええ、そこで遺留品などから何か手がかりを見つけようと思いました  
が……魔王が一悪魔に介入出来ず、特に目ぼしいものは見つかりませんでした」

しかし……と続けるグレイファイア様。

「大半は次期当主候補のゼファアドルが受け取っているので、彼が持っている可能性はありますが……」

「可能性は低い……と」

「ええ、恐らくその件は主側に何か問題があったのだと思います。あくまで噂ですが、彼女の主であるアウアールス・ネビロスは裏では何か企むんでいた、との情報が有りました」

アウアールス・ネビロス……か、72柱ではないな、エキストラ・デーモン番外の悪魔か？

「そうですか、ありがとうございます」

「いえ、それでは」

そして頭を下げるとグレイファイア様は直ぐに去っていった。さて、俺も戻るか……。

そして、俺は自室に戻りベッドの上で考える。

翌日は一誠が本邸での上流階級、貴族についての勉強が終わってから若手悪魔の会合だから、それまでは、黒歌の王について調べられる。

対した情報はないだろうが調べないよりはマシか……流石に仲間の事だし放つては置けないからな。

さて、どうなることやら。

あ、鏡返すの忘れてた……。

Who is a new comer evil  
spirit?

翌日、一誠は社交や悪魔の文字などをミリキヤスと一緒に勉強、俺はグレモリーの書架で黒歌の王や元グラシヤラボラス家当主についての情報収集をしていた。

また、他の部員たちは部長に連れられて観光をしているそうだ。しかし、なんとというか……悔つてたな……グレモリーの書架を。

滅茶苦茶広い……グレモリー卿の計らいで自分の調べたい内容が記載された書物をメイドや執事さんたちに選んで運んで貰ったが……数時間で読み切れるかこの量……！

「どうですか？ 何か手掛かりでも見つかりましたか？」

そんな悪戦苦闘する中、グレイフィア様が声を掛けてきた。

「……余り乏しくありませんね」

まあ、当たり前といえば当たり前なんだが……流石にここくらいはサーゼクス様は調べているだろう。ダンタリオンの書架に行けば何かしら手がかりは掴めるかもしれないが……

「そうですね……それと、申請書が出来ました。渡しておきますので夏休みのこの期間中ならこれでダンタリオンの書架が使用可能となります。流石に見れないのも有りますが……」

すると、グレイフィア様が術式の刻まれた紙を渡してきた。

「……というか、サーゼクス様の方にはいかなくてもよろしいので？」

「ええ、色々と仕事がありますので……」

詳しくは言えませんが、と言うグレイフィア様。流石に聞く気にはなれない。聞いてどうなるって話だし……。

そして、グレイフィア様が退室する。さてと……

「もう一丁頑張りますか……」

\*

そして暫くして、部長たちが観光から戻ってきた。丁度良く一誠の方も勉強が一区切りついたので、新人悪魔の紹介の為に、魔王領に移動することになった。

情報収集は、残念ながら目ぼしいものは見つからなかった。ダンタリオンの書架か今のグラシヤラボラス次期当主に賭けてみるしかない。

部員全員が駒王学園の制服に着替えると列車に乗り、魔王の領土を目指した。

列車は都市的な街に着き、装飾などは人間界とは少し異なっていたが近代的で人間界と似通った文化を感じさせた。

「ここが冥界の首都か……」

「ここは魔王領の都市のルシファード、旧魔王ルシファア様がおられたとされる、冥界の旧首都なんだ。そしてここからは地下鉄に乗り換えるよ。表から行くと騒ぎになるからね」

俺が呟くと、祐斗が一誠に説明していた。騒ぎになる理由はわかる……部長さんは冥界では大人気だからな……

「まあ、そう言う事だよ」

……祐斗、さり気なく読心みたいな発言はやめろ。実際は一誠の発言に対しての返答だったそうだが。

そして地下鉄のホームで電車が来るのを待っている間、部長の周りからは男女問わない黄色い声がホーム中に響き渡っていた。流石に電車内では静かになったが。

で、俺たちは地下鉄を乗り継いで地上に出ると大きなビルの前に出た。

その中に入る前に、部長が注意を呼びかけた。

「いい事？ 何があっても、言われても平常心で手を出さないこと。上にいるのは私たちにライバルよ、無様な姿は見せられないわ」

その言葉に全員が頷くとエレベーターに乗り、上階へ目指した。そして、出入り口が開くと部長が一人の男性に声をかけた。確かあいつは……

「サイラオーグ！」

そう、サイラオーグだ。例の資料通り屈強そうな男だな……。

「久しぶりだな、リアス」

すると、サイラオーグの方も気付いたみたく、部長と会話をし始めた。

「ええ。変わりないようで何よりよ。初めてのものもいるわね。彼はサイラオーグ。私の母方の従兄弟でもあるのよ」

「俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主だ」

すると、部長の紹介の後にサイラオーグが軽く自己紹介をした。  
……ん？

「……何かで力をセーブしているのか？」

腕輪が何かで押さえ込んでいるのがわかる。漏れ出す闘気を抑えるためか……資料通り闘気による強化での近接戦闘タイプだな。

「え？」

「……ほう、気づいたか」

部長は疑問、サイラオーグは感嘆の声を漏らす。

「まあ、そういうのを察知するのは得意なんでね……それに、似たものをつけてましたしね」

デュランダルがそうだったからな……暴走はしないけど無駄に破壊力が高すぎる。俺の戦闘スタイル的にはデュランダルに威力は求めてなかったしな。まあ、今ではコントロール可能だから何も問題はないけどな。

「そうか……確かお前は聖剣使いだな？ お前と戦える日が楽しみだぜ」

「お互いに順当に成績を残せばそう遅くないうちに出来ますよ……」

「それで、こんな通路で何をしてたの？」

部長がサイラオーグに尋ねると少し呆れ顔になって答えた。

「くだらんから外に出てきただけだ」

くだらない？ 何だ？ 可能性としては……

「……中で揉め事か？」

「ああ、そんなとこだ。アガレスとアスタロトがすでに来ていたんだが、その後にゼファードルが着いて早々にアガレスとやり始めたんだ



よ」

サイラオーグが言い切った瞬間、会場内で爆発するような音が響き渡った。爆発音が響くことへの理解に苦しみながら、先行して会場の扉を開くと……

「ゼファードル、こんな所で戦い始めても仕方なくてはなくて？ 死にたいの？ ……殺しても上に咎められないかしら」

眼鏡をかけ、青いローブを身に纏う女性……ジークヴァイラ・アガレスと……

「言ってるよ糞アマ！ 俺が折角その個室で一発仕込んでやるって言ってやってんのによ……アガレスのお姉さんはガードが固くて嫌だね！ だから未だに男も寄って来ずに処女やってんだろ？

……つたく、魔王眷属の女どもはどいつもこいつも処女臭くて敵わな いぜ！ だから俺が開通式をしてやろうって言ってるのによ！」

モラルの欠片も感じられない下品な言葉で挑発をする上半身裸でタトウが入った緑髪を逆立てているヤンキーな男性……ゼファードル・グラシヤラボラスが一食触発の状態で睨み合っていた。

しっかし、どっちも口悪いな……。本当に次期当主なんかね？

「あいつらが原因なのはわかるが……何でこんな事に？」

どうせ、くだらない理由だとは思いますが、いつの間にか隣にきてたサイラオーグに聞く。

「ここは時間が来るまで待機する広間だったんだがな。また、若手が集まって軽い挨拶を交わす所でもあった。ところが、血の気の多い連中が集まるわけだから、若手同士の挨拶一つでも問題が出てくる。それによる衝突も良しとする旧家や上級悪魔の古き悪魔達はどうしようもない」

サイラオーグが説明し終えた後に、俺は例の二人の間に割り込んだ。とりあえず、気が立っているなら逆にあの件を聞いてみるのもありかと思っただからだ。

……一応説明しとくと、流石にこんな場所で死ぬような攻撃はされないだろうし、さっきの爆発音と部屋の荒れ具合を見て迎撃も可能だという算段を踏んだ上で行動はしているからな？

すると、案の定二人が声を荒げた。

「あ？ 何だてめえは!? 俺とこの糞アマとのケンカに割って入ってくるんじゃないよ！」

「何者ですか!? そこを退きなさい！」

だから、次期当主エ……。とりあえず、まだまともそうなアガレスのお嬢さんに返答する。

「それは出来ないな、色々あつて彼に用があるからな」

「俺にだど? どういう事だ？」

グラシヤラボラスの凶子が見事に反応してくれたので駄目元で用件だけ告げる。

「用件だけ言えば、前次期当主が残した遺品が有れば貸してもらいたいのだが……」

ゼファドールはそれを聞くと怒りから不機嫌そうな表情に変わった。無理か？

「チツ……そんなの欲しけりゃくれてやるよ！ どうせ読めねえだろうしな！ オイ！」

「は、はい！」

ゼファドールがそう言うのと眷属の一人が書物を渡してきた。解析にするのは当たり前なので、邪魔にならないように亜空間に仕舞った。拍子抜けするほどにすんなりと良い方向に事が進んでるな。別に悪い事ではないからいいのだが。

「おい、糞アマ。興醒めだ……さっさと座りやがれ」

「え、ええ」

そして、ゼファドールは席にどかっと座るとアガレス嬢に声をかける。アガレス嬢もいきなりのゼファドールの態度の変化についていけないようだが、流されるままに席に座った。

それを見ていたサイラオーグや部長たちも何がどうなったんだ、という表情だったが順に席に座っていった。

そしてシトリーとその眷属達が来るとそれぞれ自己紹介をし、始まるまで席について待っていた。

それにしても……改めてみるとネームバリューなら凄い面子だな。

グレモリー、シトリー、アスタロト、グラシヤラボラス。この四人はそれぞれ兄や姉に魔王がいて、大王のバアルに大公のアガレス。そんなことを考えていると匙が一誠に自覚云々の説教みたいなことをしていた。

「いいか、眷属悪魔はこの場で堂々と振る舞わないといけないんだ。なぜなら、相手の悪魔達は主を見て、下僕も見るとだから。お前はグレモリー眷属で赤龍帝だって事を少しは自覚しろ」

それを聞いて匙の評価を上げた俺だった。

そしてその後、使用人が本会場の扉から出てきて、若手悪魔達は中に案内された。

若手悪魔たちを見下すように作られた高い所に置かれた席には悪魔のお偉いさんが座っており、その上の段にはサーゼクス様、隣にはセラフオール様が座っていた。その隣にはベルゼブブ……アジュカ様とアスモデウス……ファルビウム様が座っていた。

そして部長を含めた若手悪魔六人が一歩前に出た。

「よく集まってくれた。次世代を担う貴殿らの顔を改めて確認するために集まってもらった。これは一定周期ごとに行う若き悪魔を見定める会合でもある」

初老の男性悪魔が手を組みながら威厳だけはある声色で言った。

「君達六名は家柄、実力共に申し分のない次世代の悪魔だ。だからこそ、デビュー前にお互い競い合い、力を高めてもらおうと思う」

「我々もいずれ「禍の団」カオス・ブリゲードとの戦いに投入されるのですね？」

サーゼクス様の言葉にサイラオーグが尋ね返したが……

「それはまだ分からない。だが、出来るだけ若い悪魔達は投入したくはないと思っている」

……と言葉を濁した。当然だな。

「何故ですか？ 若いとはいえ、我らとて悪魔の一端を担います。この歳になるまで先人の方々からご厚意を受け、尚更何も出来ないとなれば……」

「サイラオーグ、その勇氣は認めよう。しかし、無謀だ。何よりも成長途中の君達を戦場に送るのは避けたいし、次世代の悪魔を失うのはあ

「あまりに大きいのだよ。君達は自身が思う以上に、我々にとって宝なのだという事を理解して欲しい。だからこそ大事に、段階を踏んで成長して欲しいと思っている」

「サーゼクスという言葉にサイラオーグは一応の納得をしたが、不満がありそうな顔をしていた。これは価値観の違いなのか？ 自分としてはサーゼクス様の話を聞けば引き下がるけどな。悪魔は出生率が低いのは周知の事実。そんな中で死ぬ可能性が高いテロリストと戦わせるのは次世代の未来を担う事になる悪魔任せるのは体裁的にも悪魔の将来的にも良くないしな。」

「最後にそれぞれの今後の目標を聞かせてもらえないだろうか？」

「サーゼクス様の問いかけにサイラオーグは一番最初に答えた。」

「俺は魔王になるのが夢です」

「その目標にお偉いさん達も感嘆の息を漏らした。」

「大王家から魔王が出るとしたら前代未聞だな」

「これは……茶々いれてんのか？ 俺の思考とは別にサイラオーグははつきりと言い切る。」

「俺が魔王になるしかないと言界の民が感じれば、そうなるでしょう」

「そして、それに続いて部長も今後の目標を言う。」

「私はグレモリーの次期当主として生き、そしてレーティングゲームの各大会で優勝する事が近い将来の目標ですわ」

「とりあえず、部長の目標には俺の目標にも通じる事がある。とりあえず、今後はグレモリー眷属として名前を広げるのが目標になるか？」

「そして次々と若手悪魔達が夢や将来の目標を言って行き、最後のシリィは……」

「冥界にレーティングゲームの学校を建てる事です」

「と言いつつ、お偉いさんの一人が問いかけてきた。」

「レーティングゲームを学ぶ所ならば、既にある筈だが？」

「それは上級悪魔と一部の特権階級の悪魔のみしか行く事が許されない学校の事です。私が建てたいのは下級悪魔、転生悪魔も通える分け隔ての無い学舎です」

「身分に囚われない誰もがレーティングゲームを学ぶ事の出来る学

校を作る。その夢にシトリーの隣の匙は誇らしげにしていたが……

「ハハハハハッ！」

お偉いさん達の声が会場を支配し、嘲笑うかのように次々と批判し始めた。

「それは無理だ！」

「これは傑作だ！」

「なるほど！ 夢見る乙女と言うわけですな！」

「若いと言うのは良い！ しかし、シトリー家の次期当主ともあろう者がその様な夢を語るとは。ここがデビュー前の顔合わせの場で良かったと言うものだ」

まあ、大体予想はついていたな……気に食わないのは別になるが。今の冥界がいくら変わりつつあるといっても、上級と下級、転生悪魔、それらの差別はまだ存在するし、それが当たり前だと未だに信じている者達は多いだろう。というか、大半のお偉いさんがそうなのかよ……。

「私は本気です」

セラフオルー様は力強く頷いていたが、お偉いさん……もう老害でいいか……は冷徹な言葉を口にする。

「ソーナ・シトリー殿。下級悪魔、転生悪魔は上級悪魔たる主に仕え、才能を見出だされるのが常。その様な養成施設を作っては伝統と誇りを重んじる旧家の顔を潰す事となりますぞ？ いくら悪魔の世界が変革の時期に入っていると云っても変えて良いものと悪いものがあります。全く関係の無い、たかが下級悪魔に教えるなど……」

まあ、変えていいものと悪いものがある” その意見は間違っちゃいけないが……その”たかが下級悪魔” っていう思想こそ変えるべきだと思いますが？ それに、下級悪魔は誰もが上級悪魔に使われるわけではなく、中には下級悪魔で終わる所も少なくはないらしいが……そのような奴らの救済措置としての養成施設とかいうのならどうなんだろうか？ まあ、これも伝統（ ）や誇り（ ）云々で却下されそうだけだな……あの老害の反応だと。

すると、匙は怒って抗議する。

「黙って聞いてれば、なんでそんなに会長の……ソーナ様の夢を馬鹿にするんですか!? 叶えられないなんて決まった事じゃないじゃないですか! 俺達は本気なんだよ!」

「口を慎め、転生悪魔の若者よ。ソーナ殿、下僕の躰がなってませんな」

匙も熱くなるな……まあ、自分の王の夢を馬鹿にされて怒らない奴はいないだろうしな。俺も頭硬い奴は嫌いなんだよな。脳筋は別としてだが。

「……申し訳ございません。あとで言うてきかせます」

「会長! どうしてですか! この人達、会長の……俺達の夢をバカにしたんですよ! どうして黙っているんですか!?!」

「サジ、お黙りなさい。この場はそういう態度を取る場所ではないのです。私は将来の目標を語っただけ。それだけの事なのです」

表面上は平静を取り繕っているが、シトリーの握る拳が震えているのがわかる。良く我慢できるな……俺だったら今の時点で顔が引きつってるだろうな。

「夢は所詮、夢。叶うことと叶わぬことがありますぞ。下級悪魔如きがレーティングゲームを学ぶために行き来する学校など……」

ただでさえミカエル様やその周りの方は柔軟な考えを持った方々だったし、悪魔に転生してからもサーゼクス様やグレモリーの方々は俺の無茶振りにも答えてくれたから、余計にこいつら老害共の言動に理解できないし、苛つく。……精神年齢高い筈なのにな……俺は、堪え性がないのかね?

「部長、すみません」

「え?」

軽く部長に呟く。そして、まだ下級悪魔如き……と話している老害の言葉を遮るように発言する。

「すみません、魔王様方。少し質問してよろしいでしょうか?」

「ん? 何かな?」

笑顔を崩さず俺を見つめるサーゼクス様とは反対に老害共が怪訝そうな目で睨んでくるが、対した威圧感じゃないな。新人悪魔たちは

俺が口を挟むとは思っていたのか、惚けているみたいだが。

「先ほどサーゼクス様が『今後の目標を聞きたい』とおっしゃいましたよね？」

「ああ、そうだよ」

「しかし、先程から聞くだけなのに何故、非難されたり茶々が入ったりするのでしようか？　もしや、昔の伝統や格式ではこうやって都合の悪い目標をたてた新人を叩くのが当たり前なのですか？」

一呼吸置き、老害共が反応をする前に喋り切る！

「それに、先程そちらの方々を下級悪魔如きなどと戯言をほぎ……仰っていました、今の悪魔の生活は貴方達の仰る『下級悪魔如き』によって支えられているのはご存知ですか？　昔のように地位で威張っているだけ済む時代ではなく、悪魔間の妙な隔たりを無くして協力し合う事が大切なのでは？」

すると、俺の言葉に老害共が顔を真っ赤にする前に……

「彼の言う通りだよ！　それに、うちのソーナちゃんがゲームで見事に勝っていけば何も文句も無いでしょう!?　ゲームで好成績を残せば叶えられる物も多いのだから！」

セラフオルー様が怒りながら提案してきた。そんな中、俺はサーゼクス様に視線を合わせると、サーゼクス様は軽く頷いた。

「もう！　おじさま達はうちのソーナちゃんを寄ってたかかっていじめるんだもの！　私だって我慢の限界があるのよ！　あんまりいじめると私がおじさま達をいじめちゃうんだから！」

セラフオルー様の涙目でお偉いさんに物申した。老害たちはさっきの俺に対する怒りも忘れ、反応に困っていたが、シトリーは恥ずかしそうに顔を手で覆っていた。

すると、サーゼクス様が部長とシトリーに提案を出した。

「丁度良い、ではゲームをしよう。リアス、ソーナ、戦ってみないか？」

2人は顔を見合わせて驚くが、サーゼクス様は構わず続ける。

「元々、近日中にリアスのゲームをする予定だった。アザゼルが各勢力のレーティングゲームファンを集めてデビュー前の若手の試合を観戦させる名目もあったからね。だからこそ、リアスとソーナで一

ゲーム執り行ってみようではないか。対戦の日取りは、人間界の時間で八月二十日。それまで各自好きに時間を割り振ってくれて構わない。詳細は後日連絡する」

サーゼクスの決定により、部長とシトリーのレーティングゲームが開始される事になった。こうして若手集会はこれで終了となった。

\*

「部長、改めて申し訳ございません」

集会が終わると直ぐに部長に頭を下げた。常識だよな？

「え、ええ……まあ、いいわよ。だけど、貴方があんな事言うなんて思っっていなかったわ」

「ええ、黙っている予定でしたが、まだまだ精神が成長していないんですかね、黙ってられませんでした」

すると、サイラオーグが口を挟む。

「いや、夢を馬鹿にして良い権利なんて誰にも無いし、お前のあの言葉には一理ある。あの後に、サーゼクス様はその事を含めて色々と話してくれたお陰で他の方々も理解し、自粛して下さった。上級悪魔の方々に、あそこまで言い切った眷属なんて初めて見たな」

そして、腕を組みながら感嘆するように頷く。

「リアス、いい眷属を持ったな……。さて、聖剣使い……確かゼノンだったな？ 何時か戦う事を願っているぞ」

「ええ、その時は。私……いえ、我々リアス・グレモリー眷属が貴方たちを倒します」

俺のこの言葉に一瞬だけ驚くサイラオーグ。そして、部長の方にも視線を動かして、口を開いた。

「……そうだな、レーティング・ゲームは俺たちとお前たちの戦いだな。リアス、その時は……」

「……ええ、負けないわ。その為にも、先ずはソーナの勝負に勝たなくてはね……」

そして、サイラオーグと別れ俺たちは部長の言葉によって、打倒シ



トリー眷属を胸に掲げて、グレモリー邸へと帰った。

## What is practice?

「シトリー家と対決か……」

若手集会からグレモリーの本邸に帰ってきた俺達をアザゼルが迎えた。そしてシトリー家とレーティングゲームをすることになったことを話すと修行の話を持ち出した。

「修業……まあ、予想通りだな」

「そりや、当然だ。明日から開始予定で既に各自のトレーニングメニューは考えてある」

「でも良いんですか？俺達だけが墮天使総督のアドバイスを買って」

一誠の質問にアザゼルは問題ないと言う顔をしながら口を開いた。

「俺はいろいろと悪魔側にデータを渡したつもりだぜ？ それに天

使側もバックアップ体制をしているって話だ。あとは若手悪魔連中のプライド次第で、強くなりたくない、種の存続を高めたかって心の底から思っているのなら脇目も振らないだろうしな。うちの副総督も各家にアドバイス与えてるぐらいだ。まあ、俺よりシエムハザのアドバイザーの方が役立つかもな！」

「確かに……」

「ゼノン、お前な……とにかく、明日の朝に庭に集合。修行内容はそこで教える」

その直後にグレイフィア様が現れ……

「皆様、温泉の〴〵用意が出来ました」

と言った。温泉……入るのは久しぶりだな。ジュリオさんの甘露巡りに同行したときにふと日本に寄って入ったのが最後か？

\*

ーグレモリー領にある温泉

鼻歌を口に行っているアザゼルを筆頭に俺たちは温泉を楽しんでいた。アザゼルから聞いた話では、冥界屈指の名家グレモリーの私有温

泉は名泉とも言えるらしい。前世含めて温泉は大して入ったことがない俺には名泉云々はわからないが、気持ちが良いのは確かだ。

「……ってあれ？　そう言えばギヤスパーはまだ来てないのか？」  
すると、一誠が疑問の声を上げる。確かにギヤスパーが来てないな。

一誠が周りを見回す。つられて視線を動かすと、入り口の辺りでウロウロしているギヤスパーが目に入った。一誠も目に入ったようで、仕方ない……という様子で一誠は一度、湯から上がり……

「おいおい。ほら、温泉なんだから入らなきゃダメだろう」

ギヤスパーを一誠が捕まえる。それに対してギヤスパーは、キヤツと女の子のような甲高い悲鳴をあげた。しかも、タオルを胸の位置で巻いている。且つ、こちらの視線に気付いたのか若干涙目になりながら……

「あ、あの、こっちは見ないください……」

と言った。情けないなあ……まあ、それがウケる奴もいるのがこの世の中だからな……。俺にはそのような嗜好はないから良くわからないが。

「お、お前な！　男なら胸の位置でバスタオル羽織るなよ！　普段から女装してるからこっちも戸惑うって！」

「アザゼル……俺は一誠のあの反応を見るたびにあいつに男色疑惑をもつんだが……」

「ははは！　確かにあんな反応じゃあな！　それに、何時だったか忘れたし、思い出したくもなかったが歴代の赤龍帝にいたな……思い出しただけで寒気がする」

「そ、そんな、イツセー先輩は僕の事をそんな目で見ていたのですか？　身の危険を感じちゃいますうっ！」

このままでは話が不味い方向により進んで行くと感じた一誠は、ギヤスパーをお姫様抱っこで抱きかかえ、一気に温泉へ放り投げた。

「いやあああん！　あつついよお！　溶けちゃうよお！　イツセー先輩のエッチイイ！」

ギヤスパーの絶叫が木霊し、隣の女湯からクスクスと笑い声が聞こ

えてくる。

「ところでイツセー」

再び温泉に浸かりに来た一誠の元にアザゼルが近づいてきた。あの顔はロクな事は言わないな。俺はあの二人を無視して祐斗に声をかけ、早めに上がった。……ギヤスパー？　大丈夫だろ。

そして、更衣室で服を着ていると先程のギヤスパーが放り込まれたのよりも激しい着水音が響き、ニヤニヤとした笑みを浮かべたアザゼルが更衣室に入ってきた。とりあえず何をしたのか聞く。

「おい、何した？　碌でもない事だろうが……」

「女子風呂の方に放り投げてやった」

したり顔をしたアザゼルに俺は溜息を漏らし、同時に一誠の健闘を祈った。ハーレム王ならなんとかなるだろ。まさか、あそこで……つてことはないな。

「……部屋に戻るか……」

とりあえず、考えることを放棄して寝ることにしたので、部屋に戻ることにした。この面子は飽きはしないが……アザゼルが水をえた魚のように生き生きしてるのは問題有りだな。あつた時に、ミカエル様に密告しとくか……久しぶりにゲスイ考えしたな。

……つと、忘れないうちに例の日記？　に軽く目を通しておくか

……。

\*

翌朝、俺達は広い庭の一角に集まっていた。服装は全員ジャージだ。資料やデータが書かれているであろう紙媒体を持ったアザゼルが口を開く。

ちなみに、例の日記は一見するとただの日記にだったが、一部内容が封印＋隠蔽の魔法が施されていて、読めない点がある……までは解析し終えた。流石に少しの時間で解析できるほど甘くはないみたいだ。

「先に言っておく。今から俺が言うものは将来的なものを見据えての

トレーニングメニューだ。すぐに効果が出る者もいるが、長期的に見なければならぬ者もいる。ただ、お前らは成長中の若手だ。方向性を見誤らなければ良い成長をするだろう。さて、まずはリアス。お前だ」

アザゼルが最初に呼んだのは部長だった。

「お前は最初から才能、身体能力、魔力全てが高スペックの悪魔だ。このまま普通に暮らしていてもそれらは高まり、大人になる頃には最上級悪魔の候補となっているだろう。だが、将来よりも今強くなりたい、それがお前の望みだな？」

「ええ。負けたくないもの」

アザゼルの問いに部長は力強く頷き、それを見たアザゼルは部長のトレーニングメニューが記された紙を渡す。しかし、部長はその内容を見て首を傾げた。

「……これって、特別凄いトレーニングとは思えないのだけれど？」

「そりやそうだ。基本的なトレーニング方法だからな。お前はそれで良いんだ。全てが総合的にまとまっているから基本的な練習だけで力が高められる」

「……要はそれ以外に大切なものがあるってことか」

「そうだ、リアスには戦況分析力が圧倒的に足りない……」<sup>キング</sup>「王」としての資質が欠けている。「王」は時と場合によっては、力よりも頭脳が求められる。フェニックス家との一戦は見せてもらったが……他にもリタイヤしていった奴もいるってのに、そいつらに勝ちを持っていくのも「王」の務めだ。お前はそれにも関わらず<sup>リサイン</sup>投了しやがった。そんなんじや、これからのゲームには絶対勝てねえ」

確かに、結構あつさり投了した感じがしたような気がする。あの一誠が痛めつけられていた状況では完全に不利だったが、機転を効かせれば……勝つことは難しかったかもしれないが、一泡は吹かせられたはずだ。……というか、一対一の勝負を受け入れたのが問題有りだったような気がする。あそこは逃げ一択だったような。

「ええ、十分理解してるわ……」

そして、次に姫島に向き合うアザゼル。

「次に朱乃」

「……はい」

姫島は「神の子を見張る者」幹部のバラキエルの娘だが、事情は知らないが親を憎んでいるらしい。よって、父が総督アザゼルの部下であるから、それ絡みでアザゼルに対しても良い気持ちは持っていないのだろう、返事の声色が沈んでいた。

「お前は自分の中に流れる血を受け入れる」

「ッ!?!」

直球に言われた事に、姫島は顔をしかめた。まあ、事情は知らんが率直に言った方が良いんだろうというのは理解した。

「お前のフェニックス家との一戦も、記録した映像で見せてもらったぜ。本来のお前のスペックなら、敵の「女王」クイーンを苦もなく打倒出来た筈だ。何故、墮天使の力……光を雷に乗せ、雷光にしなかった？ そうでなければ、お前の本当の力は発揮出来ないし、雷だけでは限界がある」

「……私は、あの様な力に頼らなくても」

「否定するな。自分を認めないでどうする？ 最後に頼れるのは己

の力だけだ、決戦日までにお前の弱さ……自分自身の力を受け入れる。さもなければ、お前は今後の戦闘で邪魔になる。「雷の巫女」から「雷光の巫女」になってみせろよ」

アザゼルの言葉に姫島は黙ったままだった。そして、次にアザゼルは木場の方を向く。

「次は木場だが、お前は聖魔剣……禁バランス・ブレイカー手の維持時間の向上がメインだ。確か剣術は師匠がいたな？」

「はい」

「それを見越したメニューがこれだ。少し目を通しておけ、質問はあるか？」

すると、アザゼルはそれなりの厚さに重なった資料を祐斗に渡す。祐斗はすぐに目を通すと、最後の方で手が止まりアザゼルは問いかけた。

「……この修行の後半にある空白は？」

「ああ、それはその時になったらのお楽しみだな。安心しろ、いい経験になるだろうからな」

「わかりました」

その後もアザゼルは各トレーニングメニューを告げて行った。

ギヤスパーは……とにかく恐怖心を克服するためのプログラム。

アルジエントは神セイクリッド・ギア器の回復範囲と回復力の向上。そして魔力及び身体能力の増加。

そして、次に塔城に向き合う。今日の塔城は前日の沈み具合が一転して気合いの入った様子だった……恐らく空回りしそうだが……。

「次は小猫」

「……はい」

「お前は申し分ない程、オフエンス、デイフェンス。「戦車」ルックとしての素養を持っているし、身体能力も問題ない。だが、リアスの眷属には「戦車」ルックであるお前よりもオフエンスが上の奴が多い」

「……分かっていきます」

ハツキリ言うアザゼルの言葉に塔城は悔しそうな表情を浮かべていた。

「リアスの眷属でトップのオフエンスはゼノンと木場。バランス・プレイヤー禁 手の

聖魔剣、聖剣デュランダルに聖剣ジヨウユース。まあ、凶悪な武器を有していやがるからな。ここで禁バランス・プレイヤー手 状態のイツセーが入るとな……」

確かにな……言っではなんだが、今の塔城はこれといって突出した能力はない。……俺も聖剣なければ同じような感じなんだがな。

「小猫、お前も他の連中同様に基礎の向上をしておけ。その上で、お前が自ら封じているものを晒け出せ。朱乃と同じで、自分を受け入れなければ大きな成長なんて出来やしねえのさ」

このアザゼルの一言に塔城も黙ったままだった。しかし、この眷属は色々裏持ちすぎだろ……。

「さて、次はイツセーだ。お前は……ちよつと待ってる。そろそろなんだが……」

空を見上げたアザゼル。一誠はそれに釣られる中、上空から何かが急降下してきた。

「ドラゴン!?!」

一誠が叫ぶ。しかし、悪魔領でドラゴン? 順当に考えるなら

……

「……タンニーンか」

「そうだ、イツセー。こいつはドラゴンだ」

俺の眩きとアザゼルの発言が被った事で俺の眩きは誰の耳にも入らなかったみたいだ。すると、タンニーン様……一応最上級悪魔だからな……がアザゼルに話しかけた。

「アザゼル、よくもまあ悪魔の領土に堂々と入れたものだな」

「ハッ、ちゃんと魔王様直々の許可を貰って堂々と入国したぜ?」

文句でもあるのか、タンニーン」

アザゼルとタンニーン様が会話する中、冷や汗をかいている一誠がアザゼルに問いかける。

「……先生、もしかしてこのドラゴンが俺の?」

「ああ、こいつがイツセーの先生だ」

「ええええええええつ!?!」

「ドラゴンとの修業は昔から実戦方式だ。目一杯鍛えてもらえ」

「そんな……俺のハーレムの夢が……」

タンニーンは意気消沈している一誠を片手で捕まえ、離陸体勢に入る。一誠はようやく気づいたのか驚いている。そんな中で、タンニーン様は部長に話しかけた。

「リアス嬢、あそこに見える山を貸してもらえるか?こいつをそこへ連れていく」

「ええ、鍛えてあげてちょうだい」

一誠の意思が尊重される事なく話が進んで行く。そして、一誠に部長から死刑宣告? が告げられる。

「イツセー、気張りなさい!」

そして、タンニーンは山の中に飛んで行った。一誠の「部長——!」という叫びが段々と消えていく様は何とも言えない感じだった。



「で、最後はゼノンだが……」

何だかまた悪巧みしてそんな笑みで俺に話しかけて来たアザゼル。そして……

「お前のメニューは、ちよいと特殊だ。詳しくはこいつを見る」

と言つてアザゼルは一際薄い内容にしか見えない紙を一枚だけ渡してきた。格差酷いな……。

何々……

—————

ゼノン修行内容

アザゼル

タンニーン

木場

木場の師匠

—————

「……は？」

箇条書きより酷いものをみた俺は少し呆然と言葉を吐いた。すると、アザゼルは翼を広げると……

「さて、解散だ。各々の修行に移れ」

と言つてアザゼルは空に飛んで何処かに飛んで行った。最後に俺に「ついて来い」とだけ言つて……

修行初日……

グレモリー領の辺境までやって来た俺は、アザゼルに説明を求めた。

「お前の修行内容は模擬戦だけだ。ファーンブルの件の時にも感じたが、お前は実践で急成長するタイプだ。ミカエルからの報告書にもあるが、未恐ろしいほどの成長率だぞ」

「……デュランダルの使い手だからこそ、デュランダルを狙う奴はいた。迎撃手段は多ければ多いほど良い。襲撃は少なくとも無かったが、そのおかげでここまで成長したんだがな」

デュランダル使いなのは、憑依して直ぐに判明していた。そこで、憑依の事を話されたミカエル様は俺を戦闘機関の方に一時的においでくださった。そして、色々な人から手解きを受けたり、自ら頼み込んで模擬戦を申し込んだりして成長していった。頼んだ人には、死ぬギリギリ……血反吐を吐くまで付き合ってもらったからな。治療等でグリゼダさんには迷惑かけまくったが。

「だからオールラウンダーなのか。……さて、とりあえず今日から数日間は俺と戦って貰う」

最初はアザゼルか、ならあの紙通りなら次はタンニーン様か。……って事は一誠とも会うのか。

「了解、何か制約つけるよな?」

「当たり前だ。今日は、ジュワユースのデータ取りも並列して行う。よって、お前は聖剣はジュワユースのみ使用可能だ」

聖剣はジュワユースのみか……どこまでやれる?　そして、俺は

ジュワユースを右手に構えアザゼルを見据える。対してアザゼルは光の槍……「ダウンフォール・ドラゴン・スピア墮天龍の閃光槍」を構えてこちらを見据えた。そして

……

「……………」

同時に間合いを詰めて鏢迫り合う。そして、何度か唾競り合いを繰

り返した後に、同時に距離を取る。

……アザゼルはだいぶ手加減してるな。武器のランク差に大差はなく、俺とアザゼルの実力差から考えると、唾競り合うのはアザゼルが手を抜いてるって証拠だ。まあ、データ取りと俺の修行が目的だから手を抜くのは当たり前だが……。今のうちに憂さ晴らししとくか……。

そして、俺は距離を詰め斬りかかる寸前に魔力と気によって身体強化で押し切る！

「うおー！」

アザゼルが驚きと共に軽く吹っ飛ぶ。そして、身体強化を止めて様子を窺っているとアザゼルが口を開いた。

「今のが以前に見せた魔力と気の混合か……一瞬だったが、油断したらそのまま斬られてただろうな」

怖い怖いとおどけるアザゼル。それを見て俺も口を開く。

「冗談言うな……あの程度なら何ともないだろう？」

「まあな、伊達に生きてねえしな。……さて、今度はこつちが攻めさせてもらうぜ？ ……バランス・ブレイク禁手化ッ！」

ゴッ！ とオーラが溢れ出してアザゼルが黄金の鎧を身に纏う。

「はっ！」

バランス・ブレイカーいきなり禁手になったことに気を抜かれた俺は、声を漏らす。

「行くぜッ！」

すると、アザゼルはさつきとは比べものにならないスピードで接近し、槍を振るった。

「くっ……」

苦悶の声を漏らす、何とか全ての攻撃を受け切る俺。喰らいついてはいるがアザゼルには余裕が見える。

防戦一方の俺を見て、気分をよくしたのかアザゼルが挑発をしてくる。

「ほれほれ、さつきみたいに押し返してみろ」

「……」

暫く無言で耐え、隙を窺う。

「どうした？ お終いか？」

その言葉と共にアザゼルは、槍を突き出すが、先程より若干動作が大きかった。反撃にでるなら今か……？

俺はアザゼルが突き出した槍に沿うように聖剣を滑らせ、アザゼルの体制を一瞬だけ崩す。

「んなっ!？」

驚くアザゼルに向けて、魔術を可能な限り発動させる。

「全弾受け取れッ！」

魔術がアザゼルに当たり、それによつて発生した爆風を利用して出来るだけ後方に下がる。

煙が晴れると鎧に目立つ傷すらないアザゼルが立っていた。……やっぱり、このレベルの魔術でダメージを通すのはここまでになると不可能か。

「……お前、俺に恨みでもあんのか？ 危うく俺の顔に当たる所だったぜ？」

アザゼルが変わらぬ調子で効いてくる。そりや、勿論……

「ワザとだからな……」

「ああ、だからか……って、おい」

「出来れば一発殴りたかったが……流石にそれはキツイからな」

魔術だったから体制を一瞬だけ崩したのに対して追撃出来たんだからな。あれでさらに距離を詰めるのには更に策を労する必要がある。……アザゼル相手に同じ手が通用はしないだろうしな。

「お前も大概だな。……さて、続きをやるぞ？」

「ああ……」

\*

修行三日目……

模擬戦の合間の休憩中、グラシヤラボラス家の次期当主の日記を解析しているとアザゼルが声をかけてきた。

「おい、お前……それどうした？」

「ん？　これは、グラシヤラボラス家の元次期当主だった奴の遺品だ」

すると、アザゼルは納得したかのような表情をする。……なんだ？

「道理でそんな貴重な魔導具持ってたのか」

「魔導具？　魔法がかかった日記ではないのか？」

魔導具の可能性は考えていなくは無かったが……

「魔導具ってわかんねえのも仕方ねえくらいの高位の魔導具だからな。ほれ、貸してみる」

「ああ」

手渡すとアザゼルが中身をパラパラと捲りながら言う。

「結構な物だ。見たお前もわかっているだろうが、これは所有者の記憶をトレースするものだ。まあ、大部分は漏洩を防ぐ為に封印されて読めなくなってるがな」

「封印は解けないのか？」

俺は、アザゼルに質問をする。

「いや……可能は可能だが、この魔導具は封印解除にパスワードがあつてな……大概はキーワードによるものが多い。しかし……」

「……解かれてない所を見ると、元当主にも不可だった可能性が？」

「普通に考えりやそうだな。しかし、何でそんな物を借りたんだ？」

アザゼルの問いに一瞬詰まる俺だが、言う。

「……塔城に関係する事だ」

「……どう言う事だ？」

神妙な顔になったアザゼルに、俺は黒歌について話した。すると、アザゼルは納得したような顔をした後に問いかけてきた。

「……そういう事か、お前の言う事だから真実だろうな。しかし、何故その事を小猫に言わない？　サーゼクスにもだが」

「塔城に言わないのは、情緒不安定なあいつに言うのは効果的じゃないと思つたから……というのと、証拠がないとあいつが信じない可能性があるからだな。サーゼクス様は時間の上の都合の問題と証拠無しでは流石にはぐれ解除までは不可能だからな」

その話を受けたアザゼルがふと、疑問を口にする。

「確かに証拠無しはキツイな……で、そこまで肩入れする理由は何だ？ お前の場合、何かメリットがあると踏んだ上での行動なのかわかるが……」

メリット……か、そんなに俺が合理的にしか動かない奴だと思ったのか？ ……ファーンフルの件はアザゼルに貸しを作る目的はあったが……。アザゼルにも本心を話しても問題ないだろうな。

「……そこまで言われるか。まあ、最初は同情からだっただな」

「同情？」

「ああ、親がないという共通点があつたからな……」

黒歌から話を聞いた時は、多少共感できた。……憑依前のゼノンの記憶と心には「親」という存在が抜けていたからな。凄く心打たれたのは確かだ。

「成る程ね。で、どうするつもりだったんだ？」

「最悪、天使側で秘密裏に保護する予定だった」

「マジか？ よくミカエルが許可したな？」

「まあ、色々手を回したり、色々な条件の上での許可だったけどな。まあ、ほとんど無駄にはなつたが」

ミカエル様に黒歌の事を話すまでは簡単だったが、保護となるとそれなりの地位がなくては誤魔化しきれないらしく、本当に色々やったな。吸血鬼討伐なんかもやったしな……。

「……で、今はこれを頼りに証拠を得てはぐれ解除しようって事か」

そして、アザゼルが魔導具である日記をポンツと叩き、言う。

「まあ、これが手に入ったのは運が良かったとしか言いようがないけどな」

「……そうだな、証拠さえあれば、小猫がこれで自身の力に向き合えるようにはなるだろうな。……よし、予定変更だ。明日はダンタリオンの書架を俺の地位権限で見に行くか」

アザゼルの地位……？ ああ、墮天使総督か。

「アザゼルの権限……見れる範囲は広がるのか？」

それが、疑問だ。見れても許可証と同じ見れる範囲なら無意味なんだが……。

「多少だがな……それに見た所で封印解除が出来るかわかんないがな」

やる価値はあるだろう、と言葉を続けるアザゼル。そして、俺は今更ながら問いかける。

「そーいや、封印解除はどうやって?」

「基本は指定された言霊によって封印が解かれるみたいだが、さっきも言ったが身内が解けなかったから普通のワードではないのは確かだ。そういう時の為に、こういうのには特殊な解き方があるんだよ」「本当か?」

特殊な解き方なんてあんのか……。

「ああ。だが、問題はこの魔導具が誰によって作られたのかわからなきやなんねえんだ。で、わかつたら、そいつに解いてもらう。……だが、そいつが死んでたらこの方法は没だ」

ん? わざわざそれを調べるのか? それなら……

「……ある程度有名な魔法使いに見せて見るのは?」

「……一概にそちらの方が良いとは言えない。何故ならこれが魔法使いが作ったのではないかもしれない可能性があるからだ」

アザゼル曰く、他にも辺境の魔法使いが趣味で作ったものだったりする可能性が高いそうだ。

「そうか、なら明日はダンタリオンの書架か。まあ、今は修行だな」

と、アザゼルから返された魔導具である日記を亜空間に仕舞って言うと、アザゼルは笑みを浮かべる……なんだ?

「そうだな。……バランス・ブレイク禁手化ツ!」

……って、初っ端禁手化とか巫山戯んな!

こうして、今日の修行は続いた……

\*

……修行開始四日目

「で、広過ぎんだろ」

「初めてきたな、ここ」

俺とアザゼルの二人はダンタリオンの書架に来ていた。……とうかアザゼル、始めて来たって当たり前だが……

「大丈夫なのか？」

色んな意味でな。

「わからん、とにかく探すぞ」

「……了解」

しかし、アザゼルはこのような返事を返す。とにかく、探すか……。

「……どうだ？ 見つかったか？」

粗探しする事約四時間、ほぼ手がかりはなかった。まあ、この魔導具の製作者に関して以外なら色々調べられたから無駄ではなかったが。

「いや、駄目だ……って、なんだその紙は」

すると、アザゼルの手に持っている紙に気付いたので問いかける。

……メモか？

「探してる合間に、キーワードになりそうな単語をランダムに書き殴ってみた。案外組み合わせれば、封印解けたりしてな」

「そうか……試してみるか？」

「そうだな、気分転換にやるか」

そして、例の魔導書を取り出して二人で呟き始めた。

「無限……オーフィス……神滅具……悪魔……デーモン」

「魔王……四凶……霸輝……霸龍……霸獣……」

……明らかにキーワードにならない単語が転がっているが、とりあえず呟く。

「墮天使……天使……龍……ドラゴン……高校……ハイスクール」

「D×D」

そして、俺が呟いた途端に俺とアザゼルは光に包まれた。

「はっ！」

わけがわからない俺たちは互いに見合わせる。そして、俺はアザゼル



に質問をする。

「どうなってんだ、アザゼル？」

「知らん、だが封印は解除されたみたいだ」

すると、目の前に若い青年が現れ、話を始めた。

『封印を解いたということは、その定で話させてもらう。それに、これは死ぬ前に残したものだから、勝手に喋るので悪しからず』

「こいつは、死んだ前次期当主か……時間が無いって事はこいつは遺言か？」

アザゼルが呟く。そして、青年が話を続ける。

『先ず最初に、黒歌の件の証拠は何時でも見られるようにはなった。……それ以外の情報は大部分は抹消済みだ。何せ、見せられないものもあるからな。そちらも唯一のアドバンテージを残しておきたいだろ？』

……アドバンテージ？ 何を言っているんだ？

『さて……死ぬ前だったから大したメッセージは残せなかったが、最後にゼファードールに伝えてくれ「自身に負けるな……」と。さて、そろそろ終わりだ』

そして、俺たちは元の場所へ戻った。しかし……

「……目的は達成したが、疑問が残ったな」

「今は深く考える必要はないんじゃないかねえか？ とりあえず、ここを出てサーゼクスに会うか」

俺の呟きにアザゼルはそう返してきた。まあ、今は考える必要はないか。

「そうだな……しかし、レーティングゲームの準備やらで忙しいのでは？」

魔王の職務も大変なのはわかっているしな。……よくサボるセラフォル様や全てを眷属に任せているファルビウム様の元についている悪魔の方々をみればわかる。

「まあ、そりやそうだ。多分アポ取るだけになると思うが、しないよりはマシだろ」

「という事は今日は首都に行つてアポ取るして終わりか……」

「そうなるな……明日の予定ではタンニーンともやり合う」

「了解した、移動するか……」

そして、俺たちは帝都に移動し、何とかアポを取る事に成功した。サーゼクス様とはレーティングゲーム後に会えて、場所はレーティンゲーム後に知らされると告げられた。

\*

「ゼノン、少し連絡がある」

サーゼクス様にアポを取って帝都に宿泊した翌日、早朝にグレモリー邸に行ったアザゼルが戻ってきて、俺にそう言った。

「なんだ？」

「小猫がオーバーワークで倒れたんだとよ。あと、ヴェネラナからイツセーを呼べ、って頼まれた」

話の続きを促すと、案の定塔城が倒れたらしい。ヴェネラナ様が一誠を呼ぶのはダンスの練習の為らしい。まあ、それくらいは出来るようにならないとな。

「そうか。で、どうするんだ？」

「とりあえず、あの山に行つてイツセーを呼ぶからついて来い、タンニーンにも説明しとかねえとな」

すると、アザゼルが何かを持っている。行く前には無かったが……。

「その包みは？」

「一誠のだ」

一誠の？ ……ああ、差し入れか、部長たちだろうな。

そして、俺とアザゼルは一誠とタンニーン様の修行場所の山に向かった。

「美味しい！ 美味しい……！」

一誠は、アザゼルが渡された部長、姫島、アルジエントが作った差

し入れのおにぎりを涙を流しながら食べていた。あの包みがやはりそうだったようだ。しかし……

「一誠、そんなにおにぎりで感極まるのか?」

すると、一誠が立ち上がり声を荒げる。行儀悪いぞ?

「あつたりまえだ! この数日間俺がどんだけ過酷な思いをしたと思ってるんだ!」

それから一誠は泣きわめくように自分の修行の日々を語った。

内容は省略するが、それが一息つき、食事が終わると一誠が何かを思いだしたかのようにアザゼルに問いかけた。

「そういえば、あの時にヴァーリが何か呪文みたいなものを唱えようとしていたんだけど、あれは何だったんですか?」

「ああ、『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』の事か」

「『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』?」

「知らないのか? ドライブ辺りが教えてると思ったが……」

『バランス・ブレイカー未だに禁 手に至ってないのに、教える必要はないだろう?』

「え? バランス・ブレイカーもしかして、禁 手の更にとか?」

「いや、バランス・ブレイカー禁 手の上は存在しない。セイクリッド・ギア神 器の究極は禁 手だ。

だが、魔物の類を封印した神 器はいくつかあって、それらには独自の制御が施されてる」

例をあげるなら『トウワイス・クリティカル龍 の 手』が簡単か? あれは龍を封印した

神器だが、龍にも種類は多い。なのに、能力は「所持者の力を倍にする」で全て固定されている。これが、独自の制御の一つだな。

「で、本来は神 器は強力に制御されていて、その状態から力を取り出して宿主が使えるようにしている。だが、赤龍帝と白龍皇の

セイクリッド・ギア神 器の場合はそれを強制的に一時解除し、封じられているパワーを解放する……『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』がある。一時的に神に匹敵する力を得

られるが……当然リスクは大きい。寿命を大きく削り、理性を失う……ヴァーリは莫大な魔力でコントロールしてやがるが、イツセー、お前は絶対に真似するな」

アザゼルは真剣かつ憂いを含んだ目で一誠に忠告を出した。その表情に一誠も真剣に頷く。確かに今の一誠には制御は無理だろうし

な。

補足すると、残りの神滅具で『レグルス・ネメア獅子王の戦斧』があるが、あれには『ブレイクダウン・ザ・ビースト覇 獣』がある。詳しくは知らないんだけどな。それよりも……

「まあ、バランス・ブレイカー禁 手に至るのが先だ。だが『ジャガーノート・ドライク覇 龍』とは別のアプローチで力をつけるほうがいいだろうな」

「別のアプローチ？」  
すると、一誠が疑問の声をあげる。とりあえず、考えついたのを例にしてアドバイスする。

「例えば、お前は転生悪魔で『ポーン兵士』だ。『プロモーション昇 格』の連続使用による短期決戦や相性の良い『ルック戦車』への『プロモーション昇 格』での力押しが良いんじゃないか？」

『プロモーション昇 格』の連続使用は実践向けだがな。一誠は魔力の才能だけは無いからな……『ドレス・ブレイク洋服破壊』とかいう色々不味い技は置いとくが。それなら、セイクリッド・ギア神器と相性も良い接近戦闘を伸ばした方が良いと思うからな。

「まあ、今はそれよりも……問題は塔城か」

黒歌からの言葉を伝えなきやなんないしな。黒歌の件に関しては既にアザゼルが部長や塔城本人に話しているがな。

「塔城？　小猫ちゃんがどうかしたのか？」

「アザゼルが与えたトレーニングを過剰に取り組んで……今朝倒れたそうだな」

「ええっ!？」

一誠が驚く。そして、アザゼルが俺に変わって話を続ける。

「怪我はアシアに治療してもらえるが、体力だけはそうはいかん。特にオーバークワークは確実に筋力などを痛めて逆効果だ。ゲームまでの期間が限られているのだから、それは危険だ」

確かにな。……というか、俺の修行内容は大丈夫なのか？　……

教会にいた時もそんな物だったし、普通だよな。

「まあ、それも今日限りになるとは思うがな」

「え？　どうしてですか？」

「その小猫が倒れる原因になった悩みが解決したからだ。……ゼノンの奴がな」

アザゼルのこの一言に一誠が俺を見てきたので、説明する。……俺だけで、人を救える力はないんだよな。残念ながらな。

「……実際はグシヤラボラス家の元次期当主の手柄（？）だけどな」

一誠には例の日記を時間の都合上、見せてないので疑問が解けない表情だった。そして、アザゼルが納得してない一誠に声をかける。

……すまん、一誠。後で教えるか教えて貰える用にしよう。

「さて、行くか。イツセーを一度連れ返せと言われたんでな。一度グレモリーの別館に戻るぞ」

「連れ返せ？　誰に言われたんですか？　部長ですか？」

「その母上殿だ。……小猫について聞きたきや母上殿にでも聞いておけ」

と、思ったらアザゼルがフォローしてくれた。先程言ったが、ヴェネラナ様もアザゼルから話と例の日記を見聞きしているからな。

そして、俺たち三人は山を後にした……

一誠はダンスの練習の為に別館へ、俺は本邸に移動した。すると、そこには部長がいた。

「ゼノン、話は聞いてるわ」

「ああ……塔城は？」

先ず訊ねる。部長もアザゼルから聞いているからな。

「今は疲労も気持ちの整理も落ち着いて、朱乃が看ているわ」

「そうか、案内して貰えるか？」

「ええ。でも、その件についてあの時にでも一言話してくれたら良かったじゃないかしら？ 私<sup>キング</sup>は貴方たちの「王」なのよ？ 少し

くらい頼って貰っても良かったんじゃないかしら？」

……そこを指摘されるのは痛いな……信頼してないわけじゃ無いのだが、言った所でどうしようも無かったしな。

「……それについてはすまん。だが、ここまで御都合主義に事が進むとは思っても見なかったからな」

とりあえず、その場を凌ぐ。

「それもそうね……」

そして、部長の先導で塔城のいる部屋へと向かった。

「失礼するぞ……」

ノックをしてから中に入る。ベッド脇には姫島が待機しており、ベッドには塔城が横になっていた。頭部に猫耳が生えていたのは、猫又の性質だからな。確か、体力がなくなると出てくるんだったな。

「調子はどうだ？」

「……ゼノン先輩……」

塔城が何か言いたそうな表情を見せたので、姫島に一言告げる。

「姫島、少し席を外して貰えないか？」

姫島は俺を一瞥して頷くと部屋の外に出た。そして、それを確認した後、塔城が口を開く。

「……先輩」

「どうした？」

「私は、先輩たちのように心と体を強くしていきたいんです。だけど、猫又の力は使いたくない……使えば私は……姉様のように……と思っていました」

塔城の告白を静かに聞く。

「だけど、黒歌姉様は力に飲まれた訳じゃなくって、私を守る為に……」

「そうだな……」

そして、沈黙が訪れる。……数分後、俺は口を開く。

「黒歌から言葉を預かっている……あの時に連れて行けなくってゴメン。貴方は貴方の道を進みなさい」だそうだ」

「……黒歌姉様……」

塔城の瞳にうっすらと涙が光る。

「それと、俺が言える立場じゃないが……困ったら仲間を頼れ。後は、これだ」

亜空間から一つの書物を取り出し、塔城に手渡す。

「……これは？」

「仙術についての書だ。黒歌直筆だからな。残念ながら俺に仙術の才能は無かったがな……。それと、黒歌のはぐれ解除の件は少しだけ待ってくれ……時間の問題だろうがな」

俺に仙術の才能は無い。黒歌の書物の内容は理解出来ただけだ……な……。

「……ありがとうございます」

「じゃあな、後で一誠が来るとは思うがな」

俺は部屋を後にした。そして、ドアを閉めると口を開く。

「聞いてたのか？」

ドアの近くには姫島が立っていた。……まあ、席を外してくれ、としか言っていないからな。

「ええ」

「……心配事は俺の性分じゃ無いんだけどな……こういうのは一誠の





ふと、横をみると一誠がない……逃げんの早過ぎじやないか？

まあ、やる事は変わらないがな……！

「デュランダル！ ジュワユース！」

瞬間的に聖なるオーラを両剣に込める。

「切り裂けッ！」

そして、タンニーン様の放つブレスを掻き消すように斬撃を飛ばす。

斬撃は、タンニーン様には当たりはしたが、大したダメージにはなっていないと感心したような声を出した。

「……ほう、今のを切り裂くとは……」

「小手調べの最初の一撃で溜めも見られなかったので、切り裂くのは可能だと判断したまでですよ」

それに、二人も同時に相手に取るんだから多少は威力を犠牲にしても範囲を広げるだろうしな。

「謙遜するな、普通なら切り裂こうとはしまい……」

そんなものかね？ というか……

「回避したら貴方に一撃与えられませんからね……」

狙える時に狙わないのは愚かだからな。それに、今後は攻め込めるかわからないしな。

「さて、仕切り直しとはいかがッ！」

そい言って龍のオーラを高めるタンニーン様。

「ええー！」

それに、応える様に俺も魔力と気を合成し、肉体強化と聖剣のオーラを高める。

……そして、タンニーン様との殺合模倣戦いはアザゼルが様子を見に来る三日後まで続いた……

「え、まさかの俺スルー？ ……つて、火炎弾が！」

……一誠の事をすっかり忘れていたのは内緒だ。

\*

タンニーン様との数日間の修行後、俺は一日の休養を入れた後に祐斗の修行場所へと足を運んでいた。因みにタンニーン様からは、様付けは要らない……と言われたので、普段はさん付けにした。心の内では様付けだけどな。……え？　アザゼル？　アザゼルはアザゼルだろ？　何を今更。「一閃光と暗黒の龍絶剣〈ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード〉総督」に様付けはな……。「始めまして、祐斗と同じ「騎士」<sup>ナイト</sup>のゼノンです」それは兎も角、俺は祐斗の師匠である人……悪魔に挨拶をしていた。

そういや、言っていないし、言う場面も無かったから言わなかったが普段は日本語で話してるからな？　幾ら悪魔にそう言う能力が有るとはいえ、最初は人間だったからな。数ヶ国語は普通に話せるし、読み書き出来るぞ？　魔術に<sup>翻訳魔術</sup>そういうのが有るがそれに頼り切るのは……って感じだったからな。

「始めまして、沖田総司だ。話は聞いているよ、早速見せてもらおうかな」

「……って、沖田総司様は離れるが、構えはしない。何故なら……」

「じゃあ、戦るか。祐斗」

「お手柔らかにね」

と、今回は祐斗と戦うからである。……理由は、タンニーン様との模擬戦に日にちをかけ過ぎた所為だ。……俺、戦闘狂だったっけ？

祐斗と俺は聖魔剣を両手に構える。俺が聖魔剣を使うのは、理由が二つある。一つは、今回の模擬戦が何でも有りでは無く単純に剣技だけのためのものと言う事。もう一つは祐斗の禁<sup>バランス・ブレイカー</sup>手の維持時間の具合を見るため。……まあ、この模擬戦の時間ぐらいは四本創造程度なら大丈夫だろう。俺も変に聖魔剣に負荷はかけないしな。

そして、同時に駆け出し鏢迫り合う。剣自体の性能は同じ……ならば、純粋な力と剣の腕が勝敗を決める。

「ハアッー」

祐斗の連撃を紙一重で躲しながら考える。

……祐斗は力ではなく、テクニクで戦うタイプだ。「騎士」<sup>ナイト</sup>も特性

でもあるスピードによるヒット・アンド・アウェイを得意とする。以前は魔剣しか創造出来ず、多種の属性で弱点を探り、削りながら倒すのが主軸だった。反面、防御面はからつきし低い。まあ、そういう特化型だから問題は無いんだが。その為、耐えられて一撃でKOなんてのも有り得るわけだ。

防御面はさておき、攻撃面に関してはフランス・ブレイカー 手に至った事によつて大分解消された。聖魔剣は、聖と魔の異なる二つの属性を兼ね備えた剣。威力はそんなじよそこらの聖剣・魔剣を凌ぐ。それに加え、ブレード・ブラックスマイス 『聖剣創造』の神 セイクリッド・ギア 器もあのコカビエルの一件から使えるようになってる。精度に関しては、要検討だが時間が経てばフランス・ブレイカー 手の同時使用も不可能では無いと踏んでいる。

とまあ、祐斗について考えたが勝つのは不可能では無い。……ただ、純粋な剣技だけだと辛いところだ。前回というか、コカビエルの一件の時に戦ったときは、何でも有りて祐斗の精神状態が万全じゃなかったから圧勝出来たんだよな。……まあ、負ける気は無いがな。

「考え事とは余裕だね!」

「別に余計な事じゃないからな!」

そして、一気にどちらも近寄り相手の首筋に剣を迫らせた……!

「そこだッ!」

「そこまで!」

沖田総司様の声と同時に俺達の動きが止まる。……正確に言えば、声を聞く前にどっちも止まってたけどな……互いに相手の首筋に剣を突きつけあつた状態で。

……やっぱり、肉体強化や魔術や魔法を使わないとこの程度か……。如何せん、悪魔の身体つてのにも慣れきれて無いからか?

「さて、どうでしたか?」

取り敢えず、ご指導して貰うか……。

\*

時は過ぎ……8月15日、シトリー眷属との戦いまであと5日と

なった。

ゲーム前にも魔王主催のパーティがあるので、修業は今日までとなる。……自分的には色々得るものがあったら修行だったと思っっている。レーティングゲームでは使えないが、ある切り札も有るしな。

「どうですか?」

そして、祐斗と俺はある修行の成果をアザゼルに見せていた。……時間は限られていたが、自身はある。

「……大丈夫じゃないか?」

アザゼルからOKを貰ったので、そのままグレモリー本邸に向か……おうと思っただが、シャワー浴びる必要があったので、解いて本邸に向かった。

そして、本邸前でタンニーン様によって山から送られた一誠と合流すると、シャワーを浴びて着替えた。その後、全員が一誠の部屋に集まって修業の報告会を行った。

修業の内容を話したところ、女性陣からは俺たち男性陣（ギヤスパーを除く）の内容に引いていた。

「あの先生、なんか俺、酷い生活を送ってませんか……? まあ、祐斗たちは祐斗たちで修行内容が酷いけど……」

酷いって、どういう事だ。……というか、女性陣も頷くな。

「俺もお前が山で生活出来ていたから驚いたよ。まさか普通に山で暮らし始めていたとは俺も想定外だったぜ。ゼノンや祐斗の修行内容は、近いうちにお前と祐斗、お前とゼノンとかでやらせるつもりだからな」

「えええええっ?! マジっすか!? 俺死んじやいますよ!?!」

アザゼルの発言に一誠が叫ぶ。

「大丈夫だ、最初は手加減させるさ……最初はな」

そうだな、最初は手加減するさ……最初はな。祐斗との模擬戦も最終的には何でも有りになったしな。……勿論、勝率は俺が上だったが。まあ、使う武器が反則級だからな。

「いやああああああ!」

一誠の絶叫が響き、皆が苦笑する中、今回の修行は終わった。

What is a party?

そして、時は過ぎパーティー当日。

ギヤスパーを除く男性陣は、駒王学園の制服に身を包んで、座って待機していた。何でもタンニーン様とその眷属の方々が送ってくれるらしい。

「兵藤か？　それにゼノンに木場？」

「匙、どうしてここに？」

すると、匙が声をかけてきた。一誠が質問すると、匙が答える。

「会長がリアス先輩と一緒に会場入りするって言うから付いて来たんだ。それで、会長は先輩に会いに行っちゃったし、仕方ないんで屋敷の中をウロウロしてたら、ここに出た」

匙は少し離れた席に座り、真剣な面持ちで一誠に言う。

「もうすぐゲームだな」

「そうだな」

「俺、鍛えたぜ」

「俺達も鍛えた。ってか、山で毎日ドラゴンにイジメられた」

一誠に続けて俺も口を開く。

「俺は、最初はアザゼル、次にタンニーン様、終盤は祐斗と模擬戦しかしてないな」

木場は今後の為に、口を開かなかった。……因みに予定ではあった沖田総司様との模擬戦だが、色々あって、先送りとなった。

「そ、そうか。相変わらずハードな生き方してんな。まあ、俺も相当ハードなメニューこなしたけどさ」

俺たちの返答に軽く顔が引き攣る匙。すると、匙は頬を掻きながら、口を開く。

「先月、若手悪魔が集まった時のこと覚えているか？」

俺たち三人が肯定すると、匙は続ける。

「あれ、俺達は本気だ。お、俺……せ、先生になるのが夢なんだ！」

「先生……レーティングゲーム学校のか」

俺の呟きに匙は紅潮しながらも真剣に話を進めた。

シトリーは冥界にレーティングゲーム専門の学校設立を夢として  
いるが、そこでは悪魔なら階級に関係なく受け入れるという体制を取  
る学校らしい。誰でもレーティングゲームが出来るように、シトリー  
は人間界で勉強している事も聞かされた。

「立派な夢だ……なら、自分の夢に自信を持って」

それを聞いて、率直に匙に言う。自分の夢なら自信を持った方が良  
い。叶う叶わないは自分の行動次第だからな。

「そうだな……。というか、ありがとな、ゼノン」

「何のことだ？」

惚けたように言う。何の事は分かっているが……実際、感謝され  
るように動いた訳じゃないからな。

「……それでもだ。会長も言ってたからな」

「そうか……」

まあ、素直に感謝は受け取っておくか。……レーティングゲームで  
は手は抜かないし、抜く気も無いがな。

「イツセー、お待たせ。あら、匙くん来ていたのね」

部長の声がしたので、振り向くとドレスに着替えた部長達がやって  
来た。

ただ……

「なんでお前までドレス姿なんだよ！」

一誠が代弁するかのようについ叫んだ。……まあ、分かっちゃいたんだ  
よな、この場になかったからな。というか、一誠。先に部長たちの  
姿を褒めろよ。女性とはそう言うものだけ？

「だ、だって、ドレス着たかったんだもん」

女装癖も大した物だ。……下手な女性より似合っている気がする  
な。

そして、シトリーもドレス姿でやって来た。その後、暫くすると執  
事がやって来てこう言った。

「タンニーン様とそのご眷属の方々がいらつしやいました」

庭に出てみると、タンニーンとその眷属のドラゴンが十体もいらつ  
しやった。

……普通に考えるならタンニーン様の眷属は「女王」が一名に  
「戦車」・「騎士」・「僧侶」が二名、「兵士」が三名か……。  
「約束通り来たぞ、兵藤一誠」

「うん！　ありがとう、おっさん！」

そして、シトリー眷属を含む俺たちはタンニーン様を含めたドラゴン達の背中に乗り、会場となる場所へ向かった……

\*

……パーティー会場

上級悪魔達との挨拶を一通り終えた俺は、飲み物で喉の渇きを潤すと同時に他の奴らを探していた。

一誠、アルジエント、ギヤスパーはフロアの隅っこにある椅子に座り込んで慣れない事に気疲れしたのか、グツタリしていた。

それを見て苦笑いしていると、一誠の方に金髪のお嬢さん……確かレイヴェル・フェニックス……が近づき会話をし始めた。

そして、暫く時間を潰していると視界に黒猫が入った。あれは……使い魔？　ということとは黒歌か？

そして、俺はパーティー会場を抜けてエレベーターを降り、明るい場所を出て、闇夜の森を歩く。

暫く歩くと懐かしい気を感じたので足を止めてその方向を見つめる。

「久しぶりじゃない？」

すると、黒い着物に身を包み、頭部に猫耳を生やした女性……黒歌が現れた。

「久しぶりだな、黒歌。何のようだ？　わざわざこんな時に使い魔

寄越して」

軽口を叩く……塔城の事だろうしな。

「あなたに会いたくて来たのに、酷い……なんて、野暮な事は言わないで本題に入るにやん……あの事を白音に言った？」

「ああ、まさか俺が悪魔になって同じ眷属になるとは思いもしなかつ

たけどな」

「これも、何かの運命なのかね……。」

「そうね、あの時はごく僅かな可能性に賭けたただけだったから……。それで、白音の反応は？」

「信用したよ。まあ、証拠あつたからな」

「え？」

黒歌が予想通り疑問の声を漏らしたので、俺はグラシヤラボラス家の次期当主の事を話す。

「そうだったのね。でも、私は今は戻れないにやん……。」

その言葉に俺は、黒歌とは別の方向を見て口を開く。

「そうか、カオス・ブリゲードの「団」に所属したのか。美猴が来ているって事はヴァーリチームか……。」

すると、美猴が姿を見せる……隠れて居た訳では無かったがな。

……というか、黒歌が「禍カオス・ブリゲードの団」に所属したのは……最悪の場合を考えての事だろうな。今回は裏目に出たが、ヴァーリ側に付いているならまだ脱退も簡単か。

「久しぶりだねい、聖剣使い。雰囲気的に入り込めなかつたぜい」

空気を讀んだのか……？

「で、お前も単独行動か？」

「そうだねい。黒歌が野暮用に出るって言い出して、なかなか帰ってこないから、こうして迎えに来たわけだけぜい。それと……。」

美猴は言ったん言葉を止めると、ある方向を見て言葉を続ける。

「気配を消しても無駄無駄。俺つちや黒歌みたいに仙術知ってる、気の流れの少しの変化だけでだいたい分かるんだよねい」

すると、一誠、部長、塔城の三人が出てきた。塔城が出てきたことに黒歌と美猴は驚いていた。多分、塔城は仙術の応用で一誠か部長の気と同調してたな。というか、そんなのはあの書物には無かったが……アザゼルか？

「白音……!?!」

「はい、黒歌お姉様……。」

すると、塔城と黒歌は互いに抱き合う。美猴がいる事に、部長と一



誠は警戒していたが、塔城の意思を優先させたみたく、塔城を止めようとはしなかった。

暫く経って、塔城と黒歌が離れると部長が黒歌に質問する。

「でも、何で貴方は「禍の団」に？」

「それは……」

「白音……塔城を最悪の場合は連れ戻す為……だよな？」

黒歌が言い淀んだので、俺が言葉を続ける。俺の発言に驚いた表情の黒歌だったが、口を開く。

「……そうにやん。だけど、白音それはあの「王」<sup>キング</sup>がやった事と変わらないのよね……だからこそゼノンだけを呼んだのよ、白音の様子だけでも確認しにね」

「そうだったのね……」

普通ならばあり得ない和やかな雰囲気<sup>キョウキ</sup>が辺りを包む。

「それじゃあ、そろそろ戻った方が……!？」

場を収めようとした途端、俺たちや黒歌たちの方とは別の方に一人の女性が現れた。その手には、聖剣と謎の結界装置が握られている。「始めましてローラン。早速、貴方の力を見せて？」

そして、手に持っていた結界装置が光って辺りが結界に包まれた。

辺りを即座に見回して把握すると、全員場所は離れているが、いる事を確認する。

……良かった……のか？ 美猴と黒歌の表情からするに知って

はいそうだが……。というか、ローランって、あのローランか？

「……や……な……」

先程の眩きが聞こえたので、その女性を見るとその表情は怒りに染まっていた。

……え？ どういう理由で怒ってるんだ？

「……巫山戯んな、何で余計な奴らがいるんだ？ 私とローランの

邪魔……こいつらと戯れていなさい」

すると、異形の怪物が複数創造され、黒歌や美猴、一誠たちに襲いかかった。理由が理解不明過ぎる……。

「何だこれ!？」



手を抜く意味がわからない。……考えるだけ無駄か。やるしかないか……応援は来るかわからんが、異変には気づくだろうしな。

「ハアッ！」

瞬時に魔力と気を合成し、肉体強化。そして、攻守一転して連撃を放つ。

が、その連撃は嬉々とした恐ろしい程の笑みを浮かべたオリヴィエはいとも簡単に受け切る。

「それは、予測済みだッ！」

瞬間的に魔力と気のバランスを崩し、足元を暴発させて目眩ましと共に距離を取ると直様、無数の斬撃を放つ。

煙が晴れるとそこには、左頬に切り傷が一筋のみで、他は無傷だった。

クソツタレが……ここまで実力差が有るのかよ……。

「ふふふ……いいわ」

オリヴィエは頬に出来た切り傷から出た血を手で取り、それを舐めながら不気味に言う。

「少し本気でいきましようか……死なないでね？」

「ッ！」

先程の軽い連撃ではなく、最初の重い一撃が連続で襲いかかる。

一合毎に斬撃の余波で切り傷が増える。

「ぐっ……！」

……これは、二剣でオーラを分散させるより、一剣にオーラを込めた方がいいな……。

「ジュワユースッ！」

鏢迫り合うたびに、森の木々が衝撃によって破壊され、大地が抉れ、大気と結界が震える。

このまま、斬り合ってもジリ貧か……なら、仕掛けるしかないか。オリヴィエの聖剣を左肩に受ける。

「……！」

聖なるオーラで相殺しているのにここまでダメージを受けるとは……！

そして、オリヴィエの腕を左手で掴み動きを止め……右手のジュウユースでオリヴィエを斬る！

「ふふふフフ負腐不附ふ……ロオオオラアアン……ふふ……」

……結果は、相討ち……とはいかず、あつちは軽傷に終わった。此方が悪魔だという事を抜きにしても、実力に差が有りすぎる。

というか、恐ろしすぎる。治療してる時間は無い……か。

『Welsh Dragon Balance Breaker!!』

バランス・ブレイカー プラステッド・ギア・スケイルメイル  
「禁手 赤龍帝の鎧」ツ！ 主のおっぱいをつついてこ

こに降臨ツ！」

すると、今の空気をかき消すように一誠が叫ぶ。 バランス・ブレイカー 禁手に至つ

たのか……神器が発現して半年経ってないのに、よく至つたな。

『相棒、おめでどう。しかし、構えろツ！ あの子が殺しにかかって来るツ！』

「……黙ってろって言っただろ、糞蜥蜴が……死ぬ、折角楽しかったのに……」

オリヴィエが一誠に高速で斬りかかる。一誠は構えたまま動かないし、俺も動けない。

しかし、二人の間に空間が裂け、そこから背広を着た眼鏡の若い男が現れてそれを防いだ。

彼の手には極大な聖なるオーラを放つ剣が握られている。あれは……聖王剣？

「……やれやれ、二人の帰りが遅いから来て見たら……何の真似ですか？」

「は？ こっちの台詞だアーサー。ただ私は目障りな糞蜥蜴を殺すだけだが？」

その言つて一誠を睨むオリヴィエ。

「曹操に『やり過ぎるな』と伝言を預かっていますか？」

「チツ……」

オリヴィエが舌打ちした直後に、轟音と共に結界が破壊され……

「無事か、お前達!？」

「タンニーンのおっさん!」

タンニーン様が出来てきた。

「……ゲオルクの奴、大分手を抜きやがったな……ブレイズ・ミイロテイア・ドラゴン魔龍聖の一撃でだと……?」

すると、オリヴィエは苦い顔をして呟くと、霧によって去っていった。

ゲオルク? 曹操と同じくオリヴィエの仲間か?

しかし、助かったか……。

「引きますよ」

そして、アーサーが聖王剣で空間に裂け目を創ると、美猴と黒歌がアーサーの元に近づいた。

「わかったぜい、じゃあなグレモリー!」

「……白音、またね」

「はい、お姉様」

黒歌と美猴は裂け目に入っていった。それを確認するとアーサーが俺に言う。

「……『エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣』は私が所持しています」

『エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣』……分裂したエクスカリバーの七本中最強と呼ばれる聖剣だ。それが、白龍皇側に有るのか。しかし……

「そんな事を喋っているのか?」

「ええ、今回の件の謝罪と申していただければ……。彼女は普段はまともな分類におけるんですが……」

余計たちが悪いぞ、それ。……取り敢えず、簡単な治療はした。あとは、アルジエントに任せるか。

そして、アーサーも空間の裂け目の中に入り、この場を去った。

そして、魔王主催のパーティーは「カオス・ブリゲード禍の団」の襲撃によって急遽、中止という形で幕を閉じた……。

黒歌と美猴に関しては、タンニーン様に話さないとか……。

What is a rating game?

シトリー眷属とのゲーム決戦前夜に、俺達は今回の『禍の団』の襲来について、及び情報共有の会議を終えたアザゼルの部屋に集まり、シトリー戦の前の最後のミーティングをしていた。

アザゼルの話では、今回の襲撃はオリヴィエが俺を狙ったという事になり、俺たちリアス・グレモリー眷属とタンニーン様で追い払った事で一応の決着はついた。黒歌や美猴に関しては共闘の事もあって、一部の方を除いて隠蔽する事になったらしい。

「しかし、今回は厄介な事にはなったが……これで、グレモリー眷属の戦力はアップしたに違いない。話を変えるが、ソーナ・シトリーはグレモリー眷属の事がある程度知っているだろうか?」

アザゼルの問いに部長は頷く。……厄介どころの話じゃねえよ。……まあ、何時迄も引きずるのは良く無いか。

「ええ、大まかなところは把握されているわね。例えば、イツセーや祐斗、朱乃、アーシア、ゼノンの主力武器は認識しているわ。フェニックス家との一戦を録画した映像は一部に公開されているもの。更にするならギヤスパアの神器セイクリッド・ギアに小猫の素性も割れているわ」

「ま、ほぼ知られているわけか。で、お前の方はどれぐらいあちらを把握してる?」

「ソーナの事、副会長でもある「女王」の事と「兵士」の神器セイクリッド・ギアの事くらいね」

「情報戦に関しては、あちらに利があるか。まあ、その辺はゲームでも実際の戦闘でもよくある事だ。戦闘中に神器セイクリッド・ギアが進化、変化する例もある。細心の注意を払えばいい。相手の数は八名か」

「ええ、『王』・『女王』・『戦車』・『騎士』が一名ずつで、『僧侶』・『兵士』が二名ずつの計八名で、数はこちらと同じね」

そして次にアザゼルは事前に用意したホワイトボードに何かを書いていく。

「レーティング・ゲームは選手に細かなタイプをつけて分けている。パワー、テクニク、ウィザード、サポート。この中でならリアス、朱

乃はウィザードタイプ。木場はテクニクタイプで、スピードや技で戦う者。小猫はパワータイプで仙術が極まればサポートもこなせるな。アーシアとギヤスパはサポートタイプ。イツセーもパワータイプだが、譲渡<sup>ギフト</sup>の力でサポートの方にもいけるぞ」

更に細かく分けるならアーシアはウィザード、ギヤスパはテクニクに近いとの説明が入る。

一誠はたくさん覚える事が出てきたので困惑していたが、必要最低限の事は理解したみたいだ。……主観だがな。

「で、ゼノン。お前はウィザード以外なら全タイプを兼用出来る万能型だ」

そうだな、ウィザードタイプになるには、アザゼルとの模擬戦でも言ったが、魔法や魔術の威力に欠けるからな。それに、基本的に魔法や魔術は基本的に技の繋ぎや相手の体制を崩す為にしか使わないからな。

「あれ？　ゼノンはパワータイプじゃないんですか？」

アザゼルの言葉に疑問を持ったのか一誠が声をあげる。

「そうみえるか？　……って、イツセーはこいつの戦闘をコカビエルぐらいしか見てねえのか」

「そうだな。それに、悪魔になつてからはパワータイプの印象を持たせるようにしてるしな」

はぐれ悪魔の討伐もデュランダルかジョワユースで斬り裂くだけの簡単なお仕事だしな。

「お前は本当に侮れないな……」

そして、アザゼルの口からカウンター云々の話が出た所で自分の意見を告げる。

「恐らく、シトリーの眷属にカウンター使いがいるとしたら俺に当ててくる可能性はある。一誠には多分匙を当ててくるんじゃないか？」

……何故かって？　理由は……

「普通ならそう考えるな。デュランダルの攻撃のカウンター食らったら一発でアウトだろうしな。それにイツセーには「洋服破壊<sup>ドレス・ブレイク</sup>」が有るからな」

俺の意見にアザゼルがそう言う。一誠に関してもアザゼルの言う通りの理由だ。

「……確かに「洋服破壊」<sup>ドレス・ブレイク</sup>は、女性の敵です。イツセー先輩とは、絶対に戦いたくないと思います」

塔城の言葉が鋭く突き刺さる一誠。そりやそうだ、逆にカウンターなんかで跳ね返しても……これ以上は言わん。

そして、最後にまとめ、全員がシトリー眷属との試合に備えた。

\*

—— 決戦日

魔方陣でジャンプしてゲーム会場に移動すると、直にアナウンスが鳴り響く。

『皆様、この度はグレモリー家、シトリー家のレーティングゲームの審判役を担う事となりました、ルシファー眷属「女王」<sup>クイーン</sup>のグレイフィアでございます。我が主サーゼクス・ルシファーの名のもと、ご両家の戦いを見守らせていただきます。早速ですが、今回のバトルフィールドはリアス様とソーナ様の通われる学舎「駒王学園」の近隣に存在するデパートをゲームのフィールドとして異空間にご用意致しました』

それからアナウンスでルールが知らされる……両陣営の本陣は部長側が二階の東側、シトリー側が一階の西側となっているらしい。  
『昇格』<sup>プロモーション</sup>は見込めないか？

更に特別ルールとして、回復品であるフェニックスの涙が両陣営に一つずつ支給された。……今回は短期決戦だから使い道無いだろうがな。一応、部長が持つ事になった。

『作戦を練る時間は三十分です。この時間内での相手との接触は禁じられています。三十分後にゲーム開始です』

アナウンスが終わり、皆が集まる。

「バトルフィールドは駒王学園の近くのデパートを模したもの。屋内戦ね」



壁に描かれた大きなデパート内の案内図を見ながら部長が言い、送られてきたルールの紙に目を通すと口を開く。

「今回のルールは、バトルフィールドとなるデパートを破壊し尽くさないこと。つまり、派手な戦闘は控えろって意味ね」

「となると、姫島や一誠の範囲の広い攻撃ができないのは痛いな……」

屋上や一部の区間なら可能な場所は有るが、そんな有利な所でわざわざシトリー眷属が戦ってくれるわけないだろうしな。

「そうね。それに、ギヤスパアの神セイクリッド・ギアの規制が書かれているわ。まあ、その件に関しては今回使わせる気はなかったけどね」

「……まだ不安定か。使えたらデパートのガラスの反射を使って停止範囲を拡大させられたんだがな……」

「そんな事できるのか？」

一誠が俺に問いかける。

「可能だ。テロの事を思い出せ、あれは擬似バランス・プレイヤー禁手セイクリッド・ギアだったが、裏を返せば禁手に近い素の神セイクリッド・ギアの能力があれだからな……つと、この話は一旦切る。準備もあるしな……」

そして、部長が……

「十分後にここに集合。各自、それまでそれぞれのリラックス方法で待機していてちょうだい」

そして、それぞれが散っていく中、祐斗に話しかける。

「さて、やるなら今だな」

「そうだね……」

そして、時間になると俺達はフロアに集まり、開始の時間を待った。そして、アナウンスが流れた。

『開始のお時間となりました。ゲームスタートです』

部長が椅子から立ち上がり、気合いの入った表情で言う。

「指示はさっきの作戦通りよ。イッサーと小猫、裕斗とゼノンで二手に分かれるわ。イッサーたちが店内から、裕斗たちが駐車場を経由して進行。ギヤスパアは店内の監視と報告。進行具合によって、私と朱乃とアーシアがイッサー側のルートを通って進むわ」

部長の指示を聞き、全員耳に通信用のイヤホンマイクを取り付け

る。これで連絡を取り合うそうだが、便利な物だ。

「さて、可愛い私の下僕悪魔たち！　今回は私達が勝つ！」

「応！（はい！）」



時間は過ぎ、開始から間もなくギヤスパーのリタイアのアナウンスが流れ、一誠たちの方は戦闘を始める中、祐斗たちは駐車場を通り、相手の本陣に向かっていたが……。

「さて……「女王」<sup>クイーン</sup>の真羅椿姫<sup>しんらつばき</sup>、「戦車」<sup>ルーク</sup>の由良翼紗<sup>ゆらつばき</sup>、「騎士」<sup>ナイト</sup>の巡巴柄<sup>めぐりともえ</sup>。結構人数を割いて来たね、こっちが本命かな？」

僕の隣にいる彼が三人を見て言う。確かにあちらが約半分の人数を割いてくるなんて思っても見なかった。

「さて、どうでしょう？」

相手の「女王」<sup>クイーン</sup>がそう返す。それくらいは、分かっていたさ。

「まあ、言うはずはないだろうね……ゆ、祐斗行くぞ？」

そして、僕は彼に声をかけて目で合図する。

「ああ」

彼が返事をする、自身と彼に

聖剣が創造される。この聖剣は、大して強くない……作戦の内だからね。これくらいにしとかなないと持たない。

そして、僕は静かに呟く。

「ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ。」

この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する……デユランダール！」

そして、聖のオーラが籠った聖剣が聖剣を持ってないほうの手に現れる。

「それがデユランダールですか？」

「まあ……な、ルールの所為で随分オーラは制限しているけどね……」  
ルールというか、それ以外の問題なんだけどね。すると、彼が剣を

構えると僕に向かつて叫ぶ、

「さて、ゼノンは「女王」<sup>クイーン</sup>を！ 二人は僕が相手取るツ！」

それを聞いて、相手も構える。……内心、邪魔が入らなかつた事にほくそ笑む。

「了解ッ！」

そして、僕は相手の「女王」<sup>クイーン</sup>にそれなりの速度で近づくと愚直に聖剣を振りかぶった！

「かかりましたね！」「追憶の鏡」<sup>ミラー・アリス</sup>！」

すると、相手の「女王」<sup>クイーン</sup>はカウンターの要領で鏡を出現させた。

「な……！ しまった……！」

聖剣が鏡に吸い込まれるようにぶつかる……



——時は少し遡る……

場所は広々とした、店内。そこでは、匙と一誠の激しい戦いが繰り広げられていた。

匙の神器「黒い龍脈」<sup>アフソーフション・ライン</sup>で足止めされた一誠は、腹部に蹴りを食らった。

因みに、もう片方の「兵士」<sup>ボーン</sup>を仙術によって動きを封じた小猫は、一誠に加勢したいが本人たちの「タイマン勝負に手を出さないでくれ」と二人に言われて、距離を取っていた。

しかし、蹴りを食らった一誠に大したダメージを食らった様子はない。それを見て、匙が口を開く。

「結構、本気で蹴ったんだが、お前も相当トレーニングを鍛えたというわけだな」

時間を稼ぐ……その両者の意味合いの異なつた思惑が交差するなか、匙が話し出す。

「俺はお前が羨ましかつたし、自分が悔しかつた。おまえは、自慢の赤龍帝なのに、俺には何も無い。だから、赤龍帝であるお前を倒し、自慢と自信を手に入れる！」

匙はソフトボールサイズの魔力の弾を作り出し、投擲する。避け様にも「黒い龍脈」のラインに繋がれて身動きがとれなかった一誠は、迫りくる魔力の弾に右手を翳す。すると、白い籠手が出現した。『Divide!』

そして、機械音と共に魔力弾が半分になった。その現象に匙は驚きの声をあげる。

「俺の魔力弾を半減したのかよ!？」

「山ごもりでなんとか発動できるようになった。発動する確率は一割以下で、博打に近いけどな……」

無茶な賭けで、成功したのはよかったが、白い籠手は役目を終えると直様消えた。

「いくぜツ!」 バランス・ブレイク 禁手化

そして、一誠は禁手バランス・ブレイカーを発動させて『赤龍帝の鎧』を身に包んだ。どうやら、先程のやり取りで禁手バランス・ブレイカーまでの時間を稼いでいたみたいだ。

「うおりやあああ!!」

ラインを力任せに引き千切り、ブースターから火を吹き、匙まで一直線に進み何度も拳を打ちこむ一誠。

しかし、匙は何度倒れても立ちあがった。その執念に神セイクリッド・ギア器は匙に力を与える……。

「……俺はお前に勝つまで……夢の第一歩を踏む……!」 左手に魔

力……右手に気……合成ツ!

『この気迫とこの力……黒邪の龍王』ヴリトラが匙の想いに応えたというのか!』

ドライグが驚く中、匙は叫ぶ。

「兵藤ツ!」 一つ聞かせろツ! 主様のおっぱいは柔らかいかアアア!？」

……さつきまでの真面目な雰囲気が消え去り、匙は嫉妬に燃えた瞳で一誠に殴りかかってくる。

そして、気迫と咸卦方で強化された一撃を受けた一誠は吹き飛ばされた。受け身を取り、匙に向き合うも……

「おっぱいを揉んだ時、何を思ったんだよ!?　ちくしよおおお!」

匙は叫びながら、ラインを複数展開させて、大型家具引つ張る。そして、そのまま一誠に振り下ろした。

「がっ……!?!」

一誠は、威力を抑えたドラゴンショットで撃ち落としていったが、匙もラインを一本だけ軌道を反らして、タンスを一誠の背中に直撃させた。

「俺だつて……俺だつて……揉みたいんだよおおお!　乳房すら、

見た事ない!　乳首なんて一生拝めるかわからないのに!　それを、お前は自由気ままに見やがってええええ!!」

明らかに怒りの方向性が可笑しくなっているが、匙はただ只管に一誠を殴る。一誠も負けず、反撃に頭突きからの拳を撃ち込む。殴り合いの間にアナウンスが流れていたが、二人の耳には入っていないかったようだ。

「兵藤おおおおお!!」

「匙iiiiiiiiiiii!!」

そして、二人の拳が交差して互いの顔面に拳が入る……クロスカウンターが決まったが、ダメージが蓄積されていた上に、咸卦法が途切れた匙は崩れ落ちた。だが、匙は崩れる最後まで一誠の右手を両手で掴み、リタイアするまで掴んだままだった。

それを見届けた小猫はもう一人の「兵士」<sup>ポーン</sup>にトドメをさすと、大字になり、少しだけ震えていた一誠の手をやさしく握り……。

「カッコよかったですよ。一誠先輩」

と、一言賞賛を送った。

『ソーナ・シトリーの「兵士」<sup>ポーン</sup>二名、リタイア』

そして、アナウンスが鳴り響く。

「小猫ちゃん、現状は……?」

ふと、一誠は小猫に質問する。そして、小猫はそれに答える。

「それは……」

……二人は気づいていなかった。

匙がリタイアしても、一誠の右手に付いているラインが消えていな

い事に……

What is a rating game?

II

そして、時間と場面は戻る……

「なんてね……」

突然、鏡に当たるのを避けるように、聖剣が消える。そして、あいつはそのままの勢いで相手の「女王」の背後に回り込む。

「な!? 聖剣が……デュランダルが消えた!?!」

狼狽える「女王」を尻目にあいつは高らかに叫ぶ。

「……咲き乱れろ、聖魔剣よ!」

「え? きやあああ!」

そして、鏡を縫うように避けた聖魔剣が相手の「女王」に突き刺さる。カウンターで決める気だったのか相手の「女王」は隙だらけだった。まあ、それは……

『ソーナ・シトリの「女王」リタイア』

「え!?!」

「おいおい、敵を目の前に余所見とは余裕だな?」

あんた達も同様何だがな!

「しまっ……」

『ソーナ・シトリの「騎士」・「戦車」リタイア』

アナウンスが聞こえた所で、ある魔術を解いて、ジュワユースを残してデュランダルを亜空間に仕舞う。

「上手くいったね」

そういうのは、ゼノン……になりすました祐斗。今の話のタネを話すと俺と祐斗はあの合間の時間にお互いに魔術によって変装したわけだ。実際、修行終わりにアザゼルに見せてOKだったからな。で、祐斗には「魔剣創造」ではなく「聖剣創造」を使ってもらった。それによって創られた聖剣に俺がデュランダルの聖なるオーラを纏わせる事で、本物に見せた、っていう訳だ。

「まあな、大丈夫か?」

結構消耗したとは思うが……」

「実を言うとかかなりしんどいかな。神セイクリッド・ギア器の高速切り替え、魔術による擬態と変声……一杯一杯だったよ」

そう言つて肩を竦めながら、擬態を解き、聖魔剣を消す祐斗。俺は特に何もしてないな。動揺した相手は無慈悲に斬っただけだからな。

『ソーナ・シトリーの「兵士」ポーン二名、リタイア』  
すると、アナウンスが響く。

「一誠たちか？　これで、こちらはギヤスパーのみのリタイアに対して相手の残りは「僧侶」ビショップ二名に「王」キングのシトリーだけか」  
「そうだね、連絡取ろうか」

確認する様に言うと、祐斗が提案する。確かに、連絡を取るのがベストか。交戦はしてないだろうしな。

無線を弄り、部長と連絡を取る。

「部長、そちらの戦況は？　こちらはアナウンス通りだ」

『やったわね。今は一誠側のルートを通つて本陣に進んでいるわ』

……部長自らですか……まあ、有利だからいいか。足元救われなきや良いが、そこは俺たち「騎士」ナイトの役目つてか？

「合流するか？」

『ええ、残りは三人。気を抜かずにいきましょう』

「当然だ」

そして、無線を切ると祐斗に向き合つて口を開く。

「という事で、部長たちと合流する。行けるか？」

「うん、行けるさ」

そして、祐斗と俺は相手側の本陣に向けて走り出した……

\*

そして、ショッピングモールの中央広場に辿り着いた俺たち。  
周りを見ると、三人の影が映つた……「僧侶」ビショップの花戒はなかい 桃ももと  
草下くさか 憐耶れや「王」キングのソーナ・シトリーがいた。それに結界も貼られて  
いるな。

……不味いな、合流する前に出くわすとはな。祐斗に無理させるわ



けにはいかないし、三人を相手に取るのは厄介だな。とりあえず時間を稼ぐか。

まあ、シトリーは実体がここにいないから実質は二体一だがな。

「ごきげんよう、ゼノンくんは木場くん。貴方たちには一杯食わされました。まさかあんな手を使ってあの三人を倒してくるなんて思ってみませんか」

おっと、精神というか見かけだけでは無いんだな。悟られないように話すか。時間稼ぎを兼ねてな。

「貴方に賞賛を受けるとは光栄だな。さて、一誠たちがくる前にやるか？」

と云って、デュランダルとジュワユースを構える。

「そうですね……とりあえず、兵藤くんはここに来ませんよ。私の策に嵌まりましたからね」

「策……？」

俺の疑問の声にシトリーがバッグを持っている「僧侶」ビショツプに目で指示を出す。頷いた僧侶の女性がバッグから何かを取り出した。それは、病院で点滴の際などに使うパックだ、しかも中身は誰かの血で赤く染まっている。

「血液……？」 一誠のか？」

武器でも出すんじゃないかと思っていたが、出されたものを冷静に考えて言う。

「ご名答です。兵藤くんは人間がベースとなっている転生悪魔。人間は体に通う血液の半分を失えば致死量です。レーティングゲームのルールとして、ゲーム中に眷属悪魔が戦闘不能状態になると、強制的に医療ルームへ転送されます」

……誰も考えねえよ、そんな事をして倒そうと何てよ。

「レーティングゲームのルールで倒したというわけか……しかし、どうやって？」

匙の作業だと、分かっちゃいるが、時間稼ぎの為に言う。

「サジは神セイクリッド・ギア器を用いて、兵藤くんの血を少しずつ少しずつ吸い取っていたのです。対象のエネルギーを吸い取るのが本来の能力である

神 器で血液を吸い続けるには、相当な修業と緻密なコントロールがいりました。しかし、サジはそれを完遂させたのです。もう手遅れです。兵藤くんは医療ルームへ転送されるだけの血を失いました」

「すると、匙は相撃ち覚悟で任務を果たした訳か……」

「本来ならば、貴方たちをカウンターで倒す予定でしたが……失策でした」

すると、此方に近づく影が見えた……部長たちだ。一誠と塔城もいるが、一誠は血液を搾り取られ、フラフラとしていた。

「驚きましたね。半分も血を取ったのにここまで来るとは」

「どうしても……リタイア前にとっておきの見せてやろうと思ってな……」

すると、一誠の身体にオーラが現れ、包み込んだ……何故か嫌な予感しかしないのは俺だけか？

「高まれ、俺の欲望！  煩惱解放！  貴方の声を聞かせて頂戴！」

……口上に対して、呆れて何も言えん。何だ今のは？

すると、一誠は部長を見ると意味深に頷いた。どうした？

「部長、いま俺の事を心配してくれましたね？  変な事ばかりすると身体に障ると……」

一誠の言葉に部長が驚愕の表情をする。……読心か？  口上の

にはそうだと思うが「洋服破壊」という前例が有るからな……。

「イツセー、どうしてそれを!？」

「一誠、凄くしようもない事をしているように思えるのだが……」

取り敢えず、思ってる事を言う。すると、一誠が血の気が無いのに無理して声を荒げる。

「しようもないわけがない！  俺は心じゃなく胸の内に聞いたんだ

！  否、おっぱいの声を！」

一誠はふらつきながらも、堂々としたポーズで新技を続けて叫んだ。

「相手の胸を読み取る「乳語翻訳」バイリンガル！  女性限定で相手は何をするの

かを読み取る事が出来る！  ……質問すれば相手のおっぱいは嘘、

偽りなく応えてくれる！  ……相手の心が解る、最強の技なんです

！ ……あう……血が足りねえ」

……しようもない技かと思つたら最強クラスの能力だった。女性限定だが、先読み可能。相手の心ではなく胸に問いかけるわけだから洗脳された相手や、魔術等で読心を防いでいる相手の行動も把握できる……一誠は対女性戦闘では無敵級の技を覚醒させたのか……。

まあ、能力は強いが……一誠が変態なのは変わらないな。

「一誠、倒れる前にシトリーの実体の居場所を教えてください」

「二「な……」」

シトリー眷属たちが驚きの表情を見せる。……塔城は何か納得した表情を見せていたが、仙術で奴らの人数を探った結果に疑問でも持っていたのか？

「気づいてないとしても？ 部長の様に有利な立場で出向くなら兎も角、不利な状況で出向くのは貴方みたいな方はしない筈だしな」

その言葉を聞いた後に、一誠が最後の仕事にかかる。

「会長のおっぱいさん！ いまの作戦はどういう感じか教えておくれ！」

……一誠には何が聞こえているのだろうか。すると、一誠が俺たちに向かって言う。

「会長のあの結界は……」ビシヨッフ「僧侶」二人の術による罫で……ここで無駄に結界を攻撃させて少しでもこちらを疲弊させる作戦なんだ……。本物は屋上で、映像に精神だけ移しているみたいだ……」

その言葉と共に、一誠は力尽き膝をついた。後は、任せておけ。

「イツセーさん!!」

アーシアは一誠の下へと走り、セイクリッド・ギア神器を発動させて回復させようとしたが……

「それを待っていたわ！」リバース「反転！」

「僧侶」の一人がシトリーの立体映像を解く。結界とシトリーの映像が消えるが、相手の「僧侶」ビシヨッフはかまわずにアルジエントの回復領域に足を踏み入れた。

それにより、アルジエントの神セイクリッド・ギア器から発する淡い緑色の光が、赤色の光りとなり……

「キャッ！」

「グアッ!？」

「クッ！」

『リアス・グレモリーの「ポーン兵士」ベシヨツプ「僧侶」、ソーナ・シトリの「ベシヨツプ僧侶」リタイア』

一誠とアーシア、相手の「ベシヨツプ僧侶」にダメージが入り、三人はリタイアされ、アナウンスが三人の脱落を告げる。

……チツ、「リバース反転」か。……迂闊だったな。

そして、ムードメーカーの一誠が消えたのは大きい。何故なら……「こ、小猫、気は感じる?」

部長の動揺が物語っている。同じく祐斗や姫島、塔城にも影響はあるだろうな。……全く動揺しない俺は薄情なのかね。

「……はい。彼処の屋上に会長の気を感じます」

そして、塔城はある店の屋上を指差す。その方向を見ると、悪魔の視力でだが、人影を確認した。

「残りの「ベシヨツプ僧侶」は誰が相手をする?」

俺が他のメンバーに問うと、俺の視界に黄金のオーラを全身から放つ姫島が映った。……オーラの性質は雷と光か。

「……イツセーくんに私の決意を見てもらおうとしたのに……」  
おぼつかない歩き方で一步前へ出る姫島。その瞳は涙で濡れている。

……これは一種のホラーじゃないか?　まあ、オリヴィエと比べたらどうってことは無いが。

「……この嫌な力を彼の前で使うことで……乗り越えようとしたのに……許さない」

姫島の手から大出量の光の混じった雷……雷光が生み出され、相手の「ベシヨツプ僧侶」草下に襲い掛かる。

というか、雷光を嫌な力と言う事は完全に受け入れた訳では無いのか……まあ、それは一誠の役目だな。

「ッ!　「リバース反転」!」

相手は「リバース反転」で迎え撃つも流石に雷と光を同時に反転するのは不

可能だったようで、激しい雷が彼女を包み込み、消えていった。

『ソーナ・シトリの「僧侶一名、リタイア」<sup>ピシヨック</sup>』

「これで、後はソーナのみね……」

部長がそう呟く……と、瞬間的に第六感による危険を感じて上を見ずに、叫ぶ。それと、同時にデュランダルとジユワユースに聖なるオーラを極限まで高める。

「部長ッ！　上だッ！　全力で相殺しろッ！」

何故なら……上空から水で創られた鷹や大蛇、獅子、狼、巨大な龍などが迫ってきていたからだ。

「二「なッ!」二」

「部長は右、姫島は左、塔城は仙術でサポート、祐斗は聖魔剣で撃ち零しを防げッ！　真ん中は俺がやるッ！」

驚いている時間は無い！　命令気味に指示を全員に出すと、デュランダルとジユワユースの斬撃を飛ばす！

「はあッ！」

「デュランダル！　ジユワユース！」

「雷光よッ！」

「咲き誇れッ！　聖魔剣よッ！」

滅びの魔力が鷹や狼を消滅させ、

雷光が大蛇や獅子を水に還し、聖剣による斬撃が龍を滅し、聖魔剣と仙術による結界が小型のものを防いだ。そして、僅かに水が地面に残るが、炎の聖魔剣により蒸発させて再利用を防いだ。

「……凄いだか。大丈夫か、お前ら」

と言って周りを見ると、部長、姫島、祐斗は肩で息をしている。比較的負担が少ない塔城は、結界を解いた。

……祐斗には無理させ過ぎたな……。今回の功労賞はグレモリー眷属は祐斗、シトリ眷属は匙だろな。

「ええ、また次がくる前にソーナを……」

「その必要はありません」

直ぐに回復した部長がそう言うが、現れたシトリによって言葉を遮られる。

「ソーナ！」

それを見て、俺は本心を告げる。

「最後の一撃はお見事でした、ソーナ・シトリー殿。魔力で創られた貯水槽の水を使つての一撃。危うく一網打尽となる所でした」

マジで危なかつたな。少し遅れたら、部長を抱えて退避するしか不可能だったぞ……。直感が優れてて良かった……。

すると、シトリーは俺を見て口を開く。

「……いえ、先程も言いましたが、貴方は侮れない。一瞬で機転を効かせて指示を出して相殺するなんて……」

「それで、どうしますか？」

こっちは、大分消耗したが……。それは相手も同じ筈。というか、あれだけの大量の水をコントロールして、魔力に余裕があるか……？

すると、シトリーは首を横に降ると、こう言った。

「あの一撃が私の最後の手です。よって……」

『ソーナ・シトリーの投了<sup>リザレイン</sup>を確認。リアス・グレモリーの勝利です』

What is a rating game?

### III

部長とシトリーのレーティングゲームが終了した。

結果は部長の勝利。

だが、こちらの陣営はギヤスパ、アジア、一誠と約半数を取られてしまった為、ゲームに圧倒的と言われていたグレモリー眷属は評価を下げた。特に、開始早々ギヤスパを失った事と、赤龍帝の力を宿した一誠がやられた事が原因だった。

しかし、俺と祐斗……リアス眷属の『騎士』<sup>ナイト</sup>は相応以上の評価を得た。

そして、俺はある部屋に訪れた。ノックをしてから入ると、その中にはサーゼクス様がいらっしやった。

「わざわざ時間を裂いて下さって有難うございます」

軽く頭を下げようと、するがサーゼクス様は手で制した。

「そう堅くならないでくれ……早速だが本題に入ろうか」

「わかりました」

「大体の事はアザゼルから聞かされた。とりあえず、彼女がカオス・ブリゲードの「団」を抜け次第はぐれ悪魔の解消出来るように動いて見るよ」  
「有難うございます」

今度は感謝の言葉と共に頭を下げる。頭を戻すとサーゼクス様と言う。

「構わないさ、リアスの眷属の為を思つての事だからね。……これからも、よろしく頼むよ」

「ええ」

「それと、オーデイン殿がまた会いたいと仰っていたね。面識が有るのかい？」

すると、サーゼクス様の雰囲気が変わる。話が変わったからか。  
「はい、一度だけです」

お付きのヴァルキリーさんも大変だろうな……セクハラ酷いし。

まあ、時と場合は弁えてるから良いんだけどな。

「今、イツセーくんの部屋にいらっしやるだろうから行ってくれないかい？」

一誠に会いに？　まあ、赤龍帝だろうしな。

「わかりました」

そして、一誠の病室へと向かった。

\*

そして、一誠の部屋をノックして開けると、一誠とリアス、帽子を被った隻眼老人……オーディン様がいらっしやった。雰囲気的には、オーディン様が入った直後か？

「お久しぶりです、オーディン様」

軽く会釈して言う。

「久しぶりじやの、ゼノン。あの時と変わらんの。やはり、長く生きているが若者の試合は素晴らしいのお」

すると、笑いながら髭を摩りながらオーディン様がそう言う。

「オーディン様ですね？　初めてお目にかかります。私、リアス・グレモリーですわ」

「この爺さんそんなに偉いの？」

すると、一誠が血迷った事を言う。……本当に言ってるのか？

「知らないのか？　……北欧の主神だ」

俺の言葉に一誠は驚く。いきなり名前だけでは正体がわからなかったらしいが……普通は、名前だけで分かるだろ。

「そちらがサーゼクスの妹じやな、試合見ておったぞ。お主も精進じやな。しかし、デカイのお……観戦中、ずーっと、こればかり見とっただぞい」

オーディン様は部長の胸をやらしい目付きで見る。呆れていると、いつの間にか入室していた銀髪の女性がハリセンでオーディンを叩き怒り始めた。

「ですから卑猥な目は禁止だと、あれ程申したではありませんか！



「これから大切な会談なのですから、北欧の主神としてしっかりとしてください！」

「……まったく、隙の無いヴァルキリーじゃて。わーつとるよ、これから冥界の悪魔、天使、堕天使、ギリシヤのゼウス、須弥山しゆみせんの帝釈天たいしやくてんとテロリスト対策の話し合いだからの」

叩かれた所を摩るオーデイン様……。しっかし、このヴァルキリーさんも元気だな。結構若そうなのに、お付きって事は優秀なんだろうな。

「……また、お付きのヴァルキリーが変わってますが……貴方も変わりませんか」

話し合い迄、時間が無いかも知れないが、オーデイン様にそう言う。「儂が変わらんのは、当たり前じゃろ。そうじゃな……このヴァルキリーはロスヴァイセというんじやが、未だに嫁の貰い手がない。ゼノンお主にはどうじゃ？」

……またか、二度目だぞ？ 前回も言ったからな、この方。しかも、そのヴァルキリーさんは既婚者だったぞ？ 対応した後にそのヴァルキリーさんに笑顔で怒られてたし……。

「勿体無いお言葉です。ですが、彼女の意味と言うものが……」

と、一度目と同じように言う。すると、オーデイン様がニヤリと微笑む……何故だ？ そこはつまらない奴だ、見たいな風になる筈では……

「な、何を言っているんですか!? それに、ゼノンさんも曖昧に返さないでください！」

すると、そう言っつて顔を赤くしながらアタフタとし始めたロスヴァイセさん。……まさか、本当？

「ほっほっほ、満更でもなさそうじゃな」

と、微笑みながら髭を摩るオーデイン様。……取り敢えず、嫁の貰いて云々について、自分の考えを述べる。

「まあ、でも若いんですから、そう焦らなくても良いんじゃないですか？ きつと、良い人が見つかりますよ」

……と言っつて、ズルズル独身になるってパターンも無くは無いが、

心配させるのも可哀想なので野暮な事は言わない。

「そ、そうですか。見つかりますよね!？」

すると、そう言つてロスヴァイセさんが近づいてきた。……なんか、必死さが逆に微笑ましいな。

「ええ、絶対……とは言い切れませんが、基本的にオーデイン様のお付きの方は結婚を期に代わつてますから、大丈夫ですよ」

と言つて、頭にポンツと手を乗せる。……撫ではしないがな、というか、自然に頭に手を乗せたな俺。直様、自然に手を離す。

すると、頭に手を乗せられてた事に気づいたのか、頭を直様下げた。……反応的には、恥ずかしかつたのか? まあ、年下からこんな事されるのはな……。

……というか、今更だが俺の身長は其れなりに高い。大体……アザゼルより少し低いくらいか?

グレモリー眷属の中では一番高いな。身長と精神年齢から歳上に見られるのは良く有る事だ。一誠たちがそうだったようにな。部長が一番驚いてたような気もするが……。

「……ところで一誠は何故涙を流す?」

ふと、横を見ると一誠が涙を流していたので、質問を投げかける。

「やつぱり、イケメンは何をやつても様になるのか!？」

「……知らん、と言うかお前も人の事言えないだろ……」

お前がイケメンとして騒がれないのは、言動の所為だろう。……というか、部長はウンウンと肯定してるが、それは本人に直接言え。

「さて、そろそろ時間じゃの。最後に老いぼれの言葉を聞いてくれ、世は試練だらけじゃが、楽しい事もある。存分に楽しんで、存分に苦しんで前に進むのじゃ」

そして、オーデイン様はロスヴァイセさんと共に部屋から出て行った。

\*

冥界での生活は終わり、人間界へ戻ってきた。電車内では塔城が猫

又の副作用でまるつきし猫になってたが……それ以外何事もなく、地下ホームに着いた。

そういえば、列車内で一誠が夏休みの宿題をしていたので、女性陣のアプローチの妨げにならない程度に手伝っておいた。……俺？

夏休み初日に終わらせたが？ 悪魔って便利だな。徹夜可能なんだからな……。

列車を降りて直ぐに、アルジエントは優男……確かディオドラ・アスタロト……に言い寄られていた。何だ？ 求婚でもするのか？

……ないな、したら馬鹿過ぎる。

「アーシア・アルジエント、やっと会えたよ……」

「あ、あの……」

「おい！アーシアに何の用だ！」

一誠はすぐに二人の間に入り、俺は話が拗れる前に用件を聞き出す。

「アスタロト家の次期当主、ディオドラ・アスタロト。何をしにここまで来たのでしょうか？」

「……ああ！ 思い出した。若手悪魔の会合でいた！」

一誠がそう言う。すると、ディオドラ・アスタロトは胸元を開き……

「アーシア、僕はキミを迎えに来た。会合の時、挨拶出来なくてゴメン。でも、僕とキミの出会いには運命だったんだと思う。僕の妻になって欲しい。僕はキミを愛しているんだ」

と、アーシアに求婚した。……何で冗談で思った推測が当たるんだよ……!?! というか、こいつは次期当主にしても、何なんだ、いきなり胸元開いて？ 変態か？

こうして、夏が終わり、秋が始まろうとしていた。

……新たな次の段階へと……

## 体育館裏のホーリー

It is transmigration to  
an angel?

「このような時期に珍しいかもしれませんが、このクラスに新たな仲間が増えます」

二期が始まったある日、女子の転校生が来ると言う情報が流れていた。情報源が何処から来たのか不明だが、クラスの男子は興奮を隠し来れてない様子だった。

一誠は、アルジエントがディオドラの嫁に行ってしまう夢を見たらしく沈んでいたが、今はもうすっかり立ち直って転校生が来るのを待っていた。

かという俺も楽しみ……というか、興味は有る。普通に考えて転校するタイミングがおかしい。なんで、二期開始直後に合わせて来ないで多少日が経った微妙な日なんだ？ 考えるなら、俺と同じ裏の関係者なんだろう。俺の隣に空きの机が有るしな。

天使側ならよっぽどな事が無ければ、ミカエル様から連絡を頂けるだろうし、堕天使側もわざわざアザゼルがいるのに追加でくるか？

……となると、悪魔で最後の「戦車<sup>ルーク</sup>」？ それともシトリーの新しい眷属？

そんな思考の中、先生に促されて入室してきたのは見慣れた栗毛のツインテールの少女だった。

……は？

殆どの男子は歓喜の声を上げるが、俺は驚きを隠しきれずに彼女を見つめた。

「紫藤イリナです。皆さん、どうぞよろしくお願いします！」

転校生の正体はイリナだった……。ミカエル様とは最近連絡を取ったが、妙ににこやかだったのはこの所為か……。

「という事で、イリナさんは彼の隣の席だ」

彼……と言うのは、俺だ。

「わかりました！」

とイリナは俺の隣に座る。それを見て、イリナに問いかける。

「……どういう事だ？」

すると、イリナはこう返す。

「えっと、詳しくは放課後にまとめて話すわ……」

と言葉を濁して。まあ、一人一人に話すよりそちらの方が効率的だろうしな。

\*

「紫藤イリナ。あなたの来校を歓迎するわ」

という事で、放課後の部室。オカルト研究部メンバー全員に顧問のアザゼル、シトリーが集まってイリナを迎え入れていた。人数的な問題かなんなのかシトリー眷属はいない。

「はい、皆さん！ 初めまして……の方もいらつしやれば、再びお会いした方のほうが多いですね。紫藤イリナと申します！ 教会……いえ、天使側の使者として駒王学園に馳せ参じました！」

部員全員が拍手を送り、イリナを歓迎する。

「早速ですが……」

ふと、イリナは立ち上がって祈る。すると、彼女の体が輝き、背中から白い翼が生えた。

俺を含む全員はその事に驚くが、アザゼルだけは顎に手をやりながら冷静に訊く。

「……紫藤イリナと言ったか。お前、天使化したのか？」

「天使化？ そんな現象があるんですか？」

祐斗がアザゼルに問いかけると、アザゼルは肩を竦めて口を開く。「いや、実際には今まで無かった。理論的なものは天界と冥界の科学者の間で話し合われてはいたが……」

「はい。ミカエル様の祝福を受けて、私は転生天使となりました。な

んでも「熾天使」の方々が悪魔や墮天使の用いていた技術を転用してそれを可能にしたと聞きました」

三大勢力の協力態勢は天使に転生させる技術にまで進んでいたと言うのはミカエル様から聞いて知ってたが……まさか、イリナが転生天使になるとは思っても見なかったな。

更にイリナが話を続ける。

「四大熾天使、他のセラフメンバーを合わせた十名の方々は、それぞれAからQ、トランプに倣った配置で『御使い』と称した配下を十二名作る事にしたのです。カードで言うKの役目が主となる天使様となります」

因みにイリナはAらしく、左手の甲にAの文字が浮かんでいた。更に将来、「悪魔の駒」と「御使い」のゲームも見据えているらしい。「ん？　と言う事は、お前は聖書に記された神様が死んだ事は知ってるんだな？」

すると、アザゼルが単刀直入に尋ねた。

勿論知ってるだろうな。じゃなきゃ、三大勢力の重要拠点の一つであるこの街に派遣される筈がない。

「勿論です、墮天使の総督様。主の消滅を既に認識しています」

「……ほお、信仰心の高いらしいお前が何のショックを受けずにここに来るとはな……」

俺からイリナの事について聞かされていたアザゼルは感心したように言う。

「いえ、当時はショックで寝込んでしまいました……まあ、色々ありました」

それに返答するイリナだが、妙に歯切れが悪い。疑問に思ったが……

「その辺りの話はここまでにしておいて、今日は紫藤イリナさんの歓迎会としましょう」

シトリーが切り出して他の生徒会メンバーをオカルト研究部の部屋に呼びだして、イリナの歓迎会が執り行われたのでさっきの疑問は後回しか……。



私こと、紫藤イリナの歓迎会の帰り道。私とゼノンは同じマンションへと向かっていった。何故なら、私の住むところがゼノンと同じだからだ。流石に同棲までは踏み切れなかったけど。

突然だけど、私はゼノンに恋をしている。

彼と始めて会ったのは、今はガブリエル様のQクイーンのグリゼルダ・クアルタさんと会った際だった。

当初の印象は、強くなるために必死だったせいかな怖い人だと感じた。

ただ、聖剣エクスカリバーの一振りを授かってミカエル様の命により共に行動するようになってからは彼がどういう人物なのかを理解できた。

そして、苦難を二人で乗り越えていく度にどんどん惹かれていった。

今だと、色眼鏡で長所も短所もどれも美点に見えてしまうのは仕方ないことだよな？

それ故に……

「……」

「……」

この黙ったまま歩き続けているのは耐えられない。理由はわかっている……ゼノンは私がああの際に言い淀んだ訳を知りたがっているが、気まずいのか言い出せない。

私の方も、言い淀んだ理由を話したいのだが、今だに決心がつかない。

……いや、ゼノンは待っているのだろう、私が言い出すのを。

それならば、決心して言い出さなくては……こんなんじゃない……。

「あのね……」

「どうした？」

すると、立ち止まり自然体で返してくるゼノン。それを見て、若干

顔を俯かせて呟くように言う。

「駒王協定の後、ミカエル様に色々聞かされたの……一つは聖書の神の事、もう一つはゼノンの事……」

ゼノンの事は、本当に色々聞かされた。……本当はゼノン自身から聞かされたかったんだけどね。

「それを聞いた時ね、私、自分が情けなくなっちゃって……」

「どうしてだ？」

「どうしてって……！」

「だって、ゼノンが悪魔になったのは、私が弱かった所為なんですよ!？」

「私が足を引つ張らなければ……」

貴方が死にかける事はなかった……とは言えなかった。

何故なら、ゼノンが私を抱き締めていたからだ。

「それは違う……」

その行動に胸が昂まり、自分の耳に心臓の鼓動が聞こえる。

ああ、恋は盲目とはよく言ったものだわ。これだけで、私の葛藤が馬鹿馬鹿しく感じちゃう。私は、ぎゅうとゼノンを抱き締める。

「イリナ？」

すると、ゼノンが疑問の声を出す。だけど、その声色は普段より優しく感じる。その私への気遣いに嬉しくなって、私は上目遣いで……

「もう少しだけ、ね？」

とおねだりしてみた。

すると、それに応えるようにゼノンは優しく抱き締めてくれた。

そして、暫くした後私を抱きながらゼノンが声をかけてくる。

「さて、行くか」

「……あ」

……ゼノンと離れた事により、私は自分でも無意識に声を漏らす。

その後、それを自覚し赤面する。

すると、やれやれと首を振るとすぐにゼノンは手を差し出す。

「ほら、手を出せ」

「う、うん！」

その言葉に私は顔を輝かせ手を握り、二人で歩き出した。



ーその後、自室に戻った私が先程の事を思い出し恥ずかしさのあまり、ベッドで足をバタバタさせ、眠れなかったのはここだけの秘密である。



イリナと紆余曲折あったが、自室に戻り就寝の準備を済ませた俺はベッドで考える。

「どうすればいいのかね……俺は」

というのも、先程のイリナとの帰り道での事を思い出したからだ。イリナの気持ちに気付いていながら、それを利用してるんだからな。

というか、イリナが悩んでいるあの時にイリナが足を引っ張った、というのはどうなんだろうか。まあ、今更とやかく誰が悪い悪くないを責めても現実が変わらないんだけどな。

実際問題、あの斬撃に生命力をつぎ込んだ自分が悪いんだけどな。それでイリナが悩んでたなら、それを解かないといけないしな。

まさか、転生天使になったのは力を手に入れる為か？ ……いや、動機が不純なら天使はすぐに堕ちる筈か。

というか、イリナは天使になったら悪魔である俺に心を揺さぶられたら堕ちるんじゃないのか？

……まさか、ミカエル様が言ってた「特殊な試み」って……。

その後日、ミカエル様に聞いたのは予想通りの答えだった。

「天使が悪魔に恋をしても、特殊状況下において「堕ちない」ようにしました……応援していますよっ。」

……今は、答えは出せないな。色々問題もあるしな。

I t i s t r a n s m i g r a t i o n t o  
a n a n g e l ?                    II

イリナが転校して来て、数日経った放課後の部室。

部長は部員……イリナを含む全員が集まった事を確認すると、記録メディアを取り出した。

因みに、次回のレーティングゲームの相手はディオドラ・アスタロトだ。

もう運命の巡り合わせが良すぎるとしか言いようがないがな。

「若手悪魔の試合を記録したものよ。私達とシトリー眷属のものもあるわ」

そして、眼前に巨大なモニターが用意されると。アザゼルがその前に立って説明をする。

「お前達以外にも若手達はゲームをした。組み合わせは、バアルとグラシヤラボラス、アガレスとアスタロトだ。で、今から見せるのは、それを記録した映像だ。ライバルの試合だから、よく見ておくようにな」

アザゼルの言葉に皆が真剣に頷き、まずはサイラオーグとグラシヤラボラス家のゼファードルの勝負を見た。その映像で見たのは……予想通りの結末だった。

最終的に「王」<sup>キング</sup>同士の戦いになったが、内容はゼファードルの繰り出す攻撃全てがサイラオーグに弾かれ、サイラオーグの拳が相手の防御術式を破壊していく一方的なものだった。

「……凶兇と呼ばれ、忌み嫌われたグラシヤラボラスの新しい次期当主候補がまるで相手になっていない。サイラオーグ・バアルとは、ここまでものなのか……」

祐斗はあまりの光景に目を細める。

一方的な戦闘に、一誠がゼファードルの強さを訊ねる。そして、部長の説明が説明する。部長曰く、六家限定にしなければ決して弱くはないらしい。

「ん？　　そういや、データ不明の「兵士」が出ていないが？」

レーティングゲームにすら出ていない……アザゼルなら知っているか？

「ああ、真相はよくわからんが恐らくコントロールしきれてないのかもしれない」

確か「兵士」7駒使用だったな……赤龍帝と同じ神滅具持ちか？

それとも、龍などの他種族なのか？　　まあ、アザゼルの線が高いのか？

「次に、能力のグラフを見せてやるよ。まあ、各勢力に配られたものだけだな」

そして、次にアザゼルは、「王」限定だが、各若手悪魔のパラメーターを表したグラフを出す。

グラフはパワー、テクニク、サポート、ウィザード、キングと表示された。

キングは王としての素質なんだろう。一応キングに関しての事前評価はサイラオーグ＞アガレス≧シトリー≧部長＞＞ゼファードルだな。

サイラオーグのパワーは事前調査と変わらない馬鹿げた数値の為、グラフが極端に伸びていた。

「やっぱ天才なんスかね？　　このサイラオーグさんも」

すると、グラフを見た一誠がアザゼルに問いかける。

「いや、サイラオーグ・バアルはバアル家始まって以来の才能が無かった純血悪魔だ。バアル家に伝わる特色の一つ、滅びの力を得られなかった。滅びの力を強く手に入れたのは従兄弟のグレモリー兄妹だったのさ。それにサイラオーグは、家の才能を引き継ぐ純血悪魔が本来しないものをして、天才共を追い抜いたのさ」

確か、このことからバアルとグレモリーに亀裂があるとかないとか。まあ、バアル側の嫉妬なただけだな。

「本来しないもの？」

アザゼルはふと俺を見てから言う。

「凄まじいまでの修業だよ。サイラオーグは尋常じゃない修練の果て

に力を得た稀有な純血悪魔だ。あいつには己の体しか無かった。それを愚直なまでに鍛えたのさ」

そういえば、上級悪魔は皆才能に恵まれているよな。サイラオーグだけは魔力の才能に恵まなかったが、アザゼルの言うとおり血の滲むような修業はしたんだろうが、それで成長できるのも才能の一つだと俺は思ってる。ただ、純血悪魔は魔力主義の奴も多いからサイラオーグを能無しとかいう奴は多いらしい。

「奴は生まれた時から何度も何度も打倒され、敗北し続けた。華やかに彩られた上級悪魔、純血種の中で泥臭いまでに血まみれの世界を歩んでる野郎なんだよ」

それに、魔力の才能がなくとも奴には闘気の才能があるからな。闘気の才能に言っちゃ、馬鹿げてるぐらいだ。

その後、サイラオーグとゼファードルの試合の映像が終わった。結果はサイラオーグの圧勝だったが、ゼファードルが最後まで諦めなかった事に俺は兄の言葉が響いたのか？　　と思った。

そして、アザゼルは静まり返る空気の中で言った。

「先に言っておくがお前ら、ディオドラと戦ったら次はサイラオーグだぞ」

「……ッ！　マジっスか!?!」

「願ったり叶ったりだな」

少し早いとは思うが……戦えるに越した事はない。

「少し早いではなくて？　　サイラオーグの前にグラシヤラボラス

のゼファードルとやるものだと思っていたわ」

すると、部長がアザゼルに問いかける。

「そうだったんだが、ゼファードルの奴が辞退した。サイラオーグとの戦いで心身に恐怖を刻み込まれた……かと思いきや、自分の未熟さに気付いて一から鍛え直すみたいだぜ。それで、未熟な自分が参加しても他の奴らに迷惑をかける……なんて魔王に直訴したらしいな。今頃はファルビウムの奴に扱かれてるんじゃないか？　　……部下任せかも知れねえが」

その言葉に全員が驚いた。色々驚いたぞ。……それだけ兄の一言

が影響したか……。

「お前らも充分に気をつけておけ。あいつは対戦者の精神も断つ程の気迫で向かってくる。あいつは本気で魔王になろうとしているからな。そこに一切の妥協も躊躇も無い」

アザゼルの忠告を全員が染み込ませる様に受け止め、部長は深呼吸した後、改めて言う。

「まずは目先の試合ね。今度戦うアスタロトの映像も研究の為にこの後見るわよ。対戦相手の大公家の次期当主シーグヴァイラ・アガレスを倒したって話だもの」

……まじか？

「アガレスが負けた、か……意外だな。まあ、勝負は何が起こるか分からないからな」

しかし、あの<sup>ディオドラ</sup>変態はどんな手を使って勝ったんだ？ ……つて、それは言い過ぎか。

「そうね……私達を苦しめたソーナ達は金星、アガレスを打ち破ったアスタロトは大金星と言う結果ね」

そう言いながら部長が次の記録映像を再生させようとした時……部室の片隅で転移用魔方陣が展開され……部室の片隅に爽やかな笑顔を浮かべるディオドラが現れた。

「ごきげんよう、ディオドラ・アスタロトです。アジアに会いに来ました」

何故、こうもお前は空気を読めないんだよ？

\*

部室のテーブルに部長とディオドラ、顧問としてアザゼルも座り、姫島がお茶を淹れて部長の傍らに待機する。

他の皆は部室の片隅で待機。雰囲気は最悪。まあ、俺の態度は外からみたら最悪だがな。

何故なら俺は、ディオドラの死角になるように他の部員の後ろに座り携帯端末のようなもので、見れなかったディオドラとアガレスの試

合の動画を見ていた。ちやつかり、祐斗もみているのはスルーする。アルジエントに会いに來ただけなら早く帰れって話だし、用件があつても録でも無い事だろうしな。

暫くしてディオドラが切り出す。

「リアスさん。単刀直入に言います。「僧侶」<sup>ビショップ</sup>のトレードをお願いしたいのです」

確か、トレードは「王」<sup>キング</sup>同士で駒となる眷属を交換出来るルールの一つで、同じ駒同士の交換を可能とするシステムだったかな。何かの事情が無い限りは行われ無いんだつたよな。

まあ、ディオドラが十中八九指名するのはアルジエントだろう。そして、部長が断るのも想定済み。変にディオドラがアプローチかけてきたら一誠が動くだろうし、アルジエント的にはそちらの方がいいだろう。アザゼルがいる以上、変な真似はしないだろうがな。

そして、予想通りディオドラはアルジエントを指名し、部長は間髪いれずに断つた。その後、やりとりが続くが、勿論トレードは成立しなかった。まあ、部長がいい事を言っていたけども。

「……分かりました。今日はこれで帰ります。けれど、僕は諦めません」

ディオドラは立ち上がりアルジエントの元に近寄る。終盤から見始めて、ちようど良く試合も終了したので、携帯端末を仕舞つてディオドラの挙動に注意する。

当惑しているアルジエントの前に立つと、その場で跪いて手を取り……

「アジア。僕は君を愛しているよ。大丈夫、運命は僕達を裏切らない。この世の全てが僕達の間を否定しても僕はそれを乗り越えてみせるよ」

訳の分からない事を抜かしてアルジエントの手の甲に口づけをしようとするディオドラだが……

「何しようとしてんだテメエ……」

一誠が肩を掴んで制止させた。

「離してくれないか？　薄汚いドラゴンに触れられるのはちよつと

ね」

そのディオドラの言葉に、一誠はキレる寸前だったが、怒りが爆発する前に、アルジェントがディオドラの頬にビンタした。そして、アルジェントは一誠に抱きついて叫ぶ様に言う。

「そんな事を言わないでください！」

ディオドラの頬はビンタで赤くなっていたが、それでも笑みを止めない。

……心中では何考えてんだか。

「なるほど、分かったよ。では、こうしようかな。次のゲーム、僕は赤龍帝の兵藤一誠を倒そう。そうしたら、アジアは僕の愛に答えて欲しい……」

「お前に負ける訳ねえだろッ！」

一誠はディオドラの言葉を遮って面と向かって言い切る。

その時にアザゼルの携帯が鳴り、数分間の応答の後にアザゼルは告げる。

「リアス、ディオドラ、丁度良い。ゲームの日取りが決まったぞ。五日後だ」

その日はディオドラとの邂逅は終わり、帰っていった。

そして、その後改めてディオドラとアガレスの試合を見たが……色々不自然というか明らかに駄目だろこれ。まあ、蛇を使った相手と戦った事があるからわかるんだがな。

「アザゼル……」

という事で、俺はアザゼルにその事を言った。部屋にはアザゼルと俺の二人のみで、他の部員は既にいない。

「……やっぱり、お前はわかったか……」

「ああ、どうするんだ？ 何も考えてないお前じゃないだろ？」

すると、アザゼルが口を開く。

「旧魔王共を燻り出す作戦は考えてある……サーゼクスは説得済みだ」

……なら、口を挟む必要はないか。

「わかった、内容は詳しくは聞かんが……俺たちが囿になるんだろ？」  
囿って言っても特に何かするって事は無いがな。

「ああ、お前たちをそういう形で使いたくはなかったんだが……」

「まあ、いいさ……つと、電話？」

……こんな時間帯に電話か。部長？　珍しいな。席を一旦外して電話に出る。

「部長？　どうした？」

因みに、電話番号等は既に部員全員分は所持している。

『突然なんだけど、明日取材が入ったわ。冥界のテレビ番組に私たちがでるの。若手悪魔特集で出演よ』

冥界テレビか。「サタンレンジャー」という特撮ものや「魔法少女ミラクル・レヴィアタン」とかいう魔王自らが出演するものも有る。中級悪魔試験の内容に何故が含まれるから、チェックはしている。……流石に視聴はしていないが、中級悪魔試験の参加が出来る様になったら見るかも知れない。

「了解」

そして、一言二言会話したのちに電話を切りアザゼルの元に戻る。

「……で、話は戻るがその件に関しては了解した。とりあえず、何も言わなきゃいいんだろ？」

わざわざ言っただけに余計に警戒させる必要はないだろうからな。

「ああ、悪いな」

\*

そして、その帰り道。ある人物に遭遇したので声をかける。

「珍しいな、ミルたん」

そこには筋肉隆々の漢女がいた。……よく通報されないな、あれ。

「おおつ、師匠だによ！」



「寄るな、暑苦しい。で、どうしたんだ？」

すると、買い物袋を掲げるミルたん。

「買い物の帰りだよ」

「そうか、飯か」

「そうだよ、いくら魔法少女になったからといって食べなきゃ生きていけないだよ」

少女……？ その発言はスルーして話題をふる。

「そうだな。そういえば、例の魔法は完成したのか？」

例の魔法とは、彼の渾名？ の元である「魔法少女ミルキースパ

イラル」の主人公の使う魔法の事である。流石に威力までも本物だと不味いので、エフェクトが豪華なただの光なだけだな。

……ただ、「魔法の光」なので成り立ての中級悪魔なら書き消せる威力の光力なのは秘密だ。

「やっぱり、一人じゃ無理だっただよ。だけど、皆で力を合わせたら出来たよ！」

……出来たのかよ、あれ。まあ、お友達で合わせて出来たなら大丈夫だろう。使う機会もないだろうし。

すると、視界に三人の人影が見える。あれは、一誠に……

「……ヴァーリに美猴？」

すると、二人が此方を振り向く。

「その声はゼノ……!？」

「な……!？」

ヴァーリと美猴が啞然とした声を上げる。……ミルたんを見て。「によ」

ミルたんが挨拶をすると、それを見たヴァーリと美猴が……

「頭部から察するに猫又か？ ゼノンが声をかけるまで、気づかなかったぞ……仙術か？」

「あれは……トロールの類じゃね？ ……猫トロール？」

「……お前ら、失礼だな」

などと、勝手な事を言い出したのでツツコミを入れる。……まあ、初見は驚くわな。すると、一誠に呟く。

「相変わらずだな、ミルたん……」

「そういや、ミルたんは昔は一誠のお得意様だったな。まあ、色々あつて今では俺のお得意様なんだがな。」

「そして、ミルたんが去った後にヴァーリたちに問う。」

「で、お前らは何しに来たんだけ？」

すると、一誠が答える。

「それが、ヴァーリが次のゲームは気をつけろって言ってきた」

次？ ……やはり、デイオドラは繋がっているのか。

それを表に出さずにヴァーリたちにさらに問う……答えてくれるはずもないだろうが。

「次か、お前らは何を知っている？」

すると、ヴァーリが予想通りの答えを返す。

「いや、それは言える筈が無いだろ？」

「確かにな……というか、ただ忠告に来ただけか。今ここで……というわけでは無いんだな？」

一応、念の為に聞く。

「そうだ。……それでは、用も済んだ。失礼しよう」

「じゃあな！ 赤龍帝にゼノン！」

そして、美猴によって転移したヴァーリたち。

「……帰ったか」

「そういや、美猴に話したい事があつたが……まあ、いいか。俺に不都合はないし。」

そして、俺は兵藤と別れて自分の部屋へと向かった。

\*

そして、その翌日。冥界のテレビ番組に出演する事になった俺たち。

魔方阵で冥界の都市部にある大きなビルの下に転移した。プロデューサーの悪魔に連れられてビルの上層内に着くと、廊下の先から見知った顔が歩いてくる。

「サイラオーグ。あなたも来ていたのね」

部長が声をかけたのは、サイラオーグ。その後ろには金髪のポニーテールの女性……「女王」のクイーシャ・アバドンがいた。

「リアスか。そっちもインタビュアー収録か？」

「ええ。サイラオーグはもう終わったの？」

「これからだが、リアス達とは別のスタジオだろう。……そういえば、お互い新人丸出し、素人臭さが抜けない試合だったな」

苦笑するサイラオーグの視線が一誠に移る。

「どんなにパワーが強大でもカタに嵌れば負ける。相手は一瞬の隙を狙って全力で来る訳だからな。とりわけ神セイクリッド・ギア器は未知の部分が多く、何が起るかわからないから、ゲームは相性も大事だ。お前らとソーナ・シトリーの戦いは俺も改めて学ばせてもらった。だが、お前とは理屈なしのパワー勝負をしたいものだ」

サイラオーグは一誠の肩を軽く叩き、去っていった。……最後に俺にのみ闘気を当てて……。なんか以前あった時より格段に強くなつてないか？

その後、スタジオらしき場所に案内され、スタッフの悪魔が声をかけてくる。

「ええと、木場祐斗さんにゼノンさん、姫島朱乃さんはいらつしやいますか？」

俺を含む三人が返事をする、そのスタッフの悪魔は言う。

「あなた方に質問がそこそこいくと思います。三人とも人気上昇中ですから」

それを聞いて問いかける。

「……二人は兎も角、俺もか？」

「ええ、木場さんとゼノンさんは女性ファンが、姫島さんには男性ファンが増えてきているのですよ」

なんでも、レーティングゲームの結果というのは予想以上に効果を発揮するらしい。そして、スタッフは続ける。

「それから、兵藤一誠さんは……？」

「あ、俺です」

一誠は名指しされて、手を上げるがスタッフは首を傾げていた。しかし、思い出したのかポンツと手を叩いた。

「……ああっ！　貴方が！　いやー、鎧姿が印象的でしたので、素の方が解りませんでしたよ」

「ははは……」

一誠……頑張れ。というか、赤龍帝かつ禁手が全身鎧である以上多少は仕方ないだろう。

\*

「……流石に歓声は慣れないな……」

収録後、全員が楽屋でぐったりしていた。

祐斗や俺の時は女性陣の黄色い歓声が、姫島の際は男性陣から「朱乃さまー！」などと叫びが上がっていた。

……時々聞こえた、木場×ゼノンやらゼノン×木場は幻聴だとしてよう。

また、一誠は子供たちから「おっぱいドラゴン」や「乳龍帝」と呼ばれていた。どうも、シトリー戦の時にそういうイメージが定着したようだが、仕方ないな。

『二天龍と称され、赤龍帝と呼ばれ畏怖された俺が……乳龍帝と呼ばれる事になるなんて……』

それにより、ドライグが精神的に参っていたので、カウンセリングを紹介しようか……と考えた俺だった。

……そして、ディオドラとの対戦日へと日は過ぎていった。

# Whom and resumption?

ローレーティング・ゲーム当日

俺達はオカルト研究部の部室に集まっていた。

アーシアはシスター服、俺は黒を主体とした戦闘服、他の皆は駒王学園の夏服を着て待機していた。

そして、時間になり魔法陣に包まれて転移する……。

\*

目を開けて視界に飛び込んで来たのはとてつもなく広い場所だった。ギリシヤにありそうな神殿の様な風景で、後方に入り口があった。

「……おかしいわね」

部長が怪訝そうに言う。

すると、神殿とは逆方向に魔方阵が出現する。しかも、一つだけじやなく辺り一面、俺達を囲うように。

「これは……アスタロトの紋様じゃない！」

「旧魔王派あちら側の悪魔の者たちだな」

祐斗が剣を構え、姫島も手に雷を走らせ戦闘体制に入る。

そして、魔方阵から大勢の悪魔が現れた。

「忌々しき偽りの魔王の血縁者、グレモリー。ここで散ってもらおう」

悪魔の一人が部長に挑戦的な物言いをすると同時に魔力弾を放つ。

それを前に出て拳で弾き飛ばすと同時に、直感がアルジエントの危機を告げる。

「部長ッ！ アルジエントを囲めッ！」

その直後、アルジエントの悲鳴が聞こえた。……今の魔力弾は囲だったというわけか。

「イツセーさん！」

空から聞こえてきた声、上を見るとアルジエントを捕らえたディオドラの姿が……。

「やあ、リアス・グレモリー。そして赤龍帝。アーシア・アルジエントはいただきますよ」

「アーシアを放せ！　この糞野郎！　卑怯だぞ！　ゲームをするんじゃないのかよ!?!」

一誠の叫びにディオドラは醜悪な笑みを見せる。

「バカじゃないの？　最初からゲームなんてしないさ。キミ達はこ

こで彼ら『禍の団』の精鋭達によつて八つ裂きにされるのさ」

精鋭……か。どっちかと言えば質より量のような気がするんだが

？

「ディオドラ。あなた、『禍の団』に通じたと言うの？　しかも

ゲームまで汚すなんて万死に値する！　何よりも私の可愛いアー

シアを奪い去ろうとするなんて……!?!」

部長の怒りによつて、真紅のオーラが一層膨れ上がる。

「彼らと行動した方が、僕の好きな事を好きなだけ出来そうだと思つたものだからね。ま、最期の足掻きをしていてくれ。僕はその間にアーシアと契る……意味は分かるよね赤龍帝？　追ってきたかったら、神殿の奥まで来てごらん。素敵なものが見られる筈だよ」

一撃なら与えられるか？

「一誠、アスカロンを」

「あ、ああー!」

俺の呼び掛けに反応した一誠は籠手を出し、先端から聖剣アスカロンを取り出して渡してきた。

「返してもらおう」

そして、ディオドラに向かって愚直にジャンプし、注意を自分に向けさせると共に油断を誘う。ディオドラは魔力弾を撃つて俺を落とそうとした。しかし……

「グアッ！　……な、何だと!?!」

聖剣がディオドラの肩を貫いた。

そして、その貫いた聖剣を掴み取るとディオドラの魔力弾を打ち消

した。……本来なら亜空間から剣を射出する技なんだが、アルジエントに刺さる危険性を考えてデュランダル一本しか射出しなかったのが仇となったのか、ディオドラに致命傷を与える事ができなかった。魔力弾を打つ際に身体がブレたのも要因の一つみたいだ。

傷付けられたディオドラは俺に怒りの表情を見せるも、直ぐに元に戻リアルジエントを連れ去り逃げた。

「アーシアアアアアアアアアアッ！」

「一誠くん！　今は目の前の敵を片付けるのが先だ！」

祐斗は一誠に檄を入れる。一誠も頷いて囲っている悪魔の軍勢と対峙する。

すると、オーデイン様が転移してきたので、声をかける。

「オーデイン様、どうして此方へ？」

「……あとちよつとだったのにお……まあ、いいわい。今、運営側と各勢力の面々が協力態勢で迎え撃つとる。ディオドラ・アスタロトが裏で旧魔王派と手を引いていたのまでは判明しとる。だがの、このままじゃとお主らが危険じゃろ？　救援が必要だった訳じゃ。しかし、このゲームフィールドごと強力な結界に覆われててのう、そんなじよそこらの力の持ち主では突破も破壊も難しい。内部で結界を張っているものを停止させんとどうにもならんのじゃよ」

「相手は北欧の神だ！　討ちとれば名が揚がるぞ！」

すると、実力差のわからない旧魔王派の悪魔共がオーデイン様に攻撃を仕掛けた。対して、オーデインは杖をトントツ、と地に突くと、攻撃の魔力弾が掻き消える。

「本来ならば、わしの力があれば結界も打ち破れる筈なんじゃがここにいるだけで精一杯とは……。はてさて、相手はどれ程の使い手か。ま、これをとりにあえず渡すようアザゼルの小僧から言われてのう。まったく年寄りを使いに出すとは、あの若造はどうしてくれるものか……」

オーデインはグレモリー眷属人数分の小型通信機を渡す。

「ほれ、ここはこのジジイに任せて神殿の方まで走れ。ジジイが戦場に立ってお主らを援護すると言っておるのじゃ。めっけもんだと

思って、さっさといけ」

オーデインが杖を俺達に向けると、薄く輝くオーラが発生する。

「それが神殿までお主らを守ってくれる。ほれほれ、走れ」

その言葉に一誠がいらぬ心配をするが、オーデイン様はいとも簡単に、グンクニルで悪魔共を蹴散らしてみせた。

そして、俺たちはオーデイン様に感謝して神殿に走った。

\*

神殿の入り口に入り、全員がオーデイン様から貰った通信機を耳に付ける

『無事か？　アザゼルだ。とりあえず、言いたい事もあるだろうが、まずは聞いてくれ。このレーティングゲームは禍の団の旧魔王派の攻撃を受けている。そのフィールドや近くの空間領域にあるVIPルーム付近も旧魔王派の悪魔だらけだ。現在、各勢力が協力して連中を撃退している』

観戦側にも敵が乗り込んでいるようだが、各勢力が協力しているなら彼方は平気だろう。

『最近、現魔王に関与する者達が不審死するのが多発していた。裏で動いていたのは「禍カオス・ブリゲイトの団」の旧魔王派。グラシヤラボラス家の次期当主が不慮の事故死をしたのも実際は旧魔王派の連中が手にかけてたって訳だ』

グラシヤラボラスの家柄の関係者は「禍カオス・ブリゲイトの団」の旧魔王派に殺されたと言う事か。

『首謀者として挙がっているのは旧ベルゼブブと旧アスモデウスの子孫だ。カテレア・レヴィアタンが同じだった様に、旧魔王派の連中が抱く現魔王政府への憎悪は大きい。このゲームにテロを仕掛ける事で世界転覆の前哨戦として、現魔王の關係者を血祭りにあげるつもりだったんだろう。現魔王や各勢力の幹部クラスも来ている。襲撃するのにこれ程都合なものはないからな』

グレモリー眷属の試合は最初から旧魔王派に狙われていた。ター



ゲットはそれだけではなく、現魔王とその血縁者、観戦に来ていた各勢力の長達を狙いに来たという訳だ。

「やはり、ディオドラが急激に強くなったのは……」

勘付いたように部長がつぶやく。

『オーフィスの力を借りたんだろう。最も、ディオドラがそれをゲームで使った事は奴らも計算外だったろうな。グラシヤラボラス家の一件と併せて、今回のゲームで何か起こるかもしれないと予見が出来たんだ。しかし、奴らは作戦を途中で覆さなかった』

ディオドラはオーフィスの「蛇」の力でパワーアップして試合に勝った。……「蛇」なんか使ったらバレるまではいかなくとも怪しまれるだろうに頭弱いのか？ ……弱いんだろうな。

『あつちにしてみれば、こちらを始末出来ればどちらでも良いんだろう。しかし、俺達としてもまたとない機会だ。今後の世界に悪影響を出しそうな旧魔王派を一気に潰すにはちょうど良い。現魔王、天界のセラフ達、オーデインのジジイ、ギリシヤの神々、帝釈天が出張ってテロリスト共を一網打尽にする寸法だ。事前にテロの可能性を各勢力のTOPに極秘裏に示唆して、この作戦に参加するかどうか聞いたんだがな。どいつもこいつも応じやがった。どこの勢力も勝ち気だよ。今全員、旧魔王派達と暴れてるぜ』

うわあ、現魔王にセラフ、オーデイン様にギリシヤの神々、帝釈天かよ。相手に同情したくなる面子だな。

トール様加わったり、シヴァとかのインドラの神々が加わったら更に圧倒的なんだろうけどな。

「……このゲームは完全にご破算って訳ね」

『悪かったな、リアス。戦争なんてそう起こらないと言っておいて、こんな事になっちゃまっている。一応、ゲームが開始する寸前までは事を進めておきたかったんだ。奴らもそこで仕掛けてくるだろうと踏んでいたからな。案の定その通りになったが、お前達を危ない所に転送したのは確かだ。この作戦はサーゼクスを説得して、俺が立案した。どうしても旧魔王派の連中をいぶり出したかったからな』

すると、一誠が叫ぶ。

「先生、アーシアがディオドラに連れ去られたんです！」

『……そうか、どちらにしてもお前達をこれ以上危険な所に置いておく訳にはいかない。アーシアは俺達に任せておけ、そこは戦場になる。どんどん旧魔王派の連中が魔方陣で転送されてきているからな。その神殿には隠し地下室が設けられている。かなり丈夫な造りだ。戦闘が静まるまでそこに隠れていてくれ。後は俺達がテロリストを始末する。このフィールドは禍の団の所属の神滅具ロンギヌス所持者が作った結界に覆われているために、入るのは何とか出来るが、出るのは不可能に近いんだよ』

神滅具の『絶霧』《テイメンション・ロスト》。結界・空間に関する神器の中でも抜きん出ているためか、術に長けたオーデインでも破壊出来ない代物。所持者は恐らく、ゲオルクと言う人物。

「先生も戦場に來ているんですか？」

『ああ、同じフィールドにいる。かなり広大なフィールドだから、離れてはいるが……』

それを聞いた一誠は、静かに告げる。

「……アーシアは俺達が救います」

その表情は決意に満ちていて、一步も引かないようだった。そこで、背中を押すようにアザゼルに言う。

「アザゼル、俺たちの意思は変わらん。お前らもそうだよな？」

「ああ！　アーシアは俺の仲間だ！　家族なんだ！　助けたい

んだ！　俺はアーシアを失いたくない！」

「アザゼル先生、悪いけれど私達はこのまま神殿に入ってアーシアを救うわ。ゲームはダメになったけれど、ディオドラとは決着をつけなくちゃ納得出来ない。私の眷属を奪うと言う事がどれ程愚かな事か、教え込まないといけないのよ！」

一誠と部長に続き、姫島、祐斗、塔城、ギヤスパーが意思を語る。

「……だとき」

それを聞いたアザゼルがやれやれとしているのが浮かぶ。そして、アザゼルは俺たちにこう言う。

『……つたく、頑固な餓鬼どもだ。今回は限定条件なんて一切無い。

だからこそ、お前達のパワーを抑えるものなんて何も無い。存分に暴れてこい！ 特にイツセー！ 赤龍帝の力をディオドラに見せつけてこい！』

「オッスー」

『最後にこれだけは聞いていけ、本当に大事なことだ。奴らはこちらに予見されている可能性も視野に入れておきながら事を起こした。多少敵に勘付かれても問題の無い作戦でもあると言う事だ』

「つまり、相手の方にも隠し球があるということ？」

可能性としては「蛇」か？

『ああ、可能性は高い。それと、レーティングゲームが停止している以上リタイヤによる転送は無い。危なくなっても助ける手段は無いから肝に銘じておけ……充分に気をつけてくれ』

ここでアザゼルからの全体通信が切れる。が、個別通信がアザゼルからかかる。

『ゼノン。理解してると思うが、あれは使うなどは言わんが、出来るだけ隠せ。それと、こつちが使用している際には使用は不可能だから注意しておけ』

「了解……」

そして、通信が切れる。その間に部長が塔城に仙術でアルジエントの居場所を探らせたのか、塔城が神殿を指差し口を開く。

「あちらからアーシア先輩とディオドラ・アスタロトを感じます」

全員が無言で頷き合い、神殿の奥へ向かって走り出した……。

広大な神殿の中を進み、新しい神殿を目指す。それを何度か繰り返している、前方からフードを深く被ったローブ姿の小柄な人影が八人現れた。

『やー、リアス・グレモリーとその眷属の皆』

神殿の中にディオドラの声が響くのが姿は見えない……高みの見物といった所か？　一誠は辺りを見回している。

『無駄だよ赤龍帝。僕は最奥の神殿にいる。それまで暇だから、少し遊ぼう。中止になったレーティングゲームの代わりだ』

そして、ディオドラがルールを説明する。……正式にルールと呼べるものかはわからないが。

『お互いの駒を出し合って試合をしていくんだ。一度使った駒は僕達の所へ来るまで使えないのがルール。後は好きにして良いんじゃないかな。第一試合は「兵士」<sup>ポイン</sup>八名を出す。因みにその「兵士」<sup>ポイン</sup>達は既に「女王」<sup>クイーン</sup>に昇格しているよ。いきなり「女王」<sup>クイーン</sup>八名だけれど、それでも良いよね？　リアス・グレモリーは強力な眷属を持っている事で有名な若手なのだから』

「……良いわ。あなた達の戯れ事に付き合っただけ。私の眷属がどれ程のものか、刻み込んであげるわ」

「ぶ、部長、相手の提案を呑んで大丈夫なん……」

『まあ、だけどそこまで僕も鬼じゃない。特別ルールを出してあげるよ』

部長がディオドラの提案に快諾する。一誠がそれに対して不安げに告げると、ディオドラが割り込んできた。

「特別ルール？」

怪訝な顔で聞き返す部長。

『そう。これを満たせば君たちは勝敗が決まる前に、次に進んでいい事にしてあげるよ。アジアを救いたい君たちには時間が惜しいだ

ろうしね』

ディオドラの声色が良くなった事から録でもないルールだとわかる。……何をさせるつもりだ？

「……聞くだけ聞いてあげるわ、言いなさい」

『今回の試合はその糞聖剣使い一人のみ選出して貰えばいい。』

……ああ、それと僕を傷つけた聖剣は使用禁止だからね』

「なんですって……!?!」

その理不尽なルールに部長が驚きよりも怒りの声を上げる。

糞呼ばわりに、デュランダルの制限か。とても根に持っているな。

まあ、思惑通りなんだが。

『別に、特別ルールを受けなくても構わないよ……別にね』

「……貴方……!」

部長が怒りに震える。そりや、普通に考えれば、俺を差し出さないと先に進めない」と言ってるんだからな。部長が怒るのは無理もない、指示に従わなきゃアルジェントに何されるかわからないし、俺を見捨てるわけにもいかないんだろうな。……まあ、それは普通に考えればの話だけだな。

「部長、先に行ってください」

「ゼノン!」

部長は驚く。

「……部長、先に行きましょう」

すると、祐斗が助け舟を出した。……これは、信用されてると踏んで良いのかね。

「祐斗!? ……そうね、私が信じなきゃいけないわね。ゼノン、必ず勝って来なさい! 皆、行くわよ!」

「ええ、我が剣に誓って必ず勝ちます……!」

ちよいと、臭い台詞を吐く。まあ、自分の手札と、相手のレベルからして負ける要素はほぼないがな。

そして、部長に続いてこの場を後にする他の部員たち。

「ゼノン! 負けんじゃねえぞ!」

「ゼノンくん、頑張ってください」

「……ゼノン先輩、無茶はしないで下さい」

上から一誠、姫島、塔城が去り際に声をかけてくる。そして、最後に……

「心配無用だ。……祐斗！ デュランダルは何時でも使っているぞ！」

「使うまでもないさ……そっちこそ、聖魔剣を渡そうか？」

「言うようになったな、お前も。さっさと行け……」

と、祐斗と言葉を交わす。

皆の姿が見えなくなり、残りがディオドラの「兵士」と俺だけになると、ディオドラの声が聞こえてくる。

『さて……他の眷属がいなくなったけど、どんな気持ちだい？』

「……」

『……恐ろしくて声も出せないのかな？ それじゃ、試合スタートだ！』

その言葉とともにローブを捨て去り、此方に向かってくる相手に静かに声をかける。

「……一つ、お前たちに言っておく」

「「「「「「……？」」」」」」」

全員が愚かにも足を止める。不意打ちして下さいといっているようなものだが、今回はその為に声をかけた訳ではないので、言葉を続ける。

「今から一分間だけ考え直す時間をやる。大人しく投降すれば、命だけは助けてやるが……」

『ふはははは！ 今更何を言ってるんだい？ そんなあからさまな命乞いは無駄だよ！ ……お前たち！ 「蛇」を使って血祭りに上げる！』

しかし、それはディオドラによって遮られた。そして、オーフィスの「蛇」によつと相手の「兵士」八名の力が増大する。

先程のディオドラの所為もあつてもう此方の聞く耳を持たないだろう。

まあ、仕方がないか……。

威掛法により肉体強化をすると共にカウントをスタートさせる。

相手は八名だが、愚かにも特に連携も取らずに襲いかかってきた。

……やはり「蛇」は欠陥があるのか。それとも、自分のキヤパシティーを越える力の増幅に冷静な思考が出来なくなっている？

「喰らいなさいッ！」

その内の一人の拳が自分に襲いかかる。それを片腕で逸らし、次々と迫り来る相手の攻撃を最低限の動きで対処する。

「……」

……とは言っても、蛇による力の増幅は目を見張るもので、傍から見れば押されているように感じたのか。

『ははは！　いい気味だ！　僕にあんな事をした報いだよ！』

と、上機嫌なディオドラの声が聞こえる。まあ、それも……

「………だ」

『は？　何を言ってる……』

「時間だ……禁手化ッ!!」

ゴッ！　　つと魔力が流出して周りの「ポーン兵士」を吹き飛ばす。

「キヤ………！」

自身を纏う黄金色の鎧……神器の具合を確かめて、光の槍を構えて言う。

「ダウンフォール・ドラゴン・アナザー・アーマー禁手『墮天龍の鎧』。一時的な禁手である上に、借り物だ

から出力不足が否めないが……今回は十分だ。

さて、懺悔の準備は出来たか？」

そして、俺の周りに光の槍を無数に展開する。ディオドラの反応が無いのは、バランス・ブレイカー禁手による力の放出の影響で通信が途切れたのか？

まあ、何にせよ。

「終りだ……」

そして、轟音と共に光の槍による数の暴力がディオドラ眷属に襲いかかる。

煙が晴れると、そこには何も残ってはいなかった。

「……アーメン」

せめてもの情けに、消し去った彼女たちがいた場所に向かって十字

を切る。

さて、早ければ参加は不可能だが、その次の試合くらいに間に合う筈。急ぐか……。

神殿の奥へと足を進めた……。

\*

神殿を幾つか潜ると、そこにある人物……いや、なにかがいた。

「……フリードか……生きてるのか？」

原型はほぼ皆無だが、残る上半身で分かる。これは……

「ひひひ、その声はゼノンくんですかい？ どうよ、俺のこの無様な姿。折角、オリヴィエの姉さんに素敵にして貰ったのに、お前さん所の金髪騎士に切り刻まれて、そのまま放置されたんだぜ？ あの野郎『最期はゼノンに任せるさ』とか言ってくれちゃったんだぜ？」

「どんだけ、お前が信頼されてんだって話だよ」

その話を聞いて、少なくとも部長たちがここを難なく突破したことを知り、安堵すると共に祐斗の気遣いに感謝する。……こいつとは、仕事では接点は然程なかったがな。

「……そうだな、いい友を持ったよ。それと、お前のその姿は貴様の末路にはピッタリだ」

力に溺れたものの末路……少なくとも、俺にもあり得た結末。

「ふへへ、そこまで言いますかい。まあ、でもそれなりに楽しかったぜ、俺はよ。……ただ、お前さんに、一度くらい純粹に勝ってみたかった……って、なんだ？ その馬鹿みたいな顔はよ。似合ってるぜ？」

「そりや、お前の口からそんな台詞が出てくりやな。最期まで狂ったまま死ぬかと思ってたよ」

こいつとは、はぐれに墮ちるまでは組手相手殺し合いだったからな。まあ、フリードの言う通りこちらが全勝だったが。

「そりや、どうも。それじゃ、トドメさせよ。このまま野垂れ死ぬくらいならお前に殺される方がマシだ」



トドメは祐斗に譲られたか。まあ、一応フリードとの関係は話したからな。……気を使わせたか？

「そうか……じゃあな、フリード」

デュランダルを取り出す。

「またな、地獄で待つてんぜ？」

「抜かせ。……デュランダル」

そして、フリードに突き刺し聖なるオーラを解放させて消滅させた。

そして、もう一度十字を切る。

「……アーメン」

\*

俺が一誠たちのいる最奥の神殿についた途端、神殿が大きく揺り出した。

場を確認すると、一誠が床に拳を叩きつけて巨大なクレーターを作っていた。また、前方に巨大な円形型に彼方此方に宝玉が埋め込まれ、怪しげな紋様と文字が刻まれている装置を見つけた。……

セイクリッド・ギア  
神 器……いや、ロンギヌス神滅具によるものか？

その装置の中央にはアルジェントが張り付けられており、他の部長を含む部員はその周りで一誠とディオドラの戦いを見つめていた。

しかし、ディオドラは血塗れで左腕と右足が折れており、歯を頻りに鳴らしていた。無様と言えばそれまでだが、一誠の奴、ブチ切れてないか？ 原因はディオドラに間違いはないだろうが。

そして、一誠はディオドラの胸ぐらを掴み、素顔を晒して睨み付ける。

「二度とアジアに近づくなッ！ 次に俺達の元に姿を現したら、

本当に消し飛ばしてやるッ！」

『相棒、そいつの心はもう終わった。そいつの瞳はドラゴンに恐怖を

刻み込まれた者だ」

「……終わってたか」

すると、俺の声に気づいたのか、全員がこちらを見る。

「ゼノン！」

「無事だったようだね」

此方に近づこうとしているメンバーを手で制すと、口を開く。

「今は、このアルジエントを拘束している奴を如何にかしなないとだろ？」

と、もう一度アルジエントを拘束している装置を見てから、ディオドラに向かって話しかける。

「おい、ディオドラ。これは神滅具……このフィールドと同じ

ディメンション・ロスト  
『絶 霧』によるものだな？」

すると、ディオドラが震えながらも答える。

「そ、その通りさ。それは『絶 霧』の禁 手、『霧の中の理想郷』

の能力で創りだされたものさ。創り出した結界は一度正式に発動しないと止める事は出来ない……アーシアの能力が発動しない限りね」

よし、流石に知っているな。……こいつが首謀者かは不明だが、少なくとも知らない訳は無いと踏んで質問したが、あつていて良かった。

さらに、質問を続ける。

「発動の条件、この結界の能力は何だ？」

「……発動の条件は僕か、他の関係者の起動合図、もしくは僕が倒されたら。結界の能力は枷に繋いだ者、つまりアーシアの神 器セイクリッド・ギアの能力を増幅させて反転リバースすること」

反転リバース……能力の質を逆転させる力。例えば、聖と魔の関係がわかりやすいだろうか、聖は魔に、魔は聖に変わると言うものだ。しかし、となると……。

「効果範囲は……？」

「……このフィールドと、観戦室にいる者達だよ」

成る程……よく考えたな。

「狙いはこれによる、各勢力のTOP陣の壊滅か……大胆だが、有効的

な作戦だな」

俺の言葉に全員が青ざめた。しかし……

「となると、シトリーの一戦でそんな作戦が思い付かれたのか？  
それとも……」

「君の予想通りだよ。反転自体の可能性は、随分前から出ていたように、シトリーの者がそれを実際に行った事で計画は現実味を帯びたそうだ……」

それを聞いた部長が怒りで顔を歪める。

「ソーナも利用されていたと言うの……!? それに、そのデータが利用されるなんて……!」

しかし、随分と『禍の団』カオス・ブリゲードが裏で手を引いていたんだな……

「とりあえず、この枷を破壊するなりして、無力化しなくてはならないが……ドライグ、現状でこの枷を破壊出来る術はあるか？」

一応、神滅具ロンギヌス繋がり、且つ最長年のドライグに問う。

すると、少し時間を空いた後にこう言う。

『無謀だ、方法無いと言うわけでは無いが……』

それを聞いて、核心に迫る。

『ジャガーノート・ドライヴ 覇 龍 か?』

『……コントロール出来れば、が前提になる。今の宿主では不可能に近い。例え、コントロール出来ても大して持たない上、死ぬまで解けないかもしれない』

『ジャガーノート・ドライヴ 覇 龍』は、無理か。なら、部長に訊ねる。

「……そうか、部長たちは何か試したか？」

すると、結果は惨敗。

滅びの魔力や雷光、仙術に聖魔剣でも歯が立たなかったようだ。

それを聞いて、頭を高速で回転させて策をたてる。

「……俺の考える限りで二つ、思いついた策がある」

「言って頂戴。たとえ無茶でも今は貴方の策に賭けるしかないのだから……」

部長から許可を得たので、それを言っていく。

「一つは一誠、お前が要……というか、お前次第だ」



……鼻血を噴き出しながらという謎の構図だが。その間に姫島にアルジエントの服を魔力で創るように告げると祐斗とギヤスパーと共に背を向けた。

「いくぜツ！」 『洋服破壊』ツ！」

アルジエントの両手両足を捕らえていた枷が木っ端微塵に砕ける音……とアルジエントの服が消し飛んだ音が響いた。

「や、やったー！」

一誠の成功を告げる声が聞こえた後に、塔城からもう服が出来たと言われて振り向く。すると、アルジエントが一誠に抱きついていて。「信じてました……。イツセイさんがきつと助けに来てくれるって」「当然だ……。でも、ゴメンな。辛い事、聞いてしまったんだろう？」  
辛い事……。？     ディオドラ絡みなのは確かだが、後で聞いておくか。

「平気です。あの時はショックでしたが、私にはイツセイさんがいますから」

笑顔でこんな事をいうアルジエント。俺がもし一誠だったら惚れ直してると思う。まあ、もしもの話だが。

「部長さん、皆さん、ありがとうございます。私のために……」

「アーシア。そろそろ私の事を家で部長と呼ぶのは止めても良いのよ？     私を姉と認めてくれて良いのだから」

「……ッ！     はい！     リアスお姉さま！」

今度は部長とアルジエントが抱き合う。ギヤスパーは大泣きし、塔城が頭を撫でる。俺と祐斗はそれを見て笑みを浮かべ、緊張を解いた。

「さて、アーシア。帰ろうぜ」

「はい！     その前にお祈りを……」

アルジエントは天に向かって何かを祈る。流石、元聖職者だな、様になってる。え？     俺？     形だけはしっかりしてる……と言われたな。

「何を祈ったんだ？」

「えへへ、内緒です」

笑顔で一誠のもとへ走り寄るアルジエントだったが、突如、まばゆい光の柱が発生する。

光の柱が消え去ると……

「……アーシア？」

そこにはアルジエントの姿がなかった。

What is a jaguar noted  
river?

アルジエントが消え、俺たちが警戒態勢を取ると同時にある男が現れた。そいつは……

「……貴様は確か旧魔王のベルゼブブ……」

その俺の呟きに眉を顰めてシャルバは口を開く。

「……転生悪魔ごときに、私たち真の血統が「旧」などと言われるのは不愉快だ、黙っていろ」

すると、俺に向かつて指から光が放たれる。それをデュランダルで弾く。それを見たシャルバは、舌打ちしてから部長の方に視線を動かすと話を始めた。

さらっと殺そうとするのは如何なものかと。

「……さて、私の名前はシャルバ・ベルゼブブ。偉大なる真の魔王ベルゼブブの血を引く、正統なる後継者だ。サーゼクスの妹君、貴公には死んでいただく。真の魔王は私たちだ。魔王はそれぞれ一人ずつだろう?」

カテレアだったか? 旧レヴィアタンは既に死んでいるけどな。すると、それを聞いて部長が叫ぶ。

「直接現魔王に決闘も申し込まずに、その血族から殺すだなんて卑劣だわ!」

それを聞いたシャルバは、特に気にせず言葉を返す。

「先ずは現魔王の家族から殺し、奴らに絶望を与えなければ意味がない。我々、偉大なる真の魔王の力を奴らに見せつけなくてはならない。しかし、デイオドラ。君には失望したよ、私が力を貸してやったのにこのざまとは……」

絶望ねえ……それに偉大なる真の魔王( )とか……。旧魔王は小物しかいないのか?

「た、助けてくれ、シャルバ! 君の力があ……」

すると、デイオドラはシャルバに必死に助けを求め。しかし……シャルバの指から放たれた光が容赦なくデイオドラの胸を貫く。そして、デイオドラは床に倒れ伏す間もなく霧となって消滅した。哀れな最後だったな。

「外道ツ！　何よりもアーシアを殺した罪！　絶対に許さないわッ！」

部長は激高するとともに、紅いオーラが迸る。　姫島も怒りで顔を歪め雷光を身に纏う。祐斗は聖魔剣を創り構え、各々が戦闘体制に入るが……

「アーシア、何処に行ったんだよ？　ほら、帰るぞ？　父さんも母さんも待ってるし、家に帰るんだ。だけど、隠れていたら帰れないじゃないか。はは、アーシアはお茶目さんだなあ……」

一人だけ例外で、一誠は覚束ない足取りでアーシアを探す。

……怒りよりも精神的ショックにより現実を逃避しているのか。

「アーシア？　帰ろう？　もう誰もアーシアをいじめる奴はいないんだ。いたって、俺がぶん殴るさ！　ほら、帰ろう？　　体育祭で一緒に二人三脚するんだから……」

その一誠の言葉に塔城とギヤスパーは嗚咽を漏らし、姫島も顔を背けて涙を頬に伝わせる。部長は一誠を優しく抱き、何度も頬を撫でる。

祐斗は怒りに震えながらアジュカから目を離さず聖魔剣を構えている。そんな中、俺はデュランダルを構えながら冷静にシャルバに問いかける。

「……本当にアルジエントを殺したのか？」

あの光の柱に殺傷能力はないと感じたのだが……悪魔である以上多少はダメージが入るだろうが、それも致死量ではないように見えたが……？

「そうだ、あの娘は死んだ。次元の狭間に送られその体は消滅した」

この言葉が紡がれた瞬間、第六感がある可能性を訴えている……！

「ドライグッ！　アスカロンをッ！」

『……もう、無理だ。……リアス・グレモリー、今すぐこの場を離れる。』



あれが発動する……彼奴は選択を間違えた』

「部長、すまん！」

俺は一瞬で一誠に近づき、部長を一誠から引き離れた。一瞬、部長は抵抗を見せるが、俺の鬼気迫る表情に素直にしたがった。

引き離れた瞬間、神殿が大きく揺れ、一誠が血の様に赤いオーラを発した。そして、一誠の口から老若男女、複数入り交じった呪詛のごとき呪文が発せられる。

『我、目覚めるは……』

〈始まったよ〉〈始まったね〉

鎧が鋭角なフォルムに変わる。

『覇の理を奪いし二天龍なり……』

〈いつだって、そうでした〉〈そうじゃな、いつだってそうだった〉

背中から巨大な翼が生える。

『無限を喰い、夢幻を憂う……』

〈世界が求めるのは〉〈世界が否定するのは〉

両手両足から爪が伸びる。

『我、赤き龍の霸王と成りて……』

〈いつだって、力でした〉〈いつだって、愛だった〉

そして、兜からは角が幾つも形作られ、ドラゴンそのものに変容していく。そして、一誠……いや、赤龍帝達は、最後の一言を紡ぐ……！

「二二二汝を紅蓮の煉獄に沈めよう」

『Juggernaut Drive!!!』

そして、赤い龍のオーラによって、周囲の地形が破壊され、龍となった一誠が四つん這いになり、叫びをあげる。

「GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA! ASIAA  
AAAAAAAAAAAAAAAAA!

最早人語ではない、獣のような叫び。そして、一誠は一瞬でシャルバに接近し、肩に喰らいついた。

そして、シャルバが振りほどこうと一誠に攻撃する前に宝玉の一つから刃が生まれ、シャルバの右腕を切断してそのまま喰い千切った。

……しかし、あれは『ジャガーノート・ドライブ覇龍』なのか？　何か違和感を感じる……不完全と言つていいのかわからんが、そんな気がする。

だが、此方に敵意が向いていないのは幸運だな。……最悪の場合は刺し違えも止めなくてはな。

「巫山戯るな！　赤龍帝ッ！」

片腕を無くし、激高したシャルバは残った左腕で光の一撃を放つ。規模はそれなりのものだが、対する一誠の翼が光り輝き、そのシャルバの一撃が襲いかかる瞬間に……

『DividDividDividDividDividDividDividDividDividDividDividDividDivid!!!!』

光の波動が複数回半減し、極小のものに変わり一誠に当たる。勿論、そんなものが今の一誠に効いているわけがない。

そして、一誠は兜の口を開くと、そこから赤いレーザーを一直線に伸ばし、シャルバの左腕を吹き飛ばす。

「ば、化け物め！　わ、私の力はオーフィスによって前魔王クラスにまで引き上げられているのだぞ!？」

両腕を無くしたシャルバの顔が恐怖に包まれる。周りを見ると、部長は目を見開き、全身を震わせていた。姫島も塔城もギヤスパーも祐斗も一誠を恐れるように見えて、全身の震えが止まらない様子だ。俺は何故か震えも恐怖も感じていなかった。……化け物なら色々見てきたからな、色々とな。

そんな中、一誠は両翼を広げ、鎧の胸元と腹部を開くと、そこからレーザーの発射口が姿を現す。

そして、赤いオーラが発射口に集まり、横に広がった翼も赤い光を辺り一面に放とうとしている。

溜め時間と赤いオーラの質量を考えるとこの神殿を覆い尽くす……!?!?!?退避時間は……間に合うか!?!?

「部長ッ！　撤退だ！　巻き込まれるぞッ！」  
「でも、イツセーが！」

一誠が心配なのか、躊躇している部長。それを見て、叫び祐斗に指示を飛ばす。

「巫山戯るなッ！　　祐斗ッ、こいつらを連れて行けッ！　　俺は一番最後に出るッ！」

俺は叫ぶと、祐斗に指示すると同時に、他の奴らにも目で指示する。「すみません！」

部長を祐斗が抱えて退避すると、それに続いて姫島たちも入り口を出て行った。

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!!』

それを見届けると俺は大して効果は見込めないが、入り口付近に结界を貼り、デュランダルを構える。

「さて、全員避難出来たか……デュランダルッ！　　輝きと化せッ！」

そして、俺はデュランダルから凝縮した聖なるオーラを解放した。

『Longinus Smasher!!!』

一誠がシャルバに向かって放ったH!撃の余波と俺の一撃がぶつかり合い、俺は光に飲まれた……。

\*

光に飲まれた俺は、目を開き破壊された辺りを見回して呟く。

「……デジャヴユか？」

……何を言っているんだ俺は、頭でもやられたか？

「ゼノン！」

部長たちの呼ぶ声がしたので、振り返るとそこには大してダメージを受けていない部長たちの姿があった。

「大丈夫か？」

「貴方、腕……！」

部長が心配そうに俺の腕を見つめる。そして、気付く……俺の両腕がボロボロになっている事に。

「……聖なるオーラを流し過ぎた所為だな。悪魔と化した俺には少し負担が大きかったようだが……治療を受ければ何とかなる。……今

はそれよりも一誠だ」

すると、姫島が治癒魔法をかけてくれた。応急処置に過ぎないそうだが、礼を言つて一誠の方を向く。因みにデュランダルは亜空間に既に戻してある。……両腕が使えないからな。

「イツセー……」

「〇〇〇〇〇〇〇〇……」

一誠は瓦礫と化した神殿の上に立ち、天に向かって弱々しく咆哮をしている。

……どうやって戻す？　アザゼルと連絡を取るか？　それとも……

「困っているようだな？」

俺がアザゼルと連絡を繋ごうとした時、空間に裂け目が生まれ、声が聞こえる。

そこから現れたのはヴァーリと美猴にアーサーだった。

……敵意は感じない、何のようだ？

「ヴァーリ」

部長の言葉に皆が攻撃態勢に入る。しかし、ヴァーリはその手を制す。

「やるつもりはない。見に来ただけだ。赤龍帝の『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』を……

しかし、あの姿を見るに中途半端に『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』と化したようだ」

やはり中途半端か……。

そこで、ヴァーリに問いかける。

「……この状態、元に戻るか？」

『ジャガーノート・ドライブ完全な』覇 龍』ではないからわからん。どちらにしてもこの状態が長く続くのは兵藤一誠の生命を危険にさらすことになるな」

「そうか……」

すると、美猴がこちらに歩み寄る。よく見ると、腕には見知った少女……アルジエントを抱きかかえていた。

「ほらよ、おまえらの眷族だろ、この癒しの姉ちゃん」

「アーシアー！」

「アーシアちゃん！」

部長と姫島、皆がアルジエントのもとに集まる。アルジエントは、気絶しているようだが、息はしていた。

「わざわざ、助けてくれたのか？」

と、ヴァーリたちに問うとアーサーが口を開く。

「いえ、私たちがちょうどこの辺りの次元の狭間を探索してた時に、この少女が次元の狭間に飛んできたのですよ。ヴァーリが見覚えがあると聞いて、ここまで連れてきたのです。運が良かったですね」「偶然か……それとも必然か……」

ともかく、アルジエントが無事で何よりだ。ヴァーリたちが居合わせなかったら、次元の狭間の「無」にあてられて消失していた所だったな。

「後の問題は一誠だが……」

見ると、此方の様子を関せず嘆きの咆哮を続けている。

「アーシアの無事を伝えればあの状態を解除出来るかしら」

「危険だ、死ぬぞ。ま、俺は止めはしないが。そうだな……何か彼の深層心理を大きく揺さぶる現象が起これば何とかなりそうだが……」

一誠の深層心理を揺さぶる……か。

「おっぱいでも見せれば良いんじゃないかね？」

すると、横で頭を搔いていた美猴が言う。それは……どうなんだ？

「あの状態ではどうだろうな……ドラゴンを鎮めるのはいつだって歌声だったか……」

「赤龍帝の歌か……そう簡単には無……」

「あるわよー」

俺の言葉を遮って飛んできたのは、イリナだった。

……あるのか？

……何だ、嫌な予感しかしない。

イリナの話によると、サーゼクス様とアザゼルが用意した秘密兵器らしい……が、やはり嫌な予感しかしない。

「よく分からないけれど、お兄さまとアザゼルが用意したのなら、効果が見込めるかもしれないわね」

部長が映像機器を下に置いてボタンを押すと、空中に映像が映し出

される。

その映像に映し出されたのは禁<sup>バランス・ブレイカー</sup>手状態の一誠だが……

『おっぱいドラゴン！ はっじつまっるよー！』

謎の一言を発した一誠のもとに子供達が集まる。

『おっぱい！』

そして、子供たちの謎の返事を返し、一誠と子供達のダンスが始まり、宙にタイトルと歌詞が表示されたのだが……全員が驚愕した。

――

「おっぱいドラゴンの歌」

作詞：アザ☆ゼル

作曲：サーゼクス・ルシファー

ダンス振り付け：セラフォルー・レヴィアたん

とある国の隅つこに

おっぱい大好きドラゴン住んでいる

お天気の日はおっぱい探してお散歩だ☆

ドラゴン ドラゴン おっぱいドラゴン

もみもみ ちゅーちゅー ぱふんぱふん

いろいろなおっぱいあるけれど

やっぱり おっきいのが一番大好き

おっぱいドラゴン 今日も飛ぶ

(後略)

――

こ れ は ひ ど

い

皆が呆然とする中、歌は進む。

文句を言いにはアザゼルと連絡を取ろうとするも、先ほどの

覇<sup>ジャガーノート・ドライブ</sup>龍との衝撃に通信機が役に立たなくなっていた。

「うう、おっばい……もみもみ、ちゅーちゅー……ず、ずむずむ……いやーん……ポチツと」

すると、一誠が呟く。内容は歌詞の一部だが……鎮まるのかよ。

もう、あとは部長様に任せよう。

「部長、逝ってこい」

「え？」

投げやりに言う俺に此方を向く部長。すると、姫島がすかさずアシストをする。

「そうよ、リアス！ イッセー君はあなたの胸を求めているわ！」

「え、ええ？」

この時、ヴァーリは額から汗を流しながら視線を逸らし、美猴は腹を抱えて笑いを堪えていた。

それを見て、ヴァーリに問いかける。

「ヴァーリ、アルビオンの精神がやばそうなのは気のせいかな？」

『……』

返事はない。すると、ヴァーリが重々しく口を開く。

「……気のせいではない、喋れないほどに不味い」

「……「禍カオス・ブリゲードの団」にカウンセリングは無いか？」

「ない」

この即答に俺は、アルビオンに同情した。……一誠は二天龍の精神を破壊したいのか？

「……そうか、頑張れ？」

「お、俺の……お、おっばい……」

一誠は求めるものを発見し、震える指をいつの間にか一誠に近づいていた部長の胸へ運ぶと一誠の鎧が解除された。

それを見ていた美猴とヴァーリが呟く。美猴は笑いを堪え切れ切れないが。

「くく……リアス・グレモリーの胸は兵藤一誠の制御スイッチなのかい？」

「……美猴、それは酷いな。これでは、名実共に乳龍帝ではないか

……」

「シリアス何処に行った……」

俺の咳きは誰にも聞こえずに、風に消えた。

\*

「うーん、あれ？　何がどうなったんだ？」

一誠が目を覚まし、号泣する部長に抱きつかれる。……これ見ると男女の仲にしか見えないんだが……。

その後、一誠は祐斗から説明を受けたが、『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』後の事は覚えていなかったみたいだ。ドライブの方は完全に覚えているみたく、精神状態がよろしく無かった。

また、アルジェントにも抱きつかれていた。

そして、ヴァーリが一誠に話しかける。

「兵藤一誠。無事だったようだな」

「ああ。なんだか、世話になっちゃったようだな」

「ま、たまには良いだろう。それよりもそろそろだ。空中を見ている」

一誠が訝しげに空を見ていると……空間に巨大な穴が開き、そこから巨大な何かが姿を現す。

「よく見ておけ、兵藤一誠。あれが俺が見たかったものだ」

空中をとてつもなく巨大な生物……真紅の龍が雄大に泳いでいる。

「赤い龍と呼ばれるドラゴンウエルシユ・ドラゴンは二種類いる。一つは君に宿るウエルズウエルシユ・ドラゴンの赤き龍。つまり、赤龍帝だ。白龍皇もその伝承に出てくる同じ出自のもの。だが、もう一体だけ赤い龍がいる。それが「黙示録」に記されし龍だ」

それを聞いて、俺は口を開く。

「……「アボカリユプス・ドラゴン真なる赤龍神帝」ドラゴン・オブ・ドラゴングレートレッド。「真龍」及び「D×D」と称される龍。自ら次元の狭間に住み、永遠に飛び続けている。今回のお前たちの目的はこれも兼ねていたのか？」

「いや、シャルバ達の作戦は俺達にとっては、どうでも良い事だったんだ。今回のオフィスの目的はあグレートレッドれを確認する事だ」



確認……？　　オーフェイスがグレードレッドに敵意を持ったということか？

「グレードレッド、久しい」

すると、いつの間にか俺達のすぐ近くに黒髪黒ワンピースの少女が立っていた。……気付かなかった、だど？　　まさか……

「こいつが、オーフェイスか？　　アザゼルから聞いた話では、前回は老人の姿だったらしいが……」

ヴァーリがそれを聞くと、自分も最初はそう感じたのか苦笑し、口を開く。

「そうだ。同時に「禍の団」カオス・ブリゲードのトップでもある」

すると、オーフェイスはグレードレッドに向けて指鉄砲を構えて撃ちだす格好をした。

「我は、いつか必ず静寂を手にする」

ああ、そういう事か。ヴァーリがテロ組織に身を置いているのは、オーフェイスの目的であるグレードレッドと言うドラゴンを倒す、というのが一致しているからか。

その直後、アザゼルとタンニーン様が降ってくる。

「先生、おっさんー」

「おー、イツセー。元に戻ったようだな。俺もどうなるか怖かったが、お前ならあの歌や女の胸で『ジャガーノート・ドライブ覇龍』から戻るかも……なんて思っていた。乳をつついて禁バランス・ブレイカー手に至った大馬鹿野郎だからな。あの歌の作詞をした甲斐があったぜ」

「アザゼル、戻ったのは良いんだが……ドライグとアルビオンの精神状態が不味いんだが？」

末期とはいかないがカウンリングやらの処方が必要だ、と告げると。

「スマン……だが、犠牲はつきものだ……」

と、言った。

……他の方にも相談をしなくてはな。

そして、アザゼルとタンニーン様は空を飛ぶグレードレッドに視線を向けると、タンニーン様が口を開く。

「懐かしい、グレートレッドか」

「タンニーン様も会った事が？」

それを聞いて、タンニーン様に訊ねる。

「ああ、見たただけだけどな。俺なんぞ歯牙にもかけてくれなかった」

まあ、グレードレッドは基本的に実相世界の生物や事柄には関心を示さないからな。

すると、ヴァーリがアザゼルに話しかける。

「久しぶりだな、アザゼル。クルゼレイ・アスモデウスは倒したのか？」

「……いや、旧アスモデウスはサーゼクスと殺り合ったが、寸での所で逃げられた。だが、シャルバを一誠が片付けた事で、首謀者を失った配下も逃げ出したさ」

やはり、旧アスモデウスも来ていたか。しかし、逃げられたのか。

「お兄さまは？」

すると、部長がサーゼクス様について訊ねる。

「境界が崩壊したから、観戦ルームに戻った」

アザゼルが部長たちにそういうと、今度はオーフィスに言う。

「オーフィス。各地で暴れ回った旧魔王派の連中は退却及び降伏した……事実上、まとめていた末裔共を失った旧魔王派は壊滅状態だ」

「そう。それもまたひとつの結末」

オーフィスは特に驚く様子も無く言った。

まあ、オーフィスもグレードレッドと同じく実相世界の生物や事柄には関心を示さないからな。……グレードレッドを倒すこと以外には特に関心は向かないのだろう。

「お前らの中であとヴァーリ以外に大きな勢力は人間の英雄や勇者の末裔、セイクリッド・ギア神器所有者で集まった英雄派だけか」

「英雄派か……オリヴィエがそうだろうな。知っているのは、名前だけだが、曹操にゲオルクか……」

それに、ジークフリードもいるんだろうな。

これなら、英雄派と名前負けしていないメンバーの名前だな。これに知らないメンバーもいると考えると考えると、旧魔王派とは比べものになら

ない戦闘力じゃないか？

「さーて、オーフィス。やるか？」

アザゼルが光の槍をオーフィスに向けるが、オーフィスは踵を返し……

「我は帰る」

と言うと、一瞬で消え去った。

ヴァーリ達も退散しようとしてアーサーが作った次元の裂け目に入ろうとしていたが、ヴァーリは一誠に言葉をかける。

「兵藤一誠……俺を倒したいか？」

「……倒したいさ。けど、俺が超えたいものはお前だけじゃない。同じ眷属の木場やゼノンも超えたいし、ダチの匙も超えたい。俺には超えたいものがたくさんあるんだよ」

「俺もだよ。俺も君以外に倒したいものがある。その中でも、グレードレッドは最も戦いたい相手だ。俺はいつか『真なる白龍神皇』になる。赤の最上位がいるのに、白だけ一步前止まりでは格好がつかないだろう？

……おかしいな、現赤龍帝と現白龍皇は宿命の対決よりも大切な目的や目標が存在している。今代の赤と白は可笑しな存在なんだろうが、そういうのもたまには良い筈だ……だが、いずれは」

「ああ、決着つけようぜ。部長のおっぱいを半分にされるところだからな」

一誠が拳をヴァーリに向けて言い放った。それを見てアーサーが祐斗に言葉をかける。

「木場祐斗くん、私は聖王剣の所持者であり、アーサー・ペンドラゴンの末裔。アーサーと呼んでください。いつか、聖剣を巡る戦いをしましょう。それと、ゼノンくん。オリヴィエに勝ったら貴方もいずれ……。それでは」

それを告げると、アーサーは先頭で次元の裂け目に入る。そして、ヴァーリと美猴も次元の裂け目に入る。

「……強くなれよ、兵藤一誠」

「じゃあな！　ゼノン！

おっぱいドラゴン！

それとスイツ

子姫！」

が、最後に美猴が地雷を落とした。

勿論、自覚があるのか反応する部長ことスイッチ姫。

「なっ！　　何よその呼び名は！」

「へへっ、良い呼び名だろ！」

この呼び名は今さつき大笑いしていた時に思い付いた名前だ！

赤龍帝の禁フランス・ブレイカー 手にもそれで至ったんだしな！」

そして、部長スイッチ姫が何かを言う前に次元の裂け目は閉じた。



「……………こは……………？」

謎の場所。赤龍帝の放った一撃に飲み込まれ、恐らくは空間の切れ目へと弾き飛ばされたのだろうとシャルバは推測した。

「これは無様……………両腕が無くて他もボロボロ……………これが真なる魔王ねえ……………」

すると、あざ笑うかのような女性の声が聞こえる。その顔を見た途端シャルバは怒りに顔を歪ませる。

「貴様……………何の用だ……………！」

「何の用って……………助けに来たのよ？」

同じ「禍カオス・ブリゲート」の仲間じやない？」

悠々とそんなことを言い出す相手にシャルバは疑問を返す。

「……………仲間だと……………？　　本気で……………言っているのか？」

「さあ？　　で、どうするのかしら？　　別に見なかつた事にしてもいいんだけど……………少し手伝って欲しい事があるのよ……………」

目の前の女性は、笑みを含んだ声色でそう言う。死にたく無ければ飲め……………と言っているのはシャルバは理解している。

だが、シャルバには新たな目的が出来た。この場で死ぬわけにはいかないし、死ぬにしても赤龍帝に一泡吹かせてからだ、復讐の炎を瞳に宿す。

「……………協力、しよう……………」

そして、シャルバの意識は途切れた。  
「……交渉成立。とりあえずは、こいつらの治療かしらね……」  
そして、二人は霧に包まれた。

## 放課後のラグナロク

What is an Excalibur?

一誠の家の地下一階にある大広間とある作品の観賞会が行われていた。……今更だが、一誠の家が豪邸というか、要塞になっているのはグレモリーの所為らしい。

『遂に貴様の最後だ、乳龍帝よ』

巨大スクリーンには、青髪に素顔を隠すための黒い仮面をした男が映っている。

『何を！　この乳龍帝が貴様ら闇の軍団に負ける筈がない！　行

くぞー！　バランス・ブレイク 禁手化ッ！』

すると、映像が移り変わると一誠そっくりのヒーローが変身を遂げた。変身の形態は、まんま赤ブー・ステッド・ギア・スケイルメイル龍帝の鎧だ。

説明すると、巨大モニターに映る作品は「乳龍帝おっぱいドラゴン」と言う特撮作品で、冥界で絶賛放送中の子供向けヒーロー番組らしく、放送開始から視聴率が五割を超えたとかいう話らしい。

……例の歌もしっかりEDの曲として、収録されてる。

「……気になったんだが、あれは誰だ？」

先程、「遂に貴様の〜」と言った人物が余りにも誰かさんに似ているので訊ねた。

「勿論、ゼノン先輩です。設定では闇の軍団の幹部ですが、その正体及び名前は不明らしいです」

すると、何故か俺の隣に座る塔城が俺の問いに答えた。

……というか、勿論って俺をどう思ってるんだお前は……？

因みに、先ほどの情報も塔城から教えてもらった。他にもグレモリー眷属が全員参加しているらしい。

『さて、スイッチ姫は奪わせてもらう。助けたくば、我が居城へと来るんだな……』

『助けてー！　おっぱいドラゴンー！』

ふと、目を画面に戻すと場面は終盤で、俺の偽物がスイッチ姫と呼ばれた紅髪の女性を抱えていた。その脇には裕斗をモデルにしたキャラの「ダークネスナイト・フアング」が控えていた。

「……これは、俺なんだよな？　それと、スイッチ姫は……」  
「……もう、冥界を歩けないじゃない……」

思わず呟いた俺の言葉に反応して、スイッチ姫……もとい部長が悲観の声を漏らす。というか、このスイッチ姫という命名は美猴だよね。それがこの番組に使われているということは、あの時にいて、この番組の製作に関わった奴の所為でこの名前がついたのか……。

となると、該当する奴はアザゼルしかないな。

今度、サーゼクス様に「閃 ブレイザー・シャイニングオー・ダークネス・ブレード 光」と暗黒の龍絶剣総督」と言う中二要素満載のキャラを出して貰うか？　……まあ、こうやって知名度が上がるのは悪くないがな。

「でも、幼馴染みがこうやって有名になるって鼻高々でもあるわよね。……そういえばイッセーくんって小さい頃は特撮ヒーローが大好きだったよね。私も付き合ってヒーローごっこした覚えがあるわ」

ふと、アニメが終わると塔城とは逆隣のイリナが俺の考えに似たことを言った。

……今更だが、このゼノンとしての人生で子供らしいことはしてないな。多少は肉体に精神が引つ張られることはあったが、全体的には殺伐とした世界だったからな。

「確かにやったなあ。あの頃のイリナは男の子っぽくて、やんちゃばかりしてた記憶があるよ。それが今じゃ美少女さまなんだから、人間の成長って分からないな」

一誠の言葉を受けたイリナは、余裕のある笑みを浮かべて口を開く。

「もう！　イッセーくんだったら……そんな風に口説くのは、リアスさん達だけにしてよね！」

これが天然か……と呟くと部長たちがうんうん、とうなづいていたのは見なかつた事にしよう。

\*

次の日の昼休みに駒王学園の教室で一誠たちと昼飯を食べている最中に俺は箸を止めて切り出す。

「そろそろ修学旅行だ、班を決めないとな」

余談だが、俺の昼飯は大抵は自作の弁当だ。エクソシストの育成機関で過ごしていた時は……まあ、食事があれだったからな。その為、自炊できなきや別の意味で死んでたからな。

「だな……男女それぞれ三、四名で組むんだっけ？」

一誠が訊いてきたので返す。

「そうだな、泊まるところが四人部屋だ。問題が無ければ、俺に一誠、松田、元浜を入れた四人で良いだろう」

京都で何が起こつても良いように、こいつとは同じ班にいたくちやならないしな。松田や元浜は……一般人だが最悪、魔術で暗示をかければ何とかなるのは既に検証済みだ。あとは、イリナとアシアだが……。

「そうだな、ゼノンがいれば現地の女性ともお近づきになれるかもしれんー！」

「そうだな！　頼むぞー！」

すると、松田と元浜が謎のテンションで肯定をする。

……こいつらは……。

扱いやすいから楽といえば、楽なんだが……。

「エロ三人組とゼノン。修学旅行のとき私たちと組まない？　美少女三名でウツハウハよ」

すると、桐生……桐生愛華が声をかけてきた。しかし、ウツハウハって、女性が使う言葉か？　それに自分から美少女って……。

そんな事を考えていると、アシアが一誠に話しかける。

「イツセイさん、ご一緒にいただけませんか？」

「もちろんOKに決まっているだろー！」

そのアシアの頼みに一誠は即答した。そして、二人の世界に入っているのが桐生がそちらを見ぬように俺に声をかける。



「そういうことで修学旅行はこれで決まりね。アーシアを兵藤以外の男子に任せられないから。イリナさんもそれでいい? ……まあ、彼がいるから良いとは思うけど……」

と、桐生は此方とイリナを交互に見て言う。

「き、桐生さん!」

桐生のその言葉に、アタフタするイリナを見て俺は苦笑いをする。

「それじゃ修学旅行はこの七人で行動しましょう! 清水寺や金閣寺、銀閣寺が私たちを待っているわ!」

その後、桐生を班長とする男子四人、女子三人の班が結成した。流石に外国人である俺たちには班長になれとは言われなかったのは安心した。

今後、祐斗に匙や他のシトリー眷属のメンバーと非常時に備えて予定やらなんやらを確認し合わないとな。

\*

そして、その放課後に部長たちと去年の修学旅行や、文化祭について話をしていると、全員の携帯が同時に鳴った。このアラームは、グレモリー領地内に侵入者が入った事を知らせるものである。

そして、侵入者を確認した町外れにある廃工場へ向かうと、一人の男が現れた。

「……グレモリーの眷属か。嗅ぎつけるのが早い」

その男は黒いコートを着ていて、口を開くと同時に周りに無数の龍をベースにした異形と他の戦闘員が現れた。

「英雄派ね? ……ごきげんよう、私はリアス・グレモリー。三大勢力からこの町を任されている上級悪魔よ」

部長が前に出て丁寧に挨拶をすると男は口を開く。

「ああ、よく知っている……我々の目的は貴様たち悪魔を浄化し、この町を救うことだからな」

英雄派構成員はゴミを見るような目で俺達を見る。

最近、英雄派が各勢力の重要拠点を度々襲来してくる事件が多発し

ており、俺達はそれらを迎撃している。そこまで強くは無いが最近は何テクニクタイプの神器所持者も現れ、瞬殺……別に殺しちやいな……が面倒になった。

恐らく、こいつら英雄派の目的は俺たちのデータ取りか、構成員のレベルの底上げだろう。倒した神器セイクリッド・ギア所有者は戦闘で負けた瞬間、英雄派としての記憶を消されている。まあ、組織としちゃ当然の対応だとは思うが……。ただ、俺たちを倒そうという気は現状では無いようだ……。オリヴィエの所為かも知れないが、理由は不明だ。

すると、先述した男の横に二人の男が出てきた。

……因みに、龍をベースにした異形は下手な神器セイクリッド・ギア所持者より強以上に段々と強い個体になってきている。

そいつらの相手は基本的には俺だ。何故なら龍型の異形は、魔法や魔力に抵抗が有る上、数が多いからだ。魔法や魔力に抵抗が有るので部長や姫島、ギヤスパ―は無理、数の関係上仙術が不安定な塔城は無理。一誠はアスカロンを十全に使いなせてない……祐斗の方はあるものが完成次第、龍型の相手をして貰う予定だが、今の所は消去法で俺が相手をしている。まあ、対人戦闘経験が積める今、そちらを積んだ方が良いから譲っている部分もあるが。

そして、黒いコートの男が突如二人に増える。魔術や魔法の類では、ないことから神器だと判断して呟く。

「また、神器所持者か……？」

分身する能力の神器か？ 忍者の可能性も無きにしも非ずだが……これまでの統計上で考えるとその線は薄いかな。

「困ったものね。……このところは、神器所有者とばかり戦っているわ」部長は嘆息するが、瞳には決意が漲っている。

二人に増えた男が攻撃を仕掛けた瞬間、一誠は魔力噴出口から火を噴かすことで一瞬で詰め寄り片方を殴り飛ばし、もう片方を速度重視で放った魔力弾で吹き飛ばす。

そして、俺は龍型の異形に向かって走り出し、叫ぶ。

「何時も通り、異形は任せろ！」

デュランダルの聖なるオーラを込めて、ジュウォースで強化した斬

撃を飛ばし、それを分断させ龍型の異形に降り注がせて、大半を消滅させる。そして、間髪入れずに異形へと近づきジユウユースで斬りつけて一体、追撃でデユランダルでもう一体を消滅させる。

別の個体が消滅した事など気にせず、異形が噛みつきや、突進、黒色の炎を口から放つ。

しかし、攻撃はデユランダルとジユウユースの聖なるオーラを流用した魔術障壁で防ぎ、そのまま斬り倒していく……。

「……終わったか……」

やけに数の多い異形を消し終えた俺は、部長たちの方に向かう。そして、部長たちと合流すると既に彼方は戦闘が終了しており、捕らえた英雄派の構成員を魔方阵で冥界に転送させている所だった。

「これで、冥界への移送も終わり。あとはゼノンだけ……あら、終わったのね」

そして、部長が此方に気付き皆が此方を迎える。部長たちは若干手間取ったようだが、傷も大したことなかった。

「ああ、で……今回はどうだった？」

一段落ついた所で、部長に問う。

すると、部長は少し顔を曇らせて告げた。

「二人、あの分身する神器使いに逃げられて……恐らく禁手に至られたわ」

前々回も、一人逃げられていることもあって悔しげな表情だ。すると、裕斗が思っている事を呟く。

「やはり、あの異形は兎も角として英雄派の狙いはそちらか……」

「……そうね。赤龍帝、聖魔剣、時間停止の魔眼を持つ吸血鬼、仙術使いの猫又、雷光の使い手、優秀な回復要因。このメンバーを相手にするのは人間にとっては尋常じゃない戦闘経験を詰める筈……禁手に至るのも不思議ではないわ」

それに肯定する部長。しかし、今わかった所でやることは変わらない。

「とにかく、此方が出来るのは打ち倒すだけだ……アザゼルにも打診する必要があるか……」

よって、今回はお開きとなった。

さて……明日の準備でもしておこうか。

## What is an Excalibur?

### II

休日……一誠と姫島がデートの日、俺はイリナと待ち合わせの為に休日に駒王学園に集合していた。

因みに、今日の一誠と姫島のデートには何故か部長たちが尾行する事になったらしい……尾行の為の変装が全く変装になつていなかったと言わぬが仏か。……俺たちは何かつて？ 普通に用事があつて天界に行く。

内容は、俺のデユランダルとジュワユースの事でミカエル様から話があるそうだ。何故、イリナも居るのかと言えば、彼方は転生天使の健康診断だかなんだかで用が有るらしい。

よつて、二人である方を待っているんだが……

「待たせたかな、イリナちゃんにゼノン？」

そう懐かしい声で呼ばれたので、振り返ると、ミカエル様のQクイーンかつ、この地域で展開する天界側のスタッフを統括する転生天使であり、俺の幼少期の世話を担当してくれたグリゼルダ・クアルタが其処にはいた。

「お久しぶりです……いや、久しぶり、グリゼルダ」

「お久しぶりです、グリゼルダさん！」

現在は、この三人だけなのでフランクにお互いに言葉を交わす。因みに、グリゼルダは俺の憑依云々の事を知っている人物でもある。……まあ、知らなきゃ世話の担当なんて任されないしな。

「こうして顔を合わせるのは……聖剣エクスカリバーの件以来かしら」

「ああ、夏休みは冥界で、その後はディオドラの件も有ったからな」

グリゼルダがこの地域にスタッフとして来たのは、三勢力会谈後だが、俺は其処から夏休みの冥界に帰省までは留学生手続きやら、悪魔の仕事とかあったからな。ディオドラの件が無ければ挨拶に行けた

んだがな……。

「さて、それでは行きましようか」

積もる話はあるが、今はその為に会っている訳ではない。よって、俺たちは天界側のスタッフでも統括者であるグリゼルダしか使えぬ天界への転移魔法陣で天界へと色々すつ飛ばして転移した。

……流石に正式ルートで行くとなると、悪魔が通るには色々と面倒がある。しかも、今回はミカエル様の呼び出しだからこういうことが出来るだけだ。でなきゃ、一日でこっちに帰って来れないからな。

転移の光が収まると、そこには既にミカエル様とガブリエル様、ラファエル様にウリエル様と早々たる方々が俺たちを迎えていた。横にいるイリナを見ると、明らかに動揺している。そんなイリナは、グリゼルダに連れられてこの場を去って行った。

後で聞いた話では、この転移の許可は四大天使総員の許可が必要である為に全員が万が一に転移に割り込まれた場合を考えて集合していたそうだ。

そして、俺はミカエル様に連れられて盗聴防止などの嚴重な施しがかけられた部屋へと入り、ミカエル様と対面する様にソファアへと腰を下ろした。

「さて……今日は、呼び出しに応じて頂きもらいまして有難うございます」

「いえ、ミカエル様の呼び出しとあれば……というより、何か事情があるんですよね……？」

そうでなければ、こんな微妙な時期にわざわざこんな転移魔法陣まで使うわけがない。詳しい事情は知らされなかつたが……。

すると、ミカエル様は本題へと話を進めた。

「……前置きは要りませんね。先ず今回伝えたい事が二つ有ります。

最初に、貴方のデュランダルについてですが……」

「……」

ミカエル様が言葉を止めた瞬間、場が静まり返る。ミカエル様と俺しかいないので、何方も言葉を発しなれば、そうなるのは当たり前なのだが、今回はそういう静けさとは別のものだと感じた。

そして、ミカエル様が衝撃の真実を口にした。

「——貴方のデュランダルは本物ではありません」

……どうということだ？　突拍子もない事実には頭がついていけない。

すると、ミカエル様は俺の心境を察したのか、言葉を言い換えた。「いえ、言い方が悪かったですね……そのデュランダルは不完全であると言っていていいでしょう」

今の言葉で、少し落ち着いた。偽物……とか言われたのかと思ったからな。……しかし、不完全？

そして、ミカエル様が話を続けた。

「順を追って説明しましょうか。先ずは昔にも話しましたが、三勢力の戦争にまで時は遡ります。第一に、エクスカリバーが折れたのはご存知ですね」

それは教会所属は勿論ながら、裏に属する奴らなら一般常識といっても過言ではない話である。……一誠という例外は極稀だからな。

「この折れた原因は、表では詳しくは説明されていませんが……その戦争でデュランダルと同時に扱った事による聖なるオーラの容量越えが原因というのが真実のようです」

ミカエル様が何と無く自身がなさそうに告げた言葉は、なんともいえないエクスカリバーの真相だった。

思わず、言葉が口から漏れる。

「……つまり、自爆？」

「そうなりますね……そもそも、聖剣と魔剣というのは表裏一体なのです。使い手によつては、聖剣となり、ある時には魔剣となる……というのは可笑しくは無いのです。……話を戻しましょう、その後にくスカリバーの破片を教会が回収し、錬金術を用いて七つの特性を七本の聖剣に分けて作り直されました。……そして、同時にデュランダルも危険性から二つの聖剣に分けられました……一つが貴方の持つ

『不滅』を象徴とするデュランダル、もう一つが『慈悲』を象徴とするカーテナへと」

確かにそれが事実ならば、エクスカリバーすら耐えきれぬ程の増幅させる聖剣をわざわざ野放しにする筈はないな。だが、ここである疑問が生じた。

「……しかし、何故今更？」

そう、知っていたのならわざわざこんな時期に話すよりかは、もう少し前にも話す機会があった筈である。こんなデュランダルに関する事ならば、少年時代の時にでもよかった気がするのだが……。すると、ミカエル様はその答えを話して下さった。

「エクスカリバーの方の錬金術についての詳細はあれど、此方の方の情報が意図的に隠されていた為です。最近になって、ある錬金術師の別荘を発見し、其処にこの事が記載されていた書記を発見した為に貴方にも話す事にしたのです」

意図的に隠されていた……。？　確かに、デュランダルについての裏の情報は全くといっていいほどなかったが……。

「それに、あの戦争ではエクスカリバーが折れたというのは終幕後に分かったのです。そして、その錬金術師の元で教会が回収した破片を再生させた訳であつて、デュランダルについての行方は貴方が現れるまで不明でしたからね」

更に、衝撃の真実が告げられる。しかし、そうなると……

「……それを持っていた俺って……？」

今更ながら理解した。何故、デュランダルがここまで狙われる事が有ったのか。まさか、俺という天然の聖剣使いとはいえ、餓鬼と共に大昔から再発見された最強クラスの聖剣されたのならば、狙う輩も増えるわけだ。

「そこまでは、わかりませんが……今は悪魔ですが、私たちが拾った時点では天然の聖剣の少年としか判断出来ませんでした。検査もしましたが、特には……」

だが、俺自身が何者なのかという事についてはより一層疑問が深まった。……本当に俺は何者なんだ？



「……」

長考する俺に、一先ず話を戻すミカエル様。それに応じて俺も、今はこの考えても考えても答えのない問いを置いておいて、話に耳を傾ける。

「話を戻しましょう……その書記には大昔のデュランダルの力について書かれていました。それは、今のよりも扱い易い反面、エクスカリバーすら耐えられぬ程の爆発的な増幅力を秘めていたようです」

さらにミカエル様の話では、昔でもデュランダルの増幅力は評価されていたが、このような爆発的な増幅力による惨事は大戦が始めてだつたらしい。そして、この後の錬金術師の調べでこの増幅力は年を重ねる程に強化されていくことが判明したという事で、デュランダルの二振りにしたとの事だ。

「……だから、その錬金術師は二つの聖剣へと分けたというわけですか……しかし、何故エクスカリバーとデュランダルの二振りも持つと思ったんでしょうか……？」

わざわざ、最強クラスの聖剣を二振りも持つ必要性が感じられない。……其処までの強敵が出たのならば、多少なりとも騒がれている筈だが……。

「ええ、それが不思議なのですが……あの時には別々の所有者が聖剣をそれぞれ扱っていました。それなのに……当時の事の真相を知る者は恐らくこの錬金術師くらいでしょう」

何でも、教会が回収した際には既にエクスカリバーの破片しかなかったようで、目撃者も聖なるオーラの暴発で存在しないとの事。ありえるのが、その当時のエクスカリバーを錬金した錬金術師だけだそうだ。

「その錬金術師の名は？」

よつて、その名を訊ねるがミカエル様は重々しく口を開いた。

「……ヘルメス・トリスメギストス」

まさか!?! と叫びたくなるのを堪え、その人物について思考を巡らせる。

ヘルメス・トリスメギストス。

書物などでは、ギリシャ神話の神ヘルメスとエジプト神話の神トトが習合して生まれた神人であると言われており、錬金術の祖である。

まさか、そんな奴がエクスカリバーの再生を請け負ったなんて思いもしなかった。

エクスカリバーを再生した錬金術師は、不明となっていたことから、有名どころの錬金術師のニコラ・フラメルやパラケルスス辺りが請け負ったと思っていたが……予想外だったな。

「ですが、現在の行方は不明。この別荘も幾重の魔術によつて秘蔵されていた事から、エクスカリバーの件を請け負った事すら奇跡としか言いようがありません」

この件も、三勢力の協力体制の元で捜索を進める予定ということでの話を終わらせた。少なくとも、別荘の魔術を調べた結果ではその魔術の使用者は生きている可能性が高いらしいからな。

そして、一旦ミカエル様は先程までの空気とは一転して明るめの声色で次の話へと移った。

「……さて、次にエクスカリバーについてですが、現時点で『支配の聖剣』の所有者がアーサーだという事は貴方の報告で分かっています。……そして、エクスカリバーの担い手の数が全くないのは理解していると思います」

しかし、明るめの声色のわりには出だしは結構問題のある話だ。

実際問題、天然の聖剣使いというのは昔と比べても数少なく悪魔や墮天使に絶大なる打撃を与えられる聖剣が使えないのは教会側としては由々しき問題で有った。そこで、十数年前にパルパーの指揮のもとで人工の聖剣使いを生産する計画『聖剣計画』が成された。だが、その計画では信徒を犠牲にした為に、三勢力会談までは規模を縮小して人体に多大な影響を与えないようにミカエル様の元でおこなっていた。

現在では、会談の取り決めにより中止となり、実質人工の聖剣使いは途絶えた。

以上の事から聖剣を扱える人物というのは少ない。『御使フレイブ・セイントい』

……転生天使になることで聖剣を使えるようになるらしいが、扱えるまでに至るかは別のようである。

その為に、名のない聖剣ならまだしも、エクスカリバーというほどの有名どころのものとなると候補者を探すのにも一苦労なのである。

しかし、ミカエル様は思い切った決断を告げる。

「そして、私たちが話し合った結果、紫藤イリナを最終的なエクスカリバーの担い手にする事に決まりました。ですが、現状の彼女では六本結合のエクスカリバーの担い手になるのには、正直実力不足です。よって、行く先を見据えてイリナさんが中級天使へと昇格するまでは、ゼノン、貴方にエクスカリバーを任せたいのです」

確かに、イリナならば人工とはいえ聖剣使いである上に「擬態の聖剣」の元使い手でもあるからな。

しかし……

「大丈夫なんですか？　また、過去のような事が……」

流石に六本結合の本物に近いエクスカリバーとデュランダルとなると、不安が残る。

「今のデュランダルでは例の書記によれば暴発の危険性は無いようです。それに、万が一……と言うこともあり得ますので、此方側である試みをします」

「成る程……」

詳しくは説明しないが、エクスカリバーをデュランダルの『鞘』……つまり補助パーツとするらしい。

「デュランダルを数日預かる事になります……」

だが、その為にミカエル様が言ったデュランダルを預ける事になる。

確かに、英雄派の構成員及び龍型の異形との戦闘がある可能性があるのに自身の武器を手放すのは危険だが……。

「大丈夫です。アスカロンを借りると言う手も有りますし、近日に何か起きる……なんてことはないでしょうし」

なんだか、フラグを建てた気がするのには置いておくが、確かにアスカロンを実戦で使っておくのも有りかもしれないしな。

「そうですか……ッ！　ゼノン、すみませんが、早急に戻っていただきます」

すると、急にミカエル様の耳元に魔法陣が輝くと表情を変えたミカエル様が言葉を強くかけた。

まさか……英雄派の襲撃か!?

Where is Northern Europe?  
e?

イリナとの天界訪問が途中で中断されて、事情を聞いて早急に戻ってきた俺とイリナは、部長たちグレモリー眷属と合流した後に、一誠の家の最上階にあるVIPルームで、ある方と対面していた。その方とは……

「オーデイン様！ いやらしい目線を送らないでください！ こちらの方は魔王ルシファア様の妹君なんですよ!?!」

……とまあ、オーデイン様である。日本に来た理由は、何でも日本の神々との会談が目的らしい。

ミカエル様が早急に帰還を促したのは、急すぎる北欧の主神の訪問が原因である。……とはいえ、俺もイリナも話自体は終わっていて後は天界でも見てまわろうとしていただけだから問題はなかったが……。

「まったく……お主も堅いのう。サーゼクスの妹はべっぴんでグラマーなんじゃから、儂でも目が胸に行ってしまうのじゃよ。それと、こやつは儂のお付きのヴァルキリー。名は……」

「ロスヴァイセと申します。日本にいる間よろしくお世話になります。以後、お見知りおきを」

ロスヴァイセさんは、丁寧に頭を下げる。そして、オーデイン様のそばに控えていた一人の男性をアザゼルが紹介する。

「爺さんが日本にいる間は、俺達が護衛をする事になっている。バラキエルは墮天使からのバックアップだ。俺がいつもいるとは限らないから、その間はバラキエルが見てくれる」

「よろしく頼む」

その人物は、姫島の父親の「雷光」のバラキエル。姫島との件を除けばアザゼル曰く普段はまともな墮天使らしい。普段は……の部分

が気になるが、墮天使は大抵墮ちているからまともな奴は少ないと勝手に納得した。

そして、アザゼルがオーデイン様に急すぎる訪問について問いかける。

「それにしても、爺さんは来るのが早いんじゃないか？　俺が訊いた話だともう少し後だったような気がするが……」

「少々厄介事……というより儂のやり方に不満があるやつが居ての……それで早めに出てきたんじゃない」

オーデイン様の答えはあまり思わしくなかった。オーデイン様在意を唱える奴……と考えて直ぐにあの方を思い出した。

ただ、意外とと言ったら失礼だが、まともな理由だったのは良かった。

「厄介事ってヴァン神族にでも狙われたか？　お願いだから

神々の黄昏を起こさないでくれよ」  
神々の黄昏

北欧神話の世界における終末の日を示す言葉である。それに、アザゼルの言っていたヴァン神族とは、神話において美しい巨人族と混合される事が多い種族で、歴史では何度かアース神族との抗争をしている。

その為、アザゼルは真つ先にそちらを挙げたようだ。

「ヴァン神族などどうでもいいんだがの。……この話をしてても仕方ないの。それより『禍カオス・ブリゲードの団バランス・プレイカー』が禁手の使い手を増やしているそうじゃな」

しかし、ヴァン神族ではないようで、さらに話がいきなり切り替わる。この切り替わりに部長たちが驚く。

しかし、俺は「やはり、情報は掴んでいるか。それとも、襲撃されたか？」などと若干ずれた考えをしていた。

「ああ。どつかの馬鹿が手っ取り早く、それでいて危険なやり方で増やしているらしい。神セイクリッド・ギア器セイクリッド・ギアの研究者なら誰もが考えるが……結果

問わずに道徳に逸れるような方法だから誰もやらなかったんだがな」  
アザゼルはそう顔を顰めながらオーデイン様へと返答する。する

と、その危険なやり方というのに疑問に思ったのか一誠がアザゼル先生に訊ねる。

「その方法ってなんですか？」

それを聞いて、アザゼルは表情を変えずに答える。

「簡単に言えば、世界中の神器所有者を誘拐・拉致をして洗脳。次に強い連中……お前らのような奴ら……と戦鬪させ禁バランス・ブレイカー手に至るまで続ける。以前の報告にあった二名がまさにそれだったわけだ。だが、これらのやり方は人を駒としか見ないテロリストの連中だからできることだ。各勢力の連中は、普通は段階を踏んで禁手に至らせるんだがな」

この二人というのはこの前にいた分身する神器使いとその前に襲撃してきた影の神器使いだ。

一誠の禁手に至らせる為の修行では似たような事をしていたらしいが、誘拐や拉致はしていない上に悪魔は別らしい。それに加え、赤龍帝である一誠が早急に力を手に入れる必要があるからな。

……俺の幼少期の血反吐塗れの訓練は何だったのだろうか……まあ、別に自分自身で理解してやっていたから、非難などはないんだけどな。

しかし……

「……英雄派か……」

「英雄派の正メンバーは伝説の勇者や英雄の子孫が集まっているらしい。身体能力は悪魔、天使に引けを取らないほどだ。ただ、こいつらはオーフィスの蛇には手を出していないようで、底上げや奥の手に関してはさっぱりだ」

俺の眩きに反応するように、アザゼルが英雄派について説明する。

その後、オーデイン様の護衛の話が一段落終わると、アザゼルとオーデイン様は墮天使経営の……おっぱいパブに行った。ロスヴァイセさんもオーデイン様が暴走しないように付いていった。

因みに、オーデイン様は出て行く前に俺とイリナに詫びてから去って行った。

そして、残りがオカルト研究部＋バラキエルさんになった所で、部

長が目で指示したので姫島とバラキエルさんを残してその場を去った。恐らく、二人で積もる話でもあるのだろう……ただし、姫島が未だに父親に対する負の感情を捨て切れていないならわからない。ただ、冥界の塔城の件の時のあの言葉が本物ならば……。



姫島朱乃とその父親のバラキエルだけになった部屋では、親子の対談というのに、異質な空気が流れていた。

「……」

沈黙。その一言で表現できる状況である。二名の心境はそれぞれ異なり、朱乃はバラキエル……父へ対する気持ちに今だに素直になれずに顔を俯かせている。

対するバラキエルは、先程の赤龍帝と自分の娘が二人きりで如何わしい場所の近くにいた時には、つい強い言葉を投げかけてしまった事への後悔とともに、このような娘との対談の場を設けて貰った事に感謝の思いがある。

よって、バラキエルが先に口を開くのは当然の事である。

「……朱乃、さっきの事は悪かった……だが、私はお前の事が心配なのだ」

「……」

最初に出たのは先程の事への謝罪。一旦、自身と対面するように同じようにソファーに座る娘の反応を伺うバラキエルだったが、朱乃は俯いたまま微動だにしない。

その事を確認したバラキエルは自分の思いを娘へと伝える。

「あの少年……赤龍帝の噂は聞いている。中には、ち、乳房を糧に活動する……などと過ぎたものもあるが、所詮は噂。それだけで判断するのは愚か者のすることだ」

「……」

途中で、どもりかけたもののバラキエルは言葉を紡ぐ。……が、朱



乃は今だに俯いたままで、心境がわからない。そんな事も合わさって、バラキエルは若干ネガティブになりながら言葉を続ける。

「少なくとも、先程の会合では少し性欲旺盛の少年にしか見えんし、朱乃が騙されているような事もあるまい。最終決断は勿論お前の自由だ……不甲斐ない父親を許してくれ……いや、お前の父親と言う資格などないか」

「そんなことはない!」

すると突然、バラキエルの言葉を否定するように朱乃が声を上げて立ち上がる。

「あ、朱乃?」

その娘の突然の行動にバラキエルは呆然と娘を見上げる。朱乃の方は今ので吹っ切れたのか、自身の思いを父へと伝える。

「父さまは、ちゃんと私を守ってくれた!　それに、グレモリー眷属……いえ、悪魔になった私にもこうやって接してくれている……!」

本当はお父さまが悪くないことなんて、分かっていた!　だけど、子供の私にはそれではしか精神を保つ事が出来なかった!」

「朱乃……」

涙を流しながら、自身が隠し続けていた思いを吐き出す朱乃。バラキエルも目尻に涙を溜めながら聞き続ける。

「父さまと母さまと、もっと一緒に暮らしたかった……!　　本当は、

あの時だって、父さまと暮らしたかった……ッ!　　それなのに……ッ!　　私は……ッ!」

「朱乃ッ!」

だんだんと嗚咽によって言葉がつかえてきた朱乃に、もういい、とばかりにバラキエルが朱乃を抱きしめる。

そのバラキエルの行動に朱乃は、一瞬動きを止めるが、ゆつくりとバラキエルの胸で涙を流した……。



『……………』

姫島とバラキエルさんを残し、一階へと降りた俺たちは、ただただ上手く事が運ぶようにと願っていた。

二人を残して、数十分が経ち何方に転ぼうとそろそろ動きが見える時間になった。

「お待たせしました」

すると、姫島の声が聞こえ全員が振り向くと、目の周りが泣き過ぎたのか真つ赤にも関わらず、誰もが見惚れるかのように美しい笑顔を浮かべた姫島がバラキエルと手を繋いで歩いていた。

「リアス……私はもう大丈夫よ。心配かけたわね」

今までに見せたことない、決意と自信に満ちた表情で部長に語りかける姫島。部長はその雰囲気呑まれずに朗らかに返す。

「朱乃は私の『女王』であって、友人でも有るのよ？　当たり前じゃない」

「リアス……」

「朱乃……」

二人は互いに抱き合い笑顔を浮かべる。居づらい雰囲気になったが、気にせずにバラキエルさんが此方に頭を下げる。

「これからも、朱乃とよろしく頼む」

それに対して俺たちは、思い思いに肯定の意を示す。

……これで、姫島も自身の壁を壊せたか。リアス・グレモリー眷属の中では残るはギヤスパーにアーシアの支援組くらいか？　いや、

一誠もまだ『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』に変わる何かを試作中だし、あいつ自身も何かを抱えているようだな……だが、それが何かはわからん。もしかすると、赤龍帝である事に何か感じているのかもな。

精神年齢的な年長者として、何か役に立てれば良いんだが……。

Where is Northern Europe?  
II

その翌日、俺たちリアス・グレモリー眷属はグレモリー家主催で、冥界であるイベントに主役として参加していた。

内容としては冥界の住民を対象とした『乳龍帝おっぱいドラゴン』に登場する俺たちとのサイン及び握手会となっており、今も俺たちの前には老若男女問わずの長蛇の列となっている。

……基本的に、女性には俺と木場。ギヤスパ、塔城には大きなお友達。子供は一誠や部長で男性はアーシアや朱乃と何と無く役割が分担されていて怖い。

……というか、俺と裕斗を並べて仮面の男（俺のキャラクターの名称だ。正式名称はまだ不明らしい）×ダークネスナイト・ファングとかその逆とかで黄色い歓声を上げるのは勘弁してくれないか？

コスチューム上、顔は隠れているが愛想笑いを隠せない……。で、裕斗は裕斗で気づいてねえ……。何故かこいつは、こういうのには疎いんだよ……。

その団体が過ぎると、ノーマルの女性や子供たちの対応に追われる事になったがあれ以外に苦労する事なくサイン会は過ぎていった。

……因みに、例の部長の元婚約者のライザー・フェニックスの妹のレイヴェル・フェニックスがアシスタントとして協力をしてくれた。

彼女とは少し会話ができて、聞いた話では、そのライザーは今だに一誠に倒された事によるドラゴン恐怖症で引きこもっている状態らしい。まだ、手を尽くすつもりだがいざとなったら部長たちに助けを求めるかもしれないと、申し訳なさそうに言っていたのが印象的だった。

\*

ディオドラ・アスタロトの件での活躍の褒賞としていただいた特殊なつくりのバトルフィールドで、イリナとの戦闘訓練、男だけで戦闘訓練など様々なことが有って、数日が経った。今夜も、オーデイン様の護衛として俺たちは付き添っていた。……日本の神々との会談までの時間を潰すために、オーデイン様は基本的に、日本各地のキャバクラや風俗などをメインに日本の娯楽施設を回っていた。

それでいいのか北欧の主神よ。

そして、今はスレイプニルという足が八本ある巨大な馬の引く馬車の外を俺は飛んでいた。他にはバラキエルさん、祐斗、イリナが空を飛んでいる。残りは中に待機している。

そんな中、直感に従いバラキエルさんに目配せをし、スレイプニルを止めさせてからジユワユースを構える。その後、バラキエルさんと祐斗、イリナが構えると同時に次元が裂けて黒いローブの目つきの悪い男……ロキ様がやって来た。

……やはりオーデイン様の言う厄介な奴とはこの方か……。

そして、スレイプニルが嘶き馬車中にいたアザゼルが先に出て来て全員にその来訪者の名を告げる。

グレモリー眷属とロスヴァイセさんは驚いているだろうな。というか、ロキ様を目視した瞬間にアザゼルは思い切り舌打ちをした。すると、ロキ様はマントを広げ語り出す。

「始めまして、諸君……我こそは北欧の悪神、ロキだ！」

すると、アザゼルが前に出て口を開く。

「これはロキ殿。このようなところで奇遇ですな。この馬車にはオーデイン殿が乗られている。それを承知の上で行動だろうか？」

アザゼルが冷静に問うとロキ様……いや、様はいらないか……は腕を組みながら答えた。

「というか、今のアザゼルの口調は似合わねえな。公私使い分けてるんだろうが……なんだかな。」

「何、我らが主神殿が、我ら神話体系を抜け出て、他の神話体系に接触しているのが耐えがたい苦痛だね。我慢できずに邪魔をしに来たん

だよ」

それを聞いたと同時に全員が警戒度を上げる。そして、アザゼルが口を開く。

「堂々と言ってくれるじゃねえか……悪神ロキ」

ロキを敵と断定したアザゼルの口調は元に戻っている。その態度にロキは笑みを浮かべる。

「ふっ……本来、貴殿や悪魔たちにと会いたくなかったのだが、致し方ない……いっしょに静粛してくれよう」

「お前が他の神話体系に接触するのはいいのか？　矛盾しているぜ？」

すると、アザゼルが疑問を口にする。……というか、現状でロキと戦うとなると……不味いな。

悪神ロキと言えば、神殺しのフェンリルを有する。史実ならば、ラグナロクやフェンリルの封印などが起こっているが、この世界ではそのような事は起こって居ない。起きていたら起きていたらで、不味いんだがな。

「和平など下らん事をしようとするのが、納得いかないのだ。他の神話体系なんぞ、滅ぼせばいいだけではないか？」

すると、ロキは当然のように大変過激な考えを示した。

「……一つ聞くがお前の行動は「禍カオス・ブリゲードの団」とは関係ないんだな？」

その思想にアザゼルが、一つ確認するとロキは面白くなさそうに答えた。

「あんな愚者どもと一緒にされると不愉快極まりない……オーフィスは関係ない」

「……まあ、それはそれで厄介なんだが。なるほど……これが北が抱えている問題か？」

アザゼルがそう言って、馬車の方に向くとロスヴァイセさんとオーデイン様が出てきた。二人とも足元に魔法陣を展開して魔法陣の上に立っている。

「いまだに頭が固いやつが居るようでの…… こういう風に自ら出てくる馬鹿もいるのじゃ」

オーデイン様が髭をさすりながら言う。すると、ロスヴァイセさんがスーツ姿から鎧姿になり、叫ぶ。

「ロキ様！　これは越権行為です！　主神に牙をむくなど、許されることではありません！　公正の場で異を唱えるべきです！」

すると、ロキはロスヴァイセさんを睨むと激昂して叫ぶ。

「二介の戦乙女ごときが口を挟むな！　我はオーデインに訊いている……まだこのような行為を行うのか？」

ロキの最終確認ともとれる質問。だが、オーデイン様は何でもないかのように平然と答える。

「そうじゃよ。少なくともお主と話すよりもサーゼクスとアザゼルと話した方が楽しいからの。和議を果たしたらお互いに大使を送り、異文化交流をしようと思つたわけじゃ」

自身とは全く異なつた思想を臆面もなく告げられたロキは、あまりものロキ主観で主神とは思えぬ愚かさに苦笑する。……実際、ロキの掲げる信念自体が間違っているとは言い切れないのだが、神というのは傲慢なもので、自身の信念こそが！　と思つているのが多いからな。帝釈天然り、ハーデス然り、シヴァ然り……。

「……認識した。何と愚かな……ここで黄昏を行おうではないか」  
ロキがそういうと俺たちに殺気を当て、不敵に微笑んだ。その殺気と態度に俺たちは身構える。

「それは抗戦の宣言としていいんだよな？」

アザゼルが確認するように訊くと……

「如何にも」

と、ロキが静かに告げると共に火蓋が切られた。瞬時に外で待機していた俺たちは散開し、ロキを包囲する。

「部長！　プロモーション昇格します！」

そして、一誠は部長に許可を取り「女王」クイーンに昇格するとともに禁手化をし、馬車から出てくる。それを見てロキは笑みを浮かべる。

「そうか。……ここには赤龍帝がいたのだな。いい具合に力をつけているではないか？　だが……」

ロキは手に光り輝く粒子を数秒溜め、一誠に放った。放たれたロキ



だ。その聖剣使いも言っていたが、こいつの牙で神を殺せるからな。試したことはないが、他の神話体系でも有効だろう……上級悪魔や伝説のドラゴンでも致命傷を与えられる」

素晴らしいながら、ロキはフェンリルを撫でていた手を動かして、部長を指す。

「本来、北欧の者以外に我がフェンリルの牙を使いたくないんだが、この子に北欧以外の血を味わわせるいい機会だ。魔王の血筋、その血を味わ……！」

ロキの言葉は、俺の放った斬撃によつて遮られた。フェンリルを避けてロキに当てるのは少しばかり時間と相手の隙が必要だったからな。ただ、ダメージは魔術障壁によつて与えられていない。

「……ふむ、私が話している間に攻撃してきたとはいえ、フェンリルの目を掻い潜り攻撃を当てるか……」

俺がわざわざ攻撃をしたのは、部長から目を逸らさせるのが目的だ。あのままならば、部長がフェンリルに狙われて、それを庇おうとした奴らから再起不能にされていたからな。

「貴様の考えは読める。これで、フェンリルの矛先を自身に移そうというわけだろうか？ ……だが、その思想に乗ってやろうではないか」

まあ、流石にトリックスターに陳腐な作戦は読まれるよな。だが、乗ってくれたのは好都合……！ フェンリルの殺気も此方にしか向いていない為、そうやって部長を狙う訳でもなさそうだ。

「——やれ」

ロキの言葉と共に、フェンリルが此方に向かってくる。目で捉えようとなると、見失って致命傷を受けるだろう。

だから、ここは第六感に頼るしかない……！

ガギイン！ と金属音が響くと共に、左手に構えていた複製の聖魔剣が破壊される。そして、ほぼラグがなく繰り出されたフェンリルの牙をジュワユースで一瞬受け止め、そのままスライドさせてフェンリルを斬ろうとする。

だが、単純計算でフェンリルは牙に両前足の爪と、攻め手が三つに



対して、此方は腕に構えられる聖剣は二本。明らかに手数では不利で、格上との戦闘となると、攻撃を当てるのすら至難の技となっており、先程の攻撃は爪で受け止められた。

また、魔術を使うおうにも、得意というか慣れている北欧系の魔術はフェンリルに通用するわけもなく、動きを止めることすら不可能である。大魔術ならば動きを止める事は可能だろうが専門外だ。

デュランダルさえあれば……という阿呆な言い訳を試みるが、無いものを強請っても仕方が無い。

直様、聖魔剣の代わりに一誠の所有するアスカロンを使っているものの、デュランダルと比べると使い手という事もあるが、どうしてもそれには至らない。

こうやって描写したが、実際の時間では僅か数秒の交戦にしか過ぎない。ロキがフェンリルを一旦止めるまで……数分間か？ それまで、俺とフェンリルとの防戦一方の交戦は続いた。

「ゼノン！」

フェンリルがロキの指示で離れ、俺も一旦部長たちの元の下がると、イリナの悲痛の叫びが響き、直様アーシアの【トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み】による治療によって傷の手当てを受ける。一撃で逝きうる牙の攻撃や致命傷こそ受けていないものの爪による傷跡があり、そこから血が滲み出ている。……失血を抑える魔術を使用していた為に、血が足りないうなんて事は起きていないが、普通なら多量失血で終わっていただろう。

ロキがフェンリルを撫で、此方を見ながら口を開く。

「このままいけば、その聖剣使いは殺せる……だが、その間にオーディンたちに逃げられるのも糞だ。私も相手してやろう」

確かに、逃げるだけならオーディン様なら可能だろう。それに、最悪の場合でも他数名程度も同時に転移出来るだろうしな。

そして、ロキはマントをはためかせると戦闘体制に入り、フェンリルも此方に再度殺気をぶつけて来た。

……これは、不味い！

『Half Dimension!』

しかし、フェンリルとロキを中心に空間が歪み、動きを封じた。だが、フェンリルがすぐに牙で歪みを噛み切るようにすると、その呪縛から解放された。突然の奴の登場に驚く俺達の間にも、白龍皇ヴァーリが降り立つ。

「随分楽しそうなことをしているな」

「ヴァーリ!?!」

ここにいた者たちがヴァーリの登場に驚いていた。

……本気で、ヴァーリが此方に加勢？　してきた理由が読めずに今だに困惑している俺だがとりあえず、いくら魔術によって出血を抑えているとはいえ、流石にそのままは不味いので、丸薬の増血剤を服用し万が一に備える。

「俺つちもいるぜい!」

増血剤の味に慣れずに顔を歪めている間にも、舐斗雲に乗ってきた美猴が現れた。

「おお、白龍皇か!」

ロキがヴァーリの登場に嬉々として喜びの声をあげる。そして、降り立ったヴァーリはロキへと語りかける。

「俺は白龍皇ヴァーリ……貴殿を屠りに来た者だ」

ヴァーリの簡潔な宣戦布告にロキはさらに喜ぶが、わざとらしく頷くとフェンリルを自身へと近寄らせて口を開く。

「二天龍が見られるとは満足した。今日のところはこれで引きさがらう」

言い終えた瞬間に、空間が歪みだしロキとフェンリルを包み込む。そして、去り際にロキは以下の言葉を残していった。

「だが、この国の神々と会談の日にもたまたお邪魔させてもらう!

オーデイン、次こそ我と我の子フェンリルがその首を噛み切ってくれよう!」

\*

俺達は現在、駒王学園近くの公園に集まっている。深夜かつ、魔術

による結界を簡易的だが張っている為に一般人が入ってくる事などあり得ない場所には、オーデイン様とロスヴァイセさんに俺たちが集まっていた。

「……ヴァーリたちは？」

周りを見渡して、ヴァーリと美猴がいつの間にか消えていた事に気付いた俺は、奴らと会話をしていたアザゼルに問う。そのアザゼルは、俺に問われた事がわかると苦々しげに顔を歪めて溜息をつく。

「あいつら、言いたいこと言って帰りやがった……しかも、その内容も俺たちに用があるから翌日のロキ、フェンリルの対策会議に参加させてくれたとよ」

アザゼルは再度頭に手を当てて溜息をつく。確かに、墮天使総督という立場であるならば頭を抱える問題だろうな。あの場に出てきた理由は知る必要はあるが、わざわざ俺たちの拠点に来させずにすることも可能だった筈だ。

だが、ヴァーリたちが直様帰った為にそういうわけにはいかなかった。話を聞かなければ、ヴァーリたちを拠点に入れずに済むがアザゼルには少なくともヴァーリの言葉が真実なのは理解している筈だ。拒否した場合は場合でどうなるかも理解しているだろうしな。

よって、拠点に入れる必要があるが、少なくともサーゼクス様やミカエル様の許可が必要だろう。その為にアザゼルが事情を説明するのだが……アザゼルとしてはミカエル様の小言はデイオドラの件で散々言われた事も有って聞きたく無いだろう。その為にこんなに気落ちしているんだろうな。

「そうか、頑張れよ……」

と、俺は特に何もしないがアザゼルに同情しておいた。

そして、俺たちは一度散会しまた翌日にロキとフェンリルの対策会議の為に一誠の家に集合することにした。

Whom and joint struggle  
?

ロキ襲来の翌日、兵藤家の地下一階の大広間にグレモリー眷属＋イリナ、アザゼル、バラキエル、シトリー眷属にヴァーリチームと言う面々が集まった。

結局の所、ヴァーリたちの話を聞かないという選択肢はなく、サーゼクス様やミカエル様も特に反対意見などなかった為にこの顔合わせが実現した。

ヴァーリチームは、リーダーのヴァーリを含め五名が自然体でいる。一人だけアーサーの横に見知らぬ人物がいるが、ローブを深く被っている為に詳しくは判断できない。

座る椅子は全部で五席。ヴァーリ、アザゼル、部長、シトリー、オーデイン様が座る。オーデイン様の斜め後ろにはロスヴァイセさんが控えていて、同じように部長やシトリーの横には眷属の何名かが控えている。残りアザゼルの後ろとヴァーリチームのメンバーを監視するように近くに控えている。因みに俺はヴァーリチームの近くに控えている。

そして、最初にアザゼルが話を切り出す。

「さて……ヴァーリ、話があるってなんだよ？」

「交渉をしにきた」

ヴァーリの口から彼らしくない台詞が出る。その為か、俺を含めて驚きや戸惑いの表情を隠し切れない。

……何をするつもりだ？ 奴の性格からして交渉はほぼ無縁なものだと思っていたが……。

「交渉だど？」

現にアザゼルも訝しむよりも思わず、と言った形で言葉を漏らす。そんな反応は、百も承知といった風にヴァーリは口を開く。

「そうだ。こんなに人数は要らないがな」

と言つて、辺りを見て苦笑いを浮かべるヴァーリ。

「……まあ、そりやそうだが。で、内容は何だ？」

それに対し、肯定するもテロリストの一派が此方に来るのに警戒しない奴はいないと言わんばかりの含みのある言い方をするアザゼル。そして、アザゼルに急かされたヴァーリは全員の視線を集めながらも語り始める。

「オーデインの会談を成功させるにはロキを撃退しなければいけない。が、赤龍帝を含めた現状のメンバーでは、ロキとフェンリルは凌ぐのは至難だろう。しかも、英雄派の活動のせいで冥界も天界もヴァルハラも大騒ぎで、こちらにこれ以上人材を割く訳にもいかない」

「……何が言いたい？」

ヴァーリの勿体ぶるような前置きにアザゼルは本題を急かす。

「今回の一戦に関して、俺は……いや、ヴァーリチームはお前たちとの共闘を申し出る」

「……！　本気か、ヴァーリ？」

……ッ！　共闘だと!?

俺やアザゼルを含め、驚愕の表情を浮かべる。誰もがこの反応をするのはわかっていただろうヴァーリは調子を崩さずに話を続ける。

「ああ、そして……最終的にフェンリルに関しては此方に任せてもらいたい」

「ヴァーリ、何をやる気だ？」

ヴァーリのフェンリルを任せろという台詞に眉毛を潜めアザゼルは問う。反応は多々あれど、アザゼルの問いにはヴァーリたちを除く全員が同調しただろう。ヴァーリは珍しく言葉を選ぶように重々しく口を開く。

「……俺たちの目的は、フェンリルの捕獲。及び使い魔とする事による戦力の強化だ」

「……続ける」

既にヴァーリの発言にはなんとなく想像をついていた俺はともかく、他のメンバーも度重なるヴァーリの発言にそこまで大きな反応は示さなかった。

アザゼルから続きを求められたヴァーリは更に話を続ける。

「よって、此方の申し出は共闘の許可に加え、フェンリルを捕獲する際の手助け……いや、ロキに邪魔をされないようにして貰えば構わない。それで、対価は二つ。一つは黒歌の「禍の団」の脱退。もう一つは、『支配の聖剣』だ」

この対価にヴァーリチームにアザゼル、オーデイン様を除く全員が目を見開く。特に塔城は同時に口を抑えて驚きを隠せていない。

……実は俺も内心結構驚いている。チラ、と黒歌を見ると偶然か目が合った。黒歌は目が合った瞬間に笑みを浮かべてウインクをして来た。

アザゼルは俺と黒歌を見ていたらしく、肩を竦めて頭を少し降ると口を開く。

「……ここまで用意周到か。たしかに、戦力が欲しい上に英雄派の行動とお前の行動が繋がっているって可能性はお前の性格を考えれば低い」

「ああ、彼らとは基本的にお互い干渉しない事になっている。……で、どうする？　俺はそちらと組まなくてもロキとフェンリルと戦うつもりだ。最悪の場合には三つ巴になるかもな」

ヴァーリに問われたアザゼルは、一度ヴァーリと目を見てから部長とシトリー、オーデイン様の方へ視線を向けて話を振る。

「リアス、ソーナ、爺さん、どうする？　あまりこういう発言はよくないが、俺個人としてはそこまでデメリットは感じないんだが……」

そのアザゼルの問いに、オーデイン様は直ぐに、部長は塔城を見て少し間を開けてから、シトリーは二人の回答の後に口を開いた。

「ふむ、儂も良いと思うのお」

「ええ……私も申し出を受けるべきだと思うわ」

「……はい、受けるべきかと」

三名の返答を聞いたアザゼルは立ち上がりヴァーリの目の前に歩き、手を差し出す。

「それじゃ、よろしく頼むヴァーリ」

「ああ」

直様察したヴァーリは立ち上がりアザゼルと握手を交わした。  
……こうして、二天龍の共闘が成立したのであった。

「……さて、ヴァーリの件がひと段落ついた所で、ロキ、フェンリルの対策をとある奴に聞く予定だ」

ヴァーリとの共闘の件が済んで一旦、オーディン様とロスヴァイセさんが別室に本国との連絡を取りに行つたのを確認したアザゼルが俺たちに話を切り出す。

その内容からその奴というのに心当たりのある俺は声を漏らす。

「奴……まさか……」

「そうだ、五大龍王『スリーピング・ドラゴン終末の大龍』ミドガルズオルムから聞く」

予想通り、アザゼルの口から語られたのはロキが来たる終末に備えて生み出した龍でその力は五大龍王として数えられるほどのものだ。ロキやフェンリルの対策の手がかりになる情報を持っているだろう。

しかし、こいつと会話するのは……

「しかし、ミドガルズオルムは本来は北欧の深海で眠りにについている筈だが……？」

ヴァーリが俺が思っていた事と同じ疑問を口に出す。ミドガルズオルムは先程説明した通り強大な力を持っている。だが、怠け癖が凄まじく北欧の神々……生みの親のロキでさえも使い道を見出せなかつた程だ。最終的に終末時には何とかしろと言われて基本的に深海で眠っている。

ヴァーリの問いにアザゼルが周りに聞かせるように答える。

「二天龍と龍王であるファープニルの力、ヴリトラの力、タンニーンドラゴン・ゲートの力で『龍門』を開く。そこからミドガルズオルムの意識だけを呼び寄せるんだよ。……まあ、白龍皇は予想外だったが多に越したことはない」

『龍門』……成る程、その手があったか。俺単体では使えないものだからその存在を忘れかけていた。

「お、俺もですか……？ 正直、怪物だらけで気が引けるんですけど……」

匙は自分の名を呼ばれて自分がいつてもいいのかと不安げな様子でいる。

匙も一応、五大龍王の一角ヴリトラの魂が宿る神セイクリッド・ギア器を所有している。なんでも、赤龍帝の血によって匙の神器にはヴリトラの意識が蘇りつつあるらしい。さらに、アザゼルが言うには他のヴリトラ系神器を移植出来れば可能性は高くなるとの事だ。

「まあ、要素の一つとして来てもらうだけだ。大方の事は俺達や二天龍に任せろ。とりあえず、タンニーンと連絡が付くまで待っていてくれ。俺はシエムハザと対策について話してくる。お前らはそれまで待機。バラキエル、付いてきてくれ」

「了解した」

そう言ってアザゼルとバラキエルさんは大広間から出ていき、残されたのはオカルト研究部員と生徒会のメンバー、ヴァーリチームの面々となった。そして、すぐにヴァーリが立ち上がって俺に近づく。「さて、ゼノン。対価を先に払っておこうか……」

「……ああ」

何と無く身構えてしまった俺だが、返事を返す。すると、アーサーが亜空間からある一振りの聖剣を取り出して此方に丁重に差し出してきた。

「どうぞ、これが『支配エクスカリバー・ルーラーの聖剣』です。それと……」

「ゼノン！」

何か続きを話そうとしたアーサーの言葉を俺の名を呼び、且つ俺に抱きつく事によって遮った女性がいた。

抱きつかれる前に『支配エクスカリバー・ルーラーの聖剣』を亜空間に仕舞って抱きつきの衝撃に備える。

「……っと、黒歌か」

その人物を軽く引き離し、確認するまでもないが見て眩く。すると、黒歌は面白くなさそうな表情を浮かべる。

「あら、素っ気ないのね。 ……て、あら？ そちらは？」



しかし、言葉の途中で黒歌は俺の隣に視線を動かして疑問を口にす  
る。横を見るといつの間にかイリナがいて黒歌を睨む。

……お前は何故黒歌を睨んでいるんだ？

そんな疑問を余所にイリナは黒歌に問いかける。

「……貴方が黒歌さんですか？」

「あら？　知ってるの？」

「ええ……負けませんから」

今のイリナの言葉で黒歌はイリナが俺に想いを寄せている事を理  
解したようで、黒歌はニヤリと笑みを浮かべた後に素に戻り爆弾発言  
をする。

「ふーん、私は妾でもいいのよ？」

「め、妾!？」

イリナの大声に大半が此方に視線を移す。そんな事を気にせずに  
黒歌は話し始める。

「別に一番、二番にはこだわらないにやん。……と今更だけど、ありが  
とうね、ゼノン」

と普段の調子より少し真面目になって礼をする黒歌だが、俺は先程  
の爆弾発言もあって少し肩を竦めて返事を返す。

「感謝は受け取っとくが……そういう発言は控えろ」

「そうね。白音！　あの時ぶりにやん！」

俺の言葉には適当に返事を返して塔城へと近づく黒歌。……こい  
つは絶対直す気はないな。まあ、変に気を遣われるよりはマシ……か  
？

「黒歌お姉様……。ゼノン先輩、本当にありがとうございます」

先程の発言も有ってか、塔城は黒歌との再開を喜びながらも複雑な  
表情を浮かべる。塔城の礼に手で答えると、周りを軽く見回してみ  
る。

黒歌の妾発言に今だにアワアワしているイリナが近くにいて、黒歌  
と塔城が少し離れた所で話をしている。アーサーがローブの人物と  
共に裕斗と何かを話している。ギヤスパーは何故かその後ろで様子  
を伺っている。

そんな中である声が響く。

『ま、待て！　誤解だ！　乳龍帝と言われているのは宿主で有つて……』

『乳をつついて覚醒に、拳句は「覇龍」の解除もだど？　後者を見せられた私の心情を考えた事があるのか？』

……この話は聞いてはならないような気がする。二天龍のこの嘆きを聞いていると自分まで胃が痛くなりそうだ。

因みに一誠はもはや開き直った様子を示しており、ヴァーリは普通にどうしたものかと困っている。

そんな宿主など御構い無しで二天龍の会話？　は続く。

『そ、それは私も同じだ！　私は定期的に処方してもらわなければならぬのだぞ!』

『処方だと……？　それが受けられるならば良いではないか……』

結局の所、アザゼルが『龍門』の準備を終えて戻って来るまでこの会話は終わることは無かった。アルビオンとドライグが最後の方で和解しかけていたのは何故だろうか……。

\*

ミドガルズオルムとの対談を挟んだ翌日、俺たちは再度魔改造された兵藤宅の地下にある大広間に集まっていた。因みに今日は学校があるが、それに関しては俺たちを模した使い魔などに代わってもらっている為に全員欠席などという問題はない。

そんな中でオーディン様と匙を除く全員が集まり、最後に来たアザゼルとロスヴァイセさんが此方に近づいてきた。アザゼルは見るからに不機嫌で、小言を呟いている。ロスヴァイセさんは俺の前まで近寄ると、布に包まれた片手で持てる何かを丁寧に手渡してきた。

「どうぞ」

布を丁寧に取ると、その中には豪華な装飾に北歐系の紋様が刻まれ

た日曜大工で使う程度の大きさのハンマーが有った。それが何なのか把握した俺は思わず疑問を口にする。

「ミヨルニル……!? いや、レプリカ？ だが、何故……」

「オーデインの爺さんからだ。本物に近い力を持つてるが、レプリカだ。……どれ、オーラを流してみろ」

アザゼルの言葉を聞いて一つ間を開けて周りから距離を取って、ミヨルニルのレプリカに聖なるオーラを静かに流す。ミヨルニルのレプリカをある程度大きくした所でオーラを停滞させて片手で雷が出ない程度に軽く振ってみる。

ミヨルニルのレプリカは柄の部分とはかく頭の部分が自分の背丈より一回り小さい程度にまで巨大化しているが、重さすら感じられない。

それをみたアザゼルは頷くと口を開く。

「よし、扱えるようだな。今回のロキとの戦闘ではお前にミヨルニルのレプリカを使ってもらおう」

「俺か？」

これならば他のやつの方が適任ではないか？ と思いつつアザゼルに微妙な表情を向ける。

すると、アザゼルは少し考えた後に口を開く。

「……見せれば早いから、イッセー、持ってみろ」

アザゼルに言われて近づいてきた一誠はミヨルニルのレプリカを手渡す。特に気にせず手渡したのが間違いだったか、ミヨルニルの性質を忘れていたのが不味かったのか、一誠が手に取った瞬間にミヨルニルのレプリカは先程までの羽のような軽さはなんだったのか、大きな音を立てて大広間の床に落ちて軽く食い込む。落下した衝撃で大広間全体が大きく振動する。

その揺れの意味、というか一誠が持った瞬間に重くなったというのを見てミヨルニルの性質を思い出した。それと同時にある一つの疑問が浮かぶが扱う分に支障はないので今は考えないことにする。

「重ッ！」

一誠は力を込めてミヨルニルのレプリカを持ち上げようとするが、

言葉に出たように重すぎて持ち上げられないようだ。一誠はミヨルニルのレプリカを片手で持ち上げた俺を信じられないものを見るような表情を浮かべて見つめる。それを見たアザゼルは再度口を開く。「お前らにも説明するが、ミヨルニルは力強く、純粋な心の持ち主には使えない。レプリカも同じでな。神しか扱えないのはバラキエルの協力でなんとかしたが、こればかりは無理だった」

それを聞いて驚きや納得、意味深な笑みを浮かべるなど様々な反応を周りは示すが、アザゼルは気にせず話を続ける。

「ミヨルニルのレプリカを渡されてから誰に渡すか考えたが……結論はお前になったわけだ。先ず頭に浮かんだのは転生天使のイリナだったが、今回は別の役割が有るからな……見送りになった。二天龍や後援組は言うまでもないが無理だ」

アザゼルの言うイリナの別の役割に心当たりがつかず何かあったか？　　と思いつくとするが、思考の途中でアザゼルが話し出したので中断する。……今すぐ知らなければならぬことではないだろうしな。

「残りは塔城に木場とお前なんだが……塔城、木場、これと同じ形状の獲物での戦闘経験はあるか？」

「……ないです」

「ありません」

　　といって広間の床に突き刺さっているミヨルニルを指して言ったアザゼルの問いに二名は直様返答する。確かに、この中でハンマー系統の武器を使った事が有るのは俺くらいか。　　といつても、デュランダルが使えずにいざという時の為だけに習っただけだからな。

「というわけだ、それに今すぐエクス・デュランダルを扱いこなせるようにはならないだろう？」

　　まあ、確かにな。……説明と描写もしていなかったが、前に言ったエクスカリバーをデュランダルの補助パーツ、つまり剣の『鞘』として使うことで完成した新生デュランダル……安直だがエクス・デュランダルは一誠たちがミドガルズオルムと会っている際にグリゼルダさんを介して送られてきた。

エクス・デユランダルは従来と大きく変わった点は二つ。一つはデユランダルにエクスカリバーの能力を付加できる。もう一つは『鞘』から切り離す事によってエクスカリバーを使用する事ができる点だ。前者の能力がメインで後者はイリナの鍛錬用の為に切り離しが出来ないと不都合があるからこのような感じになったそうだ。

これを使い始めたら誰にでもパワータイプでは無いことがバレるが、今更なんだって話か。

そして、俺が納得したのを見るとアザゼルは本題を切り出す。

「さて、ミヨルニルの件が終わった所で作戦を確認する。ロキとフェンリルが来るのを会談の会場で待ち伏せして、補足次第シトリー眷属らの手で轉移させる。場所は採掘場の跡地だから周囲の心配はいらん。ロキは二天龍とゼノン、ミヨルニルでトドメをさせ。フェンリルに関してはヴァーリとの契約があるが、基本的に気にせずに鎖を使つて捕縛からの撃破で問題ない……神喰狼を滅ぼすのはそう簡単ではないからな」

そして、俺たちはロキ対策の準備を進めていった。各自が各々の役割をこなす為に散っていった。

\*

「……こんなものか」

俺は地下のトレーニングルームにてミヨルニルのレプリカと『エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣』の確認をしていた。ミヨルニルのレプリカについては大体の動作確認を終えた為に一息ついていた。

次に『エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣』の性能を確認をしようと亜空間から取り出そうとしたその時にトレーニングルームに四人の女性が現れた。

そちらを振り向くと、イリナに黒歌、アシア、ロスヴァイセさんがいた。この面子の共通点が分からずに簡潔に問いかける。

「どうした？」

「えつと、ミヨルニルのレプリカの調子を確かめに来ました……オー  
ディン様は二天龍の方に行つてらっしゃるので、私が確認をしに来ま  
した」

「私とアーシアさんは、アザゼル先生に頼まれた私の役割の調整よ。  
ゼノン、突然で悪いけど『祝福の聖剣』を出してくれない？」  
「私はただ見に来ただけにやん」

すると、四人が要件を述べる……正確には三人だが。黒歌はともか  
く、残りの三人には言葉を返していく。

しかし、『祝福の聖剣』か。成る程、これで『聖母の微笑み』の  
回復力や範囲などを上げるのか。確かに『聖母の微笑み』は解釈にも  
よるが「対象を癒す」という「聖なる儀式」に入る。こじ付けに限り  
なく近いが、元シスターのアーシアで『聖母の微笑み』という明らか  
にそちら寄りの神セイクリット・ギア器だからこそなんだろう。

エクス・デュランダルから『祝福の聖剣』を取り外してイリナへ  
と手渡す。この聖剣は独特の才能を必要とするために使い熟せるか  
が懸念材料だが……何と無くだがイリナにはこっちの才能は有る気  
がするな。俺はこの聖剣は全くといっていいほど適性が薄いのはエ  
クス・デュランダルが届いて一通り試して見てわかった。

「……ミヨルニルのレプリカに関しては大丈夫です。よっぽどの事が  
無い限りは使えなくならないでしょうし」

とロスヴァイセさんに言つてから、イリナの方を向いてエクス・  
デュランダルから『祝福の聖剣』を取り出して彼女に手渡す。受け  
取ったイリナとアーシアに何故か黒歌は俺から離れてトレーニング  
ルームの端へと移動する。俺が彼女らの移動を確認してから亜空間  
から『支配の聖剣』を取り出すと、ロスヴァイセさんが口を開く。

「あの、宜しければお手伝いしましょうか？」

思いがけない彼女の発言に内心驚くが、せつかくの好意を無下には  
出来ない。それに、『支配の聖剣』の性能を確かめるには丁度良かつ  
た。言い出さなければ黒歌当たりに頼む予定だったがな。

「ええ、よろしくお願いします」

という事で軽く頭を下げる。

だが、彼女は若干言い辛そうな表情を浮かべて口を開く。

「……もう少しフランクに話しても構いませんよ？　オーデイン様の御付きといえどただの戦乙女に過ぎませんし……その……」

途中で言い淀むロスヴァイセさん……ロスヴァイセに何と無く光栄のような嫌な予感を感じる。

……俺は何か彼女の眼鏡に叶うような行動はしたか？　まあ、悩んでも仕方がないか。

「わかった。よろしく頼む、ロスヴァイセ」

「は、はいー」

こうして俺たちは途中で黒歌が参戦し始めたが特に問題は起きずに夜まで確認と調整を行った。

結果は上々だったと言っておこう。

It is what as Fenrir?

——会談当日の夜

俺たちは、オーデイン様と日本の神々が会談するという、都内のある高層高級ホテルの屋上で待機をしている。

同様に周囲のビル屋上に匙を除くシトリ―眷族が配置され、転移の準備を完了させて待機している。

アザゼルは、会談での仲介役を担うためにオーデイン様に付いている。その為、アザゼルの代わりにバラキエルさんとロスヴァイセさんがこちらにいる。

また、遥か上空にはタンニーン様が一般人対策に、普通の人間には視認できないように魔術をかけて待機している。同じく、ヴァーリたちも視界に入る内で待機をしている。

「……時間ね」

ぽつりと部長が呟き、会談の始まる時刻になったその瞬間、ホテル上空の空間が歪んで大きな穴が開く。

「小細工なしか。恐れ入る」

それをヴァーリが苦笑し、白龍皇の力を宿した翼を展開すると、他の面子も戦闘体制に入る。

確かに、小細工無しで真っ向から来るとはな。流星は腐つても神か。

そして、そこから悪神ロキと神喰狼フェンリルが現れた。

しかし、その瞬間にホテル一帯を包むように巨大な結界魔方阵が展開し、俺たちとロキ、フェンリルを転移させた。

場所は戦闘の被害を最小限に抑えるための岩肌ばかりの採石場跡地。

転移は完了し、前方にロキとフェンリルが自然体でいる。

「逃げないのね」

部長が皮肉げに言うと、ロキは傲慢に余裕を崩さず笑う。



「ここで貴様らを始末し、あのホテルに行けば良いだけだ。遅いか早いかの違いでしかないからな」

「貴殿は危険な考えにとらわれているな」

ロキの台詞を聞いたバラキエルさんがそういった。

しかし、ロキは何か気に食わなかったのか眉を顰め、口を開いた。

「危険な考えを持ったのはそちらが先だ。元はと言えば、聖書に記されている三大勢力が……いや、話など不毛！　始めようか！」

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!』  
『Vanishing Dragon Balance Breaker!!!』

ロキの宣言と共に、赤龍帝と白龍皇がそれぞれ赤と白の鎧を身に纏う。そして、俺は悪魔の翼を広げて一誠とヴァーリに並びロキの前に出る。

「これは素晴らしい！　二天龍がこのロキを倒すべく共闘すると言うのか！　そして、デュランダル使いもか！」

二天龍が肩を並べているのを見たロキは、歡喜の表情を浮かべる。俺がいることにも嬉々としている事からこいつはこいつで前のコカビエル同様の戦闘狂かつ戦争狂なんだと改めて理解した。

ミヨルニルレプリカ……ミヨルニルでいいか……を戦闘が始まっているのに見せて無いのには理由が有る。ただ単に見切られるのを恐れているのと、ロキの油断を誘う為だ。流星に、こんな状況でフェアも何もあるわけないからな……。

ヴァーリは高速でロキとの距離を詰めていき、一誠も負けじと背中ブーストを噴かす。そして、俺は「騎士」の駒の性質を生かして一誠とヴァーリに並走してロキに詰め寄る。

それに対し、ロキは幾重にも魔法陣を展開し、あらゆる魔術で迎撃する。

それをヴァーリは紙一重で回避し、一誠は攻撃を気にせず進む。俺は一旦、一誠のサポートに回るためスピードを若干落とし、聖劍の能力を解放する。だからこそ、一誠は攻撃を気にせずに進んでいる。

『エクスカリバー・ルーラー支配の聖劍』ツ！』

その聖剣の名を叫ぶとともに能力が発揮される。『支配の聖剣』エクスカリバー・ルーラーの能力は伝説の生物や魔法など様々な存在を意のままに操る事が出来る……と言うもので、何故か長い間扱っていた『破壊の聖剣』エクスカリバー・デストラクションよりも馴染む。

その能力によりロキの魔術が同士討ちや見当違いの方向に飛び、その隙に一誠がロキに攻撃を仕掛ける。

それに対してロキは、魔法陣の障壁を展開する。

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!!?』

「……障壁が！　流石は赤龍帝か！」

しかし、一誠の突撃によりロキの魔術障壁が碎かれる。その瞬間にヴァーリはある魔術を唱える。

「これはどうだ？　封ドローミの足枷！」

すると、北欧の魔法陣から鎖状の光が現れてロキを拘束する。

ドローミとは、北欧神話上にも存在した「筋の戒め」を意味するフェンリルを捕縛するのに使用した鎖の一つである。強度自体はフェンリルだったからという事も有って詳しくはわからないが、フェンリルを捕縛する事は叶わなかった事しかわからない。ただし、北欧神話通りに話が進んでいない為にドローミという道具としての鎖は存在しない。その為か、このような魔術として登場している。このような事は、様々な神話形態で起こっていて余り神話自体の知識を鵜呑みにするのは不味い原因の一つになっている。

それはともかく、ロキを鎖状の光が拘束した。ヴァーリ……白龍皇が北欧の魔術を使った事に関しての驚きによる硬直は有ったが、直様光を掻き消してその場から赤龍帝の追撃に備えて少し離れようとする。

「この程度の枷で我を抑え付け……」

「喰らえッ！」

だが、二天龍に気が向きすぎていたのと、『透明の聖剣』エクスカリバー・トランススペアレンジャーによって透明化、気配を消した事によって、俺のミヨルニルによる攻撃に直前まで気付く事は無かった。振り下ろす過程で、ミヨルニルに

オーラを込めて本家よりも一回り小さい程度にまで巨大化させた槌頭をロキへと振り下ろす！

「おおおおおおッ!？」

ミヨルニルから放たれた神雷がロキの右半身から呑み込もうとする。しかし、ロキは直撃する寸前に回避したのか倒すことは出来なかった。だが、それでも右腕辺りは雷撃によって焼かれており黒焦げとなっている。ロキは弾けるように距離を取って血すら流れぬ右腕を左手で抑え、こちらを……ミヨルニルを見ると憎々しげに口を開く。

「……まさか、その威力と雷はミヨルニル……いや、そのレプリカか!？」

オーデインめ、それ程までに会談を成功させたいか……ッ!」

流石にロキといえど、ミヨルニルのレプリカを俺たちが持つていて、俺が扱い熟せるなんて予想外だったようだ。

ただし、憎しみに歪んだ表情は直様歓喜に変わり幾重もの魔法陣がロキの右腕を包むこむと同時に叫ぶ。

「良いぞー！　良いぞー！　デュランダルの使い手がミヨルニルを使うか！

二天龍にミヨルニル！　相手に不足はない！　……

此方も攻めさせて貰うぞー！　フェンリル!」

ロキが魔法陣に包まれていない方の左腕を挙げてフェンリルに指示を出した瞬間、部長は対照的に左手を挙げる。

「にゃん」

その合図により黒歌が周囲に魔方陣を展開すると、魔法の鎖グレイプニルが出現する。因みに、このグレイプニルだが、持ち運びが難儀だった為に黒歌が仙術と魔術の併用による空間にしまい込んでいた。

それを俺、一誠、ヴァーリ以外の仲間達が掴み、フェンリルへ投げつける。

投げられた鎖はフェンリルへと向かっていく。普段のフェンリルならば避けられないような速度では無いが、指示を受けた瞬間だった事やこの鎖程度ならば噛み切れると判断したことによりそのまま鎖に拘束される。

フェンリルは直様噛み切ろうとするが、ダークエルフによって強化

された鎖はフェンリルの四肢と口を縛り付け、口を開こうにも開かずに真面に身動きが出来なくなっていた。その事実にはフェンリルは瞳を軽く開く。

「……フェンリル、捕縛完了」

そのフェンリルの姿をみたバラキエルが勝利を確信したように告げる。

だが、ロキは魔術によってある程度動くようになった右腕の調子を確かめると、高笑いしながら新たな手を切った。

「フハハハハ！　　こうも予想以上に対策をされるとはな！　　仕方ない、スコルツ！　　ハティツ！」

ロキが両腕を広げて叫ぶと、後方より2つの歪みが生じてオレンジ色の狼と紫色の狼が出てきた。

二匹の新たな狼の出現に、俺とヴァーリ以外の全員が驚愕する。

……神話において、スコルとハティはフェンリルの子供。その可能性は予想はしていたが……少し不味いか？

驚く顔に満足したのか、ロキは笑みを浮かべて説明する。

「ヤルンヴィドに住まう巨人族の女を狼に変え、フェンリルと交わらせた。その結果、生まれたのがこの二匹……親よりも多少スペックは劣るが、神殺しの牙は健在だ」

そのロキの台詞に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながらも意思を固く持って、ミョルニルを構えながらロキとスコル、ハティを目視する。すると、近くにいた一誠が思わず叫ぶ。

「畜生！　　聞いてねえよ！　　ミドガルズオルムもそんな事は言つてなかったぞ?!」

「トリックスターとも呼ばれ、悪神であるロキが手の一つや二つ隠し持っていない筈がないだろうが！」

その一誠の発言には叱咤を飛ばしながら部長とアーサーに、スコルとハティは宜しく頼む……と目配せする。

「その男の言う通りだ赤龍帝よ。ほら、オマケだ」

ロキの足元の影が広がり、影から体が細長いドラゴン……いや、ミドガルズオルムを一回りもふたまわりも小さくしたものが複数現れ

る。

それを見たタンニーンが憎々しげに吐いた。

「ミドガルズオルムも量産していたかッ！」

タンニーン様の言葉と共に量産ミドガルズオルムが一斉に炎を吐くが、直様放たれたタンニーン様の火炎で全て吹き飛ばされる。

しかし、炎を突っ切りスコルはヴァーリチームの方へ、ハティはグレモリー眷属の方へ向かっていった。

「余所見をしている暇があるのか、赤龍帝！」

それと同時にロキは魔術で創られた巨大な光球を一誠、ヴァーリ、俺へと繰り出した。前にいたヴァーリは他愛もなく避けて、ロキへと疾走。俺も普通に回避すると共に右手にミヨルニル、左手に『支配の聖剣』を構えてロキへと疾走する。一誠は背後だからわからないが、部長たちの方を向いていたとは言え、避けれただろう。現に俺も避けられたからな。

俺たちは先程と変わらずにロキへと一直線に向かう。ただし、ヴァーリと一誠は途中で立ち止まり、ヴァーリは幾重もの攻撃魔術を北欧のものも混ぜながら手元からロキへと放ち、一誠は何度も倍加させた魔力弾……ドラゴンショットをロキに向けて放つ。

勿論の事ながら俺はロキへと疾走している為にその一誠の攻撃は兎も角、ヴァーリの攻撃に巻き込まれるのは間違いない。

ロキは、血迷ったのかと俺たちを見るが『支配の聖剣』を見て即座に魔法陣を幾重にも出現させ、迎撃の準備を整える。

「……チッ！」

再度『支配の聖剣』の能力を利用して背後から来るヴァーリの魔術をそらしてロキへと向かわせると同時に幾つかのロキの魔法陣の機能を停止させる。

ロキは舌打ちをしながら、魔法陣により、ヴァーリの魔術の大半を打ち消していく。『支配の聖剣』を使いながらロキへと向かうのとロキへと向けた速度も何度も倍加されたドラゴンショットでは、明らかにドラゴンショットの方が届くのは速く魔力弾がロキへと撃ち込まれる。

だが、ロキはそれを受け止めると俺へと受け流して来た！

流石に、ロキから放たれる魔術とヴァーリの魔術を逸らすので精一杯な俺は一誠のドラゴンショットを体制を崩して避ける。

突然、ヴァーリが後ろを振り向き魔術を大量に放った。……後ろは捕縛してあるフェンリル……まさか。

体制を一瞬で立て直し、ミョルニルにより神雷をロキへと放つ。いくらミョルニルの雷とはいえ、距離が離れ過ぎな為にロキは余裕で回避をする。

その隙に、後ろを確認するとフェンリルに近づいていたスコルがヴァーリの魔術を受けて足を止めた所だった。直様、部長たちがフェンリルとスコルを引き離し、戦闘を再開させる。

……子フェンリルの目的はそちらだったか。ヴァーリのあれが無ければ解放されていたな。

再度、二人に目配せして仕掛けようとするがヴァーリが此方に近寄り口を開く。

「……兵藤一誠、ゼノン。ロキ達は君らや美猴達に任せる。このフェンリルは予定通り任せて貰おうか。鎖の心配もあるが、ロキ程度ならば赤龍帝とミョルニルが有れば撃破できる筈だ」  
「何をやる気だ白龍皇!？」

ヴァーリの発言には結論が早過ぎないか？　と思うがロキが先程の一誠の攻撃を弾いた左手が痙攣しているのを視認すると、反論する気は失せた。……それに、元よりロキとフェンリルは此方が相手取る予定だったからな。

ロキの問いにヴァーリは静かに口角を上げる。

「——見せてやろう、白龍皇……いや、ヴァーリ・ルシファアの力を……！」

そして、ヴァーリはある言葉を紡ぐ……！

「我、目覚めるは——」

〈消し飛ぶよッ!〉〈消し飛ぶねッ!〉

それは『覇』の呪文。ヴァーリの声と重なって歴代所有者の怨念混じりの声が響く。その光景は、あの時の一誠と酷似している。それと

同時にヴァーリから神々しいオーラが発せられる。

「覇の理に全てを奪われし二天龍なり——」

〈夢が終わる！〉〈幻が始まる！〉

「無限を妬み、夢幻を想う——」

〈全部だッ！〉〈そう、全てを捧げろッ！〉

「我、白き龍の覇道を極め——」

「「「「汝を無垢の極限へと誘おう!!!」」」」

『Juggernaut Drive!!!』  
ジャガーノートドライブ

その言葉が紡がれると同時に、ヴァーリの体が白い光に包み込む。この採石場全体を照らし出さんとする程の光が、ヴァーリから放たれる圧倒的な力を感じさせる。

鎧が徐々に変化していくが、それを待たずにヴァーリはフェンリルへと疾走。そして、互いに触れるか触れないかの距離まで詰めた瞬間、黒歌が二人をどこかへと転移させた。

フェンリルという最大の駒を無くしたロキが憎々しげに呟く。

「あれが、ジャガーノートドライブ 覇龍か……」

「どうした、ロキ？ あとはお前とスコルだけだぞ？」

優勢を確信したバラキエルさんがミドガルズオルムの量産体を雷光で蹴散らしながらもロキを挑発する。

このまま逃げられる訳にもいかなからな。

バラキエルさんとロスヴァイセ、タンニーン様が担当していたミドガルズオルム量産体は先程の雷光や龍王の一撃やヴァルキリーのフルバーストによって最早壊滅状態で残りは一匹、それでも火傷や魔術による傷痕が刻まれている。

ロキの事だから、まだ量産体は数体控えさせているとは思うが順調である。

スコルの方……部長達に視線を向けると、そこでは一方的とは言えないが戦闘を有利に進めている部長達の姿があった。前衛は裕斗とサポートに塔城、後衛は部長に姫島と成っていて聖魔剣と仙術で攪乱し、雷光と滅びの魔力を確実に当てる戦術をとっているようで前衛……特に裕斗の消耗こそ激しいが、スコルもだいたい消耗しておりこの

ままなら押し切れる状況だ。

対するハティを見ると、直様アーサーがハティの右爪を腕ごと空間を抉り取っていた。既に、牙と左爪辺りは同じような状況になっており勝利は間違い無いだろう。アーサーだけでやったのではなく、黒歌や美猴もアーサーの一撃を当てる為のサポートをこなしていた。

そして、視線をロキに戻すと奴はスコルとハティの様子を何かを考え込むようにして眺めている。既にミヨルニルによる傷こそ修復されているものの、先程に一誠の攻撃を左で弾いたことから右側のダメージは抜けてはいないのだろう。逃げるような素振りこそ見せないものの、既に逃亡の魔法陣は仕込んでいるかもしれない。何方にせよ、今の隙を逃す必要はない。一誠に合図を送り、ロキへと疾走する……筈だった。

その瞬間に、ロキの目の前に巨大な魔法陣が展開される。近くにした一誠を手で制して思わず立ち止まる。その魔法陣から漏れ出すフエンリルに酷似したオーラに……。

その魔法陣を創り出したロキは、その魔法陣を見ると再びマントを広げながら最後の手を切った！

「マーナガラムツ！」

「……ッ!?!」

ロキによつて創り出された魔法陣から呼び出されたのは、鮮血に染まりし狼。明らかに、スコルやハティのようなスペックの落ちた個体ではなく、フエンリルと同等の力を感じる。

……マーナガラムだと!?

——マーナガラム

「月の犬」を意味する北欧神話に登場する狼である。ミズガルズの東にある森イアールンヴィズに一人の女巨人が住んでおり、その女巨人がたくさん巨人を産んだがそれはみな狼の姿であった。この中の最強の狼がマーナガラムであり、すべての死者の肉を腹に満たし、月を捕獲し、天と空に血を塗り、太陽から光を失わせるという伝承が残っている。

だが、ある疑問が浮かぶ……なぜロキはここまでマーナガラムを出



し渋ったんだ？　すると、ロキがマーナガラムから距離を取ると口を開く。

「こいつは、ある方法によってフェンリルと我の遺伝子から創り上げた魔物だ。力はフェンリル同等……少し難点があるがな……」

最大限の警戒をする中で、ロキがそう言った瞬間にマーナガラムが俺たち……ではなく、ハティに襲いかかった。ハティは突然の襲撃に対応し切れずにマーナガラムに爪で胴体を真つ二つに切り裂かれ絶命した。そして、マーナガラムはハティの頭部から貪り喰らい始める。ヴァーリチームは一度マーナガラムとハティの亡骸から離れて様子を伺う。

「あれは……何だよ!?!」

一誠が恐怖に言葉足らずに叫ぶ。

……そんな中で俺は冷静に状況を理解しようとしていた。何故、俺たちでは無く虫の息だったハティを狙ったのか……思い起こせば、今のマーナガラムの行動以外にも不可解な点が幾つかあった。ロキがわざわざこの終盤で繰り出したことや、自身の治療を優先したこと……その事から考えられるのは……。

「部長ツ！　美猴ツ！　次はスコルだ！　喰う最中を狙うぞ！」

俺が叫んだ瞬間に、マーナガラムは俺たちを無視してスコルへと襲いかかる。俺たちはマーナガラムへと向かおうとするが……。

「……!?!」

突如、何かによって身体を押し潰される感覚と共に動きを封じられる。恐らくこれをした張本人であるロキの方を向くとロキは表情を固くしたまま口を開く。

「そうだ、お前の推測通りさデユランダル使い。こいつは欠点があつてな、敵味方とわず負傷者から狙いその死肉を喰らうようになっていなのだよ」

やはりか……だが、何故俺たちは動けない？　そして、ロキは何故追撃をしてこない？

周りを見ると全員が動きを封じられているようで明らかにチャン

スの筈だが……。

どうにかして抜け出せないかと考え、もがいている間にマーナガラムはスコルを平らげ、口からはスコルのものであろう血液が滴り落ちる。そして、マーナガラムは此方を見て咆哮する。

『オオオオオオオオンッ！』

そのマーナガラムの咆哮はこの採掘場一帯に響き渡った……。

『オオオオオオオンッ!』

何処かおぞましきというか嫌悪感を感じるマーナガルの咆哮が響き渡った瞬間にロキの仕業であろう拘束は解かれる。

マーナガルの咆哮と同時に拘束を解除したというロキの行動の真意がわからないが、今はロキの思惑について考えている暇は無い! 「咲き誇れッ! 聖魔剣よッ!」

真っ先に動いたのは、マーナガルムに一番近い裕斗。聖魔剣をマーナガルムの周囲に幾重にも積み上げて動きを阻害しようとする。

だが、マーナガルムは聖魔剣を気にせず裕斗へと突っ込む。

標的は裕斗か!

「お前達! ロキは私が相手をする! マーナガルムは任せたぞ!」

タンニーン様の言葉を背に受けながらマーナガルムへとミヨルニルを構えて急接近する。

マーナガルムは裕斗へと右爪を振り下ろすが、裕斗は聖魔剣を犠牲にして半歩後ろへと下がる。マーナガルムは気にせず距離を無理やり詰めて左爪を振り下ろすが……

「聖王剣が通じるか、試してみましよう!」

マーナガルムの追撃はアーサーによって受け止められる。だが、ハティの牙や爪、その肉体を難なく破壊した聖王剣でもマーナガルの爪は砕けなかった。

アーサーに左爪を防がれ、弾かれて体制を崩すマーナガルムだが裕斗へと突っ込むように噛みつきをしようとする。

明らかに異常なまでの固執した攻撃。聖魔剣が身体に当たっても、邪魔が入っても意に介せずに対象のみを滅ぼそうとするのには圧倒されかねない狂気だ。

だが、それを除けば……

「隙だらけだッ!」

ミヨルニルの一撃をマーナガルムの脇腹を右側から掬い上げるように当てる。神雷に焼かれ数メートル吹き飛ぶマーナガルム。

ミヨルニルの直撃に気が緩みかけた瞬間にザシユツ！ という何か切り裂かれた音と同時に苦悶の声上がる。

「ぐっ……いー」

驚く暇なく声の主である裕斗を見ると、マーナガルムらしき生物の爪に切り裂かれていた。

マーナガルムだと確信出来なかったのには理由がある。単純に四足歩行と少しの特徴以外がなくなっていたからである。眼球が有った部分には黒い穴が出来ており、血のような色の身体は体毛が抜け皮膚がしまりなく垂れ下がり黒ずんでいる。だが、こいつは先程ミヨルニルによる傷跡が有る為間違いは無い筈だ。

……いや、これはマーナガルムなどではなくただの化物！ 恐

らくミヨルニルは効いていただろうが、肉体を消滅させるまでこいつは襲ってくる！

「裕斗ー」

部長の叫びと共に雷光が化物を飲み込み、次いで部長の滅びの魔力、ロスヴァイセのフルバーストが炸裂する。その隙に一誠が裕斗へと近付きフェニックスの涙を振りかける。

その間に自傷して奴のヘイトを上げると共に辺りを警戒する。

後衛の集中砲火が途切れようとした刹那、小さな咆哮と共に目の前に奴が現れて喉笛を狙って喰らいついてきた。

速い……だが、フェンリルの速度を味わった俺にはこの速度には追いつける！

カウンターの勢いで奴の脳天にミヨルニルを打ち込んだ。効いたのか小さく唸り声を上げて再度吹き飛ぶ奴へとアーサーが聖王剣にて追撃を行う。

聖王剣の連撃が奴の右腕を襲う。だが、有効打を与えているように見えない。何かに阻まれて攻撃が無力化されているように思えるが……。

すると、奴の身体が点滅するかのよう歪み始めたかと思うとすぐ

目の前に出現し、爪で俺を引き裂こうとしてきた！ ミヨルニルを打ち込んで直ぐの攻撃に回避を行うも奴は逆の腕で明らかに骨格を無視した攻撃を繰り返す。

回避した体制から回避できる筈はなく、エクスカリバー聖剣の能力を使う時間もない。

障壁を紙のように引き裂き俺の身体が袈裟懸けに切りつけられる。致命傷に近いダメージだが、ミヨルニルを振るって神雷を奴へと当てて牽制すると共にアーサーと裕斗が奴へと斬りかかる。

その隙に、フェニックスの涙を使わずに止血の魔術と増血薬を服用し奴の標的を変えさせないようにする。部長にも小型通信機を仲介してその旨を伝える。そして、部長は悩むながらも了承の言葉を発する。

「……誰だ、おまえは?!」

突然、一誠が上空に向けて叫ぶ。その間も再度転移？ してきた化物の猛攻を俺と裕斗、アーサーで防ぎ切る。

ロキが新たに呼び出したミドガルズオルム量産体との戦闘に当たったロスヴァイセ、美猴、黒歌、塔城以外の後衛組は、化物へ有効打を与える為に魔力を練り上げている。ロキに関しては、タンニーン様が一人で当たっている。龍王の吐息は魔術を相殺し、剛腕は障壁を砕く。だが、ロキは縦横無尽に動きながら魔術を放つ為に中々当たらないようだ。

そんな中の一誠の奇声。何事かと思いつつも化物との交戦に全霊をかける。そして、一誠はタンニーン様に問いかけた。

「お、おっさん!」

「なんだ! また何か起きたのか! また乳なのか!」

ロキも興味があるのか、魔術を止めている為に受け答えは可能なタンニーン様は一誠の問いかけに次の言葉を促す。

「乳神さまって、どこの神話体系の神さまだ!」

一誠の問いに、敵味方全員……化物までもが戦闘を中断させて、一誠に視線を送っていた。

かという俺は、その間にミヨルニルのレプリカに力を蓄えておく。

これならば、あいつといえどそれなりのダメージを与えられるだろう。……一誠の発言に関しては、聞かなかった事にする。多分、胃が持たん。

「……リアス嬢ッ！ あいつの頭は既に致命傷だッ！」

「イツセー！ しっかりして！ 幻聴よ！」

一誠の声のした方にアーシアの回復の波動を感じる。まさか、一誠の頭に回復の光が届いたのか？ と考えてしまった自分が情けない。

だが、そうでなくとも誰もが一誠の正気を失うのは当然の事である。だが、もしも乳神という異世界の神の存在があるならば……

『い、いや、皆聞いてくれ。確かに乳の精霊とやらの声が聞こえる。俺の知らない世界の力を感じる。残念な結果だが、こいつは異世界の神を呼び寄せたらしい』

すると、ドライグが一誠の言葉を肯定する。しかし、この流れならば……

「そんな!? ドライグまでダメージを!?!」

『……』

案の定、ドライグの正気が疑われたに過ぎなかった。アルビオンがこの場に居なくて良かったな……どうせ後に知ることになるだろうが立ち会うよりはマシだろう。

そして、一区切りがついたのを見計らってか化物が動き出す。

俺もミヨルニルを構える……が、いきなり何か身体に違和感を覚えると共にミヨルニルの重さが戻る。重さを感じているのに持てている事実には訝しみながらもミヨルニルから雷を放とうとするが、雷は出る気配すら見せない。

「ゼノン！」

そんな中で一誠が俺を呼び、近づいてくる。そうしている間の化物の相手は周りがしてくれている。

「乳神からゼノンに与えられた力と乳神の力を譲渡したミヨルニルの一撃ならあの神喰狼擬きも倒せる！」

……確かに、俺と一誠の力は意味不明なくらいに増幅されている。

まさか乳神という存在はミヨルニルの代わりにこの力で奴を倒せというのか？ いや、迷っていても仕方がない。

「わかった、行くぞッ！」

右手にミヨルニル、左手にエクス・デュランダルを構えて化物へと突貫する。同時に一誠の姿を斜め前に映しながら聖剣の能力を解放する。

奴は再度俺の喉笛を噛みちぎろうと口を開いたまま飛びかかる。だが、目の前の俺は目の前の光景を眺めたままその場で動こうとしない。

そして、奴の牙が俺の身体を――

「ゼノン!？」

瞬間、奴の目標である俺は消えてそのすぐ後ろに俺が現われる。タネを明かせば二度目の『エクスカリバー・トランスペアレング透明の聖剣』を使って姿を消して、偽物の俺を『エクスカリバー・ミミック擬態の聖剣』と『エクスカリバー・ナイトメア夢幻の聖剣』によって創り出して先に行させたというわけだ。

ロキには平常時に二度同じ手は無理だろうし、奴も何で俺だと判断しているか不明だったから上手くいくかは半々だったが……奴が単純で助かった。

お礼と言ってはなんだが、そのまま乳神から授かったオーラを凝縮したミヨルニルで奴を打ち砕く！

インパクトの直前に一誠はミヨルニルに触れる！

「喰らいやがれ！ 一誠！」

『Trans fer!!?!?!?』

そして、更に追加で乳神の力を譲渡する。奴はミヨルニルに打たれた瞬間に吹き飛び、空中で圧縮されて呆気なく掻き消えた。

……明らかに白龍皇のような力に疑問を覚えつつも、ミヨルニルを持つ手から異常な重量を感じ直様もとの日曜大工のハンマー程度の大きさに戻す。

奴の消滅を確認してから一旦下がり、奴から受けた傷をフェニツクスの涙により治療する。シュウウウツと音と煙を上らせながら傷が塞がっていく中で、イリナが此方に近づいてくる。

「大丈夫!？」

「ああ、大丈夫だイリナ。……相談がある……」

そして俺はロキを討つ為の作戦をイリナと一誠に簡潔に口答で伝えた。他の奴らには小型通信機を介して伝わった筈だ。誰からも反論はなく、イリナは驚くも覚悟を決めたのか直様頷いた。

マーナガルト擬きの化物が消滅させられたのと俺たちの作戦会議の様子をロキは屈辱に顔を歪めながらも口を開く。

「まさか滅されるとは……仕方ない、我は一時退却する。しかし、三度ここに訪れて混沌を……!？」

だが、黒い炎らしきものが地面から巻き起こり、うねりとなって空中のロキを包み込んだ。

「この漆黒のオーラは……黒邪の龍王ヴリトラか!？」

ブリズン・ドラゴン  
その黒炎を見たタンニーン様がそう叫ぶ。

ヴリトラ……という事は匙か？ 「神の子を見張る者」の事だ、ど

うにかしてヴリトラの意識を覚醒させたのだろう。

黒い炎に吞まれたロキは驚きの声を発する。

「この炎は……動けん上に力が徐々に抜けていく!? 特異な炎を操

る龍王がいたと聞いたことがあるが、まさかッ! だが……」

匙の姿を確認もしたいが、ここはロキに接近する事を優先させる。

恐らくきっかけは赤龍帝……一誠の血だろうからそれはあいつに任せる。対話くらいなら接近中でも出来るだろう。

「一誠! イリナ! 接近するぞ!」

「応!」 「ええ!」

しかし、途中でロキは黒炎から抜け出すが黒炎がロキを中心に広がっていた為にかなり接近できた。

しかし、黒炎には近づけずにいた為に反対側に出たロキにミョルニルは届かない。ロキは抜け出して口を開く。

「この程度ならばまだ……」

言葉を遮るように雷光が煌めき、特大の一発がロキを包み込んだ。恐らく、姫島とバラキエルさんによるものだろう……見なくとも分かる。





拘束して地面に降ろす。その光景を見て誰に聞かせるわけでもなく  
呟く。

「手札は先に使い切ったほうが負けるんだよ……悪神様」

エクスカリバー・ミミック  
擬態の聖剣の力を使わせて貰った。デュランダルによって増幅した能力でミヨルニルのレプリカの偽物を創った。結構精巧な作りだったのとロキが追い詰められていたのが幸いして気付かれることは無かった。

色々疑問に残るが一先ずは一件落着か……。

\*

「これからどうすれば……!」

ロキの戦後処理を終えて、神々の対談も終わりオーデイン様も帰られた翌日。学園祭や修学旅行の話しをしているオカルト研究部の部屋中央で悲観の声をあげる銀髪の女性がいた……まあ、ロスヴァイセなんだが。何故、このような状況になっているのかと言えば会談を終えたオーデイン様に置いてかれてしまったらしい。今頃気付いている筈なのだが、何の連絡もやって来ない。……これは任されたのかね？

「これは紛れもないリストラよ! 私、あんなにオーデイン様のために頑張ったのに日本に置いていかれるなんて! どうせ私は仕事が出来ない女よ! 彼氏いない歴〓年齢よ! ふええええんっ!」

ロスヴァイセは、完全に自棄になって、泣きじやくりながら床を叩きまくる。こう見ると、先ほどまでとのギャップというか何かくるものがある。そんな柄でもない事を思いながら彼女へと対処を現実逃避によって放棄していると、部長が悪魔の微笑みを浮かべながらロスヴァイセへと話しかける。

「泣かないでロスヴァイセ。この学園で働けるようにしておいたか

ら」

「……ほ、本当に？」

泣いていたロスヴァイセは頭を上げて部長を見つめる。

「ええ。希望通り、女性教諭って事で良いのよね？　　女子生徒ではなくて？」

「勿論です。私、これでも飛び級で祖国の学舎を卒業しているもの。歳は若いけれど、教員として教えられます」

北欧で飛び級となると……結構優秀なんだな。まあ、そうでなければオーティン様の付き人になれないか。

……ほとんど覚えていないが、ロスヴァイセは666トライヘキサについてを卒業論文に出していたか？　一応説明するとトライヘキサは黙示録グレートレッドで黙示録の龍と並んで語られる獣の数字の大元となった生物で、大昔に聖書の神によって封印されている。

だからなんだという話なんだがな。

「けど、私、この国でやっていけるかしら？　　かと言って祖国には戻れないし。ううっ……せつかく安定した生活が送れそうな職に就けたのに！」

再び嘆くロスヴァイセに部長が微笑みを崩さずに書類を取り出し、彼女に手渡す。

「今、冥界に來ると、こんな特典が付いてくるわよ？」

ロスヴァイセはその書類を手にとってパラパラと斜め読みをする  
と、驚きの声を上げる。

「う、嘘……保険金がいかに!?　こつちのは掛け捨てじゃない!」  
「更にこんなサービスやシステムもついてお得だと思わない？」

追撃とばかりに部長は次々と見慣れた書類を出し始めた。……数か月前に俺が眷属入りした時にもあの書類は配られた。慈愛に満ちたグレモリーということもあって眷属や関係者となった者には相応以上のケアが施される。

他の所がどうなのかは知らんが、黒歌の時と比べると大きな差がある。

「す、凄いです！」

悪魔ってこんなに貰えるんですか？

どれも

好条件ばかりです！」

それを聞いたロスヴァイセはさつきまで落ち込んでいた様子が嘘のように消え、表情が明るくなった。そして、部長はポケットから紅い駒……「悪魔の駒」を取り出す。

「そんな訳で、冥界で一仕事するためにも私の眷属にならない？」

あなたのその魔術、「戦車」として得る事で動ける魔術砲台要員になれると思うの。……ただ駒の消費が一つで済めば良いのだけけど」

俺を除く全員が部長の申し出に驚くのも無理はない。しかし、「戦車」か……残る駒がそれしか無いのが惜しいな。ヴァルキリーつてのは、基本はウイザードタイプだが、オールマイティでもあるんだよな。そう考えると、「兵士」か特化して「僧侶」が良かったな。

まあ、無いものを強請つても意味無いがな。

「どこか運命を感じます。私の勝手な空想ですけど、それでも冥界の病院であなた達に出会った時から、こうなるのが決まっていたかもしれませんね」

ロスヴァイセがそう言いながら「戦車」の駒を受け取ると、背中から悪魔の翼が生えた。

「皆さん、悪魔に転生しました。元ヴァルキリーのロスヴァイセです。グレモリーさんの財政面も含め、将来の安心度もあるので悪魔になってみました。どうぞ、これからもよろしくお願い致します」

「……と言う訳で、皆。私、リアス・グレモリーの最後の「戦車」は彼女、ロスヴァイセとなりました」

部長が笑顔で改めて紹介し、全員が快く迎え入れた。全員を見渡して俺は呟く。

「これで、部長の駒は全て埋まったか。……戦術の幅が広がるな」

といっても、ゴリ押しに拍車がかかりそうな気もして来たが……。「そうなるわね。新しいフォーメーションも考えないといけないわね」

すると、そう言っただけで考える様子を見せる部長。そんな中でロスヴァイセが呟く。

「そういえば、住む場所はどうでしょうか……」

「……住む当てが無いなら、黒歌と同じくあのマンションで良いんじゃないか？」

ロスヴァイセの呟きに思わずそう返す。俺の言うマンションは俺やイリナ、裕斗にギヤスパアの住んでいる所だ。黒歌が俺の部屋に同棲すると言いついた時はイリナも参戦しようとしてどうしようかと思つたが……勿論、あいつらとは別室だ。

ちなみに黒歌は保険医として駒王学園で働く事になっていてロスヴァイセさん同様に、生徒ではない。

今は、はぐれ悪魔の件の処理で冥界にいる。魔王領内かつグレイフィア様がついてくれる様だから心配しなくて良いだろう。

「そうね、ロスヴァイセさえ良ければ……」

「ほ、本当ですか？ あ、ありがとうございます！」

そんな事もあつて新たにロスヴァイセが仲間になり、益々賑やかになりそうだ。

次は京都への修学旅行……何も起きずに済めば良いが……。



——「禍の団」英雄派アジト

日本の何処かで数名の男女が集まっていた。その人物らは最後に部屋に入ってきた一人のアジア系の青年へと視線を向けていた。そして、ある一人の金髪の女性が彼に口を開く。

「曹操、首尾は？」

「ああ、龍喰者の交渉は済んだ。ハーデスの頭を縦に振らせるのも苦労したよ。あとは、京都でグレードレッドを呼び出すだけさ」

曹操と呼ばれた先程の青年は軽く笑みを浮かべながらそう返した。すると、一人の大柄な男性が曹操に問いかける。

「でもよ、京都でやる必要はないんじゃないか？ 霊脈なら他の地にも有るし、わざわざあいつらの修学旅行とやりに合わせる必要はな

いんじやねえか？ まっ、聞えるんなら構わねえけどな」

大柄な男性が問いかけていながら、自己完結した事に曹操はやれやれと肩を竦めてからメンバー全員に話しかける。

「今回のロキの件は予想外の連続だったが、何方にせよ赤龍帝を含むグレモリー眷属の実力は実際に見ておいて損は無いだろう……丁度、実力を測りたいメンバーは修学旅行だけに参加するからな。リスクは其れなりに有るがな」

そのリスクというのは、余計な者まで呼び寄せる可能性が高くなるということ。だが、それを差し引いても赤龍帝らの名は大きくなっている為に情報を得るのは大切であると曹操は判断した。

「情報によれば……赤龍帝、デュランダル使い、聖魔剣、ヴァルキリー……ぐらいかしら？」

と確認をするのは、最初に開口した金髪の女性。この中に回復要員であるアーシア・アルジエントの名が無いのは、戦闘要員では無い為に単純な理由であって決して驕っているわけではない。また、エクスカリバーの使い手に選ばれた紫藤イリナに関しては未だその情報が外部に届いていないからというのもあるが、彼女がグレモリー眷属ではないからが第一である。同様の理由で匙元士郎も除外されている。

「そのようだな。といっても、彼には彼女が当たるようだからな」と苦笑いを浮かべながら言葉を返す曹操にある一人の男が反応する。

「……正直、彼を知っている僕からすれば引き抜きは不可能だと思う」その男は病的なまでに白髪が特徴的で、彼は苦々しく呟く。それを聞いた曹操は表情を先程のものから変えずに彼に声をかける。

「だが、あの彼女が提案した事だ……何か策があるんじゃないか？ 邪魔されない場所で殺り合うためかも知れないがね」

「そつちの可能性の方が高いけど、彼方にはゲオルクの監視も付くし、大事には至らないんじゃない？」

それについて、またもや金髪の女性……名はジャンヌと言う……が発言する。ゲオルクの監視が付くともあって納得しようとする白髪の青年だが、表情は険しいまま言葉を返す。

「それならば、いいが……」

「兎に角、此方は期待通りの結果を待つのみだ。旧魔王派が壊滅した今、派閥内での動きはヴァーリチームという懸念もあるが、我々が指揮をしている……変な横槍は出ないだろう」

曹操は懸念材料であるヴァーリには伝言を伝えて有り、フェンリルを従えた事には既にヴァーリが生きて戻ってきている事から知っている。だが、想定範囲内であった為かそこまで警戒はしていない。すると、またもやジャンヌが曹操の意見に同調する。

「はぐれ魔法使いの集団はリーダーたちが此方に属する以上は変に動けないからね」

「まあ、それは二条城の時にするらしい。顔見せの際にでも剣を交わらせたらどうだい？　ジークフリート？」

「……そうするよ」

## 課外授業のデイウオーカー

What is a sham battle?

ロキとの一件がひと段落ついた頃、俺たちグレモリー眷属とイリナと黒歌は、グレモリー邸へと帰省していた。

理由は、部長……リアス・グレモリーの眷属が今回『戦車』をロスヴァイセに与えたことで揃ったからである。

黒歌は冥界での事後処理を済ませ、今回の俺たちの帰省に合わせて合流し、そのまま駒王町に戻る流れになっている。

結局、黒歌はただの「下級悪魔」として生きていくことになった。誰の所にも眷属入りしていないので、このままならば昇格は厳しい。さらに、俺以外の眷属になる気はないようだ。

その発言にイリナが何やら考え込む仕草をしていたのは、気のせいではないだろう。

今はその報告が終わり、グレモリー家のダイニングルームにてお茶会の最中だ。紅茶を飲み世話を楽しむ、そんな良くある貴族のワンシーン。周りを見ると皆、様になっている気がする。一誠も夏休みでヴェネラナ様に色々教わったおかげか、立ち居振る舞いもそれっぽくなっているしな。

しかし……こうして周りを見て改めて分かった事だがリアス・グレモリー眷属は結構異質なメンバー構成だな。

現魔王サーゼクス・ルシファアの妹で、グレモリー家の膨大な魔力にバアル家の滅びの魔力を継いだ我らが「王」<sup>キング</sup>リアス・グレモリーを筆頭に、墮天使の幹部である雷光のバラキエルの娘の「女王」<sup>クイーン</sup>姫島朱乃。

「戦車」<sup>ルック</sup>は元オーディン様の付き人であり、ヴァルキリーのロスヴァイセに、猫又と呼ばれる妖怪の塔城白音。

……ああ、名前は基本的に黒歌と俺は元の名前で呼んでいる。校内では小猫のままだし、最終的にどうなるのかは本人次第だけだな。



それで「騎士」は、サーゼクス・ルシファアの「騎士」である沖田総司を師に仰ぎ、聖魔剣と呼ばれる聖魔混合の剣を扱うことのできる木場祐斗。さらに補足するならば、一人一つしか所有できない神器を『魔剣創造』と『聖剣創造』の二つを所持している。で、俺に関しては特に今更特筆することはないだろう。自分のことながら分からないことだらけでもあるしな。

そして「僧侶」は元教会のシスターであり回復系神器『聖母の微笑み』の所有者であるアジア・アルジェントに、吸血鬼のハーフで神器「停止世界の邪眼」の所有者であるギヤスパ・ヴラデイ。直接戦闘には向かない（ギヤスパーに関しては吸血鬼ならば近接戦闘技能も高いが、性格が転じている為にそうになっている）が、サポート役としてはかなり優秀な二人である。

そして「兵士」の兵藤一誠は乳龍帝として、その名前を轟かせている。アザゼル曰く赤龍帝としては珍しい存在らしい。魔力操作に関するの才能は乏しいが、いざという時の爆発力と根性は見張るものがある。特に、乳に関するの爆発力は凄まじく、「洋服破壊」「乳語翻訳」など限定的であるが、前者は防具及び武器の破壊による無力化や後者は防ぐ術はない読心と能力だけを見ればかなりの難敵で有る事が分かる。

「王」を除く八名の内、俺を含む三名が教会出身である……木場は厳密にはどうかかわからないが。そして、残りも墮天使のハーフ、吸血鬼のハーフにヴァルキリー、猫又と他種族の血を継ぐものが多い。

唯一の元一般人も赤龍帝と、誰が見ても異質なパーティーである。

「どうかしましたか？　ゼノンさん？」

「いえ、何でもないですよ、ミリキヤス様」

何故か、眷属内では身内を除いて一誠の次にミリキヤス様に懐かれた。一誠の次といってもベクトルが違うからどうして懐かれたかよくわからない。

その後は恙無く報告とお茶会が終わり、魔法陣で帰るのだが、その前にグレモリーの城にサーゼクス様——あの一件から様をつけるのをどうしようかと考えている——が戻られているということなの

で、ミリキヤス様も同伴で帰り際に挨拶をすることになった。

そして、サーゼクス様が戻る際に使う移住区の通路を進むと、サーゼクス様と貴族服のサイラオーグに会った。

何故、サイラオーグが此処に？　と一瞬疑問を覚えたが、一応彼は部長の従兄弟に当たる存在である為に別に別に変ではないのかと納得した。

サーゼクス様とサイラオーグに挨拶を交わし、部長が話を進めると今後のレーティングゲームの話が出てきた。

「今度のゲームについていくつか話してね。リアス、彼はフィールドを用いたルールはともかく、バトルに関して複雑なルールを一切除外してほしいとのことだ」

「……ッ！」

サーゼクス様の言葉を聞き、部長は驚くが直ぐにサイラオーグへと問いかける。その部長の目元は厳しい。

「それはつまり……こちらの不確定要素も全て受け入れるということかしら？」

その問いに部長の視線にサイラオーグは不敵に笑みを浮かべる。

「ああ、そういうことだ。時間を止める吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>、女の服を弾き飛ばし、読心ができる赤龍帝の技。それを俺は全部許容したい。おまえたちの全力を受け止めずに、大王家の次期当主を名乗れるはずがないからな」

その言葉を聞き、周りが息を飲むのが聞こえる。そしてサイラオーグの視線が部長を捉え、俺に移り視線が合うと一誠にも移る。

サイラオーグの純粹な戦意の籠った威圧にギヤスパーは直視していないにも関わらず一誠の後ろで震えている。

俺はサイラオーグの纏う闘気を感じ、どうやってこいつを倒せるものかと頭を働かせる。これで枷をかけているというのだから厄介なものだ。すると、サーゼクス様がある提案を口にする。

「ちようどいい。サイラオーグ、イツセーくんと拳を交えたいと言っていたね？」

この流れはまさか……？

「ええ、確かに以前そう申し上げましたが……」

「軽くやってみたらいい。天龍の拳をその身で味わってみるのはどうかな？　リアス、どうだろうか？」

サーゼクス様の提案に部長はしばし考え込み、意を決したように答えた。その一誠はというと突然の事に目を見張っていた。

「……魔王様がそうおっしゃるのでしたら、断る理由がありませんわ。イツセー、やれるわね？」

「は、はい！　俺でよかったですらー！」

部長の言葉もあつて一誠も決心したのか、一步前に出ると返事を返した。

そのような経緯があつて俺たちは、グレモリーの城の地下の広大なトレーニングルームに移動した。広さで言えば駒王学園のグラウンドより一回り広く、高さも悪魔の翼を広げて飛び回れるくらいだ。

既にサイラオーグは貴族服を脱いで灰色のアンダーウェア姿になっている。対する一誠はそのままの格好、とはいえ何時もの特別製の制服な為動きが悪くなるような事もない。

対峙する二人は先に一誠が動いた。ブーステッド・ギア【赤龍帝の籠手】を出現させると直様叫ぶ。

「ドライグッ！　いくぞー！」

『Welsh Dragon Balance Breaker!!』

音声と共に赤いオーラが発生し、一誠を包んで鎧を形成していく。そして既に見慣れた赤い鎧……ブーステッド・ギア・スケイルメイル【赤龍帝の鎧】を身に纏った。

あの乳神の一件から一誠の禁手までのカウントがほぼ必要無くなった。理由としてドライグ曰く、乳神の大きな力を受けて神器に良い刺激が与えられたかららしいが、ドライグとしてはまた「乳」ということで気を病んでいた。

その話は置いておき、両者は構えを取って様子を伺っていた。しかし、一誠は悩んでいても仕方が無いと踏んだのか右のストレートを放つ構えをする。

「行きますー！」

宣言通りその構えのまま背中ブーストに龍の翼の加速を利用して突貫する一誠。対するサイラオーグは避ける素振りは見せない。

そして、一誠の拳がサイラオーグの顔を横から殴り抜けようとした瞬間……

『Promotion Rook!!!!?』

宝玉から発生された音声が響くと一誠は「戦車」<sup>ルーク</sup>へと昇格<sup>プロモーション</sup>し、その拳のスピードは異常に上がる。「戦車」のパワーならばサイラオーグにも有効だろう。しかし、ゴッ！ と鳴り響いて当たった拳はサイラオーグの左腕によつて防がれていた。

今のを初見で防ぐだと？ どんな動体視力と反射神経してやがる。ドライグと協力したことで瞬間的な昇格<sup>プロモーション</sup>が可能になつてるんだがな。

俺が内心驚く中で一誠は防がれた為に一旦距離をとつて後方に下がる。そして、再度体勢を整えるとサイラオーグの挙動に注意を払っているようだ。

サイラオーグは防いだ左腕を軽く叩くと笑みを見せる。その笑みは一誠の一撃が予想以上のものだったことによる喜びだろう。

「いい拳だ。思わず防いでしまう程の純粋な拳打。だが——」

言葉の最中に足元に闘気を爆発させて一気に一誠との距離を詰めて背後をとるサイラオーグ。

「——まだまだだ」

そして、言葉が終わると同時にサイラオーグの拳が一誠へと襲いかかる。

だが、伊達に俺たちも死線をくぐり抜けてきた訳ではない。その証拠に一誠はサイラオーグの攻撃に反応して振り返ると共に肘を揃えて拳を腕で防ぐ。インパクトの瞬間にブースターを逆に吹かして衝撃を減らし、吹っ飛ばされる途中にドラゴンショットを連射し、直様龍の翼で離れた場所に着地をする。

サイラオーグはドラゴンショットを拳で弾き飛ばすが、追撃はしようとせずに一誠が体制を整えるのを待ち、口を開く。



に手を置く。

「ならばそれを得てからだ。続きはレーティングゲームで俺とお前、リアスの眷属たちと見えよう。——来い。そこで俺、いや俺たちがお前たちを打ち倒す」

サイラオーグはそう言い残し、サーゼクス様に挨拶をした後に去って行った。そして、そのまま此方もサーゼクス様に挨拶をして帰るつもりだったが……。

「サーゼクス様、墮天使総督から大至急の連絡です」

「ありがとうございます、グレイフィア」

サーゼクス様はグレイフィア様から渡された小型の端末を受け取る。この場で話し始める。

アザゼルからの至急の連絡だと？　修学旅行前に一波乱来そうだな。

そんな事を考えていた俺の予想以上の事が起こるとはこの時は予想していなかった……

Where is a fact ion?

俺たちグレモリー眷属のギヤスパーを除いた男子たちは現在、俺の家  
の訓練場で鍛錬をしている。

その後、サーゼクスさまから告げられたのは「吸血鬼との会談を駒  
王とする事になった」という事だった。吸血鬼は本来、悪魔以上に純  
血を尊ぶ徹底した格差社会を築いており、他の勢力からの干渉を極端  
に嫌うらしい。だけど、今回は吸血鬼側からの申し立てらしくその事  
に対応に当たっていたアザゼル先生は驚き、サーゼクスさまに連絡が  
いき、今回はその場に立ち会ったことに加えて開催地が駒王学園とい  
う訳で俺たちにそのまま知らされた。

詳しい話はサーゼクスさまが会談の準備の為に聞けなかったが、な  
んでも申し立てたのが吸血鬼が『ヴァレリー・ツェペリシュ』という  
ギヤスパーの知り合いであり彼女が現在の吸血鬼の当主であるとい  
う。

この事に、ギヤスパーは酷く動揺して神器のコントロールすらまま  
ならなくなっているほどだ。だから今は部長に小猫……白音ちゃん  
と黒歌が付いている。

「イツセー、次はお前だ」

ゼノンの声で木場との模擬戦が終了したのを理解する。最近、木場  
は『魔剣創造』と『聖剣創造』の同時使用による高速戦闘か  
『聖剣創造』しか使わずに行うガチの戦闘を俺たちとやってる。聞  
いた話では『聖剣創造』の禁手の発現と2つの神器の同時  
使用を目的としているらしい。アザゼル先生が言うには過去にそう  
いう事例が僅かだけあるみたいで、アドバイスを貰ったりしてる。  
そんな木場は見るからに疲労して大の字になっている。対するゼ  
ノンは疲れを見せずにスポーツドリンクを飲み、木場に肩を貸して待  
機場所へと連れて行く。

俺は軽くストレッチをこなしてゼノンが戻ってくるまで待つと、  
戻ってきたゼノンは聖剣を構えて此方に目で合図をする。

ギヤスパーの事は気になるけど、今は目の前に集中しないとない。

くぜ、ドライブグ！

『応！』

『Welsh Dragon Balance breaker!!』

赤の鎧を身に纏うと、直様『騎士』へとドライブグのサポートで即座に昇格し、トップスピードでゼノンへと接近する。

対するゼノンは左手にエクス・デュランダル、右手にジュワユースの二剣を構えて此方の動きに目を向けている。

『BoostBoostBoost!!?』

『BoostBoost!!?』

『BoostBoostBoostBoost!!?』

『BoostBoostBoost!!?』

ゼノンの隙を見極めるよう、フェイントに加えて不規則に倍加しつつ間合いを狭めていく。

ぶっちゃけるなら、この程度のフェイントとスピードはゼノンには通用はしない。これ以上のスピードで駆け回れる木場とさつきまでゼノンは斬り合っていたしな。

それでも、持てる手を尽くさないのは別なわけで。

ゼノンの剣の間合いに入る直前に溜めていたドラゴン・ショットを連続で散弾のように放つ。そして、すぐさま『戦車』へと昇格。ゼノンの対処を注視しつつ、それに合わせて攻撃を当てられるようにする。

「疾ッー」

ゼノンの対応は予想どおりに斬ってドラゴンショットを消してきたが、そのまま斬撃が残って飛んできた。消す為に横薙ぎで放ったデュランダルによる斬撃に加え、それと同時にジュワユースによって放たれた縦の斬撃にオマケとばかりに横薙ぎからの逆袈裟による斜めの斬撃。

それに対処するための機動力を高める為に『騎士』に再度昇格。斜めと縦の斬撃の直線に入らないように背中中のブーストを吹かして浮いて躲し、横薙ぎで飛んできた斬撃を飛び越えるように避ける。着地と同時に辺りにアスカロンのオーラを飛ばしてゼノンの接近を



防ぐ。

飛ばしたオーラを左のデュランダルでゼノンが切り裂いたと同時に急加速でゼノンから見て左から接近し、拳を振るう！

デュランダルを振り切った直後の攻撃！ 避けられるか!?

この攻撃に判断が遅れたように見えたゼノンだが、俺の拳は空を切る。

どうやって？ と思いつつも周囲を見渡そうと首を動かすと目

の前にデュランダルが突きつけられていた。

「まいった、降参」

あそこからどう足掻いても抜け出す前に斬られるのがオチなので、ゆっくりと手を挙げながら言う。

こういった模擬戦は先生の宣言通り夏休み後から始まったんだけど、ロキ戦の一件からゼノンの容赦が無くなっている気がする。強くなれてるから問題はないんだけど、イリナがいうには「昔の近寄り難い彼に戻りつつある」らしく、ここ最近はゼノンと所構わず引っ付いているのをよく見る。それを見て桐生が茶化すか、松田や元浜が羨むまでがセツトだが。

いつの間にかゼノンは持ってたスポーツドリンクとタオルを手渡してきた。それを受け取りながら質問をする。

「そーいや、さっきのはどうやったんだ？」

「あれか……『縮地』と言われるものだ。とはいえ、技能的なものではなく、仙術の方のだから」

ゼノンの言葉に首を傾げる。

縮地なら木場の師匠や木場自身が使うことがあるからわからなくもないが、仙術？ 昔にゼノンは使えないとか言っただけか？

そういつて質問すると俺にも原因は分からんが、と前置きをして答え始める。

「原因はおそらく、あの乳神とか言う奴の与えられた力によるものだろうが、俺になにかしらの変化があったらしい。以前扱えなかった仙術もほんの僅かだが扱えるようになった。デュランダルやジュウユースも以前より馴染むようになってる。今の所、違和感や逆に衰

えたものは……なくはないが、問題はないだろう」

ゼノンの話を聞いて、あの異世界の神様の声を聞き、力を与えられた俺も【赤龍帝の籠手】ブラスレット・ギアに対していい成長が見られたし、そう言うものなんだろうと納得する。違和感とかはさつきいった近寄りがない云々のことだろう。

それに、結果待ちだけど冥界および天界で診断を受けているから何かあつたらすぐ分かると言われて俺はその話を終わらせた。

すると、ゼノンは手元に展開された小型の連絡用魔法陣によって会話をし始めた。あれを見るに緊急用のものだど理解し、気を引き締める。そして、ゼノンからの内容に俺はさらに気を引き締めることになった。

「明晩、吸血鬼との会談をすることになった。場所は俺らの部室だ」



深夜の校舎、俺たちはオカルト研究部の部室に居た。

俺の他には悪魔側としてグレモリー眷属一同にソーナ・シトリー。墮天使側としてアザゼル、天界側としてイリナに加え、グリゼルダが今回この場に集まっている。

一同が言葉もなく来訪者である吸血鬼を待つ最中、外から異様な冷たさを持つ気配を感じた。その気配を全員が感じ取り、旧校舎の入り口の方に視線を向けたのを確認した俺は、静かに立ち上がると部長に一礼してから部室を出て、その気配に向けて歩き出す。

そう長くない部室から旧校舎の入り口までの道のりを歩く最中、気配の動かない来訪者の吸血鬼について情報を再確認する。

吸血鬼とは一般的な特徴として十字架・聖水に弱く、ニンニクを嫌い、鏡に映らない、流水を渡れない、影がない。それに加えて今、俺が吸血鬼を迎えに行っている理由である……初めて訪問した建物では招かれなければ侵入できない……という特徴がある。

なんとも弱点が多いように見えるが、それを覆せるほどのポテンシャルは高いのは戦ったことのある俺が理解している。とはいえ、聖

剣であるデュランダルが効果的過ぎて苦戦は少なかったが。

入り口に近づくくと赤を基調とした中世のドレスを着た少女が視界に映る。人間味を感じられない顔の造形に、真っ赤に輝く双眸、足下に存在しない影、正気を感じられない存在、その全てが彼女が吸血鬼であることを証明する。

少し気配を強くして一歩ずつ一人で立っている彼女へと近づくと、気づいたのかこちらを見ると値踏みするかのような視線がこちらに突き刺さる。

「ようこそ、いらつしやいました。貴女が吸血鬼側の……」

「エルメ、エルヒメンデ・カルンスタインです」

と思いきや言葉には刺々しきは無く、言葉からは寧ろ柔らかい印象さえ思わせる。

ギヤスパーのようなハーフヴァンパイアでは無く、純血の吸血鬼である彼女のそのような対応に驚くが表情には出さない。

吸血鬼の純血主義は悪魔のものと同等、いや、それ以上である。それを理解しているからこそその疑問。

それほどもでにヴァレリー・ツェペシユが吸血鬼の当主となったのが大きいのか？ 確かにヴァレリー・ツェペシユは、ギヤスパーの話によればギヤスパーと同じハーフヴァンパイアであるとのこと、その彼女が当主になり意識の改革を進めたならば辛うじてありえなくはないと考える。

だが、その一方でヴァレリーはギヤスパーと同じ歳であることも聞かされている身としては、其処までの意識の改革を成し得ていることやその位置に成り上がれたこと。少なくともギヤスパーが外に出るまではツェペシユ側はヴァレリーを含むハーフヴァンパイアを幽閉していたというのだから、情報が遮断されている中でその発想に至れることにも驚くばかりだ。

この点から考えられるのは、彼女の俺と同じ前世の記憶があるのではないのか？ ということ。それならば、ある程度納得するものか前世がどのような修羅場を潜り抜けてきた人物なのかと興味が湧く。この俺の推測が間違っていようとも気になる吸血鬼だ。

「では、お連れいたします」

「ええ、どうも」

そんなことを考えつつも案内すべく返事を聞き、反転。そのまま、部室へと向かおうと歩みを進める。遅すぎず、早すぎずのペースで無言で道を案内していく。

「お客様をお連れしました」

部屋のドアをノックし、客人を連れてきたことを報告。ドアを開いてエルヒメンデを部室内に入れ、自分も中に入ってドアを静かに閉める。俺が部長の傍らに戻ると、エルヒメンデは口を開く。

「ご機嫌よう、三勢力のみなさま。この度はこちら側の急な訪問に応じてくださり、ありがとうございます。今回、当主のヴァレリー様の代わりと致しまして不肖エルヒメンデ・カルンスタインが務めさせて頂きます」

やはり、知識や前に出会ったような純血の吸血鬼特有の傲慢さは彼女には見られない。

部長は、困惑を隠しつつもエルヒメンデを対面の席へ促す。

「エルヒメンデ、といったか。どうして、カーミラ派であるお前がこの場にいる?」

「そうですね……それを語る前に皆様の誤解なさっていることを正しておきましょうか。ヴァレリー様がおっしゃらなかったのが原因でもあるのですがね」

アザゼルの問いに困ったように返すと、一旦間を空けて、真面目な表情で言葉を続けた。

「第一にカーミラ派とツエペシユ派の抗争は収束を迎えました。また、それに伴い吸血鬼の血による差別は表面上は無くなりました」

「何……だと……!?!」

アザゼルが驚きの余り声を漏らす。

「とはいえ、問題がありました。それに反発したヴァレリー様の兄、マリウスらが徒党を組み内乱が起きまして」

「え!?! ヴァア、ヴァレリーは無事なんですか!?!」

エルヒメンデから伝えられる内容に思わず叫ぶギヤスパ。ギヤ

スパークが不味い、と思って口を両手で隠すようにするが、エルヒメンデの視線がギヤスパークに突き刺さる。

「貴方は……ギヤスパーク様ですね」

「え、あ、はい……」

「恐れる必要はありません、貴方様はヴァレリー様のご友人。少なくとも私には敵意はありませんし、血を疎むこともありませんよ」

だが、ギヤスパークにかけられた言葉は吸血鬼らしからぬ優しいものだった。俺の想像以上にヴァレリーという女性は人心掌握に長けているようだ。もしくは……

エルヒメンデはコホンと咳払いして話を元に戻す。

「その結果、吸血鬼自体の総数が激減しました。しかし、マリウスらの反乱にカーミラ、ツエペシユ派側双方が手を取り合い迎撃した事で固執は薄れました。そのような経緯もあって、血の濃さを気にしてられなくなったのでこのような結果になったのですがね」

「成る程、新旧魔王派の争いに似たものが其方でも起きたわけか……事情は分かった、本題に入ろう。そっちの要望は何だ？」

「要望は一つ。これをどうぞ」

エルヒメンデが鞆から取り出し、アザゼルに手渡すのはそれなりに分厚い書類。それを受け取り、書面を見る。こちらからはその文面は見えないが、アザゼルの眉にしわが寄つたのを見て、いままでの吸血鬼らしからぬ要望なのだと理解した。

「……吸血鬼の和平協議について、か」

アザゼルの零した言葉に周りが驚きの余り息を呑む。

「つまり、これはお前さんが特使として俺たちの元に派遣されたってわけか」

「はい。我らがヴァレリー様は吸血鬼の未来を考え、三勢力の方々の協力体制を敷きたいと申しておりました」

そのように話すエルヒメンデの表情は変わらず、裏があるのかすら判断出来ない。その為か、アザゼルやグリゼルダの表情は優れない。

「といつても、書類上や言葉だけでは納得はいかねえ」

「……貴方たちがヴァレリーという少女を当主としている、俄かには

信じがたい話です。正直、彼女を裏で糸引き、何か企てているのでは？ としか思えないですしね」

そのグリゼルダの言葉を聞いたエルヒメンデの纏う雰囲気が一瞬変わる。……怒り、か？　これで考えていたエルヒメンデらがヴァレリーをお飾りの当主として、裏で操っている可能性は薄くなった。そのエルヒメンデはほんの少しだけ眉を潜めて言葉を返す。

「……予想はしていましたが、ヴァレリー様を侮辱するのだけは止めて貰えますか？　それと一つ、要望ではなくお願いが有ります」

お願い、だと？　何を……

「我が吸血鬼の地に来て欲しいのです——特にグレモリー眷属にアザゼル墮天使総督には」

「私たちに……」

「俺だと？」

「ええ、目で見てもらえれば今の吸血鬼の現状が理解出来るかと。それに、ヴァレリー様がギヤスパー様に逢いたいとも仰っていました。アザゼル墮天使総督には貴方の神セイクリッド・ギア器の知識をお借りしたいのです」

お願いの内容に驚いたが、別におかしい事は言っていない。こちらがいまだに奴ら吸血鬼を信用していないのを加味しなければだがな。

「神器？　何やらキナ臭くなってきたが？」

「もう正直に話しましょう。ヴァレリー様は神滅具ロンギヌス【紫炎祭主による磔台】を所持しています」

神滅具……ここでその話が出てくるのか。しかし、合点はいった。神滅具【紫炎祭主による磔台】は、というか聖十字架という聖遺物は吸血鬼にとつては驚異だ。ギヤスパーが出てから発現したと考えると、そこから力を昇華させていったのならば力というカリスマ性は魅せられるだろう。

「そうか、神滅具とか……いや、今、何て言った？　何の神滅具だつて？」

「……？　【紫炎祭主による磔台】ですが？」

「……リアス、俺は何が何でも吸血鬼の当主に会わなくてはならなく

なった。理由は後で話す」

しかし、俺がある程度納得したのに対してアザゼルの表情は固いままだ。ハーフとはいえ、吸血鬼が聖遺物を扱えることが原因なのか、もしくは神滅具ロンギヌスを【紫炎祭主インシネレート・アンセムによる磔台】自体に問題が……？

「……そう。ギヤスパー、貴方はどうしたいの？」

「ぼ、僕ですか？」

「ええ、当主であるヴァレリー・ツエペシユは友達に会いたいと言ったのよ？」 その友達の貴方はどうしたいの？」

そんな中で部長はギヤスパーに問う。今までのギヤスパーならば何があるかわからないかつ、昔のトラウマであったらう吸血鬼の領地には帰りたいとは思わないだろう。しかし、今の引きこもりじゃない彼ならば……

「……会いたいです、ヴァレリーに……」

「わかったわ、私とその眷属は貴方たちの招待を受け取るわ」

音量は小さいが、しっかりと意志のこもった言葉にギヤスパーの成長を感じられる。それを聴き取った部長はエルヒメンデへと了承の意を返す。

その言葉に満足したのか、彼女はニコリと笑みを浮かべる。

「時間や詳細は渡した書類に記載されていますので、よろしくお願ひします。ヴァレリー様一同心よりお待ちしております」

そういつて彼女は席を立ち、見送りは必要ありませんと言って一人で去っていった。

エルヒメンデが去った後、部長がアザゼルに話しかける。

「何があったの？」

「襲撃されて死亡したグラシヤラボラス家の元当主を覚えているか？」

その事件について、ディオドラ・アスタロトの件で捕まえた旧魔王派の奴からの情報を元に詳しく調査した結果、新たな事実が判明した」

問いに対して、神滅具ロンギヌスとの事ではなく俺が結局顛末を掴めなかったグラシヤラボラス家の事件について語られる。前振りとして必要なのだと理解して、皆は話に聞き入る。

「襲撃の計画や実行犯は旧魔王派の奴だったが、実際に手をかけた奴が異なっていた。そして、その人物が【紫炎祭主インシネレート・アンセム】を所持していたのを確認した」

「それって……」

部長が思わず呟くが、アザゼルの話は続く。

「だが、【紫炎祭主インシネレート・アンセム】は、四年前にアウグスタの元から離れて以来、その弟子の現在は「禍の団」に所属するはぐれ魔法使いの集団の幹部、ヴァルブルガが所持しているのを確認している。エルヒメンデがわざわざ嘘を付く必要はないだろうし、逆に神滅具が有ったからこそ吸血鬼の当主まで成り上がったのは間違いない」

「どういうことだ？」

今度は俺が思わず呟いた。まるで意味がわからんぞ？

「それはこつちが知りたい。神滅具が単一のものではないとすれば、今までの根底は崩れる。【紫炎祭主インシネレート・アンセム】が再度同じ所有者に移動するのならば、新たな発見となる。どちらにせよ、ヴァレリー・ツエペシユには【紫炎祭主インシネレート・アンセム】について聞かなくちゃならない。この話自体が真っ赤な嘘で俺たちを襲う罫かもしれねえのが一番厄介だ」

そういうアザゼルだが、神器研究家の性かこの真相に興味を示しているように見える。

すると、グリゼルダが吸血鬼が俺たちを嵌める為の罫として神滅具やらの話をしたという仮定とした時の疑問を口にした。

「あの態度も？　プライドが高い吸血鬼ならあんな風にはできないんじゃないかしら？」

「そうなんだよな、それが全てを分からなくさせている。とにかく、3日後の金曜までに準備を整えとけ……何が起きてもいいようになる」

アザゼルはサーゼクスやミカエルとも話さなきやならねえ、と頭を掻きながらも真剣な表情で言うに俺たちは無言で頷いた。

吸血鬼の当主との邂逅、吉と出るか凶と出るか……。



## Where is a facti on? II

修学旅行を十日前に控えた俺たちだが、金曜の夕方には現在の吸血鬼の本拠地であるツェペシユ城付近までエルヒメンデから渡された魔法陣で来ていた。

飛んで直ぐ、吸血鬼たちに包囲される……なんてことは無く、毒気を抜かれた俺たちの前に二名の吸血鬼が現れる。その内の一名、エルヒメンデが此方に話しかける。

「ようこそお越しくできました。アザゼル墮天使総督にグレモリー眷属様方」

どうぞこちらへと言われ、豪華に装飾された馬車へ案内される。

そして、グレモリー眷属……ロスヴァイセを除いた全員に加えアザゼルが馬車に乗り込むと城へと向かって走り出した。ロスヴァイセが来れない理由は、アザゼルと共に抜けると教務が不味いことになるからだ。それに加え、いざという時のキャスリングの為に安全な場所にいるのもある。

「本拠地に近づけば近づくほど凄い光景ね……」

馬車の窓から外を見ている部長の言う通り、転移した周辺は内乱の影響こそ受けていないかと思えたが、城に近づけば近づくほどその戦火が浮き彫りになっている。城へ続く道を逸れた地面や建物には破壊の跡が見て取れる。

……しかし、何が引つかかる。何だ？　破壊の爪痕をそこまで気に掛ける必要がどこにある？　似た痕跡をどこか見た事が有るような気がするのは何故だ？

「ゼノン、どうした？」

しかめ面の俺を見てアザゼルが問う。それに対し、凄惨な光景だなど思っただけだ、と返すと再度窓からの景色を眺める。

「……ならいいが」

アザゼルは納得していない声色だったが、城内に入った事で気を張り、周囲を警戒し始めた。

だが、アザゼルの苦勞は報われることなく馬車から降りてからも特に何かが起こることなく城内を進んでいき、大きな扉の前へと辿り着く。

「暫し此方でお待ち下さい」

と、エルヒメンデは一礼すると闇に紛れて姿を隠した。

そして、暫くして案内をしたもう一名の吸血鬼が連絡を取ったかと思えば、こちらへと言葉をかける。

「お待ちせ致しました。では、謁見を」

その言葉と同時に重々しい音を響かせながら両開きの大きな扉がひとりでに開いていく。扉が開ききり、音が止むとアザゼルが吸血鬼と俺たちをチラと見ると先に進んでいく。それに次いで部長、シトリ、朱乃……と最後尾に俺を置いて室内に進んでいく。

城内は破壊の爪痕が無く、この室内も例外でなく床には血のように真っ赤な絨毯、豪華な装飾が目に入る。

そして、一段高い場所に置かれた玉座に座る若い女性。この吸血鬼こそが今回、俺たちを招待したヴァレリー・ツエペシユなのだろう。その玉座から少し離れた場所にはエルヒメンデが何処から入ったのか控えていた。

「ヴァレリー様、お連れ致しました」

「ありがとうございます。初めまして、アザゼル墮天使総督、リアス・グレモリーとその眷属たちにソーナ・シトリ。私が今代の吸血鬼の当主のヴァレリー・ツエペシユです」

このような場であるからか、煌びやかな服装を身に纏い、ブロンドの髪を一本に束ねている。端正な顔立ちで、ギヤスパーと同じ年とは思えない程の見た目と雰囲気を感じる。

「ヴァレリー！」

吸血鬼の領地に着いてからソワソワしていたギヤスパーだったが、念願の彼女に会えた為か思わず声をあげて駆け寄る。

エルヒメンデやもう一名の吸血鬼がそれを遮ることはなく、こちら側も制止させる必要がないので事の成り行きを見守った。二人は抱き合うとヴァレリーはギヤスパーをあやすように頭を撫でる。二人

はそのまま話をし始めた。

「元氣そうで良かった……悪魔の生活は馴れた？」

「うん、友達や先輩もできたんだ」

「本当に良かった……。ギヤスパー、少しいいかしら？」

「どうしたの？　ヴァレ……!?!」

和やかな会話から突如、ギヤスパーの言葉と動きが止まり、ギヤスパーの纏う雰囲気は異質なものになる。

「何を!?!」

「落ち着いて下さい。今、ギヤスパーに課した封印を解きました」

警戒体制に入る俺たちをだが、妙に落ち着いたヴァレリーの言葉に動きを止め、彼女とギヤスパーを注視する。部長はそんな中で問いかける。

「封印……?　　どういう事?」

「説明しましょうか。ギヤスパーについて——」

ヴァレリー・ツエペシユからギヤスパーについて語られる。

ギヤスパーは、ヴラデイ家当主と人間の女性に間により生まれた。しかし、ギヤスパーが生まれた時にその女性は死んでしまった。難産だったのではなく、死因はショック死。

その理由は、ギヤスパーが生まれた時はヒトの形をしておらず、辺りに呪詛を振りまく黒く蠢めく不気味な物体だったからであり、その姿を見た母親は死亡。呪詛により、その場に居合わせた数名の従者も死に至ったという。

生まれて数時間でヒトの赤ん坊の姿にはなったのだが、その事態を知るものからギヤスパーには、その力の暴走を恐れて語らなかつたよ  
うだ。

その真相は、ギヤスパーが生まれた時にバロールの断片化された意識の一部が原因で有ったという。

——バロール。

それは、ケルト神話に伝わるフォモール族の魔神。有名なのはその魔眼であり、邪龍のクロウ・クルワツハを使役したことも知られている。

そんな存在の眼に倣って「フォービトウン・バロール・ビユー停止世界の邪眼」は命名されたというのはアザゼルから聞いたことがある。

そして、暫くしてハーフであるが故に幽閉。その時にヴァレリーと出会い、その際にギヤスパアの女装趣味の原因が起きたりしたという。そして、ギヤスパアのその力の一部を封印させた上で脱走させたとの事だ。

そこまで話すと、彼女は今まで反応を見せなかったギヤスパアの方を向くと語りかけるように口を開く。

「そして、これが『ギヤスパア・ヴラデイ』です」

その瞬間、『闇』が俺たちを包み込む。

……反応すら出来なかった。

その事実の不甲斐なさを感じるが、臨戦態勢を取りつつもギヤスパアを見つめる。そのギヤスパアは、異質なオーラを漂わせながらもこちらへ口を開く。

《初めまして、と言えば良いのかな？ ギヤスパア 僕が苦勞を掛けたね》

声こそは俺たちの知るギヤスパアそのものだが、その雰囲気はまるで違う。

「貴方は……ギヤスパアなの？」

《そうとも言えるし、そうではないとも言える。バロールの断片化された意識の一部が聖杯によって僕を創り上げたのさ》

「聖杯!？」 セファイロト・グラール 【幽世の聖杯】の事を言っているのか!? だが、ヴァレリーは……」

「それは簡単です。私が神滅具を二種類所持しているからですよ、墮天使総督様」

神滅具の同時所有という巫山戯た内容に絶句するアザゼルの尻目にギヤスパア・バロールと一時的に俺が称した者は話を続ける。

しかし、これで吸血鬼が嘘を付いている訳ではなくなったのか……。本来の神器は聖杯で聖十字架の方をその後<sub>に</sub>得たのだろう。

方法は？ 奪った？ それとも貰った？ わからない。

《それで、この現象だがバロールと神器が融合して生まれたものだ。闇を操り、停止の力も フォービトウン・バロール・ビユー【停止世界の邪眼】とは段違いに強化されて

いる。幽閉されている時に暴走したが、【セフィロト・グラーレ幽世の聖杯】程度なら圧倒できるスペックだった》

「本当か？　ならどうやって、お前は押さえ込まれたんだ？」

ギヤスパーの能力は本物だろう、だからこそアザゼルの問いだ。この闇は飲まれたら即死の分類だろう。それを押さえ込んだのだから……。

バランス・ブレイカー  
「禁　手に至りましたので」

何事もないかのように言う彼女に周りは驚愕する。その中でアザゼルが再度問いかけようとするが、さきにギヤスパー・バロールが声を発する。

《そろそろ限界かな。——最後に一つ、僕はあなたたちには絶対に危害を加えないと約束する。もう一人の僕を通して見ていたからね。あなたたちは僕の大切な仲間だから——》

「……わかってるわ。あなたが誰だろうと構わない、あなたは私の大切な眷属だもの……」

部長の言葉に俺たちはギヤスパー・バロールの眼を見て頷く。ここにいないロスヴァイセも同じ思いだろう。

それを見てギヤスパーから発せられた『闇』と異質な雰囲気はなくなり、ギヤスパー自身が崩れ落ちる。それに対してヴァレリーはギヤスパーを優しく抱きかかえるとそのまま歩み寄り部長へと受けわたす。受け取った部長は慈愛の表情でギヤスパーへと寄り添った。

「ヴァレリー・ツェペシユ、雰囲気を壊すように悪いが質問に答えて貰うぜ？」

そんな中でもアザゼルは表情を変えずに問いかける。

「ええ、かまいません。話せる事なら何でも話しましょう」

「聞きたいのは【インシレト・アンセム紫炎祭主の磔台】の事だ。あれはどうやって手にした

？　四年前にアウグスタの元から離れて以来、はぐれ魔法使いの集団の幹部が所有している筈だが……？」

「数年前……ギヤスパーを脱走させる際にその方から頂きました」

なんでも彼女が言うには、ヴァルブルガは単身でこの吸血鬼の地にやって来たらしく、その際にヴァレリーの持つ聖杯を自身の持つ聖十

字架を差し出す事で望んだそう。彼女は、ギヤスパアの脱走の手助けを条件に加えることで承諾。そして、自身のもつ聖杯の1つをヴァルブルガの持つ技術で差し出したかわりに聖十字架を手に入れたと言っているらしい。

なんとも馬鹿げた話だが、信じる他ない。「禍の団」カオス・ブリゲードに所属している人物がギヤスパアの恩人？ 黒歌の例もあるから、もしや何かしらの事情があつて属しているだけなのか？

「つまり、聖杯の方は亜種か？ 複数ある内の一つを渡したという訳か……」

聖十字架もですがね、と端的に返すヴァレリー。

アザゼルの表情は驚きではなく、何かを考えるように顔をしかめている。

……「禍の団」カオス・ブリゲードには派閥が違えど白龍皇、聖杯、聖十字架、絶霧と神滅具を半数近く所有している事が判明した。

これに加えてジークフリートやオリヴィエといった奴がいる以上、奴らの団体を壊滅させるのは難しいだろう。これであいつらに聖槍使いがいれば、神仏は易々と手を出せなくなるだろうしな。

「……「禍の団」カオス・ブリゲードに加担しているわけではないんだな？」

アザゼルが確認をするように問う。それに対しヴァレリーは頷いて肯定すると、加えて話し始める。

「寧ろマリウスらの反乱には『禍の団』カオス・ブリゲードが関与していたようでした……ここまでの道中の破壊の爪跡は見ましたか？ あれは聖杯によつて吸血鬼が邪龍へと変貌したことによりできました。一体だけですが、捕らえておりますので墮天使総督には実際に見ていただきたいのですが……」

「邪龍だ?!」 なんてもんを蘇らせてやがる！ ……だが、俺を呼んだのはその為か。わかった、一番聞きたい事は聞けたし、そつちを見てくるとするか」

……吸血鬼の町並みの破壊の跡に対する既視感はこれか？ この地で見た破壊の痕跡と、英雄派の襲撃時に同時に出てくる龍をベースにした異形が残すものと類似している。俺たちの時は実験か？

となると、新たな疑問が湧くが1人で考えてどうにかなるものではないと切り捨てる。

思考する最中に、アザゼルは何か納得したように頷く。

「皆さまに男女で部屋をご用意しましたので、夕食までご寛ぎください。フリッツ、総督様を案内しなさい」

そう言われて前に出た男性の吸血鬼はアザゼルを連れて外へ向った。

すると、部長がエルヒメンデへと声をかける。

「ギヤスパーが目覚めるまで一緒に居てもいいのかしら？」

「ええ、ギヤスパーをよろしくお願いします。エルメ、案内をよろしくね」

そうして俺たちはエルヒメンデの先導で部屋へと歩いて行った。



「墮天使総督様、此方です」

ヴァレリー・ツエペシユの付き人のフリッツと呼ばれた吸血鬼に案内されてアザゼルは城の地下へと足を運んでいた。

地下へ足を踏み入れた瞬間にアザゼルの人工神器であるダウンフォール・ドラゴン・スピア【墮天龍の閃光槍】に眠るファーブニルが同族が近くにいると反応を示す。

(……これは邪龍云々は間違いなさそうだな。しかし、それを幽閉できるといふのは……)

「アアアアアア……ヴァアアアレエリイイイイイ……」

どんな実力だ？　と思う前にアザゼルの意識が別の方に向かう。理由は、肉声と何かが混じり合ったような聞き取りにくく、耳障りで不快な音声が響き渡っているからだ。音量は捕らえてある邪龍の元へ近づく度に強くなり、呪詛に近いそれは辺りに瘴気を振りまくように辺りの空気を汚していく。

アザゼルには少しの不快感程度に済んでいるが、ただの人間が存在していたら瘴気に飲まれていただろう。

元吸血鬼とは思えないほどの邪気だな、とアザゼルが顰め面をして  
呟く。

「ヴァレリー様曰く、聖杯の力により吸血鬼に邪龍の意識の断片を降  
ろし、それを吸血鬼の悪意と共に活性化させた結果このような形に  
なったのではないかとの事です……」

呟きに反応した男の表情は痛ましげであり、この事についてどう  
思っているのかは明白である。

その男の先導でアザゼルは歩いてしたが、邪気が一層濃くなった所  
で立ち止まると魔法陣を書き出す。

(何を……?)

「現在、マリウスはこの場所の別位相に幽閉しております。それをそ  
の位相から引つ張つてくるための魔法陣です」

アザゼルの表情を察したのか、男は説明しながらも作業を進めてい  
く。そこまで時間は掛からずに男はアザゼルへ向き直るとそれでは、  
と前置きの後に男は魔法陣を起動させる。

直後、視界に現れたのは龍と形容するにはし難い何かがあるそこには  
あつた。

巨人型の龍であろう外郭に黒い鱗、吸血鬼のものである紅い瞳と邪  
龍のものであろう銀色の瞳。

だが、その原型は留まつていない部分が多々あり、吸血鬼の身に邪  
龍を降ろすというのはいくら神滅具とはいえ、無理が有つたのだろ  
う。全体的に腐食がはじまつており翼は片方が既になく、片腕は腫瘍  
が出来たかのように不釣り合いに巨大化しており、双眸は何処か焦点  
が合つておらずに口からは先程の呻き声を漏らすのみで精神が毒さ  
れているのが分かる。

(これは『クワイム・フォース・ドラゴン大罪の暴龍』のグレンデルか?)

変質させようとした邪龍に当たりを付けたアザゼルはそれを行  
なった人物への驚異度を格段に上げる。恐らく、過度の聖杯の使用に  
より精神が毒されきつたのだろう。まともな精神では他者の身に邪  
龍というものを降ろそうなどは考えられないと思つた所で、今のマ  
リウスともグレンデルともつかないナニカについて疑問を口にする。



「何処までまともだったんだ？」

「……街を破壊し、邪龍の形でヴァレリー様と相対できたのは二、三分も無かったと思います。そこから肉体と精神に乖離し始め、最終的に今のような呪詛を撒き散らす肉塊となりました。ただ、他の吸血鬼から変異した邪龍はヴァレリー様の【紫炎祭主の磔台】インシレイト・アンセムにより消滅しましたが、この……マリウス・ツエペシユを素体とした邪龍は【紫炎祭主の磔台】インシレイト・アンセムにすら耐えました」

思い出すのも苦痛なのか、渋い顔をしながら答える。

しかし、アザゼルは苦痛の思い以外に何か喜びの感情が隠れているのを見透かす。それに対して、引っかけりつつも自分の考えを口にする。

「成る程、肉体はほぼ邪龍に近づいてんのか。だが、邪龍を降ろすには……というか、聖杯を持つてんならわざわざこんな事をする必要はない。聖杯なら邪龍は復活出来る筈だが、セイクリッド・ギア神器は後天的に得たものは制御が難しくなる。この弊害で、ヴァルブルガは難航してんのかもな」

（……その所為でこんなトチ狂った使い方すんのは訳わからないがな。だが、逆に言えばその状況でヴァレリーの神器の扱うセンスは一流なんだろうな）

その一方で、聖十字架を使い熟すヴァレリーのセンスに感心するアザゼル。

「そうですか……それとお聞きしたいのですが、ヴァレリー様が聖杯に毒されていないのは何故でしょうか？　ヴァレリー様も我々を救う為に聖杯の力を扱ったようなのですが……」

それを聞いたアザゼルの表情が固くなる。ヴァレリーが聖杯に毒されていない理由への解答の為ではなく、ヴァレリーが吸血鬼に聖杯を扱っているという点だ。

だがそれは、後に聖杯と聖十字架の禁手の内容と同時に聞けば良いとひとまず置いて、問いに答える。

「彼女は禁手に至っている、それにより副作用なく扱えるようになったのだろうか。実際、似た様な禁手のパターンがいくつもある」

【異能の棺】という一定時間特定の対象の能力を封じるが、完全に封じるには所有者の全力を費やさなければならぬデメリットがある神器を挙げ、それが禁手によりそのデメリットが完全に無くなったという事例も話すアザゼル。

「ということとは、ヴァレリー様が狂気に飲まれる心配はないのですね」  
安堵の表情を見せるフリッツ。その表情は本心から出ている事に間違いはないだろう。

だが、アザゼルには純血の吸血鬼である彼が実力があるとはいえ、ハーフ吸血鬼のヴァレリー・ツエペシュにここまで付き従う理由がわからなかった。先ほど彼がいった聖杯によって救われたのかもしれないが、それ以外の理由が有るかもしれないとヴァレリーについてフリッツに問うことにした。

「お前らはヴァレリー・ツエペシュについて何を知っ…つまり貴方はヴァレリー様について知りたいと!?」  
ならば不肖、『ヴァレリー様に付き従い隊』の会長を務める私、フリッツ・ヴォルデンベルグが語らせて頂きましょう！  
先ず、初めにヴァレリー様の魅力は……」

こんな思考の吸血鬼もいるのかと他人事のように眩きながら、フリッツの話を聞き流すアザゼルであった……。